

茨城県教育財団文化財調査報告第133集

(仮称)島名・福田坪地区特定土地区画  
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

熊の山遺跡  
(上巻)

平成10年3月

茨 城 県  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第133集

(仮称)島名・福田坪地区特定土地区画  
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

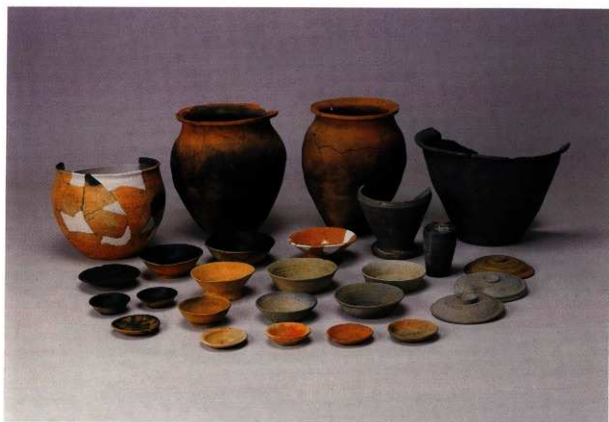
くま　　やま  
熊　の　山　遺　跡  
(上　卷)

平成10年3月

茨　　城　　県  
財団法人　茨城県教育財団



古墳時代出土土器



奈良・平安時代出土土器

## 序

茨城県は、昭和38年に筑波研究学園都市計画地域の指定を受けて以来、我が国最大のサイエンスシティとして、国や民間の研究機関、大学、また関連の工場等を集中的に誘致し、日本の科学技術の研究開発の核として、さらに、国際交流の拠点としての国際都市にふさわしい町づくりを進めております。

この新しい町づくりに欠かせない交通機関である常磐新線の整備は、つくばと東京圏を直結し、人・物・情報の交流を盛んにするだけでなく、地域活性化の大きな力となります。そこで、平成6年7月に県、市、地権者の三者協議が合意し、新線開発と沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業が進められております。

この予定地内に熊の山遺跡が存在していたため、財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成7年4月から発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は、既に「(仮称)島名・福田坪地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」として刊行しました。

本書は、平成8年度に調査を行った熊の山遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、ひいては教育・文化の向上の一助として、御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県からいただいた多大なる御協力に対し心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成10年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 橋本 昌

## 例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成8年4月から平成9年3月まで発掘調査を実施した茨城県つくば市大字烏名字香取1964番地ほかに所在する、熊の山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 熊の山遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	橋 本 昌	平成7年4月～	
副 理 事 長	中 島 弘 光	平成7年4月～	
副 理 事 長	齋 藤 佳 郎	平成8年4月～	
常 務 理 事	梅 澤 秀 夫	平成8年4月～平成9年3月	
常 務 理 事	齋 藤 紀 彦	平成9年4月～	
事 務 局 長	小 林 隆 郎	平成8年4月～平成9年3月	
事 務 局 長	西 村 敏 一	平成9年4月～	
埋 藏 文 化 財 部 長	沼 田 文 夫	平成8年4月～	
埋 藏 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 業 管 理 課	課 長	小 幡 弘 明	平成8年4月～平成9年3月
	課 長	河 崎 孝 典	平成9年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫	平成7年4月～
	課 長 代 理	清 水 薫	平成9年4月～(平成8年4月～平成9年3月係長)
	主 任 調 査 員	小 高 五 十 二	平成8年4月～
経 理 課	課 長	河 崎 孝 典	平成8年4月～平成9年3月
	課 長	鈴 木 三 郎	平成9年4月～
	主 査	田 所 多 佳 男	平成8年4月～
	課 長 代 理	大 高 春 夫	平成7年4月～平成9年3月
	主 任	小 池 孝	平成7年4月～
	主 任	宮 本 勉	平成9年4月～
	主 事	柳 澤 松 雄	平成8年4月～平成9年3月
	主 事	小 西 孝 典	平成9年4月～
調 査 一 課	課 長	和 田 雄 次	平成8年4月～
	調 査 第 一 班 長	後 藤 哲 也	平成7年4月～平成9年3月
	主 任 調 査 員	小 島 敏	平成8年4月～平成9年3月調査
	主 任 調 査 員	眞 崎 紀 雄	平成8年4月～平成9年3月調査
	主 任 調 査 員	野 田 良 直	平成8年4月～平成8年6月調査
	主 任 調 査 員	柴 田 博 行	平成8年7月～平成9年3月調査
	主 任 調 査 員	平 石 尚 和	平成8年11月～平成9年3月調査
	主 任 調 査 員	白 田 正 子	平成8年11月～平成9年3月調査

整 理 課	課長	小泉光正	平成9年4月～
	首席調査員	川井正一	平成8年4月～
	主任調査員	小島敏	平成9年4月～平成10年3月整理・執筆・編集
	主任調査員	眞崎紀雄	平成9年4月～平成9年9月整理・執筆
	主任調査員	白田正子	平成9年4月～平成9年6月整理・執筆
	主任調査員	野田良直	平成9年7月～平成10年3月整理・執筆・編集

- 3 本書で使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、第1章～第3章第1・2節、第3節2の(1)第231号住居跡～第340号住居跡は小島、第3章第3節2の(1)第131号住居跡～第170号住居跡は白田、第171号住居跡～第230号住居跡・(2)～(7)は野田、第3章第3節1・3は眞崎、第4節は小島がそれぞれ執筆した。編集は、小島・野田が行った。
- 5 本書の作成にあたり須恵器の編年については、千代川村教育委員会の赤井博之氏に御教示をいただいた。10世紀以降の上師器については、宮城県教育庁文化財保護課の村田晃一氏に御教示をいただいた。
- 6 赤色物質の成分分析、竈灰層の自然科学分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。須恵器壺Gの胎土分析は株式会社第四紀地質研究所に委託した。
- 7 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

#### 8 遺跡の概略

ふりがな	(かしよう)しまな・ふく(だ)はち(とく)ていとち(か)せう(じ)ぎょうふん(ざい)まい(ぞう)ふん(ざい)ちよう(さ)ほう(く)しよ						
書名	(仮称)鳥名・福田坪地区特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	熊の山遺跡						
巻次	Ⅱ						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第133集						
著者名	小島 敏 眞崎 紀雄 白田 正子 野田 良直						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587						
発行日	1998(平成10)年3月20日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くま ぐま 熊の山遺跡	いびん(う)な 茨城県つくば市 おんながし(ま)な(だ)ら(ひ)と(り) 大宇島名字香取 びん(う) 1964番地ほか	08220   214	36度 3分 41秒	140度 3分 46秒	19960401 ～ 19970331	16,050㎡	(仮称)鳥名・福田坪地区特定土地地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熊の山遺跡	集落跡	縄文	上 坑 2基	縄文土器片 石鏃 石斧	古墳時代から平安時代の竪穴住居跡が、259軒検出された。
		古墳	竪穴住居跡 90軒	土師器 須恵器	
			上 坑 3基	鉄鏃 刀子 鎌 土錘 支脚 紡 錠車 勾玉 砥石 石製模造品	
		奈良・平安	竪穴住居跡 169軒	土師器 須恵器 灰釉陶器 鉄鏃	
			上 坑 3基	刀子 鎌 土錘 支脚 砥石 跨帯	
		近世 時期不明	上 坑 1基	銅銭	
	竪穴住居跡 13軒	陶磁器片			
		掘立柱建物跡 3棟			
		井 戸 4基			
		上 坑 85基			
		大形竪穴状遺構 3基			
		溝 6条			
		不明遺構 1基			

# 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅹ系座標を原点とし、X軸＝+57,400m、Y軸＝+54,000mの交点を基準点（A1a1）とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 掘立柱建物跡-SB

土坑-SK 井戸-SE 溝-SD 不明遺構-SX ビット-P

遺物 土器・陶器-P 土製品-DP 石製品-Q 金属製品・古銭-M 拓本土器-TP

土層 擾乱-K

3 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。



4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。

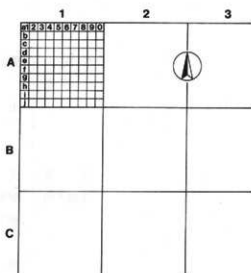
(1) 遺跡の全体図は200分の1、住居跡や掘立柱建物跡、土坑、井戸、不明遺構は60分の1・80分の1に縮尺し掲載した。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々にS=1/○と表示した。

(3) 「主軸方向」は、長辺で炉・竈を通る線を長軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E, N-10°-W）。なお、[ ] を付したものは推定である。

(4) 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台径 E-高台高 F-つまみ径 G-つまみ高とし、単位はcmである。なお、現存値は（ ）で、推定値は[ ] を付して示した。

(5) 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測(P)番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。



第1図 調査区呼称方法概念図



# 総目次

## — 上 卷 —

序	
例言	
凡例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 熊の山遺跡	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本順序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 5区の遺構と遺物	9
(1) 竪穴住居跡	9
① 古墳時代	9
② 奈良・平安時代	51
③ 時期不明	78
(2) 掘立柱建物跡	82
(3) 土坑	83
(4) 井戸	89
(5) 溝	90
(6) 遺構外出土遺物	91
2 6区の遺構と遺物	93
(1) 竪穴住居跡	93
① 古墳時代	93
② 奈良・平安時代	241
③ 時期不明	548
(2) 掘立柱建物跡	557
(3) 土坑	559
(4) 大形竪穴状遺構	577
(5) 溝	584
(6) 不明遺構	586

## — 中 卷 —

(7) 遺構外出土遺物	587
3 8区の遺構と遺物	596
(1) 竪穴住居跡	596
① 古墳時代	596
② 奈良・平安時代	618
③ 時期不明	654
(2) 掘立柱建物跡	658
(3) 土坑	659
(4) 井戸	662
(5) 溝	667
(6) 遺構外出土遺物	668
第4節 まとめ	670
付 章	
熊の山遺跡出土赤色物質の成分分析	673
熊の山遺跡竪穴層の自然科学分析	675
熊の山遺跡出土須恵器壺Gの胎土分析	678

— 下 巻 —

写真図版

## 上巻挿図目次

第 1 図 調査区呼称方法概念図	第 17 図 第349号住居跡出土遺物実測図	24
第 2 図 周辺遺跡位置図	第 18 図 第352・353号住居跡実測図	26
第 3 図 基本土層図	第 19 図 第352号住居跡出土遺物実測図	27
第 4 図 熊の山遺跡調査区設定図	第 20 図 第354号住居跡実測図	28
第 5 図 第341号住居跡実測図	第 21 図 第354号住居跡出土遺物実測図	29
第 6 図 第341号住居跡出土遺物実測図	第 22 図 第355号住居跡実測図	31
第 7 図 第342号住居跡実測図	第 23 図 第355号住居跡出土遺物実測図	32
第 8 図 第342号住居跡竪穴実測図	第 24 図 第358号住居跡出土遺物実測図	33
第 9 図 第342号住居跡出土遺物実測図	第 25 図 第358号住居跡実測図	34
第 10 図 第344号住居跡出土遺物実測図	第 26 図 第358号住居跡竪穴実測図	35
第 11 図 第344号住居跡実測図	第 27 図 第362号住居跡実測図	36
第 12 図 第345号住居跡実測図	第 28 図 第362号住居跡出土遺物実測図	37
第 13 図 第347号住居跡・出土遺物実測図	第 29 図 第363号住居跡実測図	39
第 14 図 第348号住居跡実測図	第 30 図 第363号住居跡出土遺物実測図	40
第 15 図 第348号住居跡出土遺物実測図	第 31 図 第368号住居跡実測図	41
第 16 図 第349号住居跡実測図	第 32 図 第368号住居跡出土遺物実測図	42

第 33 图	第370号住居跡出土遺物実測図……………	43	第 71 图	第191号土坑出土遺物実測図……………	84
第 34 图	第370号住居跡実測図……………	44	第 72 图	第207号土坑実測図……………	85
第 35 图	第370号住居跡実測図……………	45	第 73 图	5区土坑実測図(1)……………	86
第 36 图	第371号住居跡出土遺物実測図……………	46	第 74 图	5区土坑実測図(2)……………	87
第 37 图	第371号住居跡実測図……………	47	第 75 图	5区土坑出土遺物実測図……………	89
第 38 图	第372号住居跡実測図……………	48	第 76 图	第7号井戸出土遺物実測図……………	90
第 39 图	第372号住居跡出土遺物実測図……………	49	第 77 图	第18号溝断面図……………	90
第 40 图	第376号住居跡出土遺物実測図……………	50	第 78 图	5区遺構外出土遺物実測図……………	92
第 41 图	第114号住居跡実測図……………	51	第 79 图	第131・142号住居跡実測図……………	94
第 42 图	第343号住居跡実測図……………	53	第 80 图	第131号住居跡出土遺物実測図……………	95
第 43 图	第343号住居跡出土遺物実測図……………	54	第 81 图	第132・211号住居跡実測図……………	97
第 44 图	第346号住居跡出土遺物実測図……………	55	第 82 图	第132号住居跡出土遺物実測図……………	98
第 45 图	第346号住居跡実測図……………	56	第 83 图	第133号住居跡実測図……………	100
第 46 图	第350号住居跡出土遺物実測図……………	57	第 84 图	第133号住居跡出土遺物実測図……………	101
第 47 图	第350号住居跡実測図……………	58	第 85 图	第137号住居跡実測図……………	103
第 48 图	第351号住居跡実測図……………	60	第 86 图	第137号住居跡出土遺物実測図……………	104
第 49 图	第351号住居跡出土遺物実測図……………	61	第 87 图	第138号住居跡実測図……………	105
第 50 图	第353号住居跡出土遺物実測図……………	62	第 88 图	第138号住居跡出土遺物実測図……………	106
第 51 图	第356号住居跡出土遺物実測図……………	63	第 89 图	第141号住居跡実測図……………	108
第 52 图	第357号住居跡実測図……………	64	第 90 图	第141号住居跡出土遺物実測図……………	109
第 53 图	第357号住居跡出土遺物実測図……………	64	第 91 图	第143号住居跡実測図……………	112
第 54 图	第361号住居跡出土遺物実測図……………	65	第 92 图	第143号住居跡出土遺物実測図……………	113
第 55 图	第361号住居跡実測図……………	66	第 93 图	第152号住居跡出土遺物実測図……………	115
第 56 图	第365号住居跡出土遺物実測図……………	67	第 94 图	第152・195号住居跡実測図(1)……………	116
第 57 图	第366号住居跡出土遺物実測図……………	69	第 95 图	第152・195号住居跡実測図(2)……………	117
第 58 图	第367号住居跡出土遺物実測図……………	70	第 96 图	第159・160号住居跡実測図……………	120
第 59 图	第373号住居跡実測図……………	72	第 97 图	第159号住居跡出土遺物実測図……………	121
第 60 图	第373号住居跡出土遺物実測図……………	73	第 98 图	第162号住居跡実測図……………	123
第 61 图	第374号住居跡実測図……………	74	第 99 图	第162号住居跡出土遺物実測図……………	125
第 62 图	第374号住居跡出土遺物実測図……………	75	第100图	第163・165号住居跡実測図(1)……………	126
第 63 图	第375号住居跡実測図……………	76	第101图	第163・165号住居跡実測図(2)……………	127
第 64 图	第375号住居跡出土遺物実測図……………	77	第102图	第165号住居跡出土遺物実測図……………	129
第 65 图	第359号住居跡実測図……………	78	第103图	第167号住居跡出土遺物実測図……………	130
第 66 图	第364号住居跡実測図……………	78	第104图	第168・170号住居跡実測図……………	131
第 67 图	第369号住居跡実測図……………	79	第105图	第173号住居跡実測図……………	133
第 68 图	第377号住居跡実測図……………	80	第106图	第173号住居跡出土遺物実測図……………	133
第 69 图	第7号掘立柱建物跡実測図……………	82	第107图	第174号住居跡実測図……………	134
第 70 图	第186号土坑出土遺物実測図……………	83	第108图	第174号住居跡出土遺物実測図……………	134

第109图	第175号住居跡実測図	.....135	第147图	第260・261号住居跡実測図	.....181
第110图	第175号住居跡出土遺物実測図	.....136	第148图	第260・261号住居跡竈実測図	.....182
第111图	第176号住居跡実測図	.....137	第149图	第260号住居跡出土遺物実測図	.....182
第112图	第179号住居跡実測図	.....139	第150图	第267号住居跡実測図	.....183
第113图	第179号住居跡出土遺物実測図	.....140	第151图	第267号住居跡出土遺物実測図	.....184
第114图	第194号住居跡出土遺物実測図	.....142	第152图	第274号住居跡実測図	.....186
第115图	第197号住居跡実測図	.....144	第153图	第274号住居跡出土遺物実測図	.....187
第116图	第197号住居跡出土遺物実測図	.....145	第154图	第279号住居跡出土遺物実測図	.....188
第117图	第198号住居跡実測図	.....147	第155图	第281号住居跡実測図(1)	.....190
第118图	第198号住居跡出土遺物実測図	.....148	第156图	第281号住居跡実測図(2)	.....191
第119图	第204号住居跡実測図	.....150	第157图	第281号住居跡出土遺物実測図(1)	.....192
第120图	第204号住居跡出土遺物実測図	.....151	第158图	第281号住居跡出土遺物実測図(2)	.....193
第121图	第206号住居跡出土遺物実測図	.....153	第159图	第286・287号住居跡実測図	.....196
第122图	第211号住居跡出土遺物実測図	.....153	第160图	第286号住居跡出土遺物実測図	.....197
第123图	第212号住居跡出土遺物実測図	.....154	第161图	第288号住居跡実測図	.....198
第124图	第212号住居跡実測図	.....154	第162图	第288号住居跡出土遺物実測図	.....198
第125图	第213号住居跡実測図	.....156	第163图	第289号住居跡実測図	.....200
第126图	第213号住居跡出土遺物実測図(1)	.....157	第164图	第289号住居跡出土遺物実測図	.....201
第127图	第213号住居跡出土遺物実測図(2)	.....158	第165图	第290・291号住居跡実測図	.....202
第128图	第215号住居跡出土遺物実測図	.....159	第166图	第290号住居跡出土遺物実測図	.....203
第129图	第215号住居跡実測図	.....160	第167图	第292・293号住居跡実測図	.....205
第130图	第228号住居跡出土遺物実測図	.....161	第168图	第293号住居跡竈実測図	.....206
第131图	第228号住居跡実測図	.....162	第169图	第292号住居跡出土遺物実測図	.....207
第132图	第231号住居跡出土遺物実測図	.....163	第170图	第295号住居跡出土遺物実測図	.....208
第133图	第231号住居跡実測図	.....164	第171图	第295号住居跡実測図	.....209
第134图	第235号住居跡出土遺物実測図	.....165	第172图	第305・306号住居跡実測図	.....211
第135图	第235号住居跡実測図	.....166	第173图	第305号住居跡出土遺物実測図	.....212
第136图	第243号住居跡実測図	.....168	第174图	第309号住居跡実測図	.....213
第137图	第243号住居跡出土遺物実測図	.....169	第175图	第316号住居跡出土遺物実測図	.....214
第138图	第248号住居跡出土遺物実測図	.....171	第176图	第316号住居跡実測図	.....215
第139图	第250・251号住居跡実測図	.....172	第177图	第318号住居跡出土遺物実測図	.....216
第140图	第250号住居跡出土遺物実測図	.....173	第178图	第318号住居跡実測図	.....217
第141图	第253号住居跡実測図	.....174	第179图	第323号住居跡出土遺物実測図	.....218
第142图	第253号住居跡出土遺物実測図	.....175	第180图	第323・324号住居跡実測図	.....219
第143图	第255号住居跡出土遺物実測図	.....176	第181图	第325号住居跡出土遺物実測図	.....220
第144图	第255号住居跡実測図	.....177	第182图	第325号住居跡実測図	.....221
第145图	第259号住居跡実測図	.....179	第183图	第327号住居跡実測図	.....223
第146图	第259号住居跡出土遺物実測図	.....179	第184图	第327号住居跡出土遺物実測図	.....224

第185図	第328号住居跡出土遺物実測図	225	第192図	第332号住居跡出土遺物実測図	233
第186図	第328号住居跡実測図	226	第193図	第334号住居跡出土遺物実測図	234
第187図	第330号住居跡実測図	228	第194図	第334号住居跡実測図	235
第188図	第330号住居跡竈実測図	229	第195図	第336号住居跡出土遺物実測図	237
第189図	第330号住居跡出土遺物実測図	229	第196図	第336・338号住居跡実測図(1)	238
第190図	第331号住居跡実測図	231	第197図	第336・338号住居跡実測図(2)	239
第191図	第331号住居跡出土遺物実測図	232			

## 付 図

熊の山遺跡5区遺構全体図  
熊の山遺跡6区遺構全体図  
熊の山遺跡8区遺構全体図

## 上巻表目次

表1	熊の山遺跡周辺遺跡一覧表	5
表2	熊の山遺跡5区住居跡一覧表	81
表3	熊の山遺跡5区土坑一覧表	85



6区全景



第6号掘立柱建物跡

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

茨城県では、首都とつくば研究学園都市を結ぶ常磐新線の早期開通をめざし、常磐新線の建設とそれに伴う沿線開発に取り組んでいる。

当遺跡のある島名地区については、平成6年8月18日、茨城県知事は茨城県教育委員会あてに、常磐新線沿線地域の土地区画整理事業地域内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これに対して茨城県教育委員会は、平成6年9月19日から27日にかけて現地踏査を行った。平成7年3月8日、茨城県教育委員会から茨城県知事に、常磐新線沿線地域の島名・福田坪地区特定土地区画整理事業地域内に熊の山遺跡が所在する旨回答した。同日、茨城県知事から茨城県教育委員会あてに、島名・福田坪地区特定土地区画整理事業に係わる熊の山遺跡の取扱いについて協議があり、文化財保護の立場から再三協議を重ねた。

その結果、現状保存が困難であることから、平成7年3月9日、茨城県教育委員会から茨城県知事あてに、熊の山遺跡を記録保存とする旨回答し、調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成7年4月1日から熊の山遺跡の発掘調査を開始した。平成7年度は、1区から4区(17,167㎡)までの調査を終了した。

同じく平成8年2月5日に、平成8年度の熊の山遺跡の取り扱いについて協議があり、平成8年2月9日、31,026㎡を記録保存する事になった。しかし平成8年9月の発掘調査計画の変更により、5区・6区・8区(16,050㎡)の調査を実施した。

## 第2節 調査経過

熊の山遺跡の発掘調査は、平成8年4月1日から平成9年3月31日までの1年間にわたって、5区・6区・8区の調査を実施した。5区の一部、7区については平成9年度に調査が行われる。遺構番号については、昨年度よりの継続である。以下、調査経過について、その概要を記述する。

- 4月 発掘調査を開始するため、現場休憩所の設置、現場倉庫の移設、調査器材の搬入、補助員投入等の諸準備を行った。
- 5月 7日に、茨城県県南都市建設事務所と調査区域の確認を行った。同じく7日から補助員を投入してグリップ試掘を開始した。23日、調査6区から人力による表土除去及び遺構確認作業を行った。6区の北側から23軒の住居跡を確認し、調査を開始した。
- 6月 引き続き6区の調査を行った。14日、茨城県土木部長から茨城県教育委員会に熊の山遺跡の発掘調査計画の変更協議があった。24日には茨城県教育委員会から茨城県土木部長宛に調査面積の変更(31,477㎡)について回答した。同じく24日、6区から重機による表土除去を開始し、同時に遺構確認作業を行った。
- 7月 12日から7区、17日から8区、22日から5区の表土除去を行った。重機による表土除去・遺構確認作業と平行して、6区の調査も続けた。26日には、表土除去・遺構確認作業を終了し、住居跡486軒、土坑278基、溝21条、不明遺構7基を確認した。また6区の遺構調査も、第154号住居跡まで終了した。

- 8月 6区北側から遺構調査を再開した。20日から、補助員を増員し調査の進捗を早めることにした。
- 9月 本年度の調査区域は遺構が多く重複が激しいため、期間内に調査を終了する事がかなり難しいとの見通しから対応策の検討を進め、20日に委託者である県南都市建設事務所と茨城県教育財団、茨城県教育委員会との三者協議を行い、本年度の調査面積を縮小することが決まった。
- 10月 重複が激しく調査に困難を極めたが、精力的に調査を進め第240号住居跡、第147号土坑までの調査をほぼ終了させた。
- 11月 調査は6区のほぼ4分の3が終了した。
- 12月 調査担当者の増員があり、調査員5名で調査を行う。6日、つくば市市長公室広報公聴課による遺跡見学会が実施され、12名の見学者が訪れた。第310号住居跡、第175号土坑、第13号溝までの調査をほぼ終了した。また、8区の調査も開始した。
- 1月 中旬に、6区の遺構調査をほぼ終了した。6区は、古墳時代、奈良・平安時代の遺構が多いことが確認できた。
- 2月 5区の調査を開始したが、覆土が浅く遺構の残りが悪かった。中旬には、8区の調査を終了した。
- 3月 13日に航空写真撮影を実施し、15日には遺跡の現地説明会を行い、160名の見学者が訪れた。17日から補足調査を行い、24日に5区の遺構調査が終了した。現場事務所で諸帳簿や諸記録の点検、調査区では安全対策を行い、25日に現場事務所を閉鎖した。



## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

熊の山遺跡は、茨城県つくば市大字島名字香取1964ほかにか所在している。昭和62年11月の4町村合併（桜村、谷田部町、大塚町、豊里町、昭和63年3月に筑波町も編入）によるつくば市誕生以前は、筑波郡谷田部町に属していた。

つくば市は、茨城県南西部に位置し、北は真壁郡明野町、同郡真壁町、新治郡八郷町に、東は新治郡新治村、土浦市、南は牛久市、稲敷郡茅崎町、筑波郡伊奈町、同郡谷和原村に、西は水海道市、結城郡石下町、同郡千代川村、下妻市に接している。

つくば市の地形は、北は茨城県と福島県境にある八溝山から南に伸びる八溝山地の南端部に位置する筑波山を中心とする筑波山塊に接し、東側を東流して霞ヶ浦に流入する桜川と、西端を緩流して利根川に合流する小貝川に挟まれた、筑波・稲敷台地上にあり、市街地の大部分がここに形成されている。この台地は常総台地の一部をなし、竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体で、その上に板橋層または常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層（0.3～5.0m）、その上に関東ローム層（0.5～2.5m）が堆積し、最上部は腐食土層となっている。標高は河川流域に展開する沖積低地や浸食谷を除けばどこも20m前後を占めており、ほとんど高低差のない平坦な地形である。

当遺跡は、筑波研究学園都市の西側を南北に流れる東谷田川右岸の標高約20mの台地上に立地している。この台地は東を東谷田川、西を西谷田川に挟まれ、牛久沼まで南東方向に細長舌状に伸び、両河川等に開折され沖積低地を形成している。低地は主に水田に利用されている。今回調査した5区・6区は台地の東側端部、8区は、200mほど西寄り位置する。東谷田川を挟んだ対岸は、科学万博つくば85の会場となった水堀地区である。

水田との比高は約8mである。調査前の現況は畑であった。

#### 参考文献

- ・大山年次、蜂須紀夫 『茨城県 地学のガイド』 1977年
- ・蜂須紀夫、大森昌衛 『茨城の地質をめぐって』 築地書館 1979年9月

### 第2節 歴史的環境

つくば市谷田部地区には、東谷田川、西谷田川流域の台地上縁辺部や中央部と、東谷田川支流の蓮沼川右岸台地上に遺跡が数多く存在しているが、これまでの谷田部地区の遺跡分布調査の結果では、縄文時代以降の遺跡のみで、旧石器時代の遺構はまだ確認されていない。

縄文時代の遺跡は、境松貝塚<sup>さかいしほいづか</sup>（1）、山田遺跡<sup>やまだ</sup>（3）など中期から後期にかけての遺跡が中心である。境松貝塚は谷田部地区の代表的な貝塚であり、縄文時代中期から後期の土器や石器が出土している。貝類は、オキシジミ、ヤマトシジミ、ムラサキガイ、シオフキなどで構成されている。山田遺跡からは縄文時代中期から後期の土器や石器が広範囲にわたって出土し、大規模な集落跡の可能性が予想される。熊の山遺跡周辺では、当遺跡

から約1km南下した東谷田川と西谷田川に挟まれた台地の中央部に前野遺跡<2>、さらに500m南にタカドロ遺跡<22>、一町田遺跡<23>が確認されている。タカドロ遺跡と一町田遺跡からは中期から後期にかけての遺物が出土しており、小貝川右岸の台地と東谷田川、西谷田川に挟まれた台地では縄文時代中期から人々の生活が営まれていたと考えられる。

弥生時代の遺跡は、2か所確認されているが、熊の山遺跡周辺にはない。

古墳時代の遺跡は、下横場遺跡、面の井古墳群<10>、関の台古墳群<9>、下河原崎古墳群<12>などの中小の古墳群が数多く確認されている。古墳は大半が径7～25mの円墳である。

熊の山遺跡周辺では、当遺跡のすぐ北側に島名熊の山古墳群<17>、約1km北に関の台古墳群と関の台遺跡<26>がある。当遺跡の南東約500mには業師遺跡<6>、南東約1.5kmには複内遺跡<7>がある。どの遺跡も東谷田川左岸の台地上に位置している。また、対岸の台地上には、東南東約1kmに水堀遺跡<28>、南東約1.5kmに柳橋遺跡<29>がある。特に島名熊の山古墳群は、当遺跡のすぐ北に位置しており、径7～12m、高さ0.5～1.2mの円墳が11基群在している。

平安時代は、「和名類聚抄」によれば、谷田部地区は河内郡八部郷といい、仁徳天皇の妃、八田若孫女のため八田部を置いた所と言われる。また、島名も「和名類聚抄」にある「嶋名郷」に比定されている。

奈良・平安時代の遺跡はこれまで確認されていなかったが、平成7年度、茨城県教育財団の調査により、熊の山遺跡の他に、当遺跡から北東約3kmの神田遺跡<30>、約3.5km南の西栗山遺跡<32>、根崎遺跡<31>にこの時代の遺構が存在することが明らかになった。平安時代末には期間、谷田部、小野崎などに開発領主が出現したという言い伝えもあり、今後の調査の成果が期待できる。

12世紀後半には、常陸西南部をおおう広大な常安保は南野牧とともに村田荘の一部であったが、南野牧の分離とともに村田荘そのものになり、12世紀末にはさらに下妻荘、田中荘を分出し、八条院領として伝領された。谷田部地区の大部分は田中荘域に入る。常安保の開発領主は平直幹と考えられ、下妻荘、村田荘の直幹は下妻直幹に、田中荘の下直幹は多気義幹に伝えられたと推測されている。しかし、鎌倉幕府の成立後、八田知家の入部により義幹は没落し、田中荘は小田氏の支配下に入る。霜月騒動(1285年)により、一時北条得宗家の手に移るが、室町時代になり、また小田氏の手に戻る。当時、小田氏配下の土豪に小野崎の荒井氏、期間の野中瀬氏、島名・面野井の平井手氏がいたと伝えられる。

中世以降として確認された遺跡は城館跡がほとんどであるが、熊の山遺跡周辺では北北東へ約2kmの位置に平井手氏の居城と伝えられる面野井城跡が確認されており、当遺跡との関連も考えられる。

## 註

- (1) 谷田部の歴史編纂委員会 『谷田部の歴史』 1975年9月

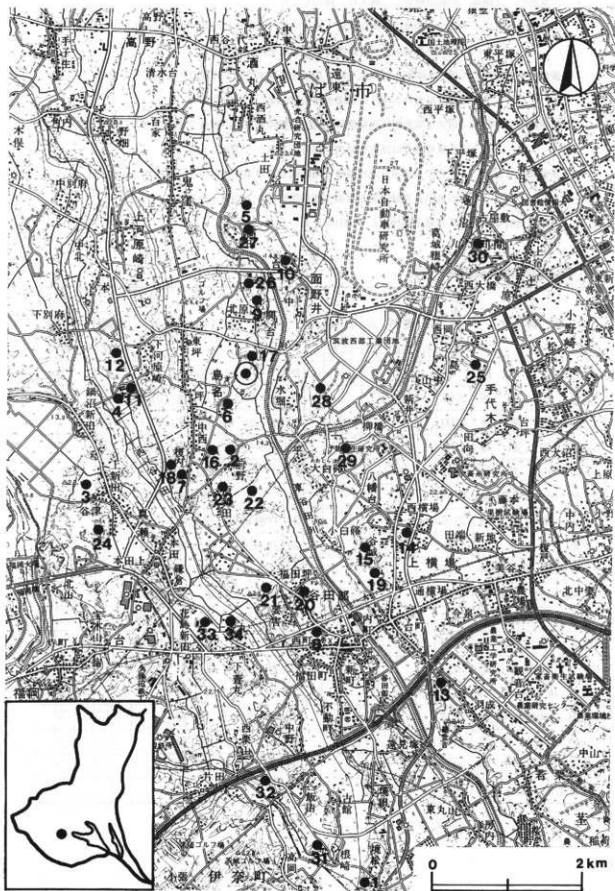
## 参考文献

- ・ 註(1) 同馬書
- ・ 茨城県史編纂会 『茨城県史中世編』 1976年3月
- ・ 池邊彌 『和名類聚抄郡郷里群名考證』 吉川公文館 1981年2月
- ・ 竹内理三 『角川日本地名大辞典8 茨城県』 角川書店 1973年12月
- ・ 中山信名 『新編常陸国誌』 嵩書房 1978年12月
- ・ 鬼澤大海 『常陸旧地考』 嵩書房 1976年10月

- ・ 江原忠昭 『増補 茨城の地名』 講人社 1976年1月
- ・ 茨城県教育財団 『研究学園都市計画桜葉崎上地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)』  
『茨城県教育財団文化財調査報告第54集』 1989年9月
- ・ 茨城県教育財団 『研究学園都市計画桜葉崎上地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)』  
『茨城県教育財団文化財調査報告第63集』 1991年3月
- ・ 茨城県教育財団 『研究学園都市計画桜葉崎上地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)』  
『茨城県教育財団文化財調査報告第72集』 1992年3月
- ・ 茨城県教育財団 『研究学園都市計画桜葉崎上地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ)』  
『茨城県教育財団文化財調査報告第83集』 1994年9月
- ・ 茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』 1991年3月

表1 熊の山遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代						番号	遺跡名	県遺跡番号	時代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平	鎌・室				江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平	鎌・室
③	熊の山遺跡				○	○	○	○	18	ツバタ遺跡	2906				○			
1	境松貝塚	2098	○						19	台成井遺跡	2910	○						
2	前野遺跡	2100	○						20	福田前遺跡	2911	○						
3	山田遺跡	2101	○						21	福田坪池の台遺跡	2912	○						
4	高山遺跡	2103		○					22	タカドロ遺跡	2914	○						
5	和台遺跡	2104			○				23	一町田遺跡	2915	○						
6	薬師遺跡	2105			○				24	真瀬新田谷津遺跡	2916	○						
7	榎内遺跡	2106			○				25	刈間遺跡	2917				○			
8	谷田部城跡	2110					○		26	関の台遺跡	2919				○			
9	関の台古墳群	2112			○				27	高田遺跡	2920				○			
10	面の井古墳群	2113			○				28	水堀遺跡	5838				○			
11	高山古墳群	2114			○				29	柳橋遺跡	5839				○			
12	下河原崎古墳群	2115			○				30	神田遺跡	5841	○	○	○	○	○	○	○
13	羽成古墳群	2116			○				31	根崎遺跡		○	○	○	○	○		
14	道心塚古墳群	2117			○				32	西栗山遺跡		○	○	○				
15	台町古墳群	2118			○				33	三度山遺跡		○	○					
16	榎内古墳群	2119			○				34	古屋敷遺跡		○	○		○	○		
17	島名熊の山古墳群	2120			○													



第2図 周辺遺跡位置図

## 第3章 熊の山遺跡

### 第1節 遺跡の概要

熊の山遺跡は、筑波研究学園都市の西側に南北に流れる東谷田川右岸の標高約20mの台地上に位置している。調査区は、発掘年度の順に従い便宜上1～8区に分けられてる。平成7年度の調査区を1～4区、平成8年度の調査区を5～8区としてきた。なお、5区の一部と7区は平成9年度に調査が行われる。調査区の規模は北側の5区（南北約130m、東西約100m）、南側の6区（南北約120m、東西約80m）、西側の8区（南北約25m、東西約90m）に分かれ、総面積は16,050㎡である。現況は畑地で、主に芝畑として利用されていた。

今回の調査によって、住居跡272軒、掘立柱建物跡3棟、土坑94基、大形堅穴状遺構3基、井戸4基、溝6条、不明遺構1基を検出した。住居跡は古墳時代が90軒、奈良・平安時代が169軒、時期不明が13軒である。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に320箱出土している。遺物の大部分は古墳時代から平安時代にかけての土師器、須恵器である。その他の遺物として、削器、縄文土器片、石鏃、石器、球状土錘、管状土錘、支脚、紡錘車、砥石、石帯、鉄鏃、刀子、鎌、陶磁器片、古銭などが出土している。

### 第2節 基本層序

調査6区内にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った(第3図)。

第1層は、40～45cmの厚さの耕作土層で、暗褐色をしている。

第2層は、5～10cmの厚さで、褐色をしたソフトローム層との漸移層である。

第3層は、15cmほどの厚さで、明褐色をしたソフトローム層である。

第4層は、30cmほどの厚さで、明褐色をしたハードローム層である。

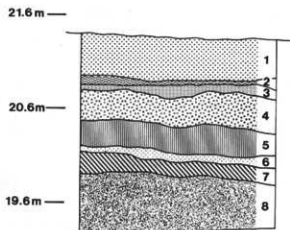
第5層は、30cmほどの厚さで、暗褐色の粘土混じりの層である。

第6層は、10cmほどの厚さで、にぶい黄橙色をした粘土層である。

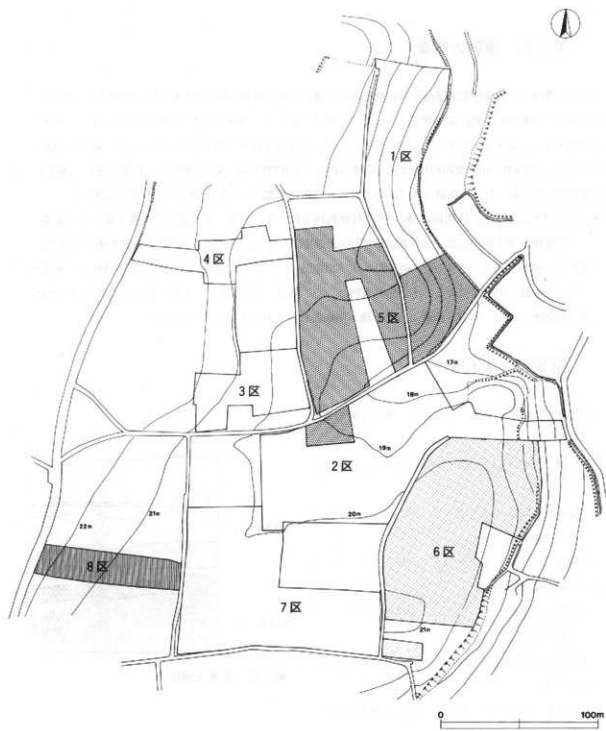
第7層は、20cmほどの厚さで、砂質を少量に含む黄橙色をした粘土層である。

第8層は、60cmほどの厚さで、砂質を大量に含む明黄橙色をした粘土層である。

住居跡などの遺構は、第2層上面で確認した。



第3図 基本土層図



第4図 熊の山遺跡調査区設定図

### 第3節 遺構と遺物

当遺跡からは、古墳時代前期から平安時代にかけての竪穴住居跡が272軒検出されている。これらの竪穴住居跡は調査区内の全域に分布している。これらのうち19.5%にあたる53軒は単独で存在しているが、ほとんどの住居跡は重複が激しく複雑な様相を呈している。

以下、検出された遺構の特徴や出土遺物について記述する。

#### 1 5区の遺構と遺物

##### (1) 竪穴住居跡

###### ① 古墳時代

###### 第341号住居跡 (第5図)

位置 調査5区東部、J14a区。

規模と平面形 ほとんどの壁が残存しておらず、規模も平面形も明確ではないが、長軸[6.26]m、短軸[6.10]mの方形と推定される。

主軸方向 [N-18°-W]

壁 北西コーナーから西側にかけて確認され、壁高は11cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北西コーナー付近に確認され、上幅10~18cm、下幅3~9cm、深さ4cmで断面形はU字形である。

床 西側から東側にかけて傾斜しており、全面的に硬い。

竈 北壁中央部の壁面に、火床部のみを確認した。攪乱により、規模は不明である。

ピット 3か所(P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>は、長径27cm、短径23cmの楕円形で、深さ22cmである。P<sub>2</sub>は、径22cmの円形で、深さ50cmである。P<sub>3</sub>は、径15cmの円形で、深さが68cmあり、いずれも主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部で確認されている。長径60cm、短径48cmの楕円形で、断面形は皿状をしている。

覆土 2層からなり、自然堆積である。

###### 土層解説

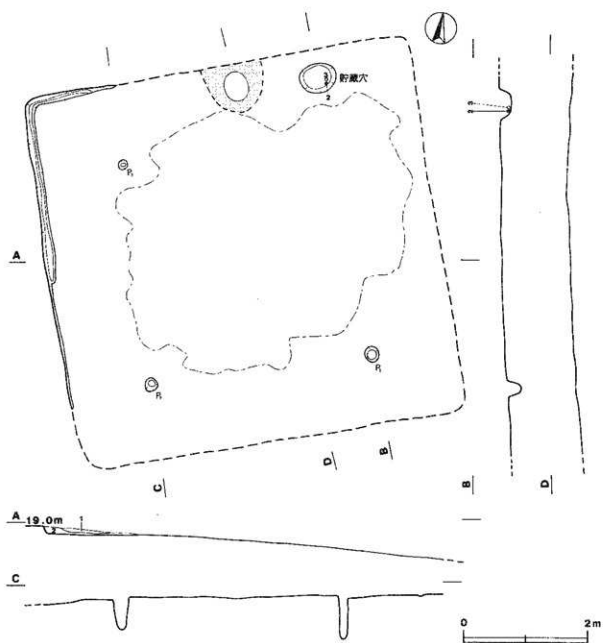
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

遺物 土器器片86点が出土している。2の土器の壺と3の紡錘車が貯蔵穴の底面から、1の土器器の坏が覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。

第341号住居跡出土遺物観察表

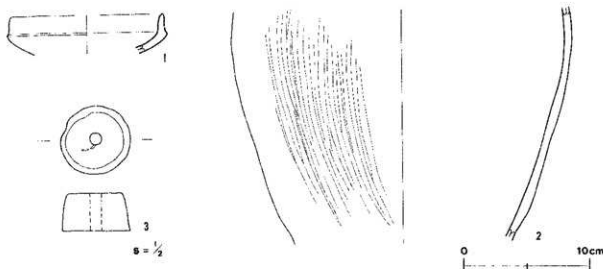
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼域	備考
第6図 1	杯 上部部	A[12.0] B(3.1)	体部から口縁部にかけての破片、体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ磨り。内面ナデ。	砂粒・スコリアに多い黄褐色普通	P2001 10% 覆土中
2	壺 上部部	B(18.8)	体部破片。体部は内彎して立ち上がる。	体部中位から下平にかけてへラ磨き。内面ナデ。	砂粒・雲母・石英微色普通	P2002 5% 貯蔵穴底面



第5図 第341号住居跡実測図

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第6図3	紡錘車	3.6	2.0	0.6	32	貯蔵穴底面	D P'2000 95%





第6図 第341号住居跡出土遺物実測図

### 第342号住居跡（第7・8図）

位置 調査5区東部，J14c1区。

重複関係 第186号土坑を掘り込んでいるので，本跡が新しい。

規模と平面形 本跡の南西部部分が調査区域外に延びており，規模や平面形は明確ではないが，残存する床や壁から長軸[7.10]m，短軸[6.70]mの方形と推定される。

主軸方向 N-22°-W

壁 北西部のみ残存し，壁高は4～6cmで，外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で，竈から中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に壁外へ12cmほど掘り込み，付設されている。長さは110cm，袖幅[158]cmである。火床部は床面を5cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変している。煙道は外傾して立ち上がる。

#### 土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 2 極暗赤褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子・粘土粒子微量
- 3 極暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化物・炭化粒子・灰微量
- 5 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 6 極暗赤褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子・ローム粒子・灰微量

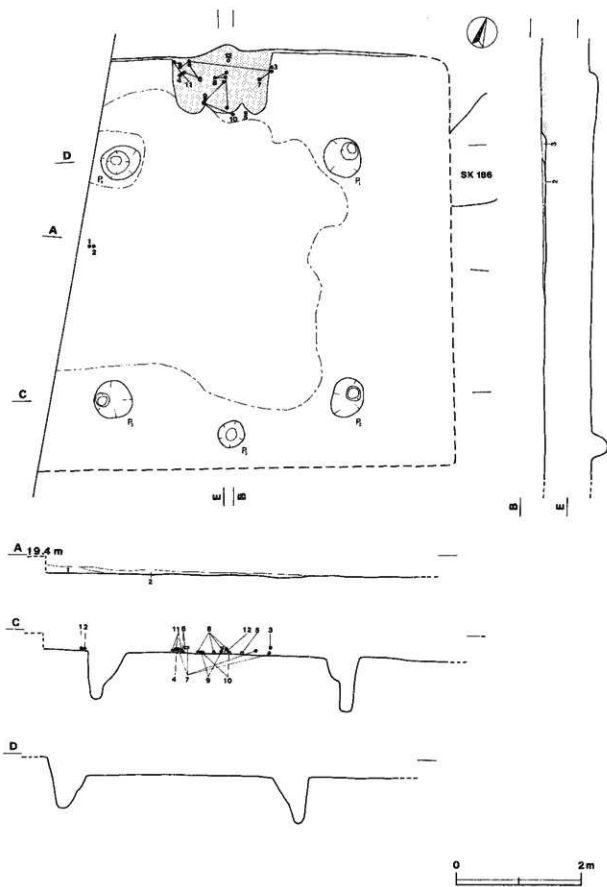
ピット 5か所(P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>は，径62cmの円形で，深さは78cmである。P<sub>2</sub>は，長径65cm，短径53cmの楕円形で，深さは88cmである。P<sub>3</sub>は，径60cmの円形で，深さは78cmである。P<sub>4</sub>は，長径62cm，短径53cmの楕円形で，深さ56cmである。いずれも主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は，長径46cm，短径41cmの楕円形で，深さ28cmである。出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層からなり，自然堆積である。

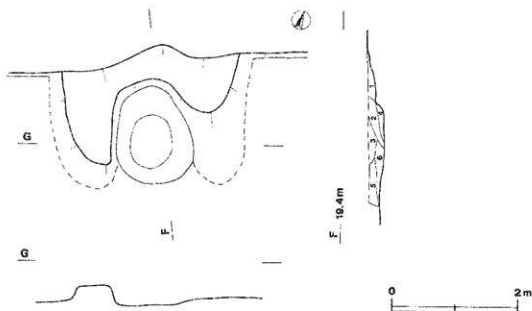
#### 土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量，炭化粒子極微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量

遺物 土師器片180点，須恵器片1点が出土している。1の土師器杯が，西側覆土下層から逆位で，2の土師器杯がその東側から，3の土師器杯が竈右袖部東側の覆土上層から，8の土師器壺と9，10の土師器鉢が竈内から，4の上師器杯，6の土師器小形壺，7の土師器壺，11の上師器鉢，12の土製白玉が竈周辺覆土下層から，



第7图 第342号住居跡実測图



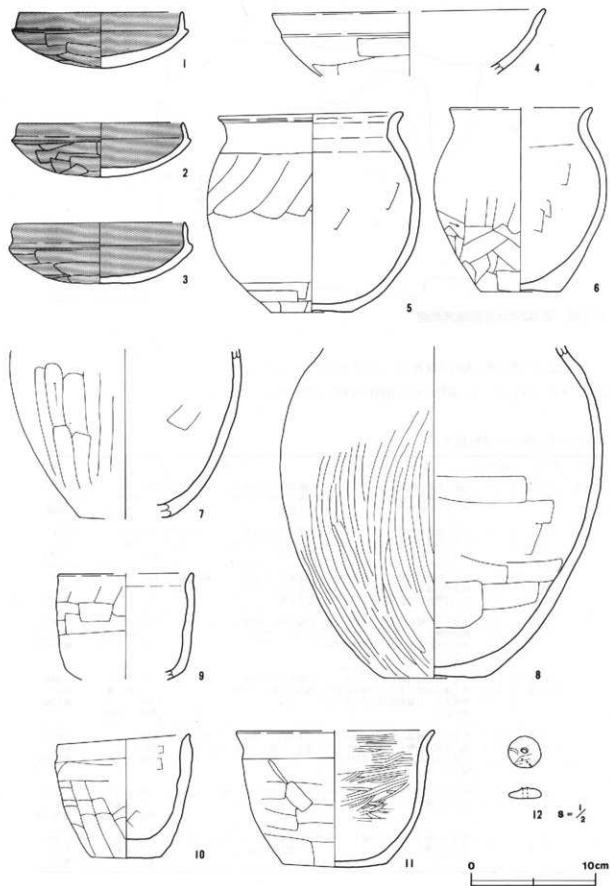
第8図 第342号住居跡実測図

5の土師器小形壺が甕石袖付近床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。

第342号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第9図 1	坏 土師器	A 19.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 体部と口縁部の境に段を有し、口縁 部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部 外面へラ削り。内面ナデ。内・外面 黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 明褐色(一部 黒色)	P2003 90% 甕石袖付下層	
		B 4.5					普通
2	坏 土師器	A 13.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 体部と口縁部の境に段を有し、口縁 部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部 外面へラ削り。内面ナデ。内・外面 黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 黒褐色	P2004 85% 1の裏側上下層	
		B 4.4					普通
3	坏 土師器	A 13.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 体部と口縁部の境に段を有し、口縁 部は内彎気味に直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部 外面へラ削り。内面ナデ。内・外面 黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 黒色	P2005 60% 層上層	
		B 4.8					普通
4	坏 土師器	A[22.6]	体部から口縁部にかけての破片。体 部は内彎して立ち上がり、体部と口 縁部の境に段をもつ。口縁部は外傾 する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母 にふい黄褐色	P2007 10% 甕石辺履上下層	
		B(5.2)					普通
5	小形壺 土師器	A 14.8	平底。体部は内彎して立ち上がり、 最大径が中位にある。口縁部は短く 外傾する。口縁端部外面に一条の沈 線をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部 外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒・雲母・スコリア 石英・礫 緑色 普通 二次焼成	P2009 70% 甕石袖付近床面	
		B 16.2					
		C 6.6					
6	小形壺 土師器	A[11.4]	底部から口縁部にかけての破片。平 底。体部は内彎して立ち上がり、最 大径が中位にある。口縁部は短く外 傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部 外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒 緑灰色 普通 二次焼成	P2011 40% 甕石辺履土下層	
		B 14.9					
		C 6.4					
7	壺 土師器	B(13.5)	底部から体部にかけての破片。平底。 体部は内彎して立ち上がる。	体部・底部外面へラ削り。内面へラ ナデ。	砂粒・雲母・石英 普通 二次焼成	P2012 30% 甕石辺履上下層	
		C 7.2					
8	壺 土師器	B(26.6)	底部から体部にかけての破片。平底。 体部は内彎して立ち上がる。	体部外面の中位から下位にかけて、 へラ削き。内面へラナデ。	砂粒・雲母・石英 にふい黄褐色 普通	P2013 40% 覆門	
		C 8.0					



第9图 第342号住居跡出土遺物实测图

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図	鉢 土師器	A[10.6] B(8.5)	底部から口縁部にかけての破片。体部はほぼ直立し、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母 褐色 普通	P2006 20% 窠内
10	鉢 土師器	A 10.6 B 9.9 C 5.4	平底。体部は内彎架味に立ち上がり、体部と口縁部の境に稜をもつ。口縁部は細くつばまる。底部肥厚。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒・雲母 褐色 普通	P2008 90% 窠内
11	鉢 土師器	A[15.8] B 11.0 C 8.3	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面へラ磨き。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P2010 50% 窠周辺覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
12	白玉	1.8	0.6	0.2	1.5	窠周辺覆土下層	D P2001 100%

### 第344号住居跡（第11図）

位置 調査5区北東部，113g9区。

重複関係 第17号溝が本跡を掘り込んでいるため，本跡が古い。

規模と平面形 ほとんどの壁が残存しておらず，また中央部が調査区域外になるため，規模や平面形は明確ではないが，長軸[7.00]m，短軸[6.30]mの長方形と推定される。

主軸方向 [N-36°-W]

壁 北西コーナー及び南西コーナー付近で確認でき，壁高は6～18cmで，外傾して立ち上がる。

床 西側の一部が擾乱されているが，全体的に平坦で，よく踏み固められている。

ピット 2か所(P<sub>1</sub>，P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は，径43cmの円形で，深さ58cmである。P<sub>2</sub>は，東半分が調査区域外になるため大きさは不明で，深さは36cmである。位置から主柱穴と考えられる。

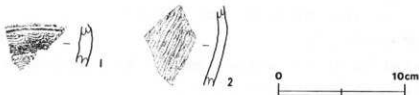
覆土 3層からなり，人為堆積と推測される。

#### 土層解説

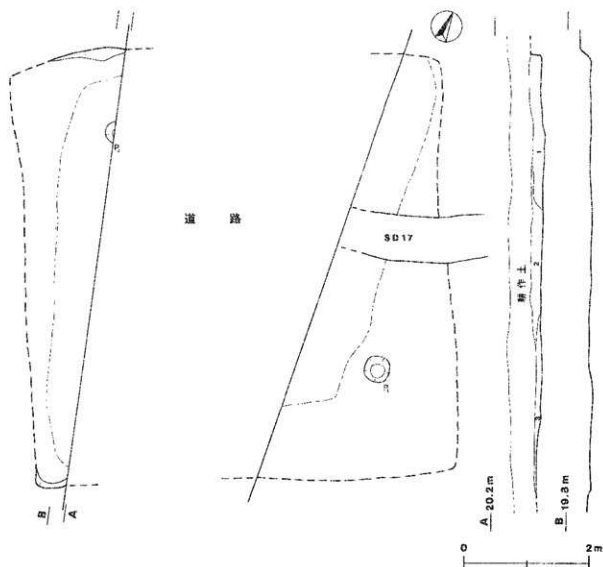
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片161点，須恵器片2点，陶器片2点が出土している。1は須恵器御付壺片で，カキ目，3条の櫛歯状波状文が施されている。2は須恵器甕の体部片で，外面に平行叩きが施されている。

所見 本跡の出土遺物は細片が多く時期判断は難しいが，古墳時代と考えられる。



第10図 第344号住居跡出土遺物実測図



第11図 第344号住居跡実測図

### 第345号住居跡 (第12図)

位置 調査5㍻北東部、114㍻区。

規模と平面形 南西から北東にかけて斜面部になっており、また竈と西コーナーの一部を除いては、ほとんどが削平されているため、規模や平面形は明確ではないが、長軸「4.06」m、短軸「4.00」mの方形と推定される。

主軸方向 [N-141°-W]

壁 西コーナーの一部が残存し、壁高は6cmで、外傾して立ち上がる。

床 竈の前面が踏み固められている。

竈 南西壁の中央部に付設されている。長さは91cm、袖幅116cm、壁外への掘り込みは15cmである。火床部は、火熱を受けて赤変している。煙道は、緩やかに立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量、焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量

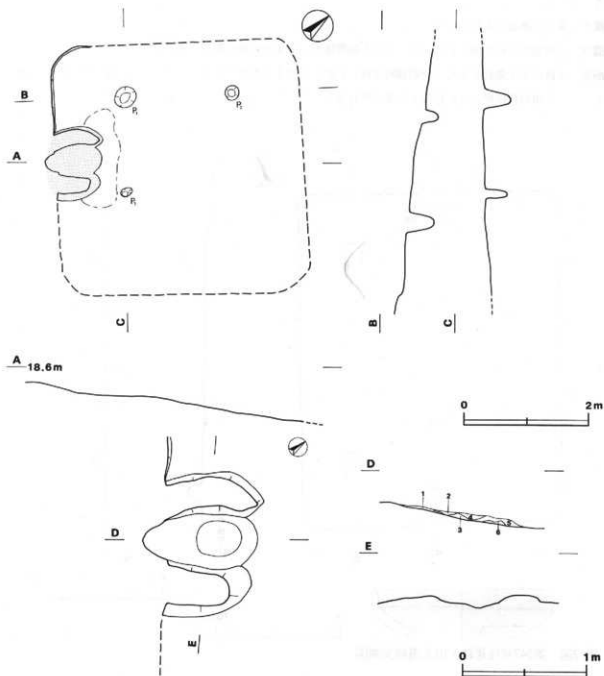
- 4 暗赤褐色 炭土粒子多量、焼土中ブロック・焼土小ブロック中量、炭化粒子微量  
 5 暗褐色 炭土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量  
 6 黒褐色 炭土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量

ピット 3か所(P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>は、径34cmの円形で、深さ45cmである。P<sub>2</sub>は、径23cmの円形、深さ26cmで、いずれも支柱穴と考えられる。P<sub>3</sub>は、長径20cm、短径12cmの楕円形で、深さ36cmで、性格は不明である。

覆土 削平により、覆土は確認できなかった。

遺物 同一個体と思われる甕の破片5点、土製品の支脚1点が竈周辺の覆土から出土しているのみである。

所見 本跡の時期は、外面に縦位のヘラ削り、内面に丁寧なヘラ磨きが施されている甕片が出土していることと、竈が付設されている遺構の形態から、古墳時代後期と考えられる。



第12図 第345号住居跡実測図

第347号住居跡（第13図）

位置 調査5区北部，I13<sub>1</sub>区。

規模と平面形 耕作による攪乱を受け，規模や平面形は明確ではないが，残存する床や柱穴から長軸[5.32]m，短軸[4.16]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-18°-W

床 全体的に平坦で，竈前面が踏み固められている。

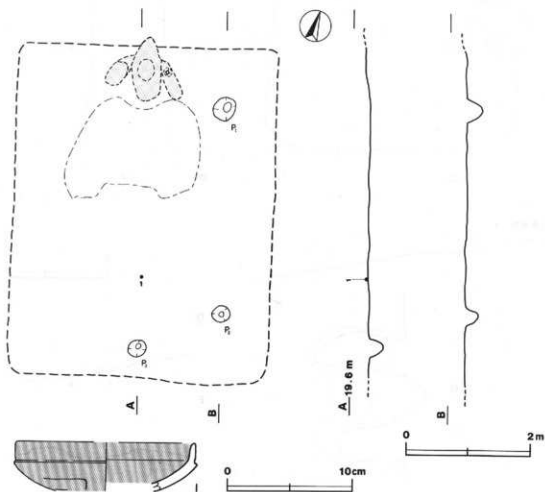
竈 南北に数本のトレンチャーによる攪乱があり，北壁中央部に火床部のみが残存していた。

ピット 3か所(P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>は，径37cmの円形で，深さ25cmである。P<sub>2</sub>は，径30cmの円形で，深さ20cmである。位置から主柱穴と考えられる。P<sub>3</sub>は，径28cmの円形，深さは20cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 覆土は確認できなかった。

遺物 土師器片37点が出土している。1の土師器片が，中央やや南の覆土下層から出土している。

所見 本跡は出土遺物が少なく時期判断は難しいが，1の土師器片が出土していることと竈を付設していることから，古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。



第13図 第347号住居跡・出土物実測図



第347号住居跡出土遺物観察表

採取番号	器種	寸法(mm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図 1	坏 土函器	A[14.2] B[ 8.9]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内側して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部は直立する。	口縁部内・外面無ナデ。体部・底部外面へう割り。内面ナデ。内・外面凹色処理。	粒粒・藍白・スコリア 了 黒色 普通	P2006 15% 覆土下層

## 第348号住居跡（第14図）

位置 調査5区中央部、J13e9区。

重複関係 第349号住居跡を掘り込んでいたので、木跡が新しい。

規模と平面形 本跡の東側は調査区域外に延びており、第349号住居跡と重複しているのですが明確ではないが、残存する壁や柱穴から長軸8.00m、短軸[6.07]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-38°-W

壁 北西壁と南西壁の一部が残存し、壁高は5～6cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦である。

竈 北西壁中央部に付設されている。長さは127cm、袖幅は135cmで、壁外への掘り込みは45cmである。両袖部の一部に砂混じりの粘土が残存している。火床部は、残存していない。煙道部は、ほぼ垂直に立ち上がる。

## 竈土層解説

- 1 明赤褐色 焼土粒子多量
- 2 赤褐色 焼土粒子・炭化物中量
- 3 黒褐色 炭化粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・粘土小ブロック少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、炭化物微量

ピット 1か所(P1)。P1は、径24cmの円形で、深さ53cmで、主柱穴と考えられる。床面を丁寧に精査したが、他にピットを確認することはできなかった。

貯蔵穴 竈の北東部に確認されている。長径95cm、短径85cmの楕円形で、断面形は皿状をしている。

## 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、炭化物微量、ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量、ローム中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量

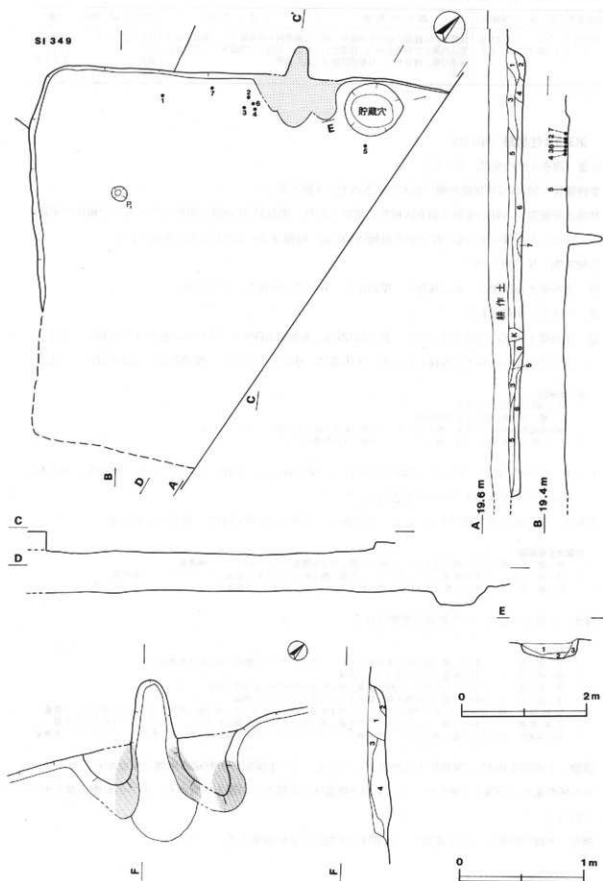
覆土 7層からなり、人為堆積と推測される。

## 土層解説

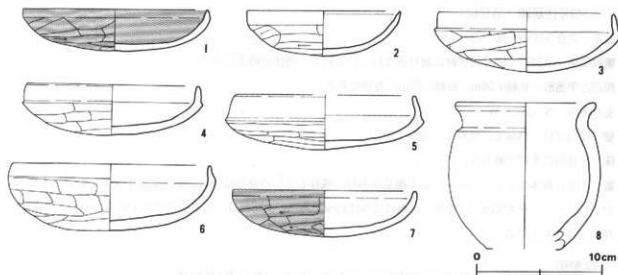
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量、焼土粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
- 5 暗褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック・粘土粒子微量
- 7 暗褐色 焼土粒子中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片169点、陶器片1点が出土している。5の上師器坏が貯蔵穴南側の床面から、2～4、6の土師器坏が近隣の覆土下層から、1、7の七師器坏が北壁近くの覆土下層から、8の小形甕が覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期の7世紀前後と考えられる。



第14图 第348号住居跡実測图



第15図 第348号住居跡出土遺物実測図

第348号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第15図 1	坏 土器	A 14.6 B 3.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 灰褐色 普通	P2027 95% 北西壁近く 覆土下層
2	坏 土器	A 12.1 B 3.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に稜をもつ。口縁部は直立する。口縁部内面直下に一条の沈線をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り後、ナデ。内面ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P2028 95% 甕付近覆土下層
3	坏 土器	A 13.8 B 4.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・スコリア 内面にふいご色・ 外面灰褐色 普通	P2029 70% 甕付近覆土下層
4	坏 土器	A 13.6 B 4.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P2030 70% 甕付近覆土下層
5	坏 土器	A [14.2] B 4.4	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 35% 褐色 普通	P2031 35% 貯蔵穴南側床面
6	坏 土器	A 15.6 B 5.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に稜をもつ。口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り後、ナデ。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P2032 65% 甕付近覆土下層
7	坏 土器	A 14.4 B 3.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に稜をもつ。口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面ナデ。外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 内面にふいご色・ 外面黒色 普通	P2033 80% 北西壁近く 覆土下層
8	小型 土器	A 11.0 B 11.2 C [ 6.0]	平底。体部は内彎して立ち上がり、最大径を中位にもつ。口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。全体的に磨減が激しい。	砂粒・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P2034 50% 覆土中

### 第349号住居跡 (第16図)

位置 調査5区中央部, J13c7区。

重複関係 第348, 354号住居跡に掘り込まれているので, 両住居跡より古い。

規模と平面形 長軸6.56m, 短軸6.55mの方形である。

主軸方向 N-20°-W

壁 壁高は11~14cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で軟らかい。

竈 南北に数本のトレンチャーによる覆乱があり, 残存している部分は少ないが, 北壁中央部に砂質粘土で付設されている。長さ96cmで, 壁外への掘り込みは27cmである。火床部は, 火熱を受けて赤変している。煙道は, 外傾して立ち上がる。

#### 壁土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, 炭化粒子・ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土大ブロック・ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・ローム小ブロック中量, 焼土小ブロック・炭化粒子少量, ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土中ブロック・ローム中ブロック微量
- 5 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・ローム小ブロック中量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム中ブロック少量
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック微量

ピット 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は, 長径43cm, 短径37cmの楕円形で, 深さ23cmである。位置から, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。床面を丁寧に精査したが, 他にピットを確認することはできなかった。

覆土 4層からなり, 自然堆積である。

#### 土層解説

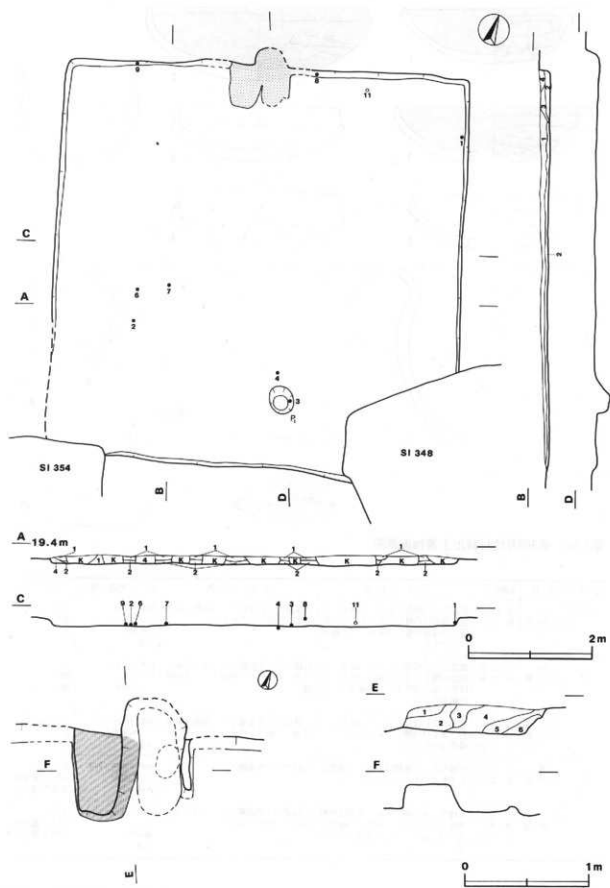
- 1 赤褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・ローム中・小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 3 赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子微量

遺物 土師器片371点, 須恵器片8点が出土している。4の土師器片がP<sub>1</sub>北側の床面から, 1の土師器片が東壁際覆土中層から, 8の土師器片が東側の北壁際覆土中層から, 9の土師器片が西側の北壁際から, 3の土師器片がP<sub>1</sub>覆土下層から, 2, 6の上師器片, 7の土師器小形甕が中央やや西寄りの覆土下層から, 11の上玉が北壁近くの覆土上層から, 5の土師器片, 10の須恵器舞付甕が覆土中からそれぞれ出土している。

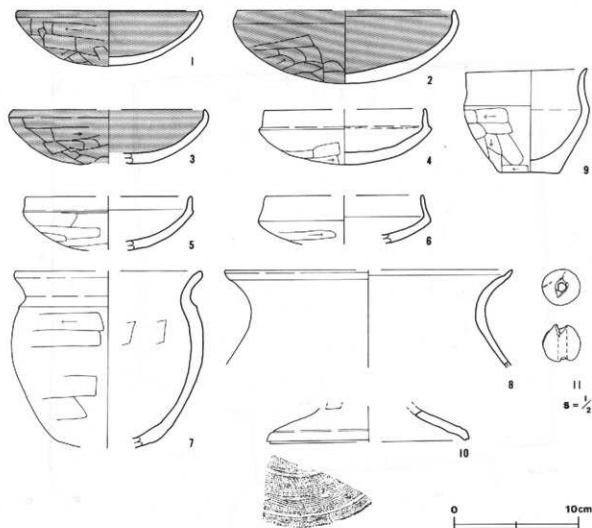
所見 本跡の時期は, 出土遺物から古墳時代後期の7世紀前半と考えられる。

### 第349号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・成焼	備考
第17図 1	埴 土 師 器	A 14.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり, 体部と口縁部の境に弱い段をもつ。口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り後, ナデ。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P2035 70% 東壁際覆土中層
		B 4.5				
2	埴 土 師 器	A[17.4]	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり, 体部と口縁部の境に段をもつ。口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り後, ナデ。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P2036 40% 覆土下層
		B 5.9				
3	埴 土 師 器	A[15.4]	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり, 体部と口縁部の境に段をもつ。口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り後, ナデ。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スクリ ア にぶい赤褐色 普通	P2037 20% P <sub>1</sub> 覆土下層
		B(4.4)				
4	埴 土 師 器	A[13.0]	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり, 体部と口縁部の境に段を有し, 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り後, ナデ。内面ナデ。内・外面剥離が著しい。	砂粒・雲母・石英・ スクリ ア にぶい褐色 普通	P2038 25% P <sub>1</sub> 北側床面
		B 4.5				



第16图 第349号住居跡実測图



第17図 第349号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 5	坏 土師器	A[13.2] B 4.4	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 反表褐色 普通	P2039 20% 覆土中
6	坏 土師器	A[12.6] B( 3.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段をもつ。口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ。内面ナデ。外面磨減。	砂粒・雲母・スコリア ・石英 にぶい褐色 普通	P2040 20% 覆土下層
7	小形 鉢 土師器	A[14.8] B 14.3 C[ 8.0]	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P2041 30% 覆土下層
8	壺 土師器	A[23.1] B( 7.9)	口縁部片。口縁部は外反し、端部はわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい褐色 普通	P2042 5% 壺東側 北壁際覆土中層
9	小形 鉢 土師器	A 9.7 B 8.5 C 4.8	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、体部と口縁部の境に弱い段をもつ。口縁部はやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P2043 80% 壺西側 北壁際覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 10	押付 須恵器	D[16.0] E(2.3)	唇部片。峯部内・外面に一条の沈線をもつ。透かしをもつ。	脚部外面カキ目。内面ナデ。	砂粒 内面黒色・ 外面灰褐色 普通 二次焼成	P2044 5% 覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
11	上玉	2.0	2.0	0.5	6	北壁近く覆土上層	D P2002 90%

### 第352号住居跡(第18図)

位置 調査5区北東部, 113a7K。

重複関係 第353号住居跡に掘り込まれているので、本跡が古い。

規模と平面形 北東側約3分の2が調査区域外に延びており、第353号住居跡と重複しているので規模や平面形は明確ではないが、残存する壁や床から、長軸(4.15)m、短軸(2.15)mで、方形または長方形と推定される。主軸方向 [N-40°-W]

壁 壁高は2~10cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南西壁下から北西壁下にかけて確認され、上幅10~18cm、下幅3~6cm、深さ3~7cmで、断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で、敷らかい。

ピット 床面を丁寧に精査したが、ピットは確認できなかった。

覆土 4層からなり、人為堆積と推測される。

#### 土層解説

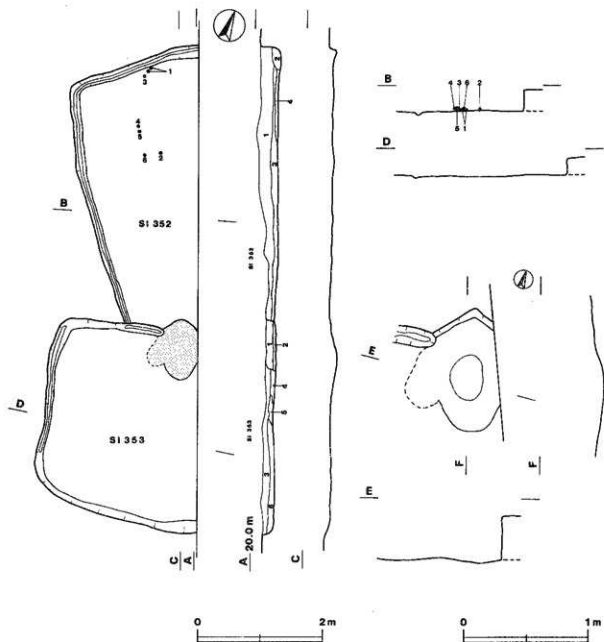
- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 2 黒褐色 焼七粒子・ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック・粘土粒子微量
- 3 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量

遺物 土師器片42点、須恵器片1点が出土している。1の土師器片が北西壁近くの覆土下層から、2の土師器片が中央の床面から、3の土師器片が1の近くの床面から、4の土師器片が北西よりの覆土下層から、5の土師器片が4の南側覆土下層から、6の土師器片が2の西側の覆土下層から、7の刀子が覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、2、3が出土していることから、古墳時代後期の6世紀中葉と考えられる。

### 第352号住居跡出土遺物観察表

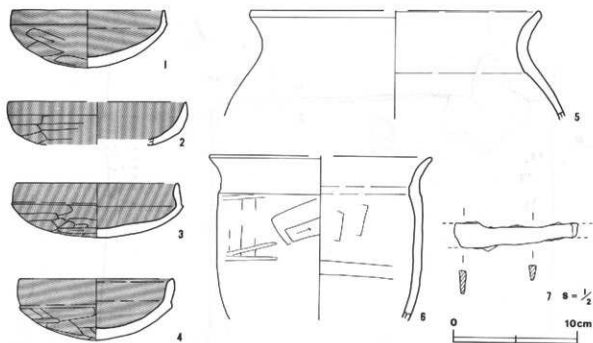
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 1	坏 土師器	A 12.2 B 4.7	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に線をもち、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り成。へラ削き。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア。明褐色 普通	P2053 90% 覆土下層
2	坏 土師器	A[14.2] B(3.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に線をもち、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 灰青褐色 普通	P2054 10% 中央床面



第18図 第352・353号住居跡実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 3	坏 土師器	A 12.9 B 4.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面ナデ。内・外面黒色処理されているが、磨滅により色が薄れている。	砂粒・雲母・スコリアに富み黄褐色普通	P2055 100% 北西壁近く床面
4	坏 土師器	A 12.4 B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部は内彎強味に直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り後、ナデ。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P2056 95% 北西寄り覆土下層
5	甕 土師器	A 23.2 B ( 8.8)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア・石英に富み赤褐色普通	P2088 10% 覆土下層





第19図 第352号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 6	甕 土師器	A〔17.8〕 B〔13.3〕	体部中位から口縁部にかけての破片。 体部は内彎気味に直立し、体部と口 縁部の境に線をもち、口縁部はやや 外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面ヘ ラ削り後、ヘラ磨き。内面ヘラナゲ。	砂粒・雲母・スコリア 黒褐色 普通	P2057 20% 中央覆土下層

図版番号	種別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	刀 子	(6.6)	1.3	0.4	(10)	覆土中	M2000

### 第354号住居跡 (第20図)

位置 調査5区中央部、J13e区。

重複関係 第349号住居跡を掘り込み、第350号住居跡に掘り込まれているので、第349号住居跡より新しく、第350号住居跡より古い。

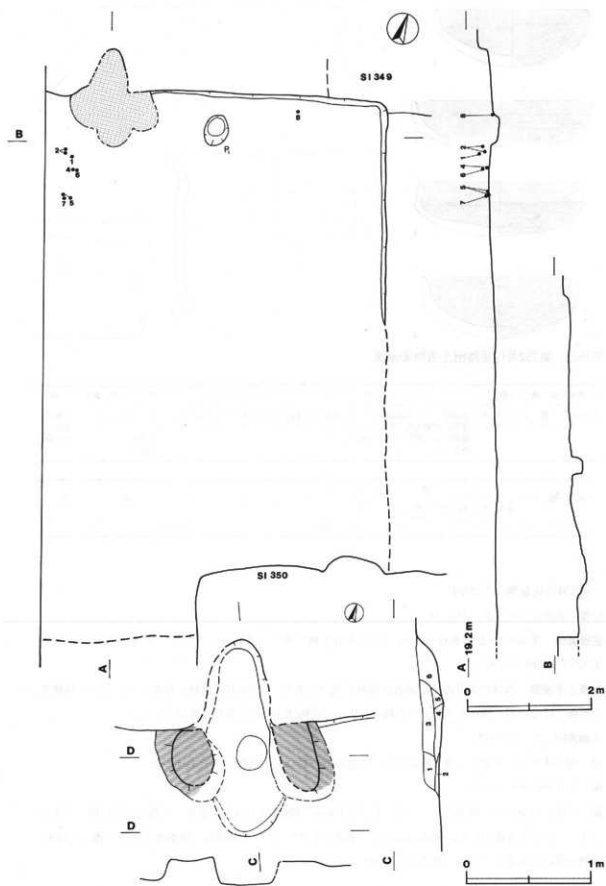
規模と平面形 西側約3分の1が調査区域外に延びており、第350号住居跡と重複しているため規模や平面形は明確ではないが、残存する壁から長軸〔8.70〕m、短軸〔8.60〕mの方形と推定される。

主軸方向 N-18°-W

壁 竈の東側から東壁の一部で確認でき、壁高は9~12cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦である。

竈 北壁に砂質粘土で構築されている。長さは158cm、袖幅は140cmで、壁外への掘り込みは65cmである。トレンチャーによる攪乱のため、袖部はほとんど確認できなかった。火床部は、床面を5cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。煙道は、外傾して立ち上がる。



第20图 第354号住居跡実測図

産土層解説

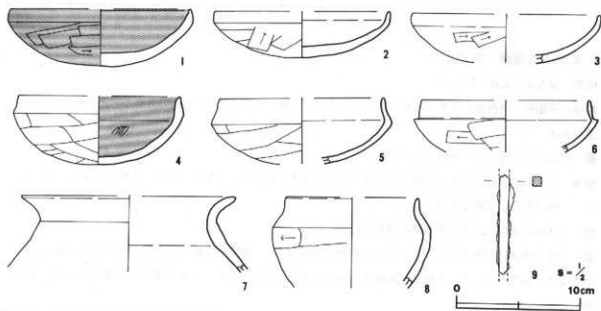
- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子・粘土粒子微量, 焼土小ブロック・ローム小ブロック・砂極微量
- 2 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子少量, 焼土小ブロック・粘土粒子微量, ローム小ブロック・灰極微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土小ブロック微量, ローム小ブロック・砂極微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量, 粘土粒子・灰微量, 焼土小ブロック極微量
- 5 暗褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量, 粘土粒子・灰微量
- 6 暗褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量, 炭化物・粘土粒子微量, ローム小ブロック・灰極微量

ピット 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は長径50cm, 短径39cmの楕円形で, 深さは20cmである。性格は不明である。

覆土 覆土は確認できなかった。

遺物 土師器片379点, 須恵器片1点, 土製品3点, 鉄釘1点が出土している。1の土師器片が竜南側の覆土上層から, 2の土師器片が1のすぐ西側の覆土中層から, 4の土師器片が1の南側の覆土下層から, 6の土師器片が4のすぐ近くの覆土中層から, 5の土師器片が6の南側の床面から, 7の土師器片が5のすぐ近くの床面から, 8の土師器小形壺が北壁近くの床面から, 3の土師器片, 9の鉄釘が覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡は第349号住居跡を掘り込み, 第350号住居跡に掘り込まれていることから, 古墳時代後期の7世紀前半と考えられる。



第21図 第354号住居跡出土遺物実測図

第354号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 1	坏 土師器	A[14.4] B 4.7	丸底, 体部は内彎して立ち上がり, 体部と口縁部の境に稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り後, ナデ。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 60% にふい赤褐色 普通	P2061 60% 竜南側覆土上層
2	坏 土師器	A[14.0] B 3.7	丸底, 体部は内彎して立ち上がり, 体部と口縁部の境に稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P2062 60% 1の西側覆土中層
3	坏 土師器	A[15.0] B(3.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。外面磨減。	砂粒・長石・雲母 にふい赤褐色 普通	P2063 15% 覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第21図 4	坏 土師器	A(13.0) B 5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 体部と口縁部の境に稜をもつ。口縁 部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部 外面へラ削り。内面へラ磨き。内面 黒色処理。外面は剥離している。	砂粒・雲母・石英 外面黒褐色・内面黒 色 普通	P2064 50% 1の南側埋土層
5	坏 土師器	A(13.2) B(5.3)	体部から口縁部にかけての破片。体 部は内彎して立ち上がり、体部と口 縁部の境に稜をもつ。口縁部はほぼ 直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・石英 灰褐色 普通	P2065 30% 6の南側埋土層
6	坏 土師器	A(13.6) B(4.2)	体部から口縁部にかけての破片。体 部は内彎して立ち上がり、体部と口 縁部の境に稜を有し、口縁部は直立 する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P2066 15% 4の近く埋土層
7	甕 土師器	A(17.2) B	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 灰黄褐色 普通	P2067 5% 5の近く床面
8	甕 土師器	A(10.6) B(7.3)	体部から口縁部にかけての破片。体 部は内彎して立ち上がり、口縁部は 直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P2081 10% 北壁近く床面

図版番号	器種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
9	釘	(5.3)	0.5	0.5	(4)	埋土中	M2001

### 第355号住居跡 (第22図)

位置 調査5以北、I13g区。

規模と平面形 南西部が調査区域外に延びているが、長軸5.40m、短軸5.39mの方形と考えられる。

主軸方向 N-2°-E

壁 壁高は1~12cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南西部の調査区域外が不明であるほかはほぼ全周しており、上幅8~18cm、下幅2~7cm、深さ5~7cmで、断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。長さは87cm、袖幅103cm、壁外への掘り込みは8cmである。袖の内壁は火熱を受けて赤変している。火床部は床面を5cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。煙道は外傾して立ち上がる。

#### 埋土層解説

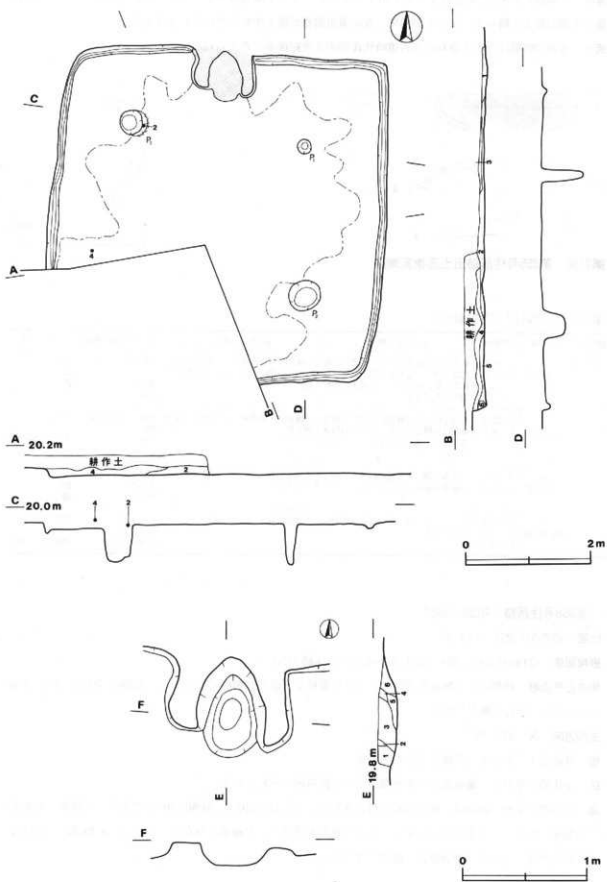
- 1 黒褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・粘土粒子少量
- 3 明赤褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、焼土中ブロック中量、炭化粒子少量
- 4 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子少量、粘土粒子少量
- 6 暗褐色 粘土中ブロック中量、焼土粒子・炭化物少量

ピット 3か所(P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>は、径23cmの円形で、深さ68cmである。P<sub>2</sub>は、径49cmの円形で、深さ39cmである。P<sub>3</sub>は、長径47cm、短径41cmの楕円形で、深さ56cmである。いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 6層からなり、自然堆積である。

#### 土層解説

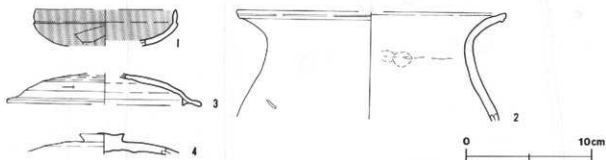
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・ローム中ブロック・粘土小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 4 稀暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 5 稀暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック・粘土小ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量



第22图 第355号住居跡実測図

遺物 土師器片198点, 須恵器片7点が出土している。2の土師器甕がP<sub>3</sub>付近の覆土下層から, 4の須恵器蓋が西側の覆土上層から, 1の土師器坏, 3の須恵器蓋が覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から古墳時代後期の7世紀後半と考えられる。



第23図 第355号住居跡出土遺物実測図

第355号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 1	坏 土師器	A[11.0] B(2.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に稜をもつ。口縁部は内彎気味に直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 20% 褐色 普通	P2068 20% 覆土中
2	甕 土師器	A[21.2] B(8.6)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反し、端部はわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。内面に指頭押圧痕。	砂粒・雲母・石英 褐色 普通	P2069 5% P <sub>3</sub> 付近覆土下層
3	蓋 須恵器	A[15.4] B(2.5)	つまみ欠損。天井部は緩やかに開く。口縁部内面にかえりがつく。	天井部回転へラ削り。口縁部内面ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英 黄灰色 普通	P2070 30% 覆土中
4	蓋 須恵器	B(1.7) F 3.5 G 0.7	ボタン状のつまみがつく。天井部は平坦である。	天井部回転へラ削り。内面ロクロナデ。	砂粒・雲母・スコリア・石英 25% 灰黄色 普通	P2071 25% 西側覆土上層

### 第358号住居跡 (第25・26図)

位置 調査5区北部, I13js区。

重複関係 第193号土坑に掘り込まれているため, 本跡が古い。

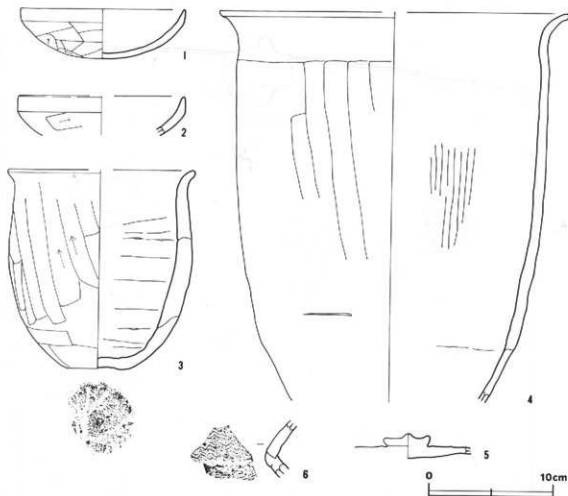
規模と平面形 耕作による攪乱を受けているため規模や平面形は明確ではないが, 長軸[9.70]m, 短軸[8.80]mの長方形であると推定される。

主軸方向 N-23°-W

壁 壁高は4~8cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で, 竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

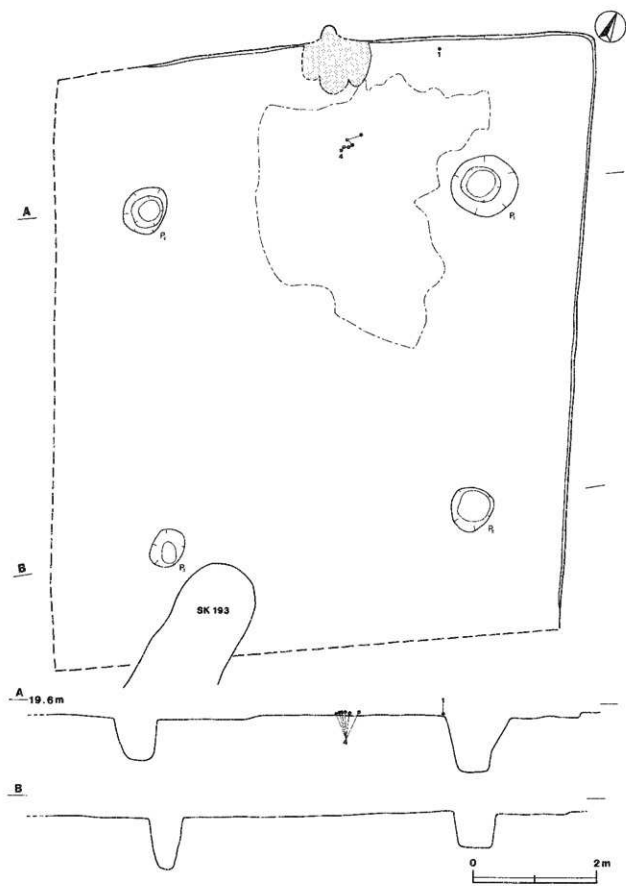
竈 北西壁に壁外へ23cmほど掘り込んで付設されている。長さ110cm, 袖幅[110]cmである。左袖部と火床部から右袖部にかけて, 2本のトレンチャーによる攪乱を受けて, 左袖部は残存していない。右袖部の一部には, 砂質粘土が残っている。煙道部は, 確認できなかった。



第24図 第358号住居跡出土遺物実測図

第358号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	坏 土器器	A 13.2 B 4.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P2074 80% 覆土下層
2	坏 土器器	A[13.2] B(3.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P2075 10% 覆土中
3	小型 土器器	A[14.9] B 16.0 C 4.8	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラナデ。体部内面に輪痕み痕。底部に木炭痕。	砂粒・雲母・スコリア・石英・長石 赤褐色 普通 二次焼成 胎土が粗い	P2076 50% 覆土中
4	瓶 土器器	A[28.0] B(31.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部はほぼ直立し、口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラ磨き。体部内面に輪痕み痕。	砂粒・雲母・スコリア・石英 赤褐色 普通	P2077 20% 覆前面覆土下層
5	蓋 須器器	B(1.9) F 3.6 G 0.8	天井部は平坦である。ボタン状のつまみがつく。	天井部回転へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・石英 灰色 普通	P2078 20% 覆土中
6	壺 須器器	B(4.5)	口縁部片。頸部はくの字状に屈曲する。	頸部には4本一条の櫛歯状工具による波状文。	砂粒 内面黒褐色・外面に ぶい黄色 普通 二次焼成	P2079 5% 覆土中



第25图 第358号住居跡実測图

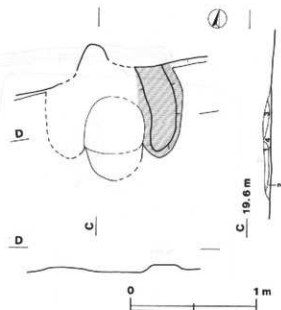


ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>は、長径107cm、短径98cmの楕円形で、深さ92cmである。P<sub>2</sub>は、長径73cm、短径65cmの楕円形で、深さ57cmである。P<sub>3</sub>は、長径63cm、短径50cmの楕円形で、深さ82cmである。P<sub>4</sub>は、長径82cm、短径65cmの楕円形で、深さ67cmである。いずれも支柱穴と考えられる。

覆土 覆土は確認できなかった。

遺物 土師器片398点、須恵器片6点、陶器片3点、土製品1点、鉄滓2点が出土している。1の土師器杯が北西壁近くの覆土下層から、4の土師器甕が竈前面の覆土下層から、2の土師器杯、5の須恵器蓋、3の土師器小形甕、6の須恵器甕がそれぞれ覆土中から出土している。5の須恵器蓋は混入と思われる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期の7世紀初頭と考えられる。



第26図 第358号住居跡竈実測図

### 第362号住居跡 (第27図)

位置 調査5区北部、112eol区。

重複関係 第363~366号住居跡に掘り込まれているので、本跡は、それぞれの住居跡より古い。また第206号土坑に掘り込まれ、第207号土坑の上部に構築されているので、第206号土坑より古く、第207号土坑より新しい。

規模と平面形 重複と耕作による攪乱により規模や平面形は明確ではないが、残存する壁や床から長軸9.12m、短軸[9.08]mの方形と考えられる。

主軸方向 N-15°-W

壁 壁高は2~7cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北西コーナーから北壁下にかけて確認され、上幅13~30cm、下幅3~10cm、深さ4~5cmで、断面形はU字形である。

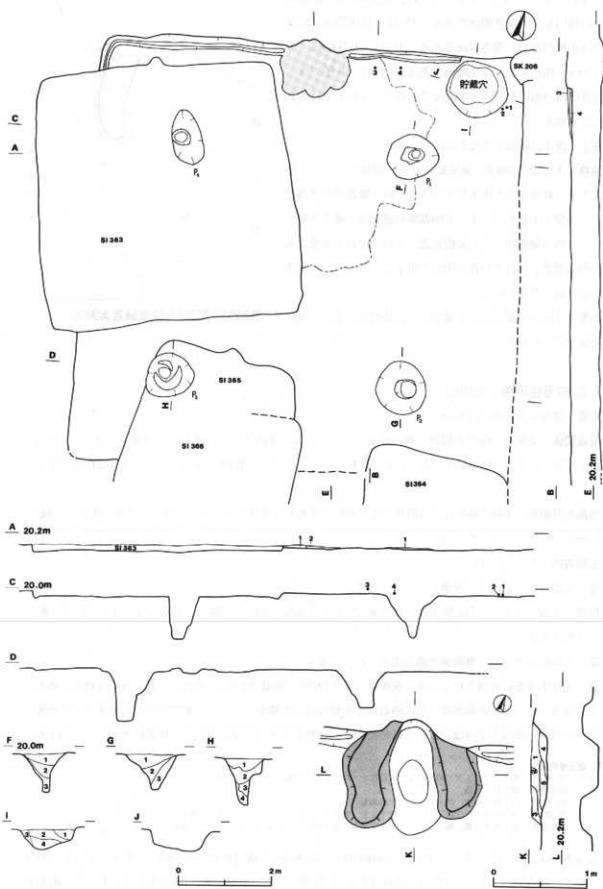
床 全体的に平坦で、竈前面が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、長さ123cm、袖幅150cmで、壁外への掘り込みは18cmである。天井部は崩落している。両袖部は、壁に砂質粘土を貼り付けて構築しており、袖の内壁は火熱を受けて赤変している。火床部は床面を7cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。煙道は外傾して立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土小ブロック微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量
- 3 暗褐色 粘土粒子中量、焼土粒子・炭化物微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・ローム小ブロック微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・灰少量、焼土中ブロック・ローム小ブロック微量

ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>は、長径110cm、短径93cmの楕円形で、深さ88cmである。P<sub>2</sub>は、径110cmの円形で、深さ79cmである。P<sub>3</sub>は、長径105cm、短径93cmの楕円形で、深さ105cmである。P<sub>4</sub>は、長径100cm、短径62cmの楕円形で、深さ89cmである。いずれも支柱穴と考えられる。



第27图 第362号住居跡实测图

P<sub>1</sub>土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量、焼土粒子極微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量、焼土粒子極微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量

P<sub>2</sub>土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量

P<sub>3</sub>土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック微量、焼土粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子極微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 褐色 ローム粒子多量

貯蔵穴 北東コーナー部から確認されている。長径133cm、短径116cmの楕円形で、底面は鍋底状をしている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・ローム小ブロック微量、焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量、焼土粒子極微量

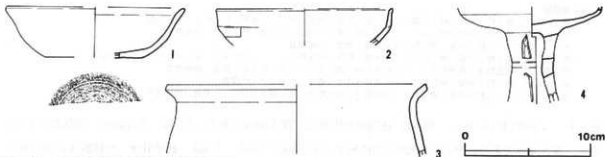
覆土 4層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック少量・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子微量

遺物 土師器片182点、須恵器片4点が出土している。2の土師器坏が貯蔵穴付近の床面から、1の土師器坏が2のすぐ近くの覆土下層から、4の須恵器高坏が北壁近くの覆土下層から、3の土師器甕が4の西側の覆土上層からそれぞれ出土している。1、3は、混入と考えられる。

所見 本跡の時期は、2の土師器坏、4の須恵器高坏が出土していることから、古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。



第28図 第362号住居跡出土遺物実測図

### 第362号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	引線図(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 1	坏 土師器	A(14.0) B 4.0 C( 7.8)	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部から体部にかけての外面クロコナデ。底部回転ヘリ残り。内面磨減が激しい。	砂粒・雲母・石英 褐色 普通 二次焼成	P2083 20% 覆土下層
2	土師器	A(13.8) B( 2.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘリ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母 褐色 普通	P2084 5% 貯蔵穴付近床面
3	土師器	A(20.4) B( 5.8)	口縁部片。口縁部は外反し、端部は短くつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 に灰(赤褐色) 普通	P2085 5% 4の西側覆土上層
4	高須 須恵器	B( 7.6) E( 5.5)	胴部から肩部にかけての破片。胴部は筒状で、上下二段に三つの三角形透かしをもつ。肩部はほぼ平出である。	坏部内・外面、胴部外面クロコナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P2086 30% 北壁近く覆土上層

### 第363号住居跡 (第29図)

位置 調査5区北部、I12c区。

重複関係 第362号住居跡を掘り込み、第207号土坑の上部に構築されているので、第362号住居跡、第207号土坑より新しい。

規模と平面形 長軸5.52m、短軸5.45mの方形である。

主軸方向 N-21°-W

壁 壁高は12~16cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅12~22cm、下幅4~11cm、深さ3~7cmで全周しており、断面形は、U字形である。

床 全体的に平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北西壁中央部に付設されている。規模は長さ125cm、袖幅136cm、壁外への掘り込みは16cmである。袖部は砂質粘土を壁面に貼り付けて構築しており、内壁は火熱を受けて赤変している。火床部は、床面を6cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。煙道は、緩やかに立ち上がる。

#### 遺土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック微量、粘土粒子・砂粒微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・粘土粒子微量、砂粒微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量、砂粒微量
- 4 黒褐色 粘土粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・砂少量、焼土中ブロック微量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・粘土粒子微量、砂粒微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・灰微量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、焼土小ブロック微量、砂粒微量

ピット 5か所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>は、径34cmの円形で、深さ60cmである。P<sub>2</sub>は、長径38cm、短径32cmの楕円形で、深さ58cmである。P<sub>3</sub>は、径26cmの円形で、深さ40cmである。P<sub>4</sub>は、長径31cm、短径27cmの楕円形で、深さ60cmである。いずれも支柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は、長径37cm、短径32cmの楕円形で、深さ50cmである。

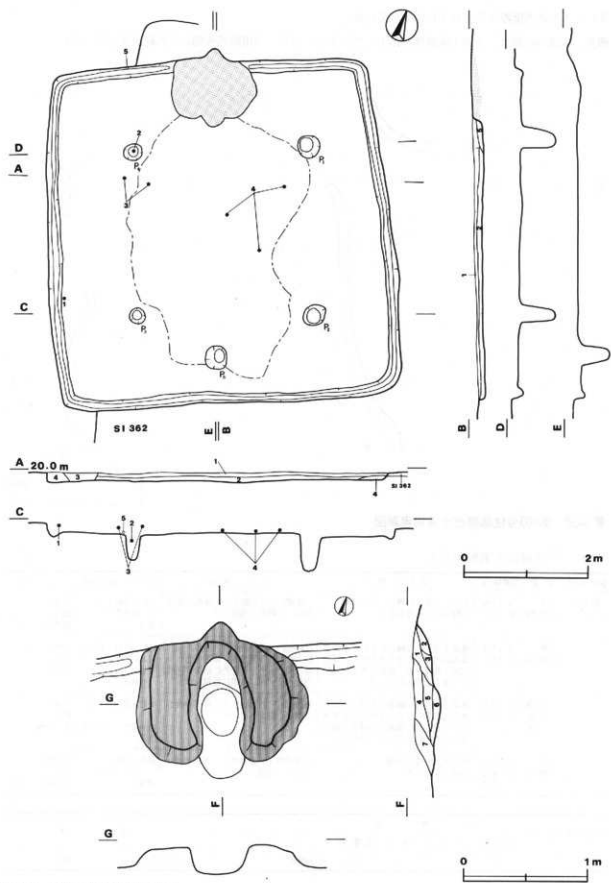
位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり、自然堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子中量、炭化物・ローム小ブロック微量
- 5 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子微量

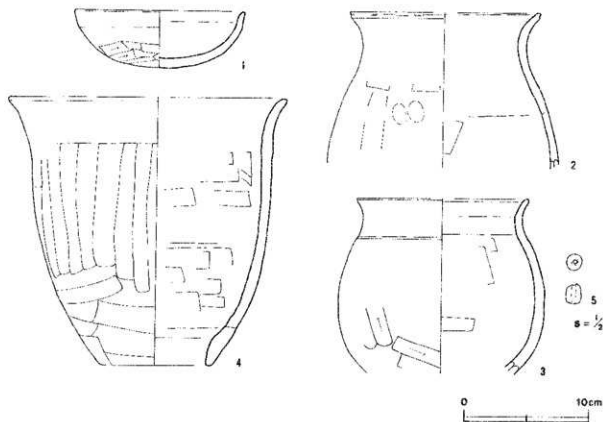
遺物 土師器片509点、須恵器片1点、土製品3点が出土している。1の土師器杯が南西壁際から正位で、2



第29图 第363号住居跡实测图

の七脚器裏がP<sub>1</sub>の覆土中から、3の土師器小形壺がP<sub>1</sub>の南側から、4の上脚器甕が中央部覆土中層から、5の小玉が北西壁際からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、1の土師器甕が出土していることから、吉墳時代後期の7世紀前半と考えられる。



第30図 第363号住居跡出土遺物実測図

第363号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	土師器 甕	A 13.6 B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外周へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア ア 明赤褐色 普通	P2087 96% 南西壁際
2	土師器 上脚器	A 15.21 B 12.5	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。端部は外上方に短くつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面に縦方向のヘラ当て痕。体部外面へラ削り底、ナデ。部分的に右側押仕。内面へラナデ。体部に輪痕み風。	砂粒・雲母・石英 にふい橙色 普通 二次焼成	P2088 15% P4覆土中
3	土師器 小形壺	A 13.6 B 14.1	体部下位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、最大径を中位にもつ。体部と口縁部の境に接をもち、口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒・雲母・スコリア ア 外面橙色・内面黒色 普通	P2089 20% P4南側
4	土師器 甕	A 22.2 B 21.7 C 9.0	無紐式。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒・雲母・スコリア ア にふい橙色 普通	P2090 60% 中央部覆土中層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
5	小玉	1.1	0.8	0.2	0.87	北西壁際	D P2003 100%

第368号住居跡 (第31図)

位置 調査5区北西部, 112a区。

規模と平面形 耕作による擾乱のため規模や平面形は明確ではないが, 長軸[3.85]m, 短軸[3.67]mの方形と推定される。

主軸方向 [N-4°-W]

床 全体的に平坦である。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ98cmである。耕作による擾乱のため, 袖部は確認できなかった。

火床部は, 床面を5cmほど掘りくぼめており, 火熱を受けて赤変している。煙道は, 外傾して立ち上がる。

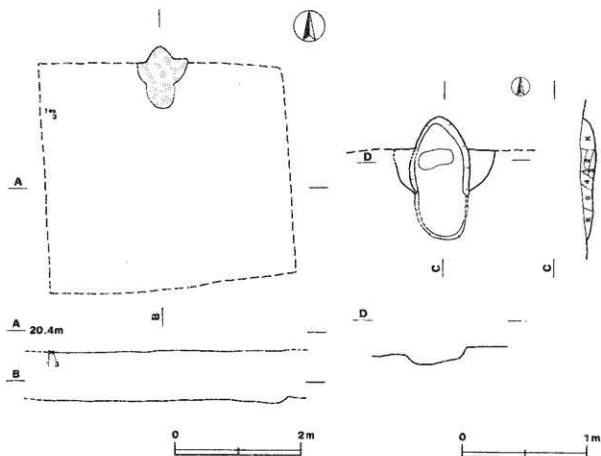
覆土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 灰多量, 焼土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量, 灰極微量
- 4 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子・ローム粒子微量, 灰極微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量

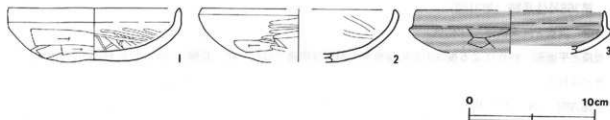
覆土 覆土は確認できなかった。

遺物 土師器片25点, 須恵器片1点, 陶器片2点が出土している。1の上脚器片が, 西壁と思われる付近の床面から, 3の上脚器片が1のすぐ近くの床面から, 2の土師器片が覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は, 1, 3の土師器片が出土していることから, 古墳時代後期の7世紀前後と考えられる。



第31図 第368号住居跡実測図



第32図 第368号住居跡出土遺物実測図

第368号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 1	杯 土器	A 13.6 B 4.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内面へラ磨き。	砂粒・蜜母・スコリア・石英 内面黒褐色・外面にぶい赤褐色 普通	P2003 95% 西壁付近床面
2	杯 土器	A(15.2) B(4.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段をもつ。口縁部は短く内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、へラ磨き。内面へラ磨き。	砂粒・蜜母 明赤褐色 普通	P2004 15% 覆土中
3	杯 土器	A(15.0) B(3.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・蜜母・石英 黒色 普通	P2005 5% 1の近く床面

### 第370号住居跡（第34・35図）

位置 調査5区北西部，I12e区。

重複関係 第18号溝に掘り込まれているので，本跡が古い。

規模と平面形 長軸7.44m，短軸6.87mの方形である。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高は2～7cmで，外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 北西壁中央部に付設されている。規模は，長さ105cm，袖幅105cm，壁外への掘り込みは30cmである。袖部は，壁面に砂質粘土を貼り付けて構築している。火床部は，床面を8cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変している。煙道は，火床面から緩やかに立ち上がる。

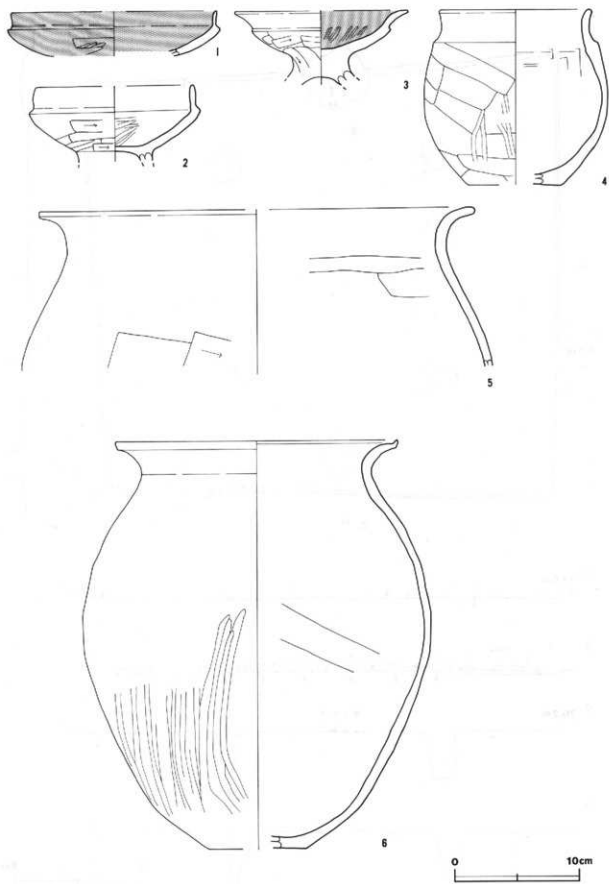
#### 覆土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・粘土小ブロック・粘土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック・ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子・粘土粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量，ローム小ブロック・粘土小ブロック微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

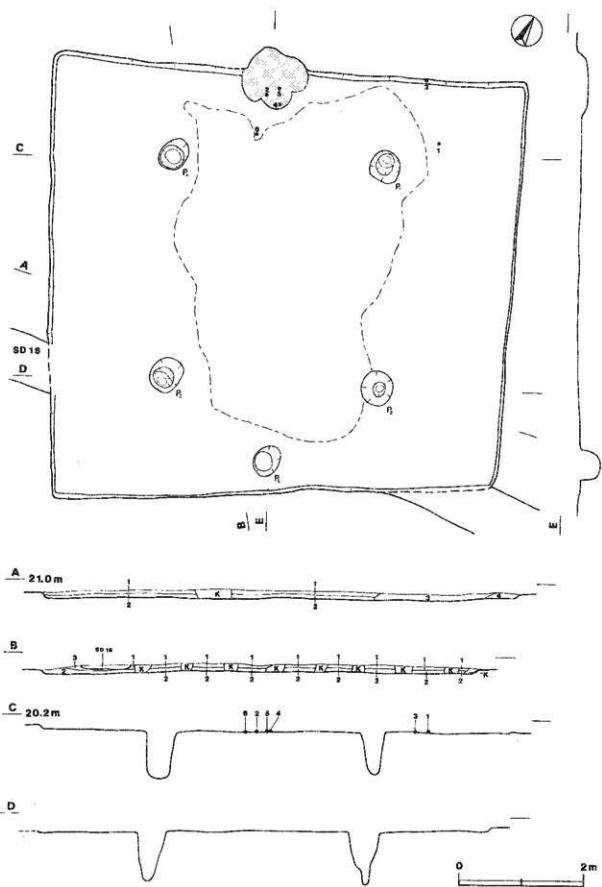
ピット 5か所(P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>は，長径54cm，短径48cmの楕円形で，深さ70cmである。P<sub>2</sub>は，径54cmほどの円形で，深さ84cmである。P<sub>3</sub>は，長径56cm，短径49cmの楕円形で，深さ80cmである。P<sub>4</sub>は，長径53cm，短径43cmの楕円形で，深さ78cmである。いずれも主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は，長径51cm，短径40cmの楕円形で，深さ34cmである。出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり，自然堆積である。

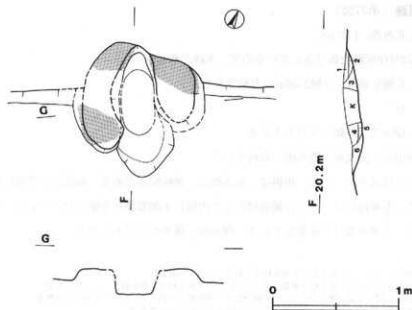




第33图 第370号住居跡出土遺物実測図



第34图 第370号住居跡実測图



第35図 第370号住居跡電気測定図

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化物・炭化粒子微量、焼土粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、炭化粒子微量、焼土粒子極微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量、焼土粒子・炭化粒子極微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量、ローム小ブロック極微量

**遺物** 土師器片483点、須恵器片13点が出土している。1の土師器環がP<sub>1</sub>の北東寄りの床面から、2の土師器高環が竈口から、3の土師器高環が北西壁際から、4の土師器小形甕が2のすぐ近くの床面から、5の土師器甕が甕内から、6の土師器甕が竈前面の床面からそれぞれ出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期の6世紀中葉と考えられる。

第370号住居跡出土土物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	坏 土師器	A[16.4] B(3.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部は直立する。	口縁部内・外面は、工具を使用した横ナデと思われ、何条もの沈線のような工具痕を残す。体部外面へラ削り後、へラ磨き。内面ナデ。内面・口縁部外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア にぶい黄褐色 内面褐色 外面褐色 普通	P2096 10% P <sub>1</sub> 北東寄り床面
2	高环 土師器	A[12.6] B(6.1)	坏部破片。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラ磨き。	砂粒・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P2097 30% 竈口
3	高环 土師器	A[14.0]	坏部破片。体部は内彎気味に緩やかに立ち上がり、体部と口縁部の境に明瞭な段を有し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 内面黒色・外面にぶい赤褐色 普通	P2098 35% 北西壁際
4	小形甕 土師器	A 12.0 B 14.2 C[7.6]	平底。体部は内彎して立ち上がり、最大径を中位にもつ。体部と口縁部の境に段をもち、口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、へラ磨き。内面へラナデ。底部へラ削り。	砂粒・雲母・スコリア にぶい赤褐色 普通	P2099 50% 竈口付近
5	甕 土師器	A[35.0] B(12.3)	体部上位から口縁部にかけての破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P2100 10% 甕内
6	甕 土師器	A 22.6 B 32.9 C[7.8]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、最大径を中位にもつ。口縁部は外反し、端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ、中位から下位にかけてへラ磨き。底部へラ削り。体部内面へラナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P2101 40% 竈前面床面

### 第371号住居跡（第37図）

位置 調査5区北西部，112es区。

重複関係 第372号住居跡を掘り込んでいるので，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.46m，短軸3.36mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は8～18cmで，外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は，長さ82cm，袖幅83cmである。袖部は，壁面に砂質粘土を貼り付けて構築している。左袖部には，さらに補強材として内面に土師器薬片を貼り付けている。火床部は，床面と同じレベルであり，火熱を受けて赤変している。煙道は，緩やかに立ち上がる。

#### 産土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック微量
- 2 暗褐色 粘土小ブロック・粘土粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子・炭微量

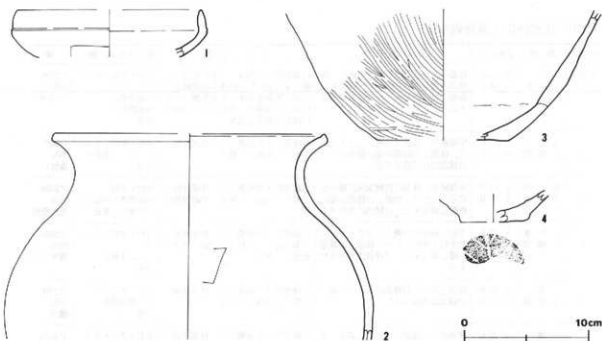
覆土 3層からなり，自然堆積である。

#### 土層解説

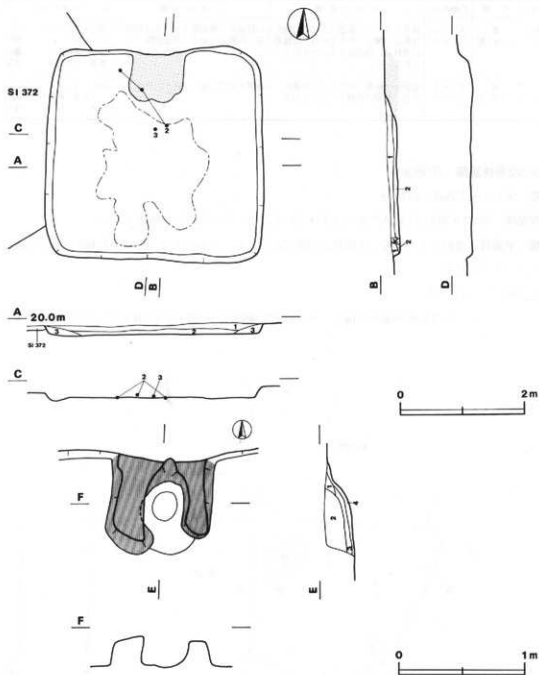
- 1 黒褐色 ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物 土師器片189点，須恵器片1点が出土している。2の土師器薬は，竈西側の床面，中央床面から出土した破片および竈左袖部の補強材として使用した破片と接合している。3の土師器薬が中央覆土下層から，1の土師器片が覆土中からそれぞれ出土している。4は土師器薬の底部片で，外面に木炭痕が施されている。

所見 本跡の時期は，出土遺物から古墳時代後期の7世紀前葉と考えられる。



第36図 第371号住居跡出土遺物実測図



第37図 第371号住居跡実測図

第371号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(α)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	坏 土 陶 器	A(14.8) B(3.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に稜をもつ。稜の直下に部分的な沈線を残す。口縁部はやや内傾する。	体部内・外面兼ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリアに富み黄褐色普通	P2102 5% 層土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 2	斐 上 陶 器	A[24.6] B(16.6)	体部上位から口縁部にかけての破片、 体部は内彎して立ち上がり、口縁部 は外反し、端部は土力つまみ上げ られている。	口縁部内・外面狭ナデ。体部外周ナ デ。内面ヘラナデ。外面斜磨。	砂粒・紫母・スコリア・石炭 にぶい黄褐色 普通 二次焼成	P2103 20% 取内側床面・中 央床面・竈左袖
3	斐 上 陶 器	B(10.1) C[10.6]	底面から体部下位にかけての破片、 平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部・底面外面ヘラ磨き。内面ナデ	砂粒・紫母・スコリア・石炭 暗褐色 普通 二次焼成	P2104 10% 小穴覆土F層

### 第372号住居跡 (第38図)

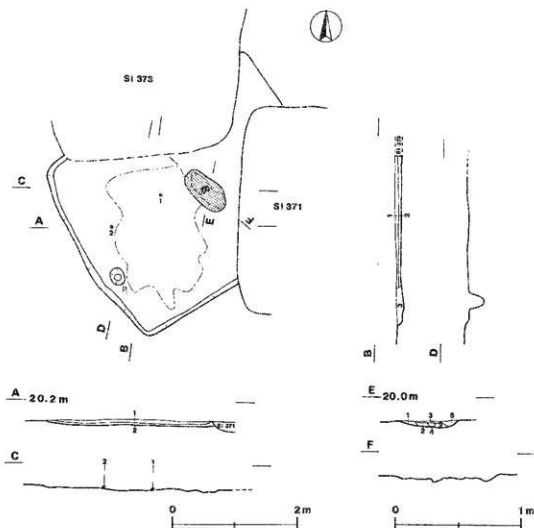
位置 調査S区北西部, I12a区。

重複関係 第371・373号住居跡に掘り込まれているので、それぞれの住居跡より古い。

規模と平面形 重複により規模や平面形は明確ではないが、残存する壁や床から長軸3.96m、短軸[3.24]mの長方形と考えられる。

主軸方向 N-55°-E

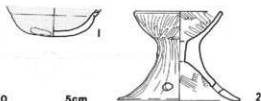
壁 西コーナー、および南西壁から南コーナー付近で確認され、壁高は2~6cmで、外傾して立ち上がる。



第38図 第372号住居跡実測図

床 全体的に平坦である。

炉 中央部に付設されている。長径80cm、短径38cmの楕円形で、4cmほど掘りくぼめた地床炉である。



第39図 第372号住居跡出土遺物実測図

炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック極微量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子極微量
- 3 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子中量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量

ピット 1か所(P1)。P1は、長径28cm、短径22cmの楕円形で、深さ26cmである。位置から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。床面を丁寧に精査したが、他にピットを確認することはできなかった。

覆土 3層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片17点が出土している。1の土師器罎が中央部床面から、2の土師器器台が南西壁寄りの床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、炉を持ち、1の土師器罎、2の土師器器台が出土していることから、古墳時代前期と考えられる。

第372号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	罎 土師器	B (2.3)	底部丸。丸底。底部は内彎して立ち上がる。	体部・底部外面へラ削り。内面刷毛目調整後、ヘラナデ。内・外面赤彩処理。	砂粒・石英にぶい赤褐色 普通	P2105 20% 中央床面
2	器台 土師器	A 6.7 B 7.1 D 9.8 E 4.7	脚部一部欠損。脚部はハの字状に開く。4か所に透かし孔をもつ。器受部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。端部に平坦面をもつ。	脚部・器受部外面へラ磨き。器受部内面へラ磨き。脚部内面刷毛目調整。	砂粒・スコリアにぶい橙褐色 普通	P2106 90% 南西壁寄り床面

第376号住居跡 (第40図)

位置 調査5区北西部、I12is区。

重複関係 第375号住居跡の下位に構築されているので、本跡が古い。

規模と平面形 重複により規模も平面形も明確ではないが、長軸[3.95]m、短軸[3.70]mの方形と推測される。

主軸方向 [N-7°-W]

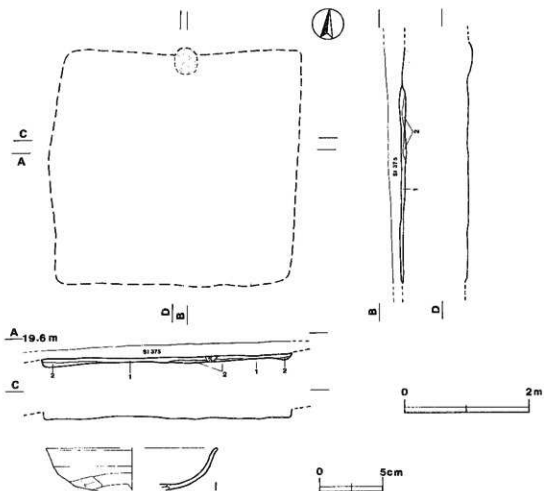
床 全体的に平坦である。

竈 北壁中央部に焼土があり、竈があったと考えられるが、形状、規模等は不明である。

覆土 2層からなり、人為堆積と推測される。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・炭化物微量
- 2 極暗褐色 炭化粒子中量、焼土粒子微量



第40図 第376号住居跡・出土遺物実測図

遺物 土師器片58点、須恵器片3点が出土している。1の土師器片が覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、第375号住居跡の下位に構築されていることと、出土遺物から古墳時代後期の7世紀後半と考えられる。

第376号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1	平 土 師 器	A 13.6 B ( 3.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ刮り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 青焼	P2023 10% 覆土中



② 奈良・平安時代

第114号住居跡 (第41図)

位置 調査5区南西部, L12ds区。

規模と平面形 長軸3.47m, 短軸3.15mの方形である。

主軸方向 N-90°-E

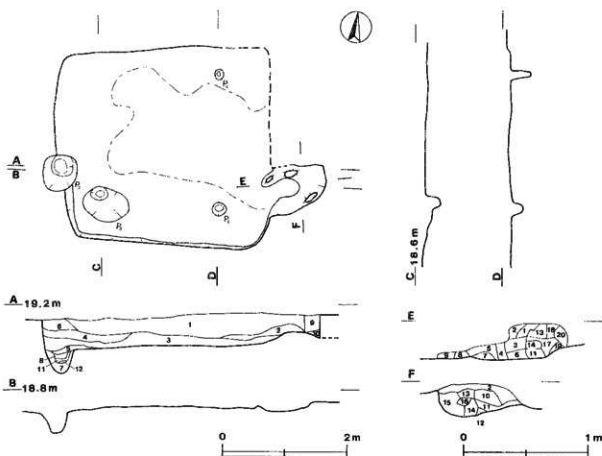
壁 壁高は4~8cmで, 緩斜して立ち上がる。

床 全体的に平坦で, よく踏み固められている。

竈 東壁を壁外へ80cmほど掘り込み, 付設されている。天井部は崩落して残存せず, 砂混じりの灰色粘土で構築された左袖部の一部が確認された。火床部は楕円形に4cmほど掘りくぼめられ, 火熱を受け, 赤変している。

遺土層解説

- |        |                 |         |                           |
|--------|-----------------|---------|---------------------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子微量         | 11 黒褐色  | 粘土粒子少量, 焼土粒子微量            |
| 2 黒褐色  | 粘土粒子少量, 焼土粒子微量  | 12 暗褐色  | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量         |
| 3 黒褐色  | 焼土粒子・粘土粒子微量     | 13 黒褐色  | 粘土粒子微量                    |
| 4 暗褐色  | 粘土粒子少量          | 14 極暗褐色 | 焼土粒子・粘土粒子微量               |
| 5 黒褐色  | ローム小ブロック・粘土粒子少量 | 15 黒褐色  | 焼土粒子・粘土粒子微量               |
| 6 極暗褐色 | 焼土粒子微量          | 16 黒褐色  | 粘土粒子少量, 焼土粒子微量            |
| 7 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量    | 17 黒褐色  | ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 8 暗褐色  | ローム粒子中量         | 18 極暗褐色 | 焼土粒子少量, 粘土粒子微量            |
| 9 暗褐色  | ローム粒子・粘土粒子微量    | 19 暗褐色  | ローム粒子中量                   |
| 10 黒褐色 | 粘土粒子中量, 焼土粒子微量  | 20 黒褐色  | ローム粒子・焼土小ブロック微量           |



第41図 第114号住居跡実測図

ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>は径22cmの円形で、深さ21cmである。P<sub>2</sub>は長径75cm、短径50cmの楕円形で、深さは28cmである。P<sub>3</sub>は長径17cm、短径13cmの楕円形で、深さ33cmである。いずれも支柱穴と考えられる。P<sub>4</sub>は上端部分が崩落して広がっているが、本来は径40cmほどの円形と推測される。深さは35cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 12層からなり、自然堆積である。

#### 土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	7 褐色	ローム粒子中量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量	8 暗褐色	ローム中ブロック中量、ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量
3 黒褐色	焼土粒子・ローム粒子・粘土中ブロック微量	9 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
4 黒褐色	焼土粒子・ローム粒子微量	10 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
5 黒褐色	炭化物・ローム粒子少量、炭化粒子微量	11 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子少量
6 黒褐色	焼土粒子・ローム粒子少量	12 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子少量

遺物 十師器片53点が出土しているが、ほとんどが碎片である。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代と思われる。

なお、本跡の南部が平成7年度に調査され、既に報告されているが、平成8年度に残る北部を調査したので、平成7年度分の実測図と合し、新しい事実を加えて解説した。(茨城県教育財団文化財報告第120集参照)

### 第343号住居跡 (第42図)

位置 調査5区東部、I1411区。

規模と平面形 長軸5.90m、短軸5.60mの方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 北側から南西部にかけて確認され、壁高は10~24cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

煙溝 上幅15~25cm、下幅5~10cm、深さ8~15cmで、全周している。断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で、よく踏み固められている。

竈 北壁中央部を壁外へ25cmほど掘り込み、砂質粘土で構築されている。長さは114cm、袖幅105cmで、袖の内壁は火熱を受けて赤変している。火床部は床面を6cmほど掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変している。

煙道は、緩やかに立ち上がる。

#### 壁土層解説

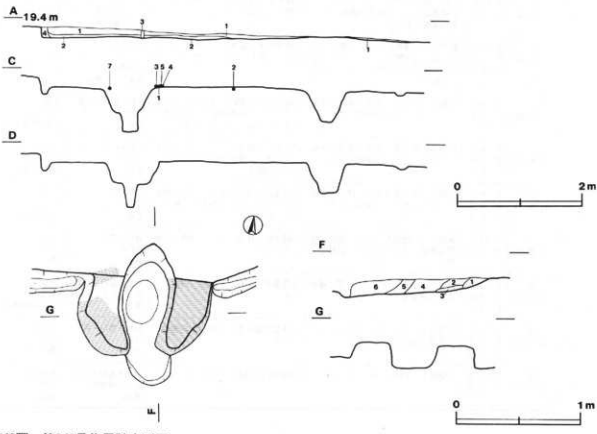
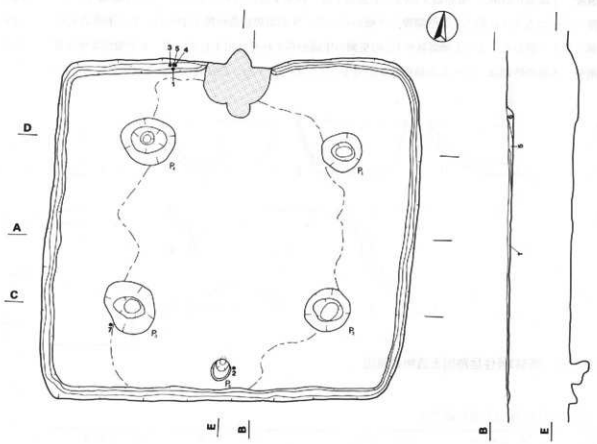
1 暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック・ローム粒子微量
2 暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、粘土粒子微量
3 暗赤褐色	灰多量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
4 暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子・灰・粘土粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
6 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量

ピット 5か所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>は、径63cmの円形で、深さ48cmである。P<sub>2</sub>は、径72cmの円形で、深さ51cmである。P<sub>3</sub>は、長径91cm、短径75cmの楕円形で、深さ70cmである。P<sub>4</sub>は、長径88cm、短径74cmの楕円形で、深さは73cmである。いずれも支柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は、長径36cm、短径30cmの楕円形、深さは32cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなり、自然堆積である。

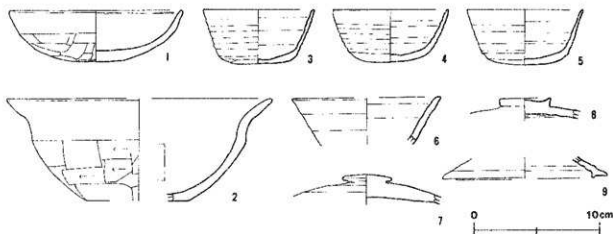
#### 土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
2 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
5 黒褐色	焼土小ブロック・焼土粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子微量
6 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・砂微量



第42图 第343号住居跡実測图

遺物 土師器片278点, 須恵器片18点, 土製品1点, 鉄滓4点が出土している。1の土師器杯, 3~5の須恵器杯が重なるように斜位で北壁際覆土下層から, 8, 9の須恵器蓋が覆土中から, 7の須恵器蓋がP3の南西側の覆土下層から, 2の土師器鉢がP3の東側の床面からそれぞれ出土している。6の須恵器杯は混入である。所見 本跡の時期は, 3~5の須恵器杯が出土していることから, 奈良時代の8世紀前半と考えられる。



第43図 第343号住居跡出土遺物実測図

第343号住居跡出土遺物観表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 1	杯 土師器	A 13.6 B 4.1	丸底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面直下に一条の浅線をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外縁へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スクリア・石英 緑色 普通 煤竹青	P2014 100% 北壁際覆土下層
2	鉢 土師器	A[19.8] B 7.6 C[ 8.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内傾して立ち上がり、体部と口縁部の境に線をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外縁横ナデ。体部・底部外縁へラ削り。内面へラ削り後、ナデ。	砂粒・雲母・スクリア・石英 明赤褐色 普通 二次焼成	P2015 35% P3東側床面
3	杯 須恵器	A 8.6 B 4.4 C 5.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部にかけての内・外面ロクロナデ。底部回転へラ削り後、手持ちへラ削り。ロクロ回転左。	砂粒・雲母・石英 灰黄色 普通	P2016 95% 北壁際覆土下層
4	杯 須恵器	A 9.0 B 4.2 C 6.4	口縁部一部欠損。丸底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部にかけての内・外面ロクロナデ。底部手持ちへラ削り。ロクロ回転左。	砂粒・雲母・石英 灰黄色 普通	P2017 85% 北壁際覆土下層
5	杯 須恵器	A 9.2 B 4.4 C 6.3	口縁部一部欠損。丸底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部にかけての内・外面ロクロナデ。底部手持ちへラ削り。ロクロ回転左。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P2018 70% 北壁際覆土下層
6	杯 須恵器	A[11.8] B( 3.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部にかけての内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	P2019 5% 覆土中
7	蓋 須恵器	B( 2.5) F[ 3.8] G 0.7	扁平なつまみがつく。天井部は緩やかに下降する。	天井部外面回転へラ削り。内面ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英・長石 にぶい赤褐色 普通	P2020 30% P3南西側覆土下層
8	蓋 須恵器	B( 1.6) F 3.9 G 0.6	天井部片。ボタン状のつまみがつく。天井部は緩やかに下降する。	天井部外面回転へラ削り。内面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰黄色 普通	P2021 10% 覆土中
9	蓋 須恵器	A[13.2] B( 1.6)	口縁部片。内面に短いかえりがつく。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい黄褐色 普通	P2022 5% 覆土中

### 第346号住居跡（第45図）

位置 調査5区北東部，I13ra区。

重複関係 第190号土坑に掘り込まれているので，本跡が古い。

規模と平面形 一辺が4.50mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は1～15cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下中央部から東壁下中央部にかけて確認され，上幅10～15cm，下幅3～6cm，深さ5～8cmで，断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で，竈から中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部を壁外へ5cmほど掘り込み，付設されている。長さは88cm，袖幅[150]cmである。袖部は右袖の一部しか残存していない。火床部は楕円形に13cmほど掘りくぼめられている。煙道は外傾して立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子多量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量，焼土中ブロック・炭化粒子中量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子中量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量

ピット 5か所(P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>は，径20cmで，深さ52cmである。P<sub>2</sub>は，長径23cm，短径17cmの楕円形で，深さ64cmである。P<sub>3</sub>は，長径65cm，短径45cmの楕円形で，深さ38cmである。P<sub>4</sub>は，長径27cm，短径20cmの楕円形で，深さ40cmである。これらのピットは，位置から主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は，径26cmの円形，深さは24cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

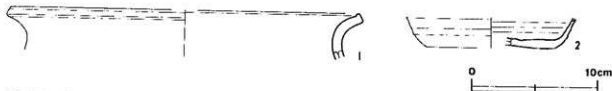
覆土 4層からなり，自然堆積である。

#### 土層解説

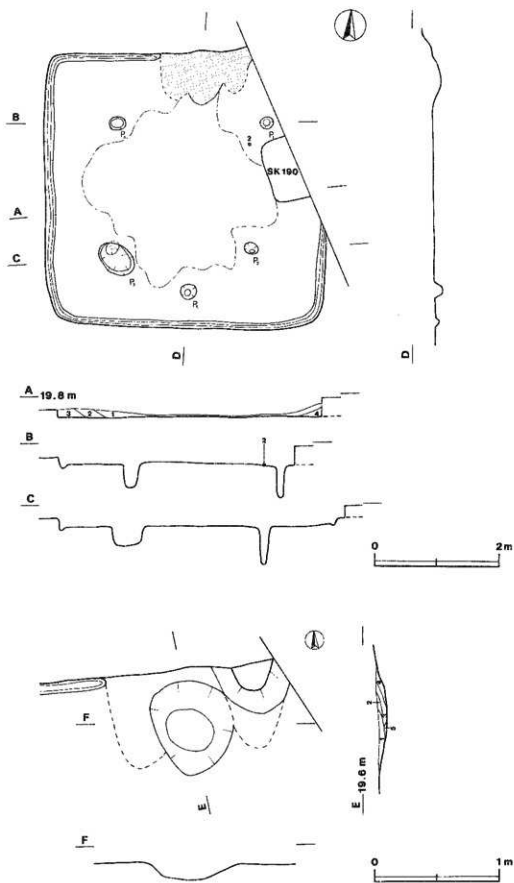
- 1 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム中・小ブロック少量

遺物 土師器片55点，須恵器片1点，礫1点が出土している。1の土師器壺が覆土中から，2の須恵器杯が東側床面から出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から奈良時代の8世紀前半と考えられる。



第44図 第346号住居跡出土遺物実測図



第45图 第346号住居跡実測图

第346号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	甕 土師器	A〔27.6〕 B〔3.7〕	口縁部片。口縁部は外反し、端部は短くつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナゲ。	砂粒・貫母・スコリア・石灰に富み褐色 普通	P2025 5% 覆土中
2	須恵器 須恵器	B〔2.4〕 C〔10.0〕	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面クロコナゲ。底部外面手持ちへう削り。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P2024 15% 東側床面

第350号住居跡（第47図）

位置 調査5区中央部，J13rd区。

重複関係 第354号住居跡を掘り込んでいるので，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸5.51m，短軸4.56mの長方形である。

主軸方向 N-19°-W

壁 壁高は2～12cmで，緩やかに立ち上がる。

床 全体的に平坦で，竈前面が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。竈中央部が耕作による攪乱を受けているため，袖部は残存しているが，火床部は確認できなかった。袖幅は，101cmである。

竈土層解説

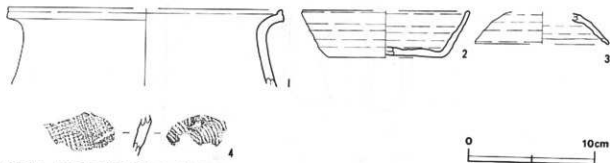
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂少量，焼土小ブロック・ローム粒子・粘土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック・砂少量，ローム粒子微量，粘土粒子極微量

ピット 2か所(P<sub>1</sub>，P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は径27cmの円形で，深さ22cmである。P<sub>2</sub>は径26cmの円形，深さ30cmで，いずれも支柱穴と考えられる。床面を丁寧に精査したが，他にピットを確認することはできなかった。

覆土 4層からなり，自然堆積である。

土層解説

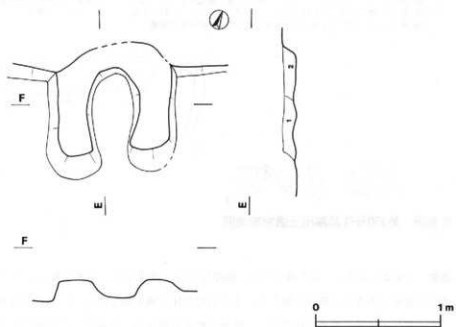
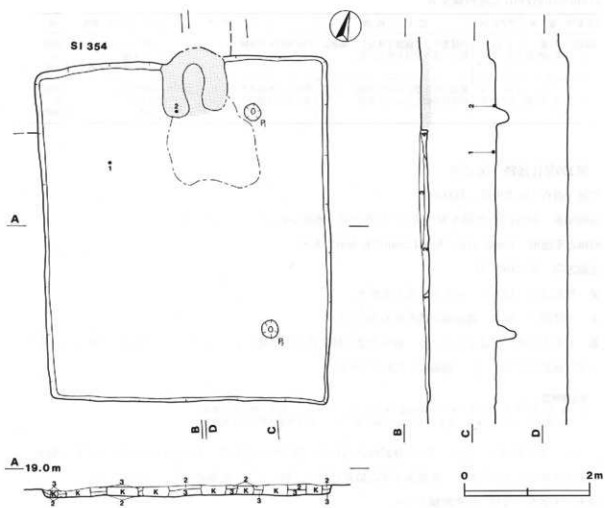
- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・ローム中ブロック微量，炭化粒子極微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量



第46図 第350号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片158点，須恵器片5点，陶器片2点，鉄滓1点，不明土製品2点が出土している。1の土師器甕が中央やや西寄りの覆土下層から，2の須恵器甕が竈左袖部から，3の須恵器蓋が覆土中からそれぞれ出土している。4は須恵器甕の体部片で，外面に格子目叩きが，内面に当て具痕が見られる。

所見 本跡の時期は，出土遺物から奈良時代の8世紀前半と考えられる。



第47图 第350号住居跡实测图



### 第350号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎七・色調・焼成	備考
第46図 1	壺 土師器	A[21.6] B(5.9)	口縁部片。口縁部端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナゲ。	砂粒・炭屑・スコリア・長石にぶい黄褐色 普通	P2045 5% 中央西寄り覆土下層
2	坏 須恵器	A[13.2] B 3.7 C[ 8.9]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部にかけての内・外面ロクロナデ。底部外面一方向の手持ちへら削り。	砂粒・炭屑 灰白色 普通	P2046 45% 適左輪部
3	蓋 須恵器	A 10.6 B( 2.5)	口縁部片。内面に短いかえりがつく。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒 灰黄色 普通	P2047 5% 覆土中

### 第351号住居跡 (第48図)

位置 調査5区北東部, 113a-d区。

規模と平面形 長軸3.76m, 短軸3.59mの方形である。

主軸方向 N-6°-E

壁 壁高は10~14cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁中央下から東壁南東下にかけて確認され, 上幅14~23cm, 下幅4~13cm, 深さ3~7cmで, 断面形はじ字形である。

床 全体的に平坦で, 電から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。長さ110cm, 袖幅125cm, 壁外への掘り込みは40cmである。袖部の内壁は火熱を受けて赤変している。火床部は床面を3cmほど掘りくぼめており, 火熱を受けて赤変している。煙道は外傾して立ち上がる。

#### 遺土層解説

- 暗赤褐色 焼土粒(中量), 焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子少量
- 暗赤褐色 焼土粒(中量), 焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 暗赤褐色 焼土粒子・砂多量
- 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒(中量), 炭化粒子少量
- 黒褐色 炭化粒子多量, 焼土粒(中量), 焼土小ブロック少量
- 黒褐色 焼土粒・炭化物・炭化粒子少量
- 褐色 砂多量
- 暗赤褐色 焼土粒多量, 炭化粒(中量)

ピット 2か所(P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は, 長径63cm, 短径48cmの楕円形, 深さ31cmで, 主柱穴と考えられる。P<sub>2</sub>は, 長径45cm, 短径36cmの楕円形, 深さ10cmで, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南西コーナー部で確認されている。長径95cm, 短径80cmの楕円形で, 断面は皿状をしている。

#### 貯蔵穴土層解説

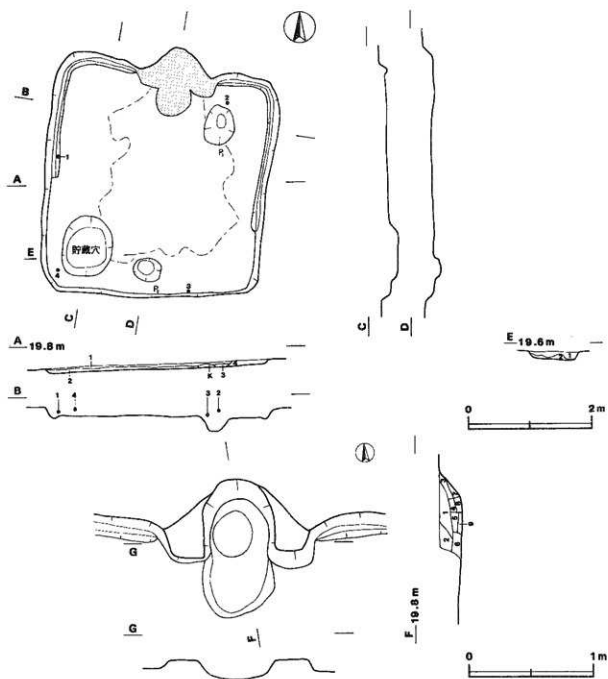
- 黒褐色 焼土粒・ローム粒(中量), 炭化粒・ローム小ブロック少量
- 褐色 ローム粒(多量), 焼土粒・ローム小ブロック少量, 炭化粒・ローム中ブロック微量

覆土 4層からなり, 自然堆積である。

#### 土層解説

- 暗褐色 ローム粒(中量), 焼土粒(少量), 炭化粒(微量)
- 暗褐色 ローム粒(中量), 炭化粒(少量), 焼土粒・ローム小ブロック微量
- 黒褐色 ローム粒(少量), 炭化粒(微量), 焼土粒(微量)
- 黒褐色 ローム粒(中量), ローム小ブロック・粘土粒(微量)

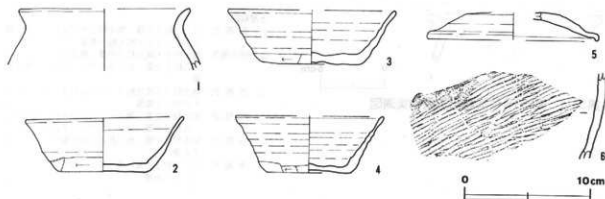
遺物 土師器片212点, 須恵器片19点が出上している。2の須恵器片がP<sub>1</sub>北側の覆土上層から逆位で, 3の須恵器片が南壁際の床面から, 4の須恵器片が南西コーナー付近の覆土上層から, 1の土師器片が西壁際の覆



第48図 第351号住居跡実測図

土中層から、5の須恵器蓋が覆土中からそれぞれ出土している。6は須恵器壺の体部片で、外面に平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代の8世紀後半と考えられる。



第49図 第351号住居跡出土遺物実測図

第351号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 1	甕 土器	A[13.4] B(4.9)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P2048 10% 西壁階覆土中層
2	坏 須恵器	A 12.6 B 4.4 C 7.2	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部にかけての内・外面 ロクロナデ。体部下端・底部手持ち ヘラ削り。	砂粒・雲母・石英・ 長石 暗灰黄色 普通	P2049 90% P:北側覆土上層
3	坏 須恵器	A[13.2] B 4.3 C 7.8	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部にかけての内・外面 ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。 底部回転ヘラ切り後、手持ち ヘラ削り。	砂粒・雲母・石英・ 長石 灰黄色 普通	P2050 60% 南壁階床面
4	坏 須恵器	A[11.6] B 4.5 C 6.6	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部にかけての内・外面 ロクロナデ。体部下端・底部手持ち ヘラ削り。	砂粒・石英 黄灰色 普通	P2051 45% 南西コーナ 一付近覆土上層
5	蓋 須恵器	A[13.6] B(2.2)	つまみ欠損。天井部は扁平で、口縁部は短く屈曲する。	天井部回転ヘラ削り。口縁部・内面 ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英 黄灰色 普通	P2052 10% 覆土中

### 第353号住居跡 (第18図)

位置 調査5区北東部, I13e7区。

重複関係 第352号住居跡を掘り込んでいるので、本跡が新しい。

規模と平面形 東側約2分の1が調査区域外へ延びているので、規模や平面形は明確ではないが、南北方向3.11m、東西方向(2.65)mで、方形または長方形と考えられる。

主軸方向 [N-15°-W]

壁 壁高は1~7cmで、外傾して立ち上がる。

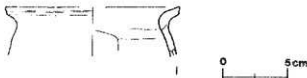
壁溝 西壁下、および北壁下の一部から確認され、上幅9~15cm、下幅3~5cm、深さ3~4cmで、断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で、軟らかい。

竈 北壁に付設されているが、東側2分の1が調査区域外のため、西半分だけを確認した。左袖部は残存していない。火床部は床面を7cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。

ピット 床面を丁寧に精査したが、ピットは確認できなかった。

覆土 6層からなり、人為堆積と推測される。



第50図 第353号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック・粘土粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、焼土小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・粘土粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 炭化粒子中量、焼土小ブロック・粘土粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片36点が出土している。1の土師器甕が竈内から出土している。

所見 本跡の時期は、第352号住居跡を掘り込み、1の土師器甕が出土していることから平安時代の9世紀と推定される。

第353号住居跡出土遺物観表

図版番号	器種	計測値(cm)	形状の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	土師器 甕	A:13.6 B:(3.9)	口縁部片。口縁部は外反し、肩部は上方につまみ上げられている。口縁部外面直下に一条の沈線をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。	砂赤・雲母・スコリア・石英にぶい褐色 普通	P2009 5% 竈内

第356号住居跡（第51図）

位置 調査5区北東部、I13m区。

規模と平面形 長軸3.08m、短軸2.86mの方形である。

主軸方向 N-3° E

壁 壁高は2～5cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅9～15cm、下幅2～5cm、深さ2～6cmで、全周している。断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で、踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。袖幅は111cmである。火床部と思われるところから左袖部にかけて、トレンチャーによる擾乱を受けており、左袖部は一部が残存しているに過ぎない。袖部は壁面に砂質粘土を貼り付けて構築している。

土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量

ビット 床面を丁寧に精査したが、ビットは確認できなかった。

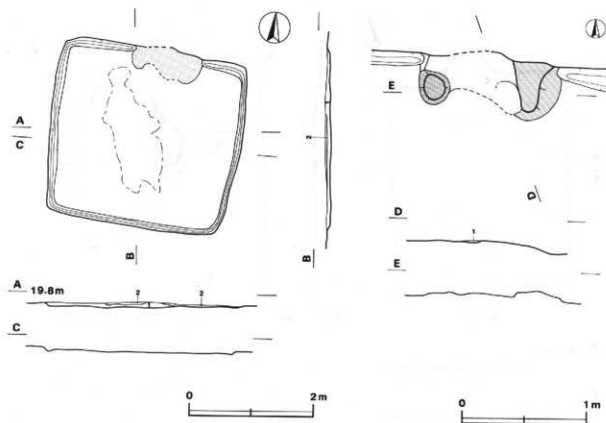
覆土 2層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

遺物 土師器片11点、陶器片1点が出土している。いずれも覆土中からの出土である。

所見 本跡は出土遺物が少なく時期判断は難しいが、遺構の形態から平安時代と考えられる。



第51図 第356号住居跡実測図

第357号住居跡 (第52図)

位置 調査5区北東部, 113ge区。

規模と平面形 長軸3.40m, 短軸2.85mの長方形と考えられる。

主軸方向 N-10°-W

壁 北および西側のみ残存し, 壁高は6cmで外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で, 中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。長さ110cm, 袖幅120cmで, 壁外への掘り込みは40cmである。火床部中央部を北西方向に18cm幅でトレンチャーによる攪乱を受けており, 火床部は12cmほどくぼんでいる。袖部は, 壁面に砂質粘土を貼り付けて構築している。煙道は, 緩やかに立ち上がる。

富士層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子多量, 炭土小ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子多量, 炭土小ブロック・炭化粒子中量

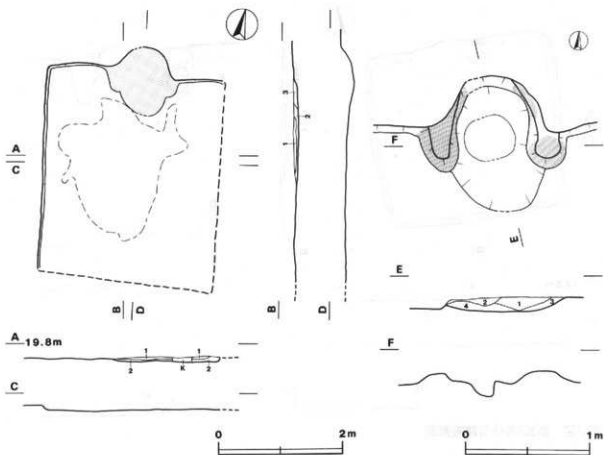
ピット 床面を丁寧に精査したが, ピットは確認できなかった。

覆土 3層からなり, 自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量

遺物 土器器片23点, 須恵器片4点が出土している。1, 2の須恵器片が覆土中から出土している。



第52図 第357号住居跡実測図



第53図 第357号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は出土遺物が少なく時期判断は難しいが、遺構の形態と出土遺物から、平安時代の9世紀前半と考えられる。

第357号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図 1	坏 須恵器	A[14.6] B(3.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部にかけての内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。	砂粒・雲母 灰色 普通	P2072 5% 覆土中
2	坏 須恵器	B(2.2) C 7.2	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へら削り。体部下端磨滅。	砂粒・雲母・石英 明黄褐色 普通	P2073 40% 覆土中

### 第361号住居跡（第55図）

位置 調査5区北西部，I12e6区。

規模と平面形 長軸3.54m，短軸3.32mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は3～8cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅10～15cm，下幅3～8cm，深さ5～8cmで，全周している。断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に壁外へ11cmほど掘り込み，付設されている。耕作による擾乱を受けており，袖部は左袖部の一部が残存しているに過ぎない。火床部は浅く掘りくぼめられ，火熱を受けて赤変している。煙道は緩やかに立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
- 3 黒暗褐色 焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 5か所(P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>は，長径31cm，短径26cmの楕円形で，深さ28cmである。P<sub>2</sub>は，径37cmの円形で，深さ26cmである。P<sub>3</sub>は，長径36cm，短径30cmの楕円形で，深さ25cmである。P<sub>4</sub>は，径34cmの円形で，深さ26cmである。いずれも，主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は，長径28cm，短径24cmの楕円形で，深さ20cmである。出入り口施設に伴うピットと考えられる。

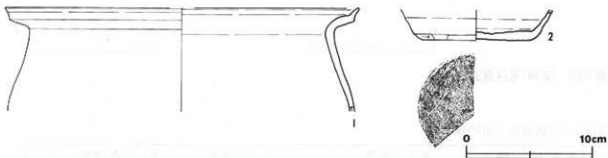
覆土 単一層で，自然堆積である。

#### 土層解説

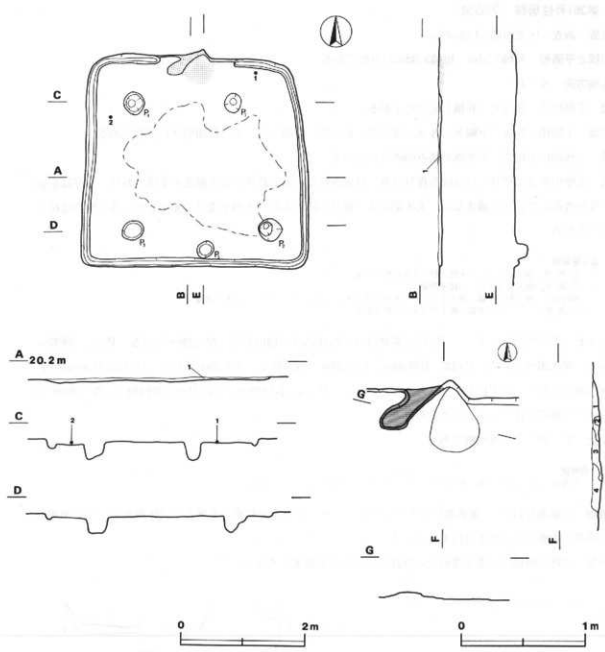
- 1 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック・粘土小ブロック微量

遺物 土師器片115点，須恵器片7点が出土している。1の土師器甕が北壁近くの床面から，2の須恵器坏が西側覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から奈良時代の8世紀前葉と考えられる。



第54図 第361号住居跡出土遺物実測図



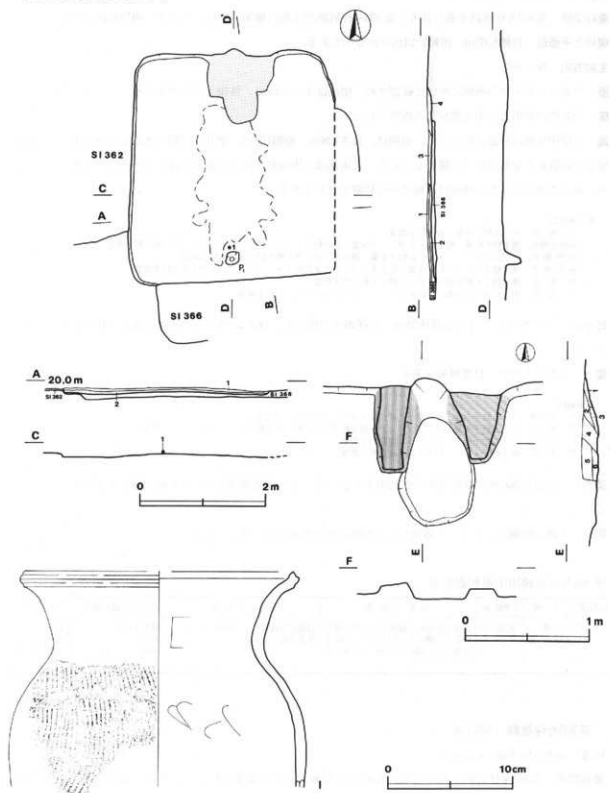
第55図 第361号住居跡実測図

第361号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 1	甕 土器	A[28.0] B(8.2)	口縁部片。口縁部は外反し、端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア・石英に富み褐色 普通	P2080 5% 北壁近く床面
2	埴 須恵器	B(2.4) C[8.6]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端・底部手持ちへラ削り。	砂粒・雲母褐色 普通	P2082 30% 西側覆土中層



第365号住居跡 (第56図)



第56図 第365号住居跡・出土遺物実測図

位置 調査5区北部、I12a区。

重複関係 第362号住居跡を掘り込み、第366号住居跡の上部に構築されているので、両住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸3.65m、短軸3.24mの長方形である。

主軸方向 N-0°

壁 北東コーナーから西側にかけて確認され、壁高は4~6cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、長さ128cm、袖幅107cm、壁外への掘り込みは7cmである。袖部は壁面に砂質粘土を貼り付けて構築している。火床部は、床面を5cmほど掘りくぼめているが、赤変している部分は確認できなかった。煙道は、緩やかな傾斜で立ち上がる。

#### 遺土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 2 黒暗褐色 焼土粒子中量、焼土中・小ブロック少量、炭化粒子・ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子微量
- 3 黒暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック・粘土粒子微量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土粒子微量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量

ピット 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は長径24cm、短径20cmの楕円形、深さ27cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり、自然堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物 土師器片266点、須恵器片5点が出上している。1の須恵器片がP<sub>1</sub>の北側の覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土した遺物から平安時代の9世紀後半と考えられる。

### 第365号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	須恵器	A[21.4] B(17.4)	体部上位から口縁部にかけての收角。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反し、端部は上方につまみ上げられている。	口縁部外面横ナデ。内面ヘラナデ。体部外面平行平き。	砂粒・石英 灰色 青褐色	P2091 20% P <sub>1</sub> 北側覆土中層

### 第366号住居跡 (第57図)

位置 調査5区北部、I12a区。

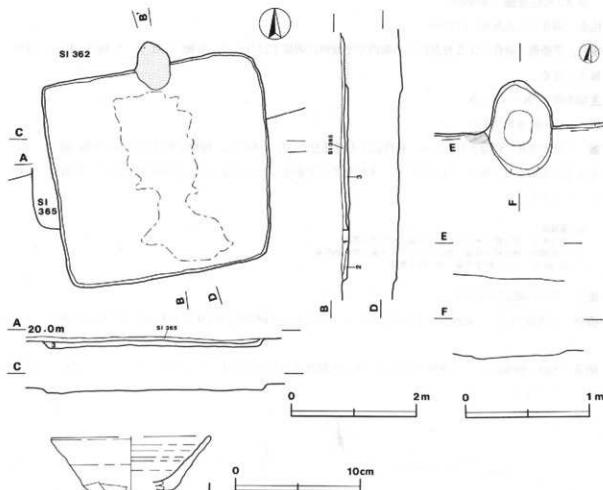
重複関係 第362号住居跡を掘り込み、第365号住居跡の下位に構築されているので、第362号住居跡より新しく、第365号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸3.48m、短軸3.38mの方形である。

主軸方向 N-11°-W

壁 壁高は7~9cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、中央部が踏み固められている。



第57図 第366号住居跡・出土遺物実測図

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、長さ80cm、袖幅[101]cm、壁外への掘り込みは40cmである。袖部は砂質粘土で構築されているが、重複による攪乱のためほとんど残存していない。火床部は床面を浅く掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。煙道は緩やかに立ち上がる。

覆土 3層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 2 緑褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・炭化物微量
- 3 緑褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片73点、須恵器片1点が出土している。1の須恵器坏が覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、1の須恵器坏から平安時代の9世紀前葉と考えられる。

第366号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 1	坏 須恵器	A[12.8] B 4.3 C[ 6.4]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部にかけての内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母・スコリア・石英 に広い赤褐色 普通	P2000 20% 覆土中

第367号住居跡 (第58図)

位置 調査5区北西部, 112b7区。

規模と平面形 耕作による攪乱のため規模や平面形は明確ではないが, 長軸[3.45]m, 短軸[3.40]mの方形と推定される。

主軸方向 [N-6°-W]

床 全体的に平坦である。

竈 北壁中央部に付設されている。耕作による攪乱を受けているため, 規模は長さ(57)cm, 袖幅(59)cmである。火床部は床面を浅く掘りくぼめており, 火熱を受けて赤変している部分が見られる。煙道は 外傾して立ち上がる。

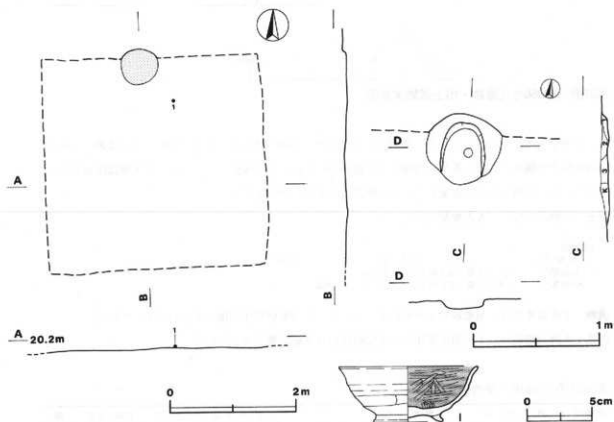
竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック少量, 炭化物微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子微量

覆土 覆土は確認できなかった。

遺物 土師器片65点, 須恵器片4点が出土している。1の土師器高台付坏が中央やや北寄りの床面から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物が少ないが1の土師器高台付坏が出土していることから, 平安時代の10世紀以降と考えられる。



第58図 第367号住居跡・出土遺物実測図

第367号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種類	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第58図 1	高台付杯 上師器	A 11.0 B 4.4 D: 5.6 E 0.6	ハの子状に開く高台が付く。体部は内灣して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部中位にかけての外側をロクロナデ。体部中位から下位にかけて円形へう割り。内面へう割り。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色焼成。	砂粒・雲母・スコリア 内面黒色・外面にぶい黄褐色 普通	P3062 90% 中央北寄り床面

第373号住居跡（第59図）

位置 調査5区北西部、I12c4区。

重複関係 第372号住居跡を掘り込んでいるので、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.08m、短軸3.01mの方形である。

主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は13~18cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、踏み固められている。

竈 北壁中央やや東寄りに付設されている。規模は長さ97cm、幅幅108cm、壁外への掘り込みは58cmである。袖部は砂質粘土で構築している。火床部は浅く掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変している。煙道は、外傾して立ち上がる。煙道の立ち上がり付近からは、支脚に使用されたと思われる雲母片岩が出土している。

壁土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・砂中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 砂多量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、砂少量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂少量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 炭化粒子・砂中量、焼土粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量
- 7 黒褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、焼土中ブロック微量
- 8 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量

ピット 2か所(P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は、径20cmの円形で、深さ27cmである。P<sub>2</sub>は、径29cmの円形で、深さ22cmである。いずれも主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー付近から確認されている。長径73cm、短径63cmの楕円形で、深さは47cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量、ローム小ブロック極微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 灰中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック極微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・灰少量、炭化粒子微量、ローム小ブロック極微量
- 5 黒褐色 灰多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック極微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック極微量

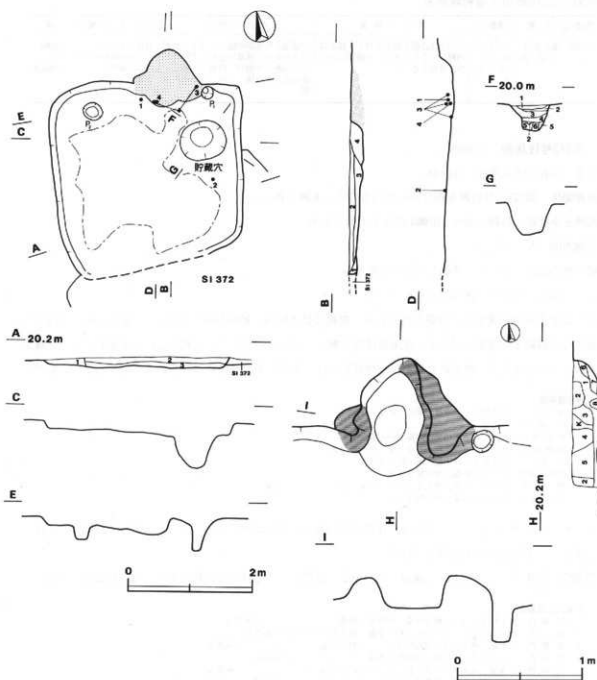
覆土 4層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 炭化粒子中量、焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子少量

遺物 上師器片133点、須恵器片36点、土製品2点、鉄製品2点が出土している。1の土師器高台付碗が竈焚口付近の床面から正位で、2の上師器高台付碗が中央部東寄りの床面から、4の上師器小皿が竈焚口から、それぞれ出土している。3の上師器碗は、竈前面、竈内、竈焚口から出土している破片と接合している。

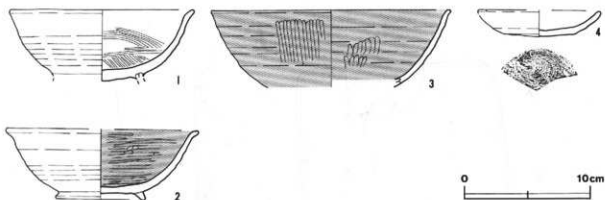
所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第59図 第373号住居跡実測図

第373号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 1	高台付陶土器	A 14.4 B ( 5.7)	高台部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部・体部外面ロクロナデ。内面へう磨き。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 内面黒色 外面にふいば褐色 普通口縁部煤付着	P2108 85% 崖状口付近床面
2	高台付陶土器	A [15.1] B 5.6 D 7.0 E 0.7	口縁部一部欠損。短いハの字状に開く高台がつく。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外反する。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部下端回転へう磨り。内面へう磨き後、黒色処理。高台貼り付け。	砂粒・雲母・スコリア にふいば褐色 普通 体部外面煤付着	P2109 70% 中央東寄り床面



第60図 第373号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 3	碗 土師器	A 18.8 B (6.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面へう磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 黒色 普通	P2110 30% 壺前面・ 壺内・壺焚口
4	小皿 土師器	A [ 9.6] B 2.1 C [ 5.7]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面クロコナデ。底部回転未切り。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P2107 20% 壺焚口

### 第374号住居跡 (第61図)

位置 調査5区北西部, 112b4区。

規模と平面形 長軸3.32m, 短軸3.30mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は16~28cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ100cm, 袖幅120cm, 壁外への掘り込みは12cmである。両袖部とも、南側の一部がトレンチャーによる擾乱を受けている。袖部は、壁面に砂質粘土を貼り付けて構築している。袖内面には、補強材として土師器の壺片が貼り付けられている。火床部は、床面を8cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。煙道は外傾して立ち上がる。煙道の立ち上がり部から、土製支脚が出土している。

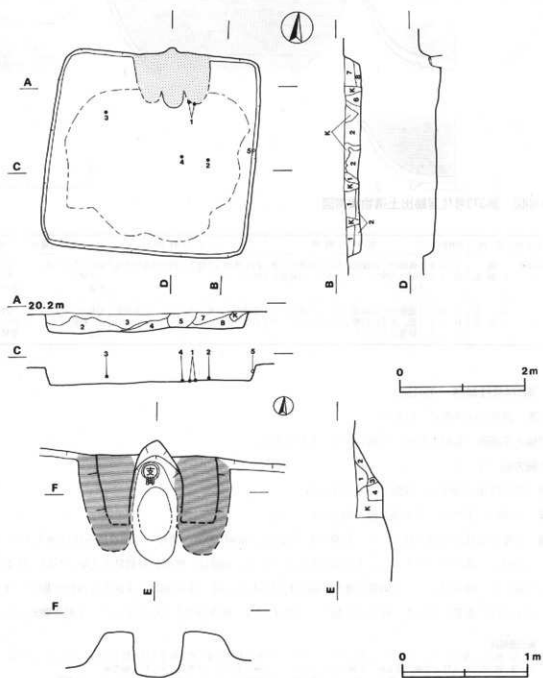
#### 竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 粘土粒子中量、焼土粒子少量、焼土小ブロック・粘土小ブロック微量、炭化粒子極微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・粘土小ブロック微量
- 4 暗褐色 粘土粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子極微量

覆土 8層からなり、人為堆積と思われる。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量、炭化物・ローム中ブロック極微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム中ブロック極微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・ローム小ブロック少量、炭化粒子極微量
- 4 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 褐色 粘土粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・粘土粒子微量
- 7 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック微量、粘土粒子極微量
- 8 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量

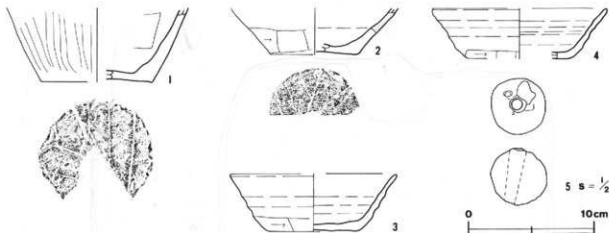


第61図 第374号住居跡実測図

**遺物** 土師器片312点、須恵器片74点、陶器片3点、鉄滓2点が出土している。3の須恵器坏が北西寄りの覆土中層から、4の須恵器坏が中央部覆土下層から、2の土師器甕が中央部東寄りの覆土下層から、1の土師器甕が竈前面の床面から、5の土玉が東壁際からそれぞれ出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から平安時代の8世紀後葉と考えられる。





第62図 第374号住居跡出土遺物実測図

第374号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	粟 土 器	B〔5.9〕 C〔8.8〕	底部から体部下位にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面へラ磨き。内面へラナゲ。 底部に木炭痕。体部外面磨減。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	P2111 15% 甕前面沫面
2	粟 土 器	B〔3.7〕 C〔7.0〕	底部から体部下位にかけての破片。 体部は外傾して立ち上がる。	体部外面へラ削り。内面へラナゲ。 底部内面指頭押圧痕。底部に木炭痕。	砂粒・雲母・スコリア・石英 明赤褐色 普通	P2112 10% 中央部 束寄り覆土下層
3	坏 須 器	A〔13.0〕 B 4.6 C 7.0	底部から口縁部にかけての破片。平 底。体部は外傾して立ち上がり、口 縁部に至る。	口縁部から体部にかけての内・外面 ロクロナゲ。体部下端・底部外面手 持ちへラ削り。	砂粒・雲母 黄灰色 普通	P2113 35% 北西寄り 覆土中層
4	坏 須 器	A〔13.8〕 B 4.0 C〔8.2〕	底部から口縁部にかけての破片。平 底。体部は外傾して立ち上がり、口 縁部に至る。	口縁部から体部にかけての内・外面 ロクロナゲ。体部下端・底部外面手 持ちへラ削り。	砂粒・雲母 灰色 普通	P2114 20% 中央覆土下層

図版番号	種別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
5	土 玉	3.0	2.9	0.9	27	東壁際	D P2004 100%

第375号住居跡 (第63図)

位置 調査5区北西部, 112; a区。

重複関係 第376号住居跡の上部に構築されているので、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸5.34m, 短軸5.00mの方形である。

主軸方向 N-7°-W

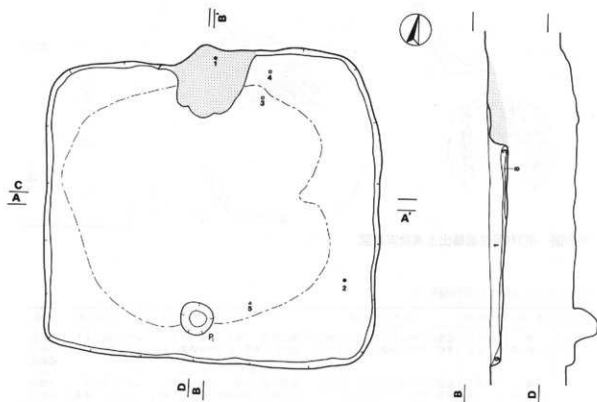
壁 壁高は10~28cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦である。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ118cm, 袖幅112cm, 壁外への掘り込みは24cmである。袖部は、砂質粘土で構築している。火床部はわずかにくぼんでおり、火熱を受けて赤変している。煙道は緩やかに立ち上がる。

甕土層解説

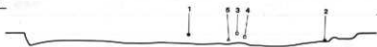
- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子多量, 砂微量, 炭化粒子極微量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量



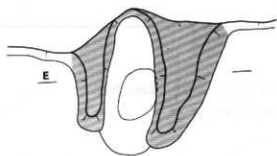
A 19.8 m



C



0 2m



E

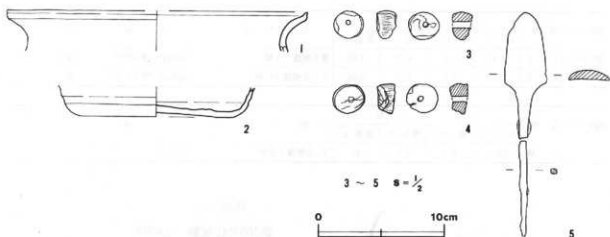
L

E 19.6 m



0 1m

第63图 第375号住居跡実測图



第64図 第375号住居跡出土遺物実測図

- 3 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子微量
- 4 極暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子微量
- 5 黒褐色 焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子微量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土粒子微量
- 7 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子微量, 炭化粒子極微量
- 8 極暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子・砂微量
- 9 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック少量

ピット 1か所(P1)。P1は南壁中央の壁際から80cmほど内側に位置し、竈と同一線上に並んでいる。径53cmの円形、深さ34cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層からなり、人為地積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土小ブロック微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, 焼土小ブロック・粘土小ブロック微量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 炭化粒子・ローム粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 極暗褐色 焼土粒子少量
- 7 極暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム中・小ブロック微量, 炭化粒子極微量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

遺物 土師器片734点, 須恵器片17点, 鉄片1点が出土している。1の土師器片が竈内から, 2の須恵器片が南東部床面から, 3の白玉が竈右側の覆土上層から, 4の白玉が3の北側の覆土中層から, 5の鉄片がP1の東側の覆土中層からそれぞれ出土している。

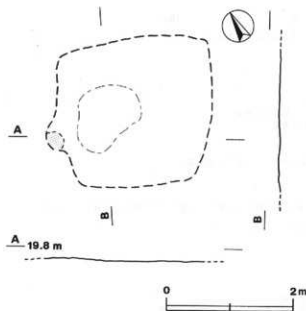
所見 本跡の時期は, 出土遺物から奈良時代の8世紀前葉と考えられる。

第375号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第64図 1	土師器	A(23.8) B(3.2)	口縁部片。口縁部は外反し, 端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 赤褐色 普通	P2115 5% 竈内
2	須恵器	B(2.4) C(12.2)	底部から体部下位にかけての破片。平底。	体部下端・底部外面回転ヘラ削り。内面ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英 灰黄色 普通	P2116 30% 南東床面

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第64図3	白玉	1.6	1.1	0.3	3.04	竈右側覆土上層	Q2000 滑石片岩 80%
4	白玉	1.7	0.9	0.3	3.06	3の北側覆土中層	Q2001 滑石片岩 80%

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	鉄線	(12.7)	2.4	0.6	(16)	P, 東側覆土中層	M2013



第65図 第359号住居跡実測図

③ 時期不明

第359号住居跡 (第65図)

位置 調査5区北東部, I13f区。

規模と平面形 耕作により削平され, 規模も平面形も明確ではないが, 長軸[2.42]m, 短軸[2.36]mの方形と推測される。

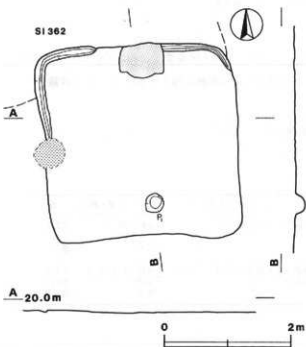
主軸方向 [N-68°-W]

床 全体的に平坦である。中央部南側に長径53cm, 短径38cmの楕円形の粘土が確認されている。

竈 壁は確認できなかったが, 北西壁と思われる中央部に焼土があり, 竈があったと考えられるが, 削平され形状, 規模等は不明である。

遺物 土師器片6点が出土している。

所見 本跡は, 出土遺物が少なく竈もはっきり残存していないため, 時期は不明である。



第66図 第364号住居跡実測図

第364号住居跡 (第66図)

位置 調査5区北部, I13f区。

重複関係 第362号住居跡を掘り込んでいるので, 本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.04m, 短軸3.03mの方形である。

主軸方向 N-3°-W

壁 北東・北西コーナー付近で確認され, 壁高は2~3cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 北東・北西コーナー付近で確認され, 上幅7~15cm, 下幅3~7cm, 深さ2cmで断面形はU字形である。

床 全体的に平坦である。

竈 北壁中央部に付設されているが、耕作による擾乱を受けており、火床部のみを確認した。火床部は、火熱を受けて赤変している。また、西壁中央付近から径50cmの円形に焼土が確認されており、竈の可能性もある。  
 ピット 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は長径32cm、短径28cmの楕円形、深さ15cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 覆土は確認できなかった。

遺物 土師器片5点が出土している。

所見 本跡は出土遺物が少なく時期判断は難しいが、第362号住居跡を掘り込んでいることから、古墳時代後期の6世紀後半以降と考えられる。

#### 第369号住居跡 (第67図)

位置 調査5区北西部, 112a5区。

規模と平面形 上部が削平されており規模や平面形は明確ではないが、長軸 [4.20] m、短軸 [3.22] mの長方形と推測される。

主軸方向 [N-85°-E]

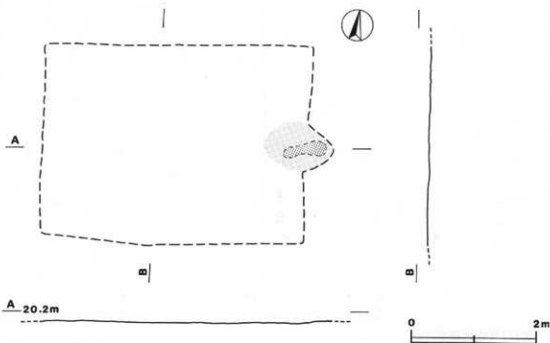
床 全体的に平坦である。

竈 東壁中央部に付設されているが、上部が削平されており火床部のみを確認した。規模は不明である。

覆土 覆土は確認できなかった。

遺物 遺物は、出土しなかった。

所見 本跡の時期は、竈は付設されているが、出土遺物がないため、不明である。



第67図 第369号住居跡実測図

第377号住居跡 (第68図)

位置 調査5区北西部, 112ca区。

重複関係 第18号溝に掘り込まれているので, 本跡が古い。

規模と平面形 北東部が調査区域外に延びており, また耕作により削平され規模も平面形も明確ではないが, 長軸[3.98]m, 短軸[3.72]mの方形と推測される。

主軸方向 [N-8°-W]

床 全体的に平坦である。

竈 北壁中央から西寄りに付設されている。長さ98cmである。袖部は確認できなかった。火床部は浅く掘りくぼめており, 火熱を受けて赤変している。

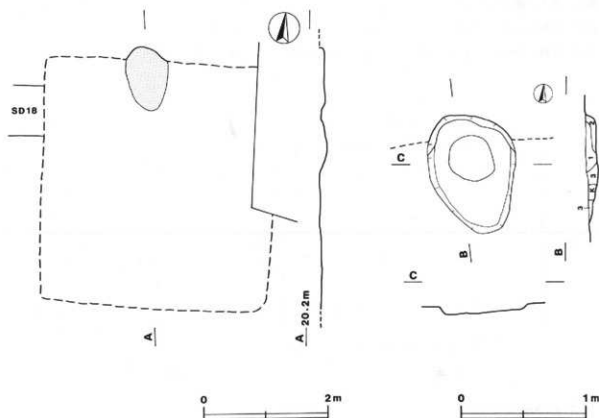
竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック・炭微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

覆土 覆土は確認できなかった。

遺物 土師器片4点, 土製品1点が出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物が少なく, 不明である。



第68図 第377号住居跡実測図

表2 熊の山遺跡5区住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長×短	壁高 (m)	築造 層	内 部 施 設				備 考			
							壁 厚	柱 間	土 間	土 間				
341	J14a	N-W-E	方 形	3.47 × 3.15	4-8	平垣	-	3	1	竪堀	-	自然		
341	J14a	S-W-E	方 形	3.26 × (5.10)	11	平垣	-	3	-	竪 1	-	自然	土師器(灰、甕)紡錘車	
342	J14c	N-W-E	方 形	7.10 × 6.70	4-6	平垣	-	4	1	竪	-	自然	土師器(灰、甕)土製臼玉	SK196 + 本跡
343	J14i	N-W-E	方 形	3.90 × 3.60	10-20	平垣	全周	4	1	竪	-	自然	土師器(灰、甕)須恵器(灰、甕)	
344	J13e	S-W-E	[長方形]	7.00 × (6.30)	6-18	平垣	-	2	-	-	-	人為		本跡→SD17
345	J14f	N-W-E	方 形	4.66 × 4.07	6	平垣	-	2	-	竪	1	-		
346	J13f	N-O	方 形	4.90 × 4.30	10-20	平垣	一部	4	1	竪	-	自然	土師器(甕)須恵器(灰)	本跡→SK190
347	J13j	S-W-E	[長方形]	3.20 × 4.10	-	平垣	-	2	1	竪	-	-	土師器(灰)	
348	J13a	N-W-E	[長方形]	8.00 × 6.07	5-6	平垣	-	4	-	竪 1	-	人為	土師器(灰、甕)	SK349 + 本跡
349	J13c	S-W-E	方 形	6.56 × 5.55	11-14	平垣	-	-	1	竪	-	自然	土師器(灰、甕、鉢)須恵器(御行甕)土工	本跡→SK348、354
350	J13f	N-W-E	長方形	5.51 × 4.56	5-12	平垣	-	2	-	竪	-	自然	土師器(甕)須恵器(灰、甕)	SK354 + 本跡
351	J13a	S-W-E	方 形	3.76 × 3.40	10-14	平垣	一部	1	1	竪 1	-	自然	土師器(甕)須恵器(灰、甕)	
352	J13d	N-W-E	[長方形]	4.15 × 2.10	2-10	平垣	一部	-	-	-	-	人為	土師器(灰、甕)刀子	本跡→SK353
353	J13e	N-W-E	[長方形]	3.11 × 2.60	1-7	平垣	一部	-	-	竪	-	人為	土師器(甕)	SK352 + 本跡
354	J13e	N-W-E	方 形	8.20 × (8.80)	9-12	平垣	-	-	-	竪	1	-	土師器(灰、甕、鉢)須恵器(灰)	SK349 + 本跡→SK350
355	J13a	S-W-E	方 形	5.40 × 5.39	1-12	平垣	-	3	-	竪	-	自然	土師器(灰、甕)須恵器(甕)	
356	J13a	S-W-E	方 形	3.08 × 2.86	2-5	平垣	全周	-	-	竪	-	自然		
357	J13a	N-W-E	長方形	3.40 × 2.85	6	平垣	-	-	-	竪	-	自然	須恵器(灰)	
358	J13j	N-W-E	長方形	8.70 × 3.80	4-8	平垣	-	4	-	竪	-	-	土師器(灰、甕、鉢)須恵器(甕、蓋)	本跡→SK193
359	J13f	S-W-E	方 形	2.42 × 2.36	-	平垣	-	-	-	竪	-	-		
364	J12e	S-O	方 形	3.34 × 3.32	3-8	平垣	全周	4	1	竪	-	自然	土師器(甕)須恵器(灰)	
362	J12a	N-W-E	方 形	9.12 × 9.03	2-7	平垣	一部	4	-	竪 1	-	人為	土師器(灰、甕)須恵器(灰)	SK207 + 本跡→SK363、366、SK368
363	J12a	N-W-E	方 形	5.32 × 5.45	12-18	平垣	全周	4	1	竪	-	自然	土師器(灰、甕、鉢)小玉	SK362、SK207 + 本跡
364	J13f	N-W-E	方 形	3.04 × 3.03	2-3	平垣	一部	-	1	竪	-	-		SK362 + 本跡
365	J12f	S-O	長方形	3.65 × 3.34	4-6	平垣	-	-	1	竪	-	自然	須恵器(甕)	SK362、365 + 本跡
366	J12f	S-W-E	方 形	3.48 × 3.38	7-9	平垣	-	-	-	竪	-	人為	須恵器(灰)	SK362 + 本跡→SK365
367	J12b	N-W-E	[方 形]	3.45 × 3.40	-	平垣	-	-	-	竪	-	-	土師器(高台付灰)	
368	J12a	S-W-E	[方 形]	3.85 × (3.67)	-	平垣	-	-	-	竪	-	-	土師器(灰)	
369	J12a	N-W-E	[長方形]	4.20 × (3.22)	-	平垣	-	-	-	竪	-	-		
370	J12a	S-W-E	方 形	7.44 × 6.81	2-7	平垣	-	4	1	竪	-	自然	土師器(灰、甕、鉢)	SD18 + 本跡
371	J12a	S-O	方 形	3.46 × 3.36	8-18	平垣	-	-	-	竪	-	自然	土師器(灰、甕)	SK372 + 本跡
372	J12a	S-W-E	[長方形]	3.36 × 3.34	2-6	平垣	-	-	1	竪	-	自然	土師器(埴、甕台)	本跡→SK371、373
373	J12c	S-W-E	方 形	2.98 × 3.01	10-18	平垣	-	2	-	竪 1	-	自然	土師器(高台付埴、甕、小玉)	SK372 + 本跡
374	J12a	N-W-E	方 形	3.32 × 3.30	16-28	平垣	-	-	-	竪	-	人為	土師器(甕)須恵器(灰)土工	
375	J12j	N-W-E	方 形	5.31 × 5.00	10-28	平垣	-	1	竪	-	-	人為	土師器(甕)須恵器(灰)白土 鉄鏝	SK376 + 本跡
376	J12j	N-W-E	[方 形]	3.63 × (3.70)	-	平垣	-	-	-	竪	-	人為	土師器(灰)	本跡→SK375
377	J12a	S-W-E	[方 形]	3.98 × 2.72	-	平垣	-	-	-	竪	-	-		本跡→SD18

## (2) 掘立柱建物跡

調査5区の北西部から、掘立柱建物跡1棟を検出した。以下、検出した建物跡の特徴や出土遺物について記載する。

### 第7号掘立柱建物跡（第69図）

位置 調査5区北西部、I12i区。

重複関係 第375・376号住居跡を掘り込んでいるので、本跡が新しい。

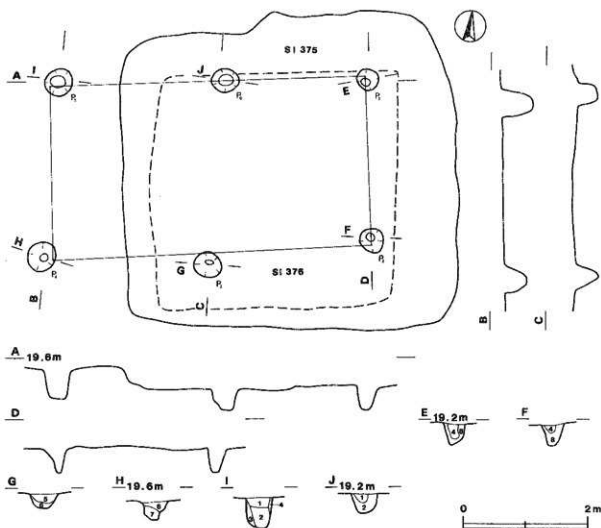
規模 東西2間、南北1間の建物跡で、東西5.1m、南北2.7mである。柱間寸法は、桁行2.4～2.7m、梁行2.7mである。柱穴の掘り方は、平面形が径33～45cmの円形で、深さ32～52cmである。柱痕は、確認されていない。

桁行方向 N-84°-Eの東西棟である。

覆土 ブロック状の堆積をしており、人為堆積と考えられる。

#### 掘り方土層解説

- |        |                         |       |                      |
|--------|-------------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子少量、炭土粒子微量          | 5 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量   |
| 2 暗褐色  | ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量     | 6 褐色  | ローム中ブロック中量           |
| 3 黒暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック少量   |
| 4 暗褐色  | ローム粒中量                  | 8 暗褐色 | ローム小ブロック多量、焼土小ブロック中量 |



第69図 第7号掘立柱建物跡実測図



遺物 土師器片57点が出土している。

所見 本跡は、出土遺物が細片のため時期を判断するのは難しいが、奈良時代の第375号住居跡を掘り込んでいることから、奈良時代の8世紀前葉以降と考えられる。

### (3) 土 坑

調査5区で、土坑23基を検出した。その中でも、しっかりしたものや特徴的なものについて記載し、その他は一覧表に掲示した。

#### 第186号土坑 (第70図)

位置 調査5区東部, J14a区。

重複関係 上部に第342号住居跡が構築されており、本跡が古い。

規模と平面形 長径2.26m, 短径1.47mの楕円形である。

長径方向 N-27°-E

壁面 深さは133cmで、外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 9層からなり、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子多量, ローム大・中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム大・中ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量, ローム大ブロック中量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量
- 7 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量
- 8 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 9 黒褐色 ローム粒子中量

遺物 縄文土器片1点, 土師器片19点が出土している。1は、覆土中から出土した縄文土器深鉢の口縁部付近の破片で、縄文時代後期中葉の堀ノ内I式土器である。沈線の交点に円形の付文, 無節縄文が施されている。1は混入と思われる。

所見 本跡は、遺構の形態から陥し穴と思われ、時期は縄文時代と考えられる。

#### 第191号土坑 (第71図)

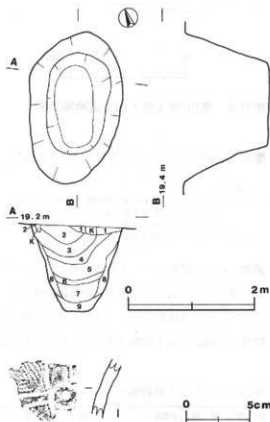
位置 調査5区北部, I13f区。

規模と平面形 長径2.50m, 短径1.92mの楕円形である。

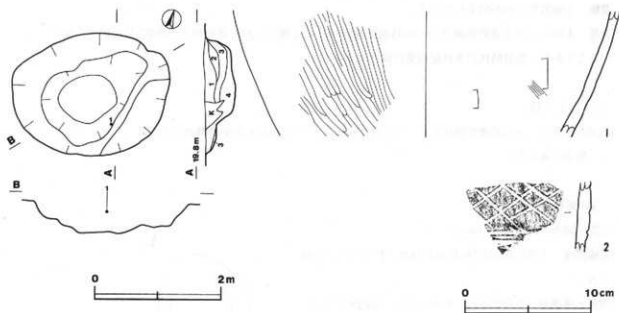
長径方向 N-70°-E

壁面 深さは50cmで、外傾して立ち上がる。

底面 緩やかな凹凸がある。



第70図 第186号土坑・出土遺物実測図



第71図 第191号土坑・出土遺物実測図

覆土 4層からなり、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・ローム中ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 褐色 ローム粒子多量

遺物 縄文土器片1点、土師器片85点が出土している。1の土師器甕が南東側の覆土中層から出土している。2は覆土中から出土した縄文土器深鉢の体部片で、縄文時代後期中葉の堀ノ内I式土器である。半截竹管状工具による平行沈線を巡らし、その上部に条線による格子目文を施している。2は混入と思われる。

所見 本跡は、出土遺物は流れ込みと思われ、時期は不明である。

第191号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	土師器	B(10.0)	体部片。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面へラ磨き。内面へラナデ。	砂粒・雲母・スコリア・石英 外面黒褐色・内面に ぶい褐色 普通	P2117 5% 南東側覆土中層

第207号土坑(第72図)

位置 調査5区北部、I12e9区。

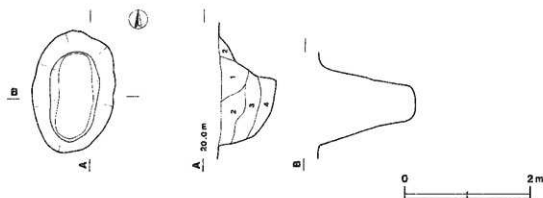
重複関係 上位に第362・363号住居跡が構築されており、本跡が古い。

規模と平面形 長径1.96m、短径1.28mの楕円形である。

長径方向 N-0°

壁面 深さは151~163cmで、外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。



第72図 第207号土坑実測図

覆土 4層からなり、人為堆積と考えられる。

土層解説

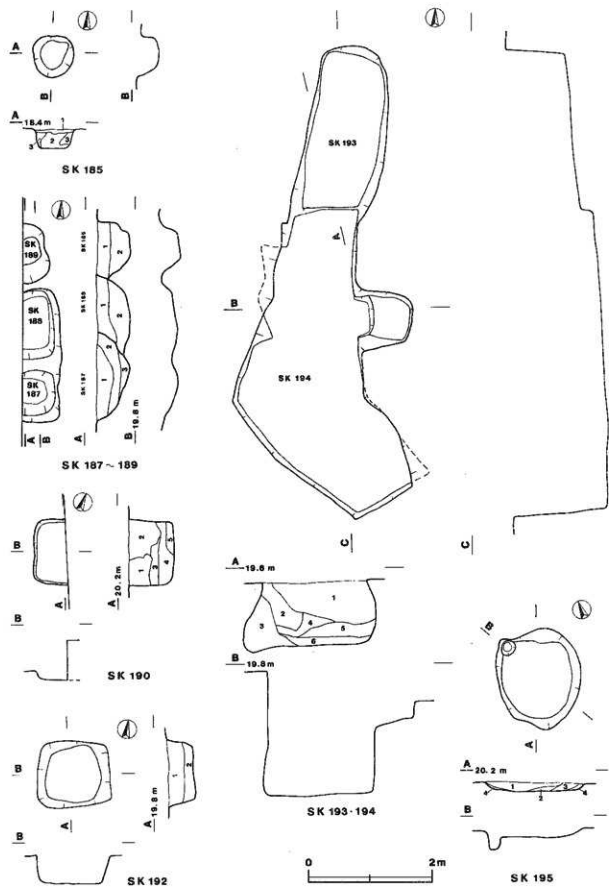
- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子極微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック微量、粘土粒子極微量

遺物 遺物は、出土しなかった。

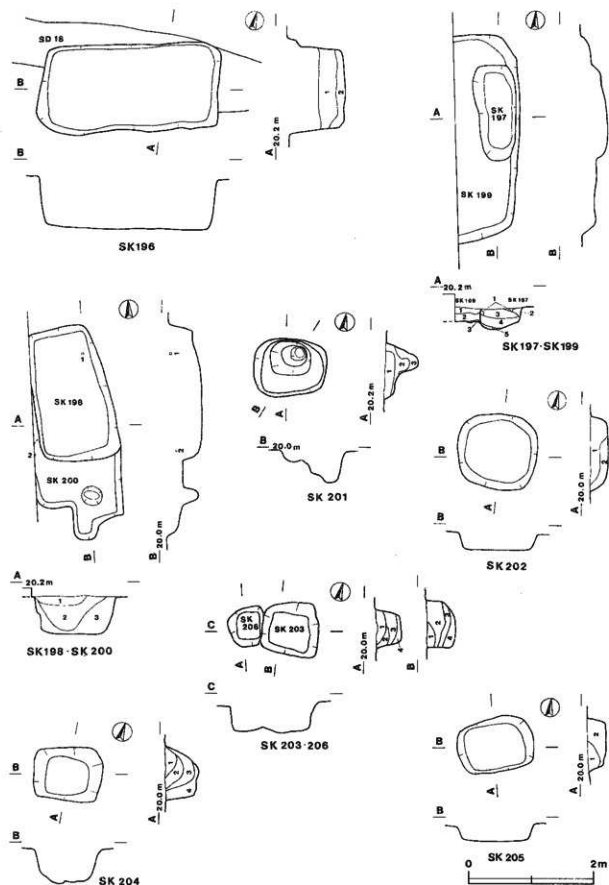
所見 本跡は、遺物が出土しなかったが、遺構の形態から陥し穴と思われ、時期は縄文時代と考えられる。

表3 熊の山遺跡5区上坑 一覧表

上坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		築込	底面	覆土	主 な 遺 物	備 考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)					
185	L124a	N-4° W	円形	0.66 × 0.64	29~32	外積	平坦	自然	土師器片1 須恵器片1	旧2区
186	J14a	N-27° E	楕円形	2.26 × 1.47	133	外積	平坦	人為	縄文土器片1 土師器片19	本跡→SK342
187	I13b	N-8° W	楕円形	0.72 × (0.52)	48	緩斜	緩斜	人為		SK188→本跡
188	I13a	N-10° W	楕円形	1.10 × (0.50)	47	外積	平坦	人為		SK189→本跡→SK187
189	I13b	N-25° W	楕円形	0.96 × (0.38)	48	外積	平坦	人為		
190	I13e	N-19° W	方形	1.04 × (0.50)	25	外積	平坦	人為	土師器片4	SK46→本跡
191	I13f	N-70° E	楕円形	2.50 × 1.92	50	緩斜	凹凸	人為	縄文土器片1 土師器片85 (土師器片)	
192	I13f	N-5° W	長方形	1.16 × 1.06	47	外積	平坦	人為	土師器片22	
193	J13a	N-7° E	長方形	[2.66] × [1.26]	96	垂直	平坦	人為		SK358→本跡→SK194
194	J13a	N-1° W	不整形	4.88 × 1.62	190	垂直	平坦	不明	土師器片116 須恵器片10	SK368→SK193→本跡
195	I12e	N-0°	不整形	1.50 × 1.36	12	緩斜	平坦	自然		
196	I12a	N-16° W	長方形	2.84 × 1.38	92	外積	平坦	人為	土師器片9	SK18→本跡
197	I12a	N-1° W	長方形	1.54 × 0.60	42	外積	凹状	自然	鉄滓1	SK199→本跡
198	I12a	N-6° W	長方形	2.16 × 1.16	54	外積	平坦	自然	石製品1	SK200→本跡
199	I12e	N-1° W	長方形	3.30 × (1.03)	24	緩斜	平坦	自然	鉄滓1	本跡→SK197
200	I12e	N-0°	方形	1.36 × (1.07)	23	外積	平坦	不明	古銭1	本跡→SK198
201	I12e	N-91° W	長方形	1.16 × 0.90	50	緩斜	凹凸	自然	土師器片4	
202	I12f	N-0°	方形	1.28 × 1.20	29	外積	平坦	人為	土師器片19 須恵器片1	
203	I13d	N-5° W	長方形	0.93 × 0.76	50	外積	凹状	自然	土師器片12	本跡→SK206
204	I13d	N-106° W	長方形	1.08 × 0.84	48	外積	凹凸	自然	土師器片8	
205	I12f	N-13° W	長方形	1.22 × 0.84	27	外積	平坦	人為	土師器片34	
206	I13d	N-20° W	長方形	0.62 × 0.52	45	外積	凹凸	自然		SK362, SK303→本跡
207	I12e	N-0°	楕円形	1.96 × 1.28	151~163	外積	平坦	人為		本跡→SK362, 363



第73图 5区土坑实测图(1)



第74图 5区土坑实测图(2)

第185号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子産層
- 2 暗褐色 炭化粒子産層, ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量

第187号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

第188号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子微量

第189号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第190号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量
- 2 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量, ローム大ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック少量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック微量

第192号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量, ローム大ブロック中量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム大・中ブロック中量

第193号土坑土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量, ローム中・小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム大ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子・粘土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子微量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量, ローム中ブロック微量

第195号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化物・ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量

第196号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量, ローム大ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

第197号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量, 焼土粒子微量, ローム小ブロック極微量
- 5 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量

第198号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子極微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子・ローム中ブロック微量, 炭化物極微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, ローム大・中ブロック微量

第199号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量, 炭化粒子極微量
- 3 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量

第201号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子極微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック微量, 焼土粒子極微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量

第202号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量, 焼土粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量

第203号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック微量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, ローム大ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量, ローム大ブロック少量

第204号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量, ローム大ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム大・中ブロック微量

第205号土坑土層解説

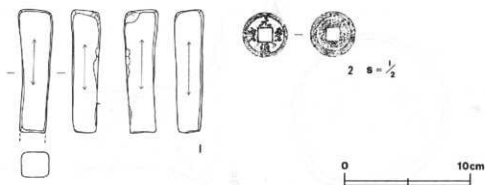
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・粘土中量, 炭化粒子極微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量, 焼土粒子極微量

第206号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・ローム小ブロック極微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・粘土粒子極微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 粘土粒子微量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極微量

第198号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第75図1	砥石	(0.8)	2.7	2.0	(98)	覆土上層	Q3003 焼灰層



第75図 5区土坑出土遺物実測・拓影図

第200号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第75図2	古鉄	2.45	2.45	0.15	3.52	覆土上層	M2003 元豊通寶(1659) 銅銭 100%

#### (4) 井戸

調査5区において、井戸1基を検出した。以下、その特徴と出土遺物について記載する。

##### 第7号井戸（第76図）

位置 調査5区北西部、I12f区。

規模と形状 掘り方は、平面形が2.50m前後の円形をしており、確認面から90cmの深さまで急傾斜を持ち、そこから下1.20mまでは、径1.25mの円筒形をしている。深さは、(2.1)mである。

覆土 7層からなり、自然堆積と考えられる。

##### 土層解説

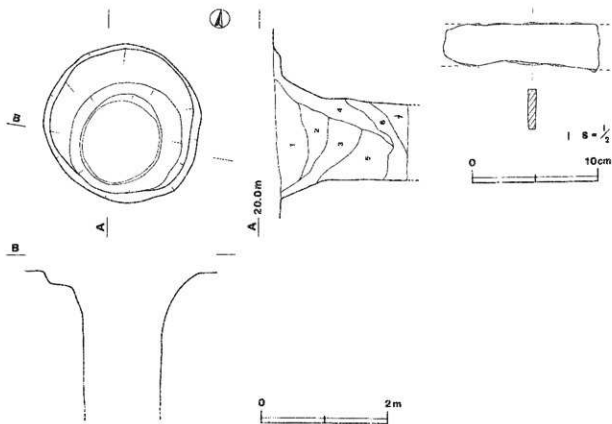
- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土小ブロック微量、焼土小ブロック極微量
- 2 黒褐色 炭化物・ローム粒子・砂・粘土小ブロック微量
- 3 黒褐色 炭化物・ローム中・小ブロック・ローム粒子・粘土小ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量、焼土小ブロック極微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物微量、焼土粒子極微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量、焼土粒子極微量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物・ローム小ブロック・粘土小ブロック微量、焼土粒子極微量

遺物 土師器片36点、須恵器片2点、鉄滓3点、鉄製品1点が出土している。1の鉄鎌が、覆土中から出土している。

所見 本跡は、出土遺物が少なく、いずれも細片のため、時期は不明である。

第7号井戸出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第76図1	鎌	(8.2)	(2.5)	0.4	(39)	覆土中	M2002



第76図 第7号井戸・出土遺物実測図

### (5) 溝

調査5区において、北東部で1条、北西部で1条の溝を検出した。以下、それぞれの特徴と出土遺物について記載する。

#### 第17号溝 (付図)

位置 調査5区北東部、I13g<sub>1</sub>区～I14f<sub>1</sub>区。

重複関係 第344号住居跡を掘り込んでいるので、本跡が新しい。

規模と形状 上幅0.6～0.7m、下幅0.3～0.4m、深さ20cm前後、全長(8.0)mで、断面形はU字形である。

方向 I13g<sub>1</sub>区から北東(N-60°-E)の方向に直線的に延びている。

遺物 遺物は、出土しなかった。

所見 本跡の時期は、第344号住居跡を掘り込んでいることから古墳時代以降と考えられるが、性格は不明である。

#### 第18号溝 (第77・付図)

位置 調査5区北西部、I12d<sub>2</sub>区～I12e<sub>1</sub>区。

重複関係 第370・377号住居跡を掘り込み、第196号土坑に掘り込まれているので、第370・377号住居跡より新しく、第196号土坑より古い。

規模と形状 上幅0.6～0.8m、下幅0.3～0.5m、深さ5～20cm、全長(20.5)mで、断面形はし字形である。

方向 I12d<sub>2</sub>区から北東(N-77°-E)の方向に、ほぼ直線的に延びている。



第77図 第18号溝断面図



覆土 単一層であり、自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子少量

遺物 遺物は、出土しなかった。

所見 本跡は、出土遺物がないため、時期と性格は不明である。

(6) 遺構外遺物(第78図)

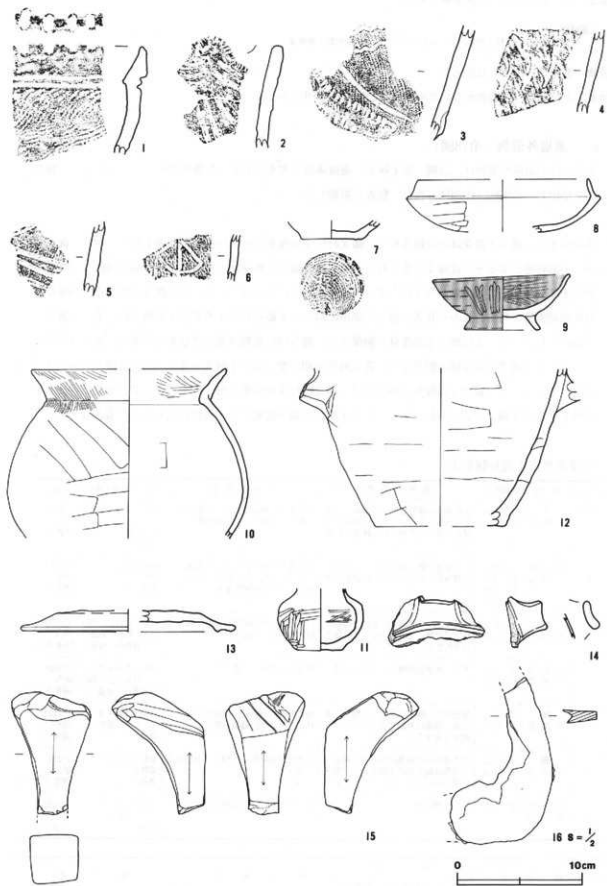
調査5区の遺構外遺物は、試掘、表土除去、遺構確認の調査で出土した遺物である。その中から、特色あるものを抽出し、拓影図、実測図、及び一覧表に掲載した。

第78図1は、縄文土器深鉢の口縁部片で、縄文時代中期前葉の阿玉台ⅢからⅣ式土器で、地文に縄文を施した後、半截竹管による平行沈線文が施されている。2は縄文土器深鉢の口縁部片で、縄文時代早期中葉の田戸上層式土器で、胎土には織線が含まれ、平行沈線文が斜位に施されている。3は縄文土器深鉢の胴部片で、縄文時代中期前葉の阿玉台ⅢからⅣ式土器で、降帯に沿って半截竹管による爪形文が施され、深い沈線や波状沈線が設けられている。4は縄文土器深鉢の胴部片で、縄文時代前期後葉の浮島Ⅱ式土器で、波状貝殻文が施されている。5は縄文土器深鉢の胴部片で、縄文時代早期中葉の田戸上層式土器で、平行沈線文、押し刺突文が施されている。6は縄文土器深鉢の胴部片で、縄文時代後期中葉の堀ノ内Ⅰ式土器で、地文に縄文を施し、半截竹管による沈線文が設けられている。7は土師器小皿の底部片で、外面に回転糸切り痕が残る。

5区遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地文	備考
第78図 8	深鉢 土器	A(13.8) B 1.2	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面揃わず。体部外面へラ削り、内面ナデ。外面鉄線。	砂粒・雲母・スコリア 40% 明赤褐色 青褐色	P2118 40% 調査5区表様
9	高台付杯 土師器	A 10.9 B 4.5 D 6.0 E 1.1	ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部にかけての外面は、ロクロナガ後、ヘラ磨き。内面へラ磨き。内・外面黒色地文。	砂粒・雲母 褐色 青褐色	P2119 60% 調査5区表様
10	壺 土師器	A(15.6) B(13.6)	体部中位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面揃わず調整。体部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒・雲母 外面 にふい褐色・内面に ふい赤褐色 青褐色	P2120 30% 調査5区表様
11	小型壺 土師器	B(5.0) C 3.1	平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面へラ磨き。	砂粒・雲母・スコリア ア 外面にふい褐色 内面黒色 青褐色	P2121 60% 調査5区表様
12	壺 土師器	B(12.7) C(10.4)	底部から口縁部にかけての破片。多孔式。体部は外傾して立ち上がり、把手を有する。	体部外面へラ磨り。内面へラナデ。体部内・外面に輪磨み痕。	砂粒・雲母・スコリア にふい褐色 青褐色	P2122 10% 調査5区表様
13	壺 須恵器	A(17.2) B(1.8)	天井部から口縁部にかけての破片。天井部は緩やかに下降する。口縁部内面に短いかぶりがつく。	天井部外面回転へラ削り。内面ロクロナデ。	砂粒・スコリア 黄褐色 青褐色	P2123 20% 調査5区表様
14	注口土器 縄文土器	B(4.0)	注口土器の把手。	内・外面ともよく研磨されている。	砂粒・スコリア にふい黄褐色 青褐色	P2124 5% 調査5区表様

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
15	歌台	(9.9)	6.4	3.9	(296)	5区表面採集	Q3003 凝灰岩
16	罎	(9.0)	(5.5)	(0.7)	(33)	5区表面採集	M2004



第78图 5区遺構外出土遺物実測図

## 2 6区の遺構と遺物

### (1) 竪穴住居跡

#### ① 古墳時代

#### 第131号住居跡(第79図)

位置 調査6区北端部、L15c1区。

重複関係 本跡は第142号住居跡を掘り込み、第161・162号住居跡に掘り込まれていることから、第142号住居跡より新しく、第161・162号住居跡よりも古い。

規模と平面形 長軸5.90m、短軸5.76mの方形である。

主軸方向 N-50°-W

壁 壁高は4~10cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅18~25cm、下幅4~10cm、深さ4~8cm、断面形はU字形で、ほぼ全周する。

床 全体的に平坦で踏み固められ、東部分では貼り床が確認された。

炉 2か所。炉1は、中央部に位置し、長径50cm、短径35cmの楕円形で5cmほど掘りくぼめている。炉2は、北西壁際の西寄り位置し、長径134cm、短径80cmの楕円形で深さ10cmほど掘りくぼめている。

#### 炉1・2土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子少量
- 2 暗褐色 炭化粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 赤褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・焼上ブロック少量、炭化粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・焼土粒子少量

ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は、径20~25cmの円形、深さ46~55cmで、支柱穴と思われる。P<sub>4</sub>は、長径28cm、短径20cmの楕円形、深さ59cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 2層からなり、自然堆積である。

#### 土層解説

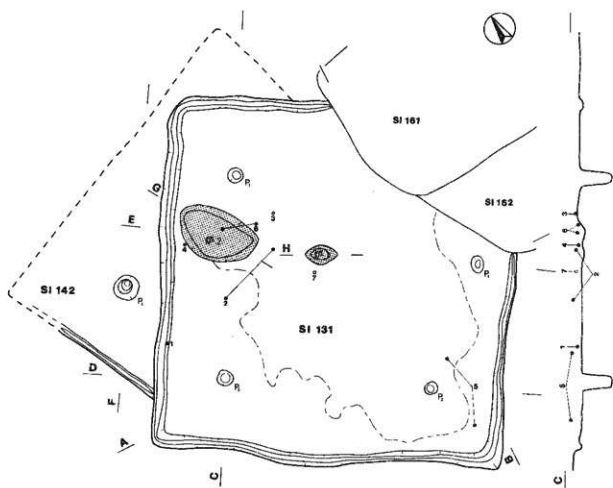
- 1 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片897点が出土しており、特に、北西壁際の炉2周辺と南コーナーから多く出土している。第80図1の上師器柄は北西壁際下層から、5の土師器甕口縁部片は、南コーナーの覆土中層から出土している。2の小形埴は炉2の南部中層から、3の高坏脚部は炉2の南西側床面からそれぞれ逆位の状態で出土している。4の高坏は炉2の西側覆土中層から、6の土師器小形甕は炉2の東側から出土し、6の土師器小形甕は二次焼成を受けている。7の紡錘車は炉1付近の覆土中層から出土している。8の不明土製品、9の勾玉は炉1の覆土中から出土している。

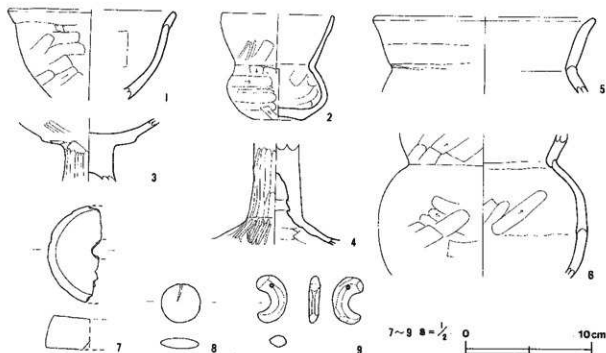
所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期の5世紀中葉と考えられる。

第131号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第80図 1	土師器	A 13.01 B(7.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、球形状を呈する。口縁部と体部との境に線をもち、折り返し口縁である。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。体部内面へラナデ。	砂粒・白色粒子 暗赤褐色 良好	P 3 30% 北西壁際覆土下層
2	小形埴 上師器	A(9.0) B 8.5 C 3.6	口縁部 距欠損。平底。体部は扁平気味で、体部最大径と口径がほぼ等しい。口縁部は外傾する。	口縁部内面から外面上半横ナデ。口縁部外面トキヘラ削り後へラ磨き。体部・底部外面へラ削り。体部・底部内面へラナデ。	白色粒子・小礫 明赤褐色 普通	F 4 70% ②2南部覆土中層



第79图 第131・142号住居跡実測图



第80図 第131号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第80図 3	高 土 輪 部	B(5.0)	坏部から脚部片。坏部下位に線を有する。	坏部外面へう磨き。坏部と脚部の接合部へう削り。脚部外面へう磨き。磨減が著しい。	砂粒 或黄褐色 青透	P 5 30% 伊2 南西床面
4	高 土 輪 部	B(8.0)	脚部片。基部欠損。脚部は円筒状を呈し中空である。基部は大きく開く。	脚部・基部外面へう磨き。基部内面へうラナデ。脚部内面に輪痕み痕が残る。	砂粒・白色粒子 黄褐色 普通 脚部二次焼成	P 6 脚部70% 伊2 西側覆土中層
5	壺 土 輪 部	A(17.0) B(6.2)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がり。口縁端部は丸くおさまる。	口縁部内・外面へうラナデ。	砂粒・白色粒子 に赤褐色 普通	P 7 10% 南コーナ-覆土
6	小形 土 輪 部	B(11.5)	底部・口縁部欠損。体部は球形状で頸部はくの字状に折れる。	頸部・体部内面へうラナデ。頸部・体部外面へう削り。	砂粒 褐色 普通 二次焼成	P 8 35% 伊2 北側覆土下層

図版番号	種別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
7	貯 蓄 土	(2.3)~5	1.8	(0.4)	(5.9)	伊1村近覆土中層	DP 1 砂岩
8	不詳土製品	2.1	0.5		1.98	伊1覆土中	DP 2

図版番号	種別	計 測 値					出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
9	勾 玉	2.5	1.6	0.6	0.2	2.8	伊1覆土中	Q 1 碧玉

### 第132号住居跡（第81図）

位置 調査6区北部，I4J4区。

重複関係 第211号住居跡を掘り込み，第149号住居跡が上部に構築されていることから，本跡は第211号住居跡より新しく，第149号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸4.78m，短軸4.60mの方形である。

主軸方向 N-76°-E

壁 壁高は22-34cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅7-15cm，下幅4-10cm，深さ5-15cm，断面形はU字形で，全周している。

床 全体的に平担で，踏み固められている。

竈 東壁中央部に付設されている。規模は袖幅100cm，長さ80cm，壁外への掘り込みはない。煙道部天井は崩落しているが残存状況は良好で袖部・煙道部が確認できた。袖部は，粘土と山砂を混ぜて構築されている。火床部は径54cm，深さ5cmの円形に掘りくぼめられている。燃焼部奥は，40度の角度で立ち上がっている。燃焼部側壁はかなり焼けており，長期間使用されたものと考えられる。

#### 竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂少量
- 2 褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック・砂少量
- 3 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子多量，粘土ブロック少量，炭化物・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 炭化粒子中量，焼土粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
- 5 暗褐色 炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量
- 6 褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・砂少量，ローム小ブロック微量
- 7 暗褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
- 8 褐色 焼土粒子・ローム粒子中量，炭化粒子少量
- 9 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・ローム粒子・砂少量
- 10 褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は，径60~80cmの円形，深さ56~79cmで，主柱穴と考えられる。

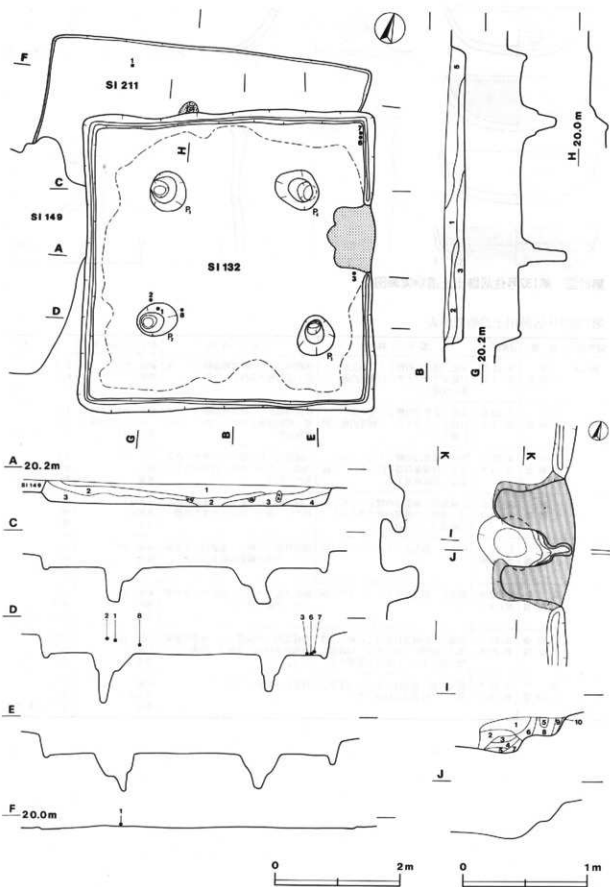
覆土 5層からなり，自然堆積である。

#### 土層解説

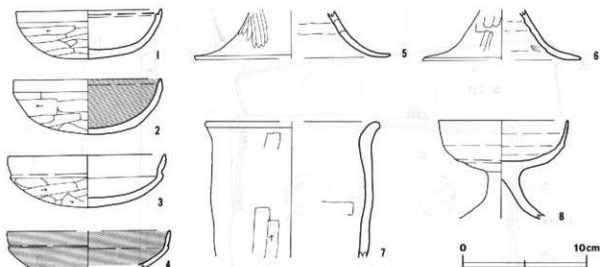
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化粒子・ローム中ブロック少量，焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量

遺物 土師器片613点，須恵器片12点が出土している。遺物は比較的良好な状態で，土師器の坏，高坏，埴，器台，甕などの器種が見られる。第82図1，2の土師器坏，8の須恵器高坏はP<sub>2</sub>周辺覆土中層からほぼ完形の状態が出土した。3の土師器坏は竈右袖側の床面から，6の土師器高坏，7の土師器小形甕は，北東コーナーの床面からそれぞれ出している。

所見 本跡の時期は，土師器坏が小形化傾向にある特徴から，古墳時代後期の6世紀末から7世紀初頭と考えられる。



第81图 第132·211号住居跡実測图



第82図 第132号住居跡出土遺物実測図

第132号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第82図 1	坏 土器器	A 11.8 B 4.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で直立する。口縁部内面に一条の沈線をもつ。	体部内面から口縁部外面横ナデ。体部・底部外面手持ちヘラ削り。	緻密、雲母 明褐色 良好	P 9 100% P±内層土中層
2	坏 土器器	A 12.0 B 4.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部は、ほぼ直立する。	体部内面から口縁部外面横ナデ。体部・底部外面手持ちヘラ削り。内面黒色処理。	緻密、砂粒・雲母 内面黒色・外面明赤 褐色 良好	P10 100% P±周辺層土中層
3	坏 土器器	A 12.6 B 4.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部は、ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部内面ヘラナデ。体部・底部外面手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 褐色 普通	P11 80% 礫石袖付近床面
4	坏 土器器	A[13.0] B(3.2)	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を有し、口縁部は、ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面手持ちヘラ削り。内・外面黒色処理。	赤色粒子 雲褐色 普通	P12 10% 覆土上層
5	高 土器器	D[15.4] E(3.8)	脚部片。裾部は大きくハの字状に開く。	脚部外面ヘラ磨き。裾部内・外面横ナデ。内面に輪襷模様を残す。	緻密、砂粒 褐色 良好	P13 10% 覆土上層
6	高 土器器	D[12.8] E(4.1)	脚部片。裾部は大きくハの字状に開く。	脚部外面ヘラ削り。裾部内・外面横ナデ。内面ヘラナデ。	緻密、砂粒 褐色 良好	P14 10% 北東コーナー床面
7	小形 土器器	A[14.0] B(10.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は短く外反する。口唇部は肥厚する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向の手持ちヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P16 20% 北東コーナー下層
8	高 土器器	A 10.4 B(8.0)	裾部欠損。裾部は大きくハの字状に開く。口縁部はほぼ直立する。	体部内・外面ロクロナデ。	砂粒 灰白色 普通	P17 80% P±周辺層土中層



### 第133号住居跡 (第83図)

位置 調査6区北西部, L14g4区。

規模と平面形 長軸6.90m, 短軸6.32mの長方形と考えられる。

主軸方向 N-31°-W

壁 壁高は10~32cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。北西コーナーは調査区域外のため, 検出できなかった。

壁溝 上幅7~17cm, 下幅4~14cm, 深さ5~12cm, 断面形はU字形で, 全周している。

間仕切溝 2条(a, b)。2条とも南壁から2条中央に向かって延びる。上幅16~20cm, 下幅8~14cm, 深さ10~13cm, 断面形は逆台形である。

床 全体的に平坦である。特に中央付近が踏み固められている。

炉 中央部からわずかに北東寄りに位置し, 出入口施設に伴うピットと同一線上にある。長径60cm, 短径40cmの楕円形で, 4cmほど掘りくぼめられている。

ピット 6か所(P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は, 径45~50cmの円形, 深さ59~72cmで, 主柱穴と考えられる。これらの主柱穴では, 一辺80~100cmの方形の掘り方が確認できた。P<sub>5</sub>は南壁から50cmほど中央寄りに位置し, 径35cm, 深さ21cmで, 出入口施設に伴うピットと思われる。P<sub>6</sub>は, P<sub>5</sub>の東側に近接し, 径50cmの円形, 深さ110cmの断面「円筒形」で, 底面には粘土が張ってある。性格は不明である。

覆土 6層からなる。覆土にはロームブロック, 焼土粒子, 炭化粒子が含まれていることから人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

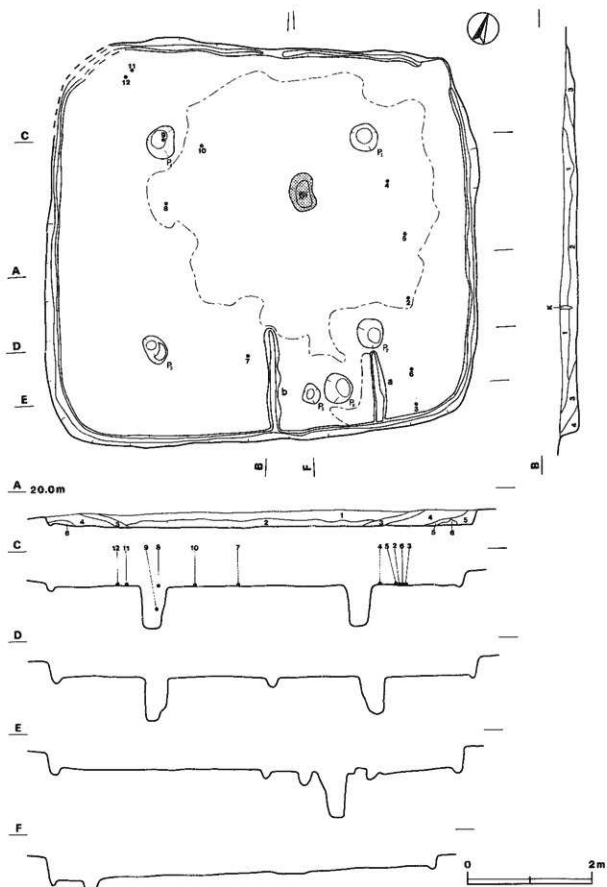
- 1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 炭化物・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量, 炭化粒子少量

遺物 土師器片462点, 手捏土器1点が出土している。第84図1の土師器碗は南東側覆土中から, 9の土師器甕はP<sub>4</sub>祝土中層から, 2, 4の上師器高坏, 5の土師器埴は東壁寄りの床面から, 3の土師器高坏, 6, 7の土師器器台は間仕切り溝a, b臨床面からそれぞれ出土している。8の上師器器台はP<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>の間の床面, 10の上師器甕はP<sub>4</sub>周辺の床面から出土している。

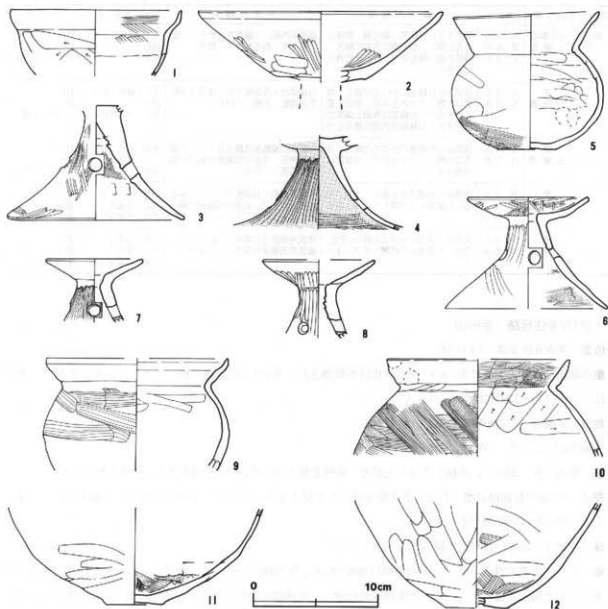
所見 北壁際, 南東コーナー, 南壁際, 西壁際には, 床面から約10cmの厚さで焼土が見られ, 焼失住居である。ほとんどの遺物は床面直上から出土しており, 焼失時のものと思われる。時期は, 遺構形態と遺物から古墳時代前期の4世紀中葉と考えられる。

第133号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・完成	備考
第84図 1	碗 土師器	A 13.8 B (5.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内側に立ち上がり, 口縁部はほぼ直立する。口縁部と体部の境に明確な線をもち。	口縁部内面刷毛目調整後, 横ナデ。口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ。磨減が著しい。	長石・石英・スコリア・砂粒 褐色 不良	P19 20% 南東側覆土中
2	高坏 土師器	A 19.8 B (5.7)	坏部破片。底部と体部の境に明瞭な線を有し, 体部は大きく外方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上子ヘラ磨き, 下子ヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。	長石・石英・細砂・スコリア 褐色 普通	P20 30% 南壁寄り床面
3	高坏 土師器	D 14.3 E (9.2)	脚部片。脚部はハの字状に開く。4か所に透かし孔をもつ。	脚部外面上半刷毛目調整, 下半刷毛目調整後, ヘラ磨き。内面上半脚部状刷毛目調整, 下子ヘラナデ。	磨き 明赤褐色 良好	P21 50% 間仕切り臨床面



第83图 第133号住居跡实测图



第84図 第133号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 4	高 土 器	B( 7.6) E( 6.2)	脚部はラッパ状に開く。1か所に透かし孔をもつ。	脚部外面へラ磨き。脚部内面へラナデ。腹部内面刷毛目調整。内・外面赤彩。	褐色 暗赤褐色 良好	P22 20% 東壁寄り床面
5	埴 土 器	A 11.8 B 11.2 C 4.7	平底。体部は丸みをもって立ち上がり、最大径は体部中位にあり、わずかに扁平である。口縁部は外傾し、外に開く。	口縁部内・外面横ナデ。刷毛目調整後ナデ。下位には刷毛目が残る。体部内面上位へラナデ。中位から底部刷毛目調整後指頭押圧。	長石・石英・砂粒 褐色 良好 外面煤付着	P23 65% 東壁寄り床面
6	器 土 器	A 9.6 B 9.0 D13.0 E 7.0	脚部一部欠損。脚部は大きくハの字状に開く。器受部はわずかに内彎して立ち上がり、端部に縁をもつ。4か所に透かし孔をもつ。	器受部内・外面、脚部内・外面へラ磨き。	長石・石英・砂粒 明赤褐色 良好	P24 70% 間仕切 a 脇床面
7	小形器 土 器	A 7.7 B( 5.1) E( 3.1)	脚部下半欠損。器受部は外方に開き端部に縁をもつ。4か所に透かし孔をもつ。	器受部外面ナデ。脚部外面へラ磨き。	砂粒 褐色 良好	P25 50% 間仕切 b 脇床面

図号	名称	計測値(cm)	形状の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 8	小形部台 土 器 器	A[ 8.8 B( 6.3) E( 4.1)	胴部下半、口縁部一部欠損。胴部は外方に開く。器受部は外方に開き、端部に倒い縁をもつ。3か所に透かし孔をもつ。	器受部内面、口縁部外面横ナデ。器受部下半、胴部外面ヘラ磨き。	砂粒・赤色粒子 褐色 良好	P26 30% P <sub>2</sub> 、P <sub>4</sub> の間隙面
9	壺 上 器 器	A[14.6 B( 9.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、中に最大径をもつ。口縁部は外傾し端部で直立する。口縁部内面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目調整。内面ヘラ磨り。	長石・砂粒・石英 褐色 良好 外面薬付着	P27 30% P <sub>1</sub> 腹上中層
10	壺 上 器 器	A[14.8 B( 7.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内面曲線状刷毛目ナデ。外面指調押圧。体部外面曲線状刷毛目調整。内面ヘラ磨り。	長石・石英・小石 にぶい褐色 良好	P28 10% P <sub>4</sub> 周辺表面
11	壺 七 脚 器	B( 7.8) C 4.6	底部から体部下半の破片。平底。突出した底部から内彎して立ち上がる。	体部外面刷毛目調整後、ナデ。体部内面ヘラナデ。底部内面曲線状刷毛目による放射状のナデ。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通 外面薬付着	P29 30% 灰成
12	壺 土 器 器	B( 8.5) C[ 5.2]	底部から体部にかけての破片。平底。突出した底部から内彎して立ち上がる。	体部外面刷毛目調整。内面ヘラナデ。底部内面曲線状刷毛目によるナデ。	砂粒・石英 にぶい褐色 普通 外面薬付着	P30 10% 灰成

### 第137号住居跡 (第85図)

位置 調査6区北部、L14f区。

重複関係 本跡の上部に第136・138号住居跡が構築され、第139号住居跡に掘り込まれていることから、本跡は第136・138・139号住居跡よりも古い。

規模と平面形 一辺が約5.70mの方形である。

主軸方向 N-3°-W

壁 壁高は6～20cmで、外傾して立ち上がる。東壁北側半分は第138号住居跡によって壊されている。

壁溝 第138号住居跡に壊されている北壁を除いた全壁下を巡っている。上幅11～21cm、下幅5～10cm、深さ5cm、断面形はU字形である。

床 中央部と出入口付近が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は袖幅126cm、長さ94cm、壁外への掘り込みはわずか10cmである。両袖部は白色粘土で覆われている。火床部は長径28cm、短径22cmの楕円形で、わずかに掘りくぼめられている。

燃焼部から煙道部へは45度の角度で立ち上がる。

#### 土層解説

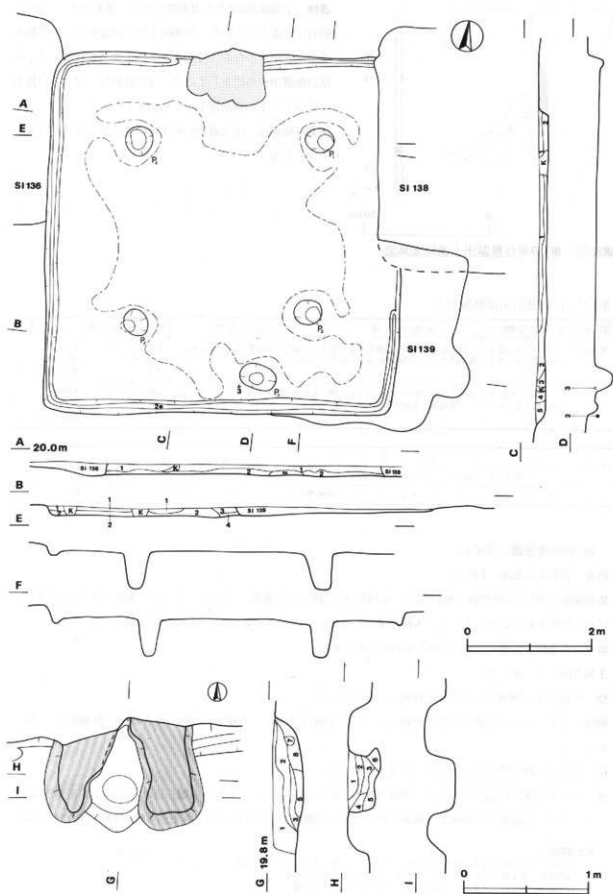
- 暗褐色 ローム小ブロック多量、ローム粒子中量、焼土粒少量、炭化物微量
- 褐色 炭化粒子・山砂多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化材少量
- 赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・山砂少量
- 赤褐色 焼土小ブロック多量、ローム粒子・炭化物・山砂少量
- 赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・山砂少量
- 暗赤褐色 焼土粒子・山砂中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量
- 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量

ピット 5か所(P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、径43～60cmの円形、深さ58～64cmで、主柱穴と思われる。P<sub>5</sub>は、長径60cm、短径40cmの楕円形、深さ25cmで出入口施設に伴うピットと考えられる。

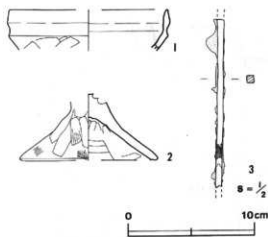
覆土 5層からなる自然堆積である。

#### 土層解説

- 極暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 極暗褐色 ローム粒子中量
- 暗褐色 ローム粒子多量
- 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック微量



第85图 第137号住居跡实测图



遺物 土師器片284点, 須恵器片7点, 鉄製品1点, 鉄滓, 砥石片が出土している。第86図1の土師器坏は, 北東側覆土中から出土したものである。2の土師器高坏脚部は, 南壁の壁溝中から出土している。3の鉄釘は, 出入り口施設に伴うピットの西側覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。

第86図 第137号住居跡出土遺物実測図

### 第137号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 1	坏 土師器	A[12.5] B(3.3)	口縁部破片。体部と口縁部の境に明確な段をもつ。口縁部は長く、直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒・スコリアにふい色色普通	P34 10% 北東側覆土中
2	高坏 土師器	D[10.8] E(5.3)	脚部片。裏に向かってハの字状に開く。着端部は平坦である。	外面順毛目ナデ後、ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・雲母にふい色色普通	P35 30% 南壁壁溝中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
3	釘	8.8	0.5	0.4	5.0	西側覆土中	M1 90%

### 第138号住居跡 (第87図)

位置 調査6区北部, L14fa区。

重複関係 第137号住居跡を掘り込み, 第143号住居跡の上に構築している。さらに, 本跡の上には第139号住居跡が構築されていることから, 本跡は第137・143号住居跡より新しく, 第139号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸4.10m, 短軸3.90mの方形である。

主軸方向 N-6°-W

壁 壁高は4~18cmで, わずかに外傾して立ち上がる。

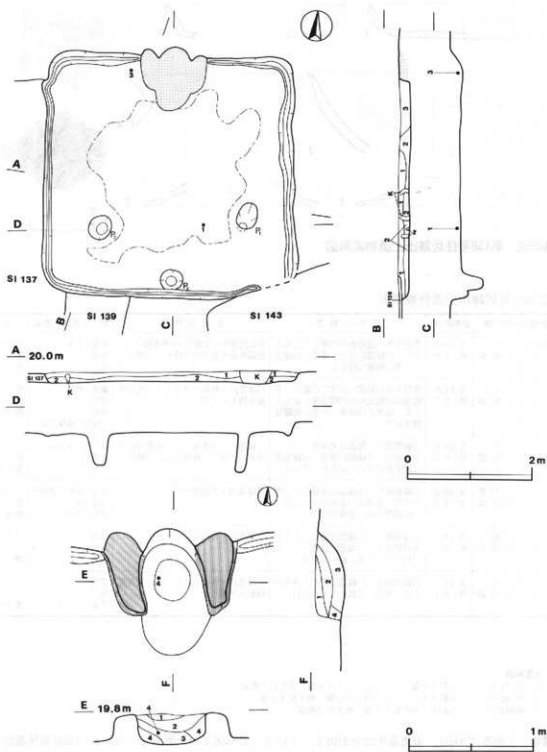
壁溝 南東コーナーを除いた壁下を巡っている。上幅11~20cm, 下幅4~12cm, 深さ6cm, 断面形はU字形である。

床 中央部が踏み固められており, わずかに高くなっている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は袖幅104cm, 長さ102cm, 壁外への掘り込みは16cmで, 平面形は逆U字形である。両袖部は白色粘土で構築されている。燃焼部から煙道部への立ち上がりは約20度で緩やかである。

#### 埋土層解説

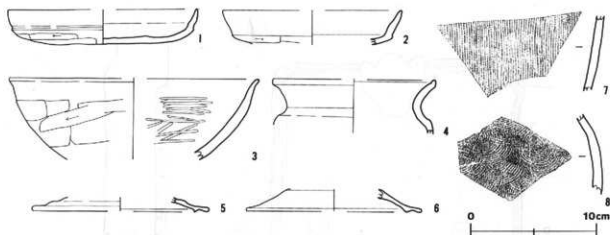
- 1 黒褐色 炭化粒子多量, 焼土粒子・粘土中ブロック中量, 焼土小ブロック少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・粘土中ブロック多量, 焼土中・小ブロック中量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子・焼土大・中・小ブロック中量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, 焼土小ブロック少量



第87図 第138号住居跡実測図

ピット 3か所(P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>は、径32~36cmの円形、深さ51~65cmで、主柱穴と思われる。P<sub>3</sub>は、径36cmの円形、深さ25cmの出入り口に伴うピットと考えられる。

覆土 3層からなる。ロームブロックや炭化物を含んでいるので人為堆積と考えられる。



第88図 第138号住居跡出土物実測図

第138号住居跡出土物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第88図 1	坏 土師器	A[15.0] B 2.8	平底気味の底部から内彎して立ち上がり、口縁部に至る。底部と口縁部との境に明瞭な段をもつ。	底部内面から口縁部内・外面横ナデ、底部外面不定方向手持ちヘラ削り。	砂粒・石英 褐色 良好	P36 50% 中央部覆土下層
2	坏 土師器	A[14.0] B(2.7)	底部から口縁部にかけての破片。平底気味の底部から内彎気味に立ち上がる。底部と口縁部との境に明瞭な段をもつ。	口縁部内・外面クロコナデ。底部外面手持ちヘラ削り。	褐色、微粒 褐色 良好 口縁部内面煤片着	P37 10% 覆土中
3	碗 土師器	A[19.8] B(6.5)	口縁部破片。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部はわずかに外につまみだしている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。	スコリア・雲母 赤褐色 良好	P38 10% 覆土袖脇
4	小形壺 土師器	A[13.0] B(4.3)	口縁部破片。口縁部は外傾して立ち上がり、端部はつまみあげている。口縁端部内面に沈線が通る。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・砂粒・雲母が 多量で粗い 褐色 普通	P39 10% 覆土中層
5	蓋 須恵器	A[14.0] B(2.1)	口縁部破片。口縁部は短く、丸みがあり肥厚する。端部には低いかえりが付く。全体的に扁平である。	口縁部内・外面クロコナデ。	雲母 灰色 良好	P40 5% 覆土中
6	蓋 須恵器	A[14.0] B(2.1)	口縁部破片。口縁部は短く、丸みがある。端部には低いかえりが付く。	口縁部内・外面クロコナデ。天井部回転ヘラ削り。	雲母 灰オリーブ色 不良	P41 5% 覆土中

土層解説

- 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量、焼土粒子少量
- 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量

遺物 土師器片366点、須恵器片22点が出土している。第88図2の土師器坏、5、6の須恵器坏蓋は覆土中から出土している。1の土師器坏は中央部下層から、3の土師器碗は覆土袖脇から、4の土師器小形壺は覆土中層からそれぞれ出土している。7の須恵器壺片は、北東コーナー床面から出土しており、胎土が緻密で灰白色を呈し他地域からの搬入品である。8の須恵器壺体部片は、体部外面に同心円状叩きか施されたもので雲母を多量に含んでいる。この他に図示はできなかったが須恵器長頸瓶の破片が1点出土しており、肩部と頸部の接合は3段接合のもので外面に自然釉がかかっている。

所見 本跡の時期は、かえりが付く須恵器坏蓋が出土していることから、奈良時代の7世紀末から8世紀初頭と考えられる。本跡からは、搬入品の須恵器も出土しており、他の住居跡とは様相を異にしている。



### 第141号住居跡（第89図）

位置 調査6区北部，L144s区。

重複関係 第140号住居跡に掘り込まれ，第142号住居跡を掘り込んでいることから，本跡は第140号住居跡より古く，第142号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸6.10m，短軸5.80mの方形である。

主軸方向 N-37°-W

壁 壁高は28～34cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。北西コーナー部は，第140号住居跡に壊されている。

壁溝 北西コーナーを除いた一部壁下を巡っている。上幅10～26cm，下幅3～10cm，深さ5～8cmで，断面形は逆台形である。

床 全体的に平坦で，踏み固められている。南東壁下中央部には，幅22～35cm，高さ5cmの半円状の高まりがあり，踏み固められている。位置や形態から出入り口施設と思われる。

竈 北西壁中央に付設されている。第140号住居跡によって，左袖部から煙道部が壊されており，残存部は右袖部と火床部である。火床部は径40cmの円形で皿状に掘りくぼめられている。袖部は，粘土とローム粒子を混ぜて構築されている。

#### 竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土少量
- 3 暗褐色 粘土ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量，粘土ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 焼土小ブロック少量，焼土粒子・焼土中ブロック・粘土少量，焼土大ブロック少量
- 6 暗褐色 焼土からなる。(火床)
- 7 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 8 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量，焼土粒子少量
- 9 褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・焼土中ブロック少量，ローム小ブロック少量

ピット 5か所(P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，径40～73cmの円形，深さ54～85cmで，主柱穴と思われる。P<sub>5</sub>は，南東壁中央部壁際に接し，出入り口施設と思われる半円状の高まり内側に位置し，竈と同一線上に並んでいる。長径55cm，短径43cmの楕円形，深さ56cmで出入り口施設に伴うピットと考えられる。

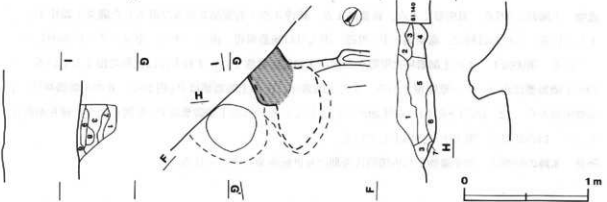
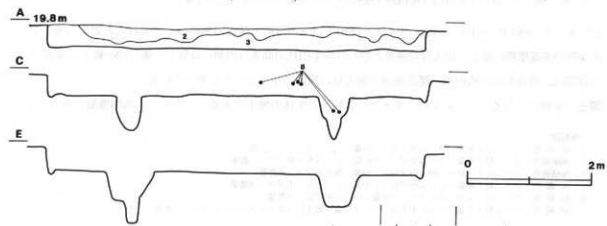
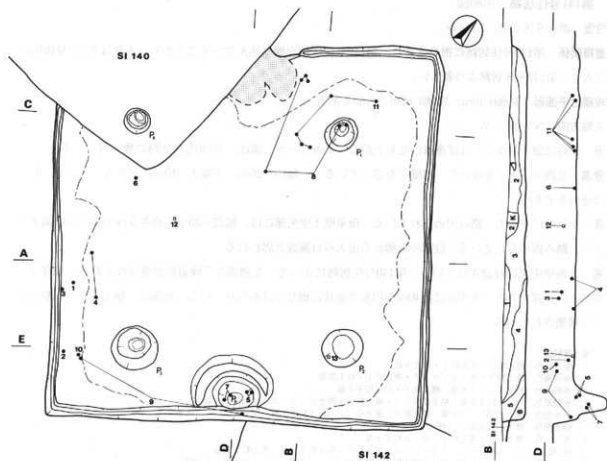
覆土 6層からなる。ロームブロック・ローム粒子が主体の埋土であることから，人為的堆積と考えられる。

#### 土層解説

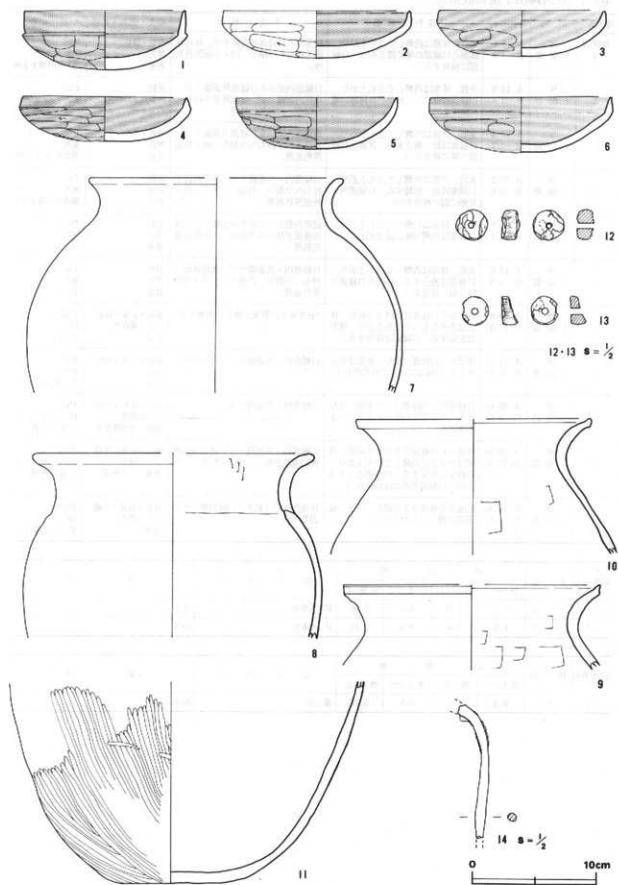
- 1 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック少量，ローム大・中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム中・小ブロック少量，焼土小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック少量，ローム大・中ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量，ローム中ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量，ローム中・小ブロック少量，焼土小ブロック少量，ローム大ブロック少量

遺物 土師器片997点，須恵器片4点，鉄製品1点，鉄滓3点，石製品2点及び混入した縄文土器片1点が出土している。これらは特に，竈東側とP<sub>1</sub>周辺，出入り口施設周辺，南コーナー，東コーナーに集中して出土している。第90図1～4の土師器片は壁際から逆位・斜位の状態，いずれもほぼ完形で出土している。9，10の土師器片は南コーナー壁際覆土から，5の土師器片，7の土師器片はP<sub>5</sub>内から，6の土師器片は，P<sub>4</sub>南側床面から，12，13の白玉はP<sub>2</sub>の床面から出土している。11の土師器片はP<sub>1</sub>を囲むように破片が散在していた。14の鉄釘は，覆土4層から出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。



第89图 第141号住居跡実測图



第90图 第141号住居跡出土遺物実測図

第141号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第90図 1	坏 土 師 器	A 13.0 B 4.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部は直立する。	底部から口縁部外面横ナデ。体部外面手持ちヘラ削り。内・外面黒色処理。	長石・砂粒 黒色 普通	P58 90% 南西院階上土層
2	坏 土 師 器	A 15.0 B 3.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く直立する。体部と口縁部の境に横をもつ。	口縁部内面から口縁部外面横ナデ。体部内面横ナデ。体部外面手持ちヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒 外面にぶい藍色 内面黒色 普通	P59 80% 南コーナ -覆上下層
3	坏 土 師 器	A 13.4 B 3.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く直立する。体部と口縁部の境に横をもつ。	口縁部内面から口縁部外面横ナデ。体部外面手持ちヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア 黒色 良好	P60 90% 南院階上土層
4	坏 土 師 器	A 13.2 B 3.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く内彎する。口縁部内・外面に弱い横をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面手持ちヘラ削り。内面ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 黒色 良好	P61 90% 南西院階上土層
5	坏 土 師 器	A 13.0 B 4.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内彎気味に直立する。	底部内面から口縁部外面横ナデ。体部外面手持ちヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒 黒色 普通	P62 90% P <sub>1</sub> 内
6	坏 土 師 器	A 14.6 B 4.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。体部と口縁部の境に弱い横をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面手持ちヘラ削り。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 黒色 普通	P63 90% P <sub>1</sub> 南側床面
7	甕 土 師 器	A(19.8) B(17.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は丸みをもって立ち上がり、球形状を呈する。口縁部は外反する。	内・外面共に磨減が激しく調整不明。	長石・石英・砂粒 にぶい黄褐色 普通	P65 15% P <sub>1</sub> 内
8	甕 土 師 器	A(21.6) B(15.0)	体部から口縁部の破片。体部は丸みをもち、口縁部はコの字状に折れる。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面ヘラナデ。	長石・石英・砂粒 褐色 普通	P66 10% P <sub>1</sub> 覆土
9	甕 土 師 器	A(20.6) B(6.8)	口縁部片。口縁部はくの字状に外反する。口唇部はわずかに上方につまみあける。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・砂粒・雲母 にぶい藍色 普通 外面障材着	P67 15% 南コーナ -覆土上層
10	甕 土 師 器	A(18.9) B(10.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部はつまみあけ、口唇部内面に沈線をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面磨減で調整不明、内面ヘラナデ。	長石・石英・雲母 にぶい藍色 普通 二次焼成	P68 10% 南コーナ -覆土上層
11	甕 土 師 器	B(16.3) C 8.0	底部から体部下手の破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ磨き、内面剥離のため調整不明。	長石・石英・小磯 にぶい藍色 普通	P69 30% P <sub>1</sub> 周辺覆土

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
12	白 土	1.7	1.0	0.3	3.56	P <sub>1</sub> 内床面	Q 4
13	白 玉	1.5	0.9	0.4	2.16	P <sub>1</sub> 内床面	Q 5

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
14	針	(7.2)	0.7	0.5	(5.15)	覆土中	M 8

### 第142号住居跡（第79図）

位置 調査6区北部，L15e1区。

重複関係 第131・141号住居跡に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形 重複により規模や平面形は明確でないが，残存する壁や床から，一辺約[5.30]mの方形と推定される。

主軸方向 [N-30°-W]

壁 重複のため，北壁東側半分の壁が残存しているのみである。壁高は約6cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁が現存している北壁下の東側部分を巡っている。上幅10～13cm，下幅5～8cm，深さ5cm，断面形はU字形である。

床 床面の4分の3は第131号住居跡に壊されており，残存する北側の床は，ピットの周囲がわずかに踏み固められている。

ピット 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は，径約40cmの円形，深さ59cmで主柱穴と考えられる。

覆土 1層からなる。炭化材や焼土を多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量，炭化材・炭化粒子・焼土粒子・焼土中ブロック中量

遺物 葎土中から土師器細片15点が出土しているが，図示できる遺物はない。

所見 本跡は，床面に焼土塊，炭化材が多量にみられ，焼失住居である。時期は，出土遺物に刷毛目調整の壺片がみられること，古墳時代中期の5世紀中葉に比定した第131号住居跡に掘り込まれていることから，古墳時代前期と考えられる。

### 第143号住居跡（第91図）

位置 調査6区北部，L13g1区。

重複関係 本跡の上に第138・144～146号住居跡が構築されているので，本跡が最も古い。

規模と平面形 一辺が約4.20mの方形である。

主軸方向 N-64°-E

壁 壁高は8～30cmで，外傾して立ち上がる。

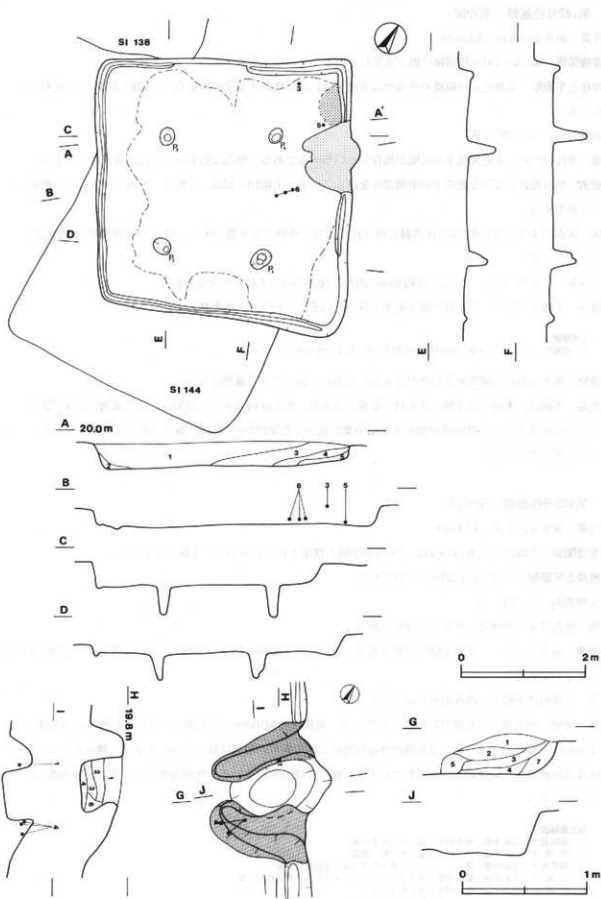
壁溝 南東コーナー，北壁を除いた壁下を巡っている。上幅10～18cm，下幅5～8cm，深さ5～12cm，断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で，踏み固められている。

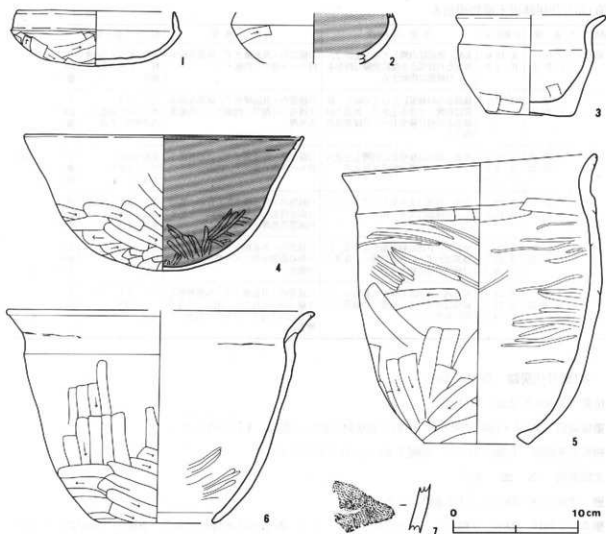
竈 東壁の中央部から北寄りに付設されている。規模は袖幅100cm，長さ80cm，壁外への掘り込みは20cmで，平面形は三角形である。袖，煙道部の残存状況は良好であり，袖部は粘土と山砂を混ぜて構築されている。火床部は長径37cm，短径29cmの橢円形でわずかに掘りくぼめられている。燃焼部奥は，70度の急な角度で立ち上がっている。

#### 竈土層解説

- 1 赤褐色 山砂多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量
- 2 暗褐色 山砂多量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 3 赤褐色 山砂中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 4 黒褐色 山砂・焼土粒子中量，焼土中・小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 山砂中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土中・小ブロック中量，炭化粒子少量



第91图 第143号住居跡実測图



第92図 第143号住居跡出土遺物実測図

ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径25~30cmの円形、深さ43~54cmで主柱穴と考えられる。

覆土 5層からなる。焼土ブロックや炭化粒子を含んだ黒褐色土が主体の人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 極暗褐色 炭化粒子・焼土粒子中量、粘土ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック微量

遺物 土師器片212点、須恵器片5点が出土している。第92図1の土師器環、4の土師器鉢はそれぞれ左袖内、右袖内から出土している。5の土師器甕は左袖脇の床面直上から伏せた状態で、6の土師器甕は右袖近くの覆土下層から出土している。2の土師器環、3の土師器小形鉢は、北東コーナーの覆土から出土したものが接合している。7の須恵器甕体部片は、外面に同心円文の叩きが施されたものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。

### 第143号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第92図 1	坏 土師器	A 13.6 B 4.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部との境に明瞭な段をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面手持ちへう削り、内面ナデ。	砂粒・雲母・白色炭粒にふい・黄褐色良好	P70 100% 甕石袖内
2	坏 土師器	B(4.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部との境に段をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面手持ちへう削り、内面ナデ。内面黒色処理。	灰石・石英 内面にふい・黄褐色・内面黒色 普通	P71 20% 覆土
3	小形鉢 土師器	A 12.0 B 8.2 C 7.0	平底。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面手持ちへう削り後ナデ、内面ヘラナデ。	灰石・砂粒 にふい・黄褐色 普通	P72 80% 東北コーナー 覆土上層
4	鉢 土師器	A 22.3 B 11.0	丸底。体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面手持ちへう削り、内面へう磨き。内面黒色処理。	灰石・砂粒・雲母 外面黄褐色・内面黒色 普通	P73 90% 甕石袖内
5	飯 土師器	A 20.3 B 23.5 C 8.4	単孔式。体部は短頸部を呈する。口縁部はわずかに外方に開く。体部と口縁部の境に段をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り後部分的にへう磨き、内面へう磨き。	灰石・石英・砂粒 にふい・褐色 良好	P74 95% 左袖端床面
6	飯 土師器	A(24.4) B 17.1 C 9.1	単孔式。体部はわずかに膨らみ、口縁部は外反する。体部と口縁部との境に段をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上平腕方向の手持ちへう削り、内面へう磨き。	灰石・砂粒・雲母 にふい・褐色 普通	P75 50% 左袖付近層上層

### 第152号住居跡 (第94・95図)

位置 調査6区北部, M14a区。

重複関係 第151・180～182・193・197号住居跡に掘り込まれ、本跡が最も古い。

規模と平面形 長軸[8.60]m, 短軸[7.85]mの長方形である。

主軸方向 [N-22°-E]

壁 壁高は18～35cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅16～29cm, 下幅約5～10cm, 深さ約5～7cm, 断面形は逆台形である。重複のため確認できたのは東壁の南半分から南東コーナーまでと、西壁の北半分から北西コーナーまでの部分である。

床 全体的に平坦で踏み固められている。中央部と南東コーナーには焼土塊が、北西コーナー・南東コーナーには炭化材がみられる。

炉 中央部から僅かに西寄り位置する。第197号住居跡に西半分は壊されているため、規模は明確ではないが、径50cmの円形と推定される。掘り込みは8cmの深さである。

ピット 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は西壁中央部に位置する。径45cm, 深さ20cmの円形のピットで、性格は不明である。

貯蔵穴 北西コーナーに位置する。径60cmの円形, 深さ23cm, 断面形は逆台形である。

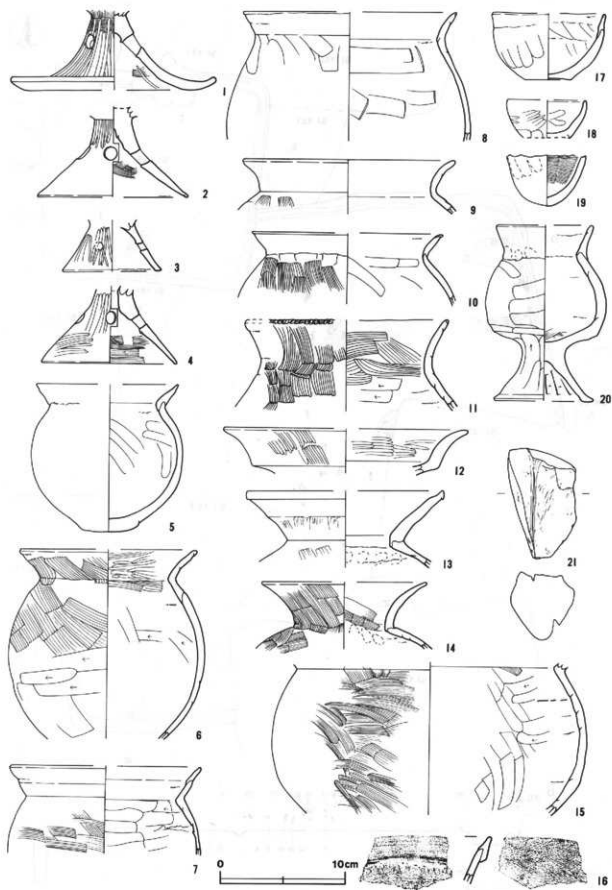
覆土 5層からなる。焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックを含む暗褐色、黒褐色土主体の人為地積である。

#### 土層解説

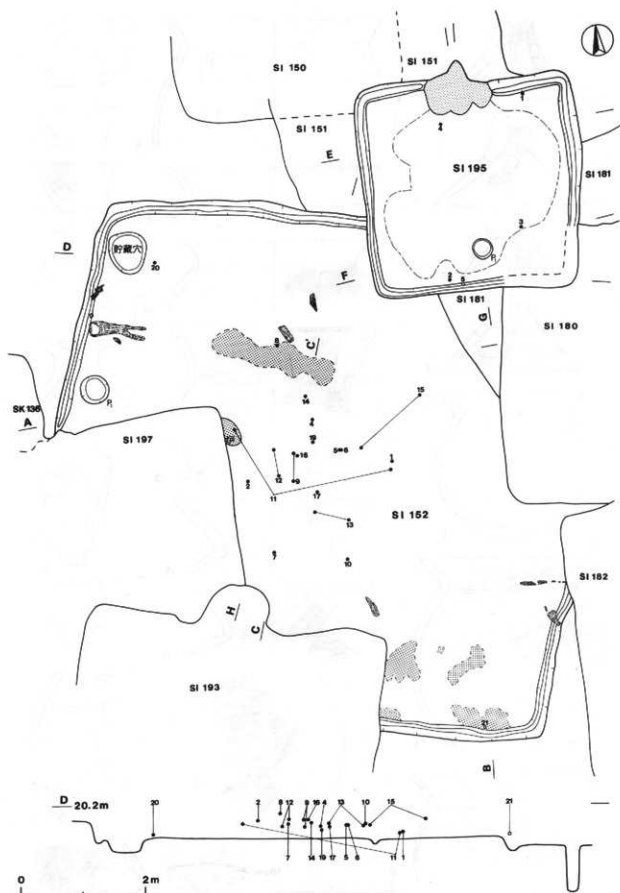
- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 炭化粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量

遺物 土師器片1489点, 手捏ね土器2点, 砥石1点, 混入した編文土器片5点が出土している。大部分の遺物は覆土1, 2層にあたる中層から上層に集中して出土している。第93図1, 2の土師器高坏, 3, 4の土師器器台, 5, 6の土師器小形甕, 7～10の土師器台付甕, 11の上師器甕, 12～16の土師器甕, 17～20のミニチュア土器は中央部の中層から上層で出土している。20の土師器ミニチュア台付甕は、北西コーナー下層から, 21

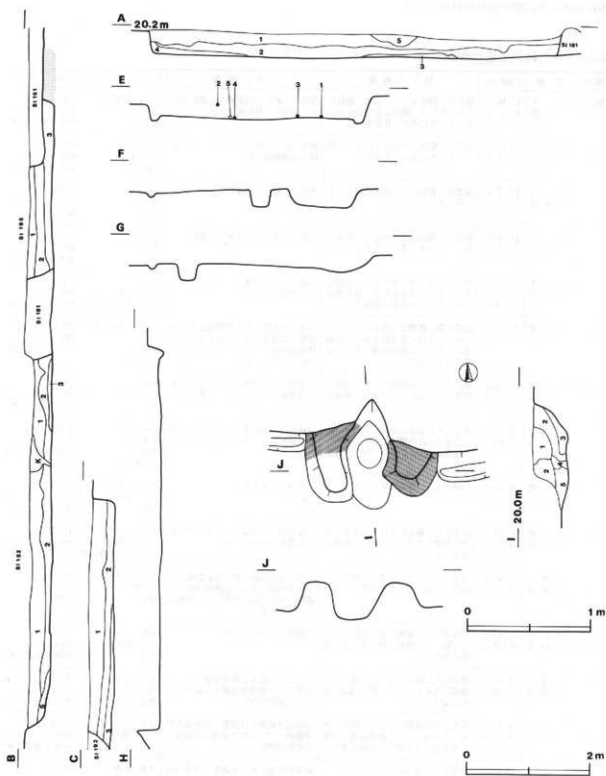




第93图 第152号住居跡出土物実測図



第94图 第152・195号住居跡实测图(1)



第95図 第152・195号住居跡実測図(2)

の砥石は南東コーナー下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の床面には焼土塊、炭化材が広がっており、焼失住居である。これらの上から遺物が多量に出土していることから、焼失後人為的な埋め戻しの際、遺物投棄が行われたものと考えられる。時期は、出土遺物か

ら古墳時代前期で4世紀中葉と思われる。本遺跡の中では古墳時代前期の住居跡は少なく、本跡の出上遺物の器種構成は当該期の良好な資料である。

第152号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(mm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・形成	備考
第93図 1	高土師器	D 16.5 E (6.4)	脚部片。脚部はラッパ状で、裾長に大きく広がりが、端部は反り気味となる。3か所に透かし孔をもつ。	外面へラ磨き。内面刷毛目調整後ナデ。端部内・外面横ナデ。	長石・白色粒子 明黄褐色 普通	P114 40% 中央部覆土中層
2	高土師器	D 12.0 E (7.4)	脚部片。脚部はハの子状に大きく開く。4か所に透かし孔をもつ。	脚部上位へラ磨き、下位ナデ。内面刷毛目調整後ナデ。	長石・砂粒 にぶい黄褐色 普通	P115 20% 中央部覆土上層
3	高土師器	D 7.8 E (4.2)	脚部片。脚部はハの子状に開く。4か所に透かし孔をもつ。	外深へラ磨き。内面ナデ。	砂粒 褐色 良好	P116 30% 覆土中
4	高土師器	D 10.6 E (6.3)	脚部片。脚部は丸みをもって外方に開く。4か所に透かし孔をもつ。	外面へラ磨き。内面刷毛目調整。	長石・砂粒 褐色 良好	P117 30% 中央部覆土中層
5	小形土師器	A 11.4 B 11.9 C 4.9	底部は丸底気味で突出する。体部は丸みをもって立ち上がる。最大径は中位にもつ。口縁部は外積する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面へラナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通 丹塗付着	P118 50% 中央部覆土上層
6	小形土師器	A 14.0 B (15.3)	底部丸底。体部は丸みをもって立ち上がり、中位に最大径をもつ。口縁部はくの子状に折れ外積する。口縁端部に平坦面をもつ。	口縁部・体部上半外面輪歯状刷毛目調整。口縁部内面へラ磨きナデ。体部内面強いへラナデ。体部外面下半横方向のへラ磨り。	白色粒子多量で粗い 藍色 良好	P119 30% 中央部覆土上層
7	台付土師器	A 15.2 B (7.1)	体部上位から口縁部にかけての破片。脚部はくの子状で、口縁部は外積する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目調整。内面へラ磨り、粗い刷毛ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 良好	P121 10% 中央部覆土上層
8	台付土師器	A 17.2 B (10.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。口縁部はわずかに外方に開く。器壁は薄い。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目調整後へラナデ。内面へラナデ。	長石・砂粒 明黄褐色 普通 外面横付着	P124 20% 中央部覆土上層
9	台付土師器	A 16.9 B (4.4)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・砂粒 にぶい黄褐色 良好	P125 10% 中央部覆土上層
10	台付土師器	A 15.4 B (5.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外積する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目調整。内面へラナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 良好	P127 10% 中央部覆土上層
11	土師器	A 16.0 B (7.4)	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は外傾し、わずかに開く。	口縁部外面輪歯状刷毛目調整後ナデ。口縁部内面・体部外面輪歯状刷毛目調整。体部内面へラ磨り。口縁端部キザミ目を施す。	長石・石英・細砂 浅黄褐色 普通	P122 10% 炉内
12	有段土師器	A 19.6 B (3.6)	口縁部片。口縁部は強く外反し、大きく開く。口縁部に段を有する。器壁は肥厚する。	口縁部内・外面へラ磨き。	砂粒 にぶい褐色 普通	P113 10% 中央部覆土上層
13	土師器	A 15.8 B (6.2)	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は外反し、大きく開き端部に垂直の面をつくる。	口縁部外面刷毛目調整後横ナデ。内面横ナデ。体部外面刷毛目調整後ナデ。内面強調整付着。	磁石・細砂 浅黄褐色 普通	P120 10% 中央部覆土中層
14	土師器	A 13.2 B (5.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は丸みをもつ。口縁部は強く外反し水平近くまで開く。器壁は薄い。	口縁部外面刷毛目調整。内面刷毛目調整後ナデ。体部外面刷毛目調整。内面強調整付着。	砂粒 にぶい褐色 良好	P120 20% 中央部覆土上層
15	土師器	B (12.3)	体部片。体部は球形状を呈する。	体部外面強い刷毛目調整。体部内面刷毛目調整後へラ磨り。	砂粒・小礫 にぶい黄褐色 良好	P126 10% 中央部覆土上層
16	土師器	B (3.9)	複合口縁部の破片。	口縁部外面横ナデ、内面刷毛目調整。	砂粒 にぶい褐色 普通	P128 10% 中央部覆土上層

図版番号	器種	台高(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93回 17	ミニチュア土師器	A [ 9.0] B 5.4 C 3.8	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。輪のミニチュア。	口縁部内・外面横ナゲ。体部内・外面ヘラナゲ。	砂粒に富み黄褐色良好	P110 40% 中央部覆土中層
18	ミニチュア土師器	A [ 6.4] B [ 3.1]	底部割離。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部内面に稜をもつ。輪のミニチュア。	体部外面ヘラナゲ、内面ヘラナゲ。	黄褐色、黄粒に富み黄褐色良好	P131 30% 覆土中
19	ミニチュア土師器	A 6.3 B 4.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は凹む。	体部外面指ナゲ、内面刷毛目調整。	砂粒に富み黄褐色良好	P132 100% 中央部覆土中層
20	ミニチュア土師器	A [ 7.4] B 14.2 D 7.8 E 5.0	胴部は外方に開き、竪はわずかに反る。体部下端部に稜を有し、丸みをもち、口縁部は外傾する。台付壁のミニチュア。	口縁部内・外面横ナゲ。口縁部と体部の境目明確。体部外面横方向のヘラ指り。胴部外面縦方向のヘラ指り。体部内面刷毛目調整後ナゲ。胴部内面ヘラナゲ、ヘラ当て痕を残す。	砂粒・白色黄粒灰黄色 黄褐色 黄褐色	P112 90% 北西コーナー下層

図版番号	種別	計 測 値				出 上 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
21	磁石	8.9	5.6	5.5	(45)	南東コーナー覆土下層	Q 9 磁灰岩 50%

### 第159号住居跡 (第96図)

位置 調査6区北端部、L15d4区。

重複関係 第160号住居跡に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸6.00m、短軸5.30mの長方形である。

主軸方向 N-19°-W

壁 壁高は12~21cmで、外傾して立ち上がる。東壁南半分は第160号住居跡に壊されている。

壁溝 西壁北半分と、第160号住居跡に壊されている東壁南半分を除いた壁下を巡っている。上幅14~27cm、下幅3~12cm、深さ5~10cm、断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で、主柱穴の内側に踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は袖幅93cm、長さ76cm、壁外への掘り込みは15cmで、平面形は三角形である。袖部は山砂混じりの粘土とローム粒子で構築されている。火床部は径30cmの円形で、5cmほど掘りくぼめられている。燃焼部奥から煙道部へは45度の角度で立ち上がる。火床部には土製支脚が残っていた。

#### 甌土層解説

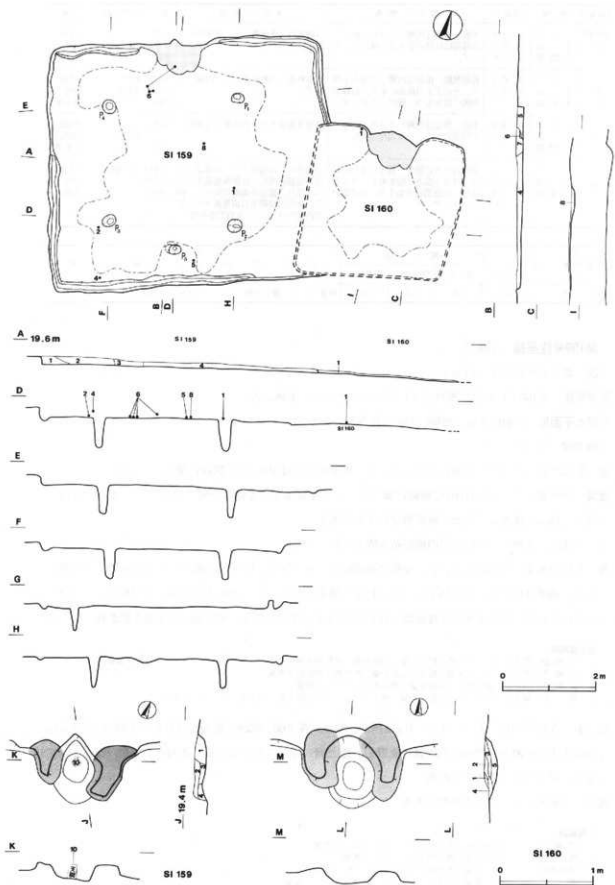
- 1 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、山砂少量、炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 灰褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・山砂少量、炭化物・炭化粒子微量
- 3 赤褐色 灰中量、焼土粒子・山砂少量、焼土中・小ブロック微量
- 4 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、焼土中ブロック・山砂少量、焼土大ブロック・炭微量

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P5は径25~35cm、深さ60~67cm、断面形は筒形で主柱穴と思われる。P5は南壁中央の壁際から70cmほど内側に位置し、竈と同一線上に並んでいる。径20cmの円形、深さ50cmで出入り口施設に伴うピットと考えられる。

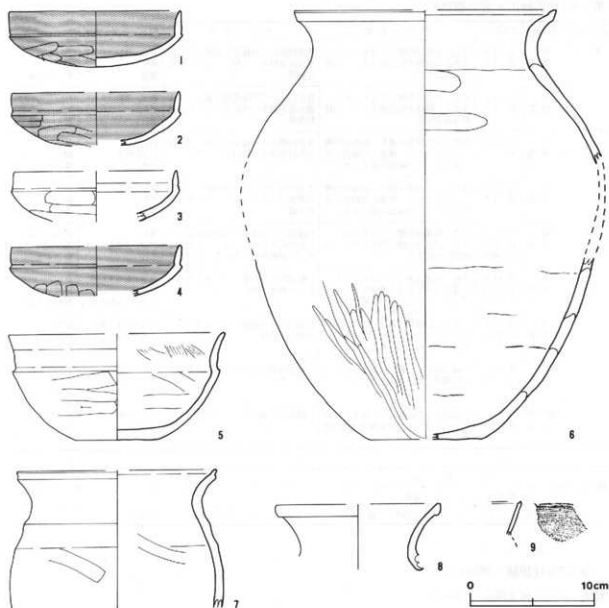
覆土 7層からなり、人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・ローム小ブロック微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 6 褐色 ローム粒子多量
- 7 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック微量



第96图 第159·160号住居跡实测图



第97図 第159号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片178点、須恵器片2点が出土している。第97図1、2の土師器杯、5の土師器碗は、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、出入りロビット付近の床面からそれぞれ出土している。4の土師器杯は南壁際中層から、8の須恵器蓋は中央部下層から出土している。6の土師器甕は左袖際床面から出土したものと甕と甕内から出土したものが接合したものである。10の土製支脚は原位置をとどめた状態で出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期の6世紀中葉と考えられる。

第159号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図	坏 上 甕 器	A 13.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 体部と口縁部の境に段をもつ。口縁 部は直立する。	底部内面から口縁部外面横ナデ。体 部外面手持ちへう張り。内・外面黒 色処理。	灰石・砂粒 普通	P166 90% P.北床面
		B 4.5				
2	坏 十 器	A 13.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 体部と口縁部の境に段をもつ。口縁 部は直立する。	底部内面から口縁部外面横ナデ。体 部外面手持ちへう張り。内・外面黒 色処理。	黒色。焼成 良好	P157 30% P.北床面
		B (4.3)				
3	坏 十 器	A 13.0	体部から口縁部の破片。体部は内彎 して立ち上がり。体部と口縁部の境 に段をもつ。口縁部は直立する。	体部内面から口縁部外面横ナデ。体 部外面手持ちへう張り。	白色粒子 に多い褐色 普通	P158 20% 掘上中
		B (4.1)				
4	坏 上 器	A 13.6	体部から口縁部の破片。体部は内彎 して立ち上がり。体部と口縁部の境 に段をもつ。口縁部は直立する。	体部内面から口縁部外面横ナデ。体 部外面手持ちへう張り。内・外面黒 色処理。	緻密。焼成 黒色 良好	P169 20% 南瀬原掘上中層
		B (4.0)				
5	坏 十 器	A 17.2	平底。体部は内彎して立ち上がり、 体部と口縁部の境に段を有する。口 縁部は外反する。	口縁部内・外面黒毛目調整後横ナデ 体部外面手持ちへう張り。内面へう 張り。底部外面 1方向のへう張り。	砂粒 に多い褐色 良好	P160 45% 出入りロビット 穿削床面
		B 8.5 C 8.6				
6	漆 上 器	A 131.0	平底。体部は緩やかに立ち上がり、 口縁部は外反する。端部はつまみ上 げられ、口内面内面に沈線をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下 位へう張り。内面へう張り。	灰石・石灰・小焼 褐色 普通 丹塗層付着	P161 30% 元輪窓実室
		B 135.5 C 9.0				
7	漆 上 器	A 16.0	体部から口縁部の破片。体部は緩や かに立ち上がる。口縁部は外反し、 端部はつまみあげられる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ う張り。内面へう張り。	灰石・石灰・砂粒 オリーブ色 普通	P162 15% 掘上中
		B 131.0				
8	漆 須 器	A 12.8	口縁部破片。口縁部は強く外反する。 口縁端部に垂直の面をつくる。	口縁部外面クロナデ。内面割離の ため、整形不明。	灰石・砂粒 10% 普通	P163 10% 中央部掘上下層
		B (5.3)				
9	漆 須 器	A	口縁部破片と思われる。口縁部は外反 して立ち上がる。口縁端部内面に沈 線が走る。	口縁部外面割離状況が目を眩される。	灰石・砂粒 青灰色 良好	P130 5% 掘上中
		B (2.8)				

図版番号	種 別	計 測 値			記 上 地 点	備 考
		長さ(cm)	径(cm)	重量(g)		
10	支 脚	(17.0)	9.2~10.8	(106)	堀上床面	DPS 実測図なし

## 第162号住居跡 (第98図)

位置 調査6区北端部、L15<sub>R</sub>区。

重複関係 第131号住居跡を掘り込み、上部に第161・163号住居跡が構築されていることから、本跡は第131号住居跡より新しく、第161・163号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸5.63m、短軸5.48mの方形である。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高は20~27cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅17~37cm、下幅4~12cm、深さ5cm、断面形はU字形で、全周している。

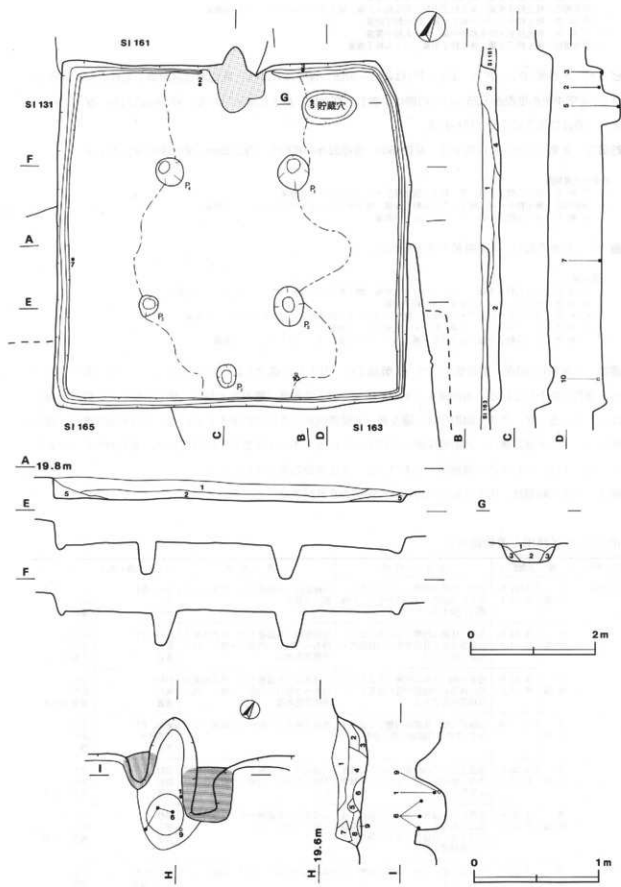
床 全体的に平坦で、出入りロビットから竈にかけての中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は袖幅87cm、長さ106cm、壁外への掘り込みは33cmで、平面形は三角形である。袖部は山砂混じりの粘土を貼り付けて構築されている。火床部は径32cmの円形で、わずかに掘りくぼめられている。燃焼部奥から煙道部へは30度の角度で立ち上がる。

## 土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量、焼土中ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量





第98图 第162号住居跡実測图

- 5 黒褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量  
 6 暗赤褐色 粘土粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量、焼土小ブロック・ローム粒子微量  
 7 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量  
 8 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子微量  
 9 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量、ローム粒子微量

ピット 5か所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は径31~57cm、深さ53~58cm、断面形は逆台形で主柱穴と思われる。P<sub>5</sub>は兩壁中央の壁際から25cmほど内側に位置し、竈と同一線上に並んでいる。径30cmの円形、深さ10cmで出入り口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 北東コーナーに位置する。長径86cm、短径52cmの楕円形、深さ28cm、断面形は逆台形である。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量  
 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・ローム小ブロック微量  
 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

覆土 5層からなり、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

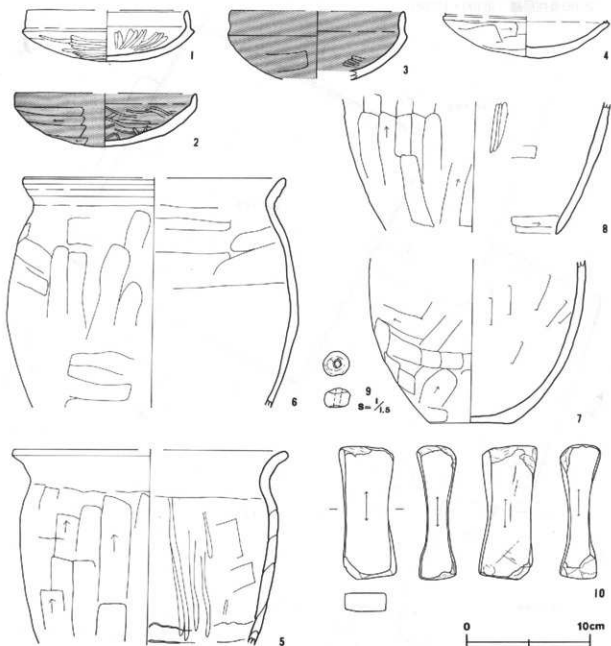
- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック少量  
 2 暗褐色 ローム小ブロック中量、焼土粒子少量  
 3 暗褐色 ローム小ブロック・山砂少量、焼土小ブロック・炭化物・ローム大・中ブロック微量  
 4 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム大・中ブロック微量  
 5 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・焼土小ブロック少量、ローム中・小ブロック微量

遺物 土師器片480点、須恵器片5点、土製品2点、混入した縄文土器片3点が出土している。竈及びその周辺に遺物が集中している。第99図1の土師器杯、6の土師器甕は竈内覆土から、9の土製小玉は竈火床面から出土している。2、3の土師器杯は、竈左袖、北壁溝内からそれぞれ出土している。5の土師器甕は貯蔵穴底面から、7の土師器甕は、西壁際床面から出土している。4の土師器杯、10の磁石は、覆土中のものである。1、3、4は、いわゆる「模倣杯」であり、2、3は黒色処理がされている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。

第162号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 1	杯 土師器	A[12.9] B 4.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部内・外面へラ磨き。	褐色、炭粒 良質	P173 50% 竈内
2	杯 土師器	A[14.5] B 4.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く直立する。口縁部内・外面に段をもつ。	口縁部内・外面磨ナデ。体部外面手持ちへラ磨り、内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	灰石・砂粒 褐色 普通	P174 40% 左袖刃辺床面
3	杯 土師器	A[13.9] B(5.5)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部の境に段をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部外面手持ちへラ磨り、内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒 褐色 普通	P175 30% 北壁溝底面
4	杯 土師器	B(3.9)	口縁部欠損。体部は内彎して立ち上がる。体部と口縁部の境に段をもつ。	外面手持ちへラ磨り。内面磨ナデ。	褐色、炭粒 良質	P176 30% 覆土中
5	甕 土師器	A.22.0 B(15.7)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部外面方向へラ磨り、内面へラ磨き後へラナデ。	砂粒 褐色 普通	P177 20% 貯蔵穴底面
6	甕 土師器	A[20.8] B(23.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は丸みをもって立ち上がり球形状を呈する。口縁部は外方に開き、端部に平坦面をもつ。	口縁部内・外面磨ナデ。体部外面手持ちへラ磨り、内面へラナデ。	砂粒 褐色 普通	P178 20% 竈覆土上層
7	甕 土師器	B(13.1) C 6.7	口縁部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体・底部外面へラ磨り。内面へラナデ。	灰石・砂粒 にぶい褐色 普通	P179 50% 西壁側床面



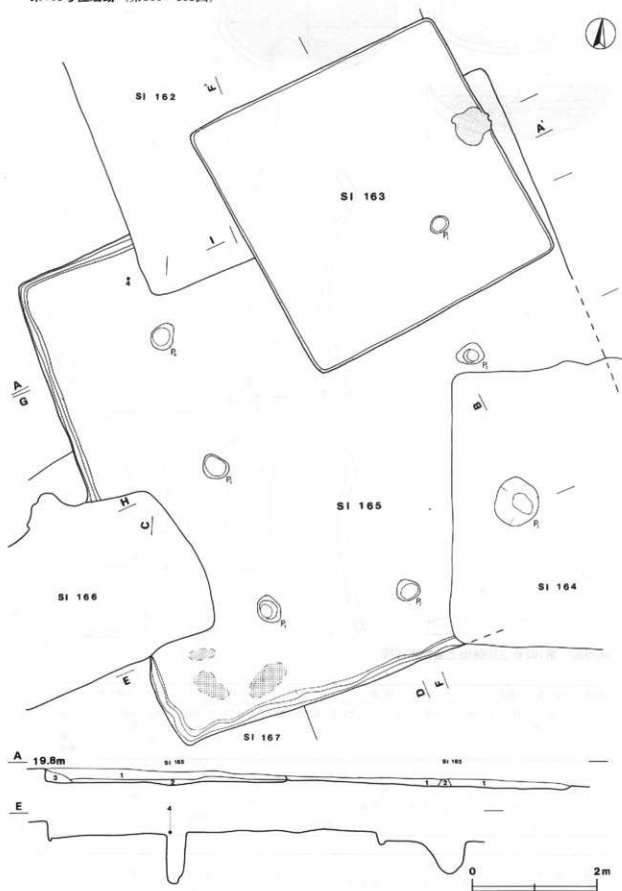
第99図 第162号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 8	甌 土器	B(10.6)	半孔式。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面縦方向のヘラ削り。内面ヘラナデ。	長石・砂粒にぶい橙色不良	P180 5% 貯蔵穴底面 覆土中

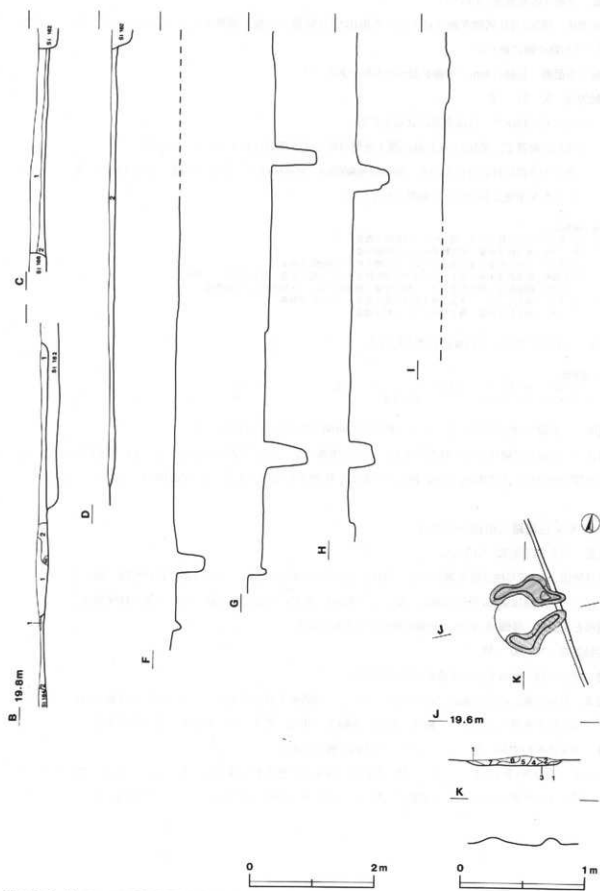
図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
9	小玉	0.8	1.0	0.2	0.71	竈火床面	D P 6

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
10	砥石	10.6	4.5	3.2	176	南壁寄り覆土下層	Q16 凝灰岩

第163号住居跡 (第100・101図)



第100図 第163・165号住居跡実測図(1)



第101图 第163·165号住居跡实测图(2)

位置 調査6区北端部、L15r区。

重複関係 第165号住居跡を掘り込んでいる第162号住居跡の上部に構築されていることから、第165・162・163号住居跡の順に新しい。

規模と平面形 長軸4.40m、短軸4.32mの方形である。

主軸方向 N-57°-E

壁 壁高は6~18cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に軟質で、第162号住居跡の覆土を貼り床とする部分はわずかに沈んでいる。

竈 北東壁中央部に付設されている。規模は袖軸60cm、長さ60cmで、壁外への掘り込みはない。袖部は山砂混じりの粘土を北東壁に貼り付けて構築されている。

#### 遺土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量、粘土小ブロック微量
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・山砂微量
- 6 赤褐色 焼土小ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 7 赤褐色 炭化粒子中量、焼土粒子・ローム粒子微量

覆土 2層からなり、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子・ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 土師器片140点が出土している。細片のため図示できるものはなかった。

所見 出土遺物が細片のため時期を決定するのは困難であるが、古墳時代後期に比定される遺物が多い。遺構の重複関係からいえば第162号住居跡よりも新しい住居であるが、あまり大きな時間差はないようである。

### 第165号住居跡（竈100・101図）

位置 調査6区北部、L15g区。

重複関係 第167号住居跡を掘り込み、第162~164号・166号住居跡・第6号掘立柱建物跡に掘り込まれていることから、本跡は第167号住居跡より新しく、第162~164号・166号住居跡・第6号掘立柱建物跡より古い。

規模と平面形 長軸「8.50」m、短軸8.08mの長方形である。

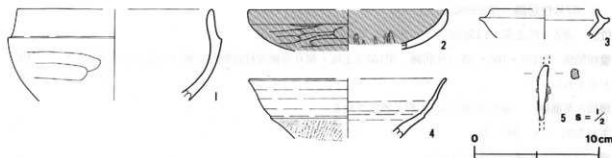
主軸方向 N-30°-W

壁 壁高は22~24cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 重複が激しいため確認できたのは一部分で、南壁西半分から南西コーナー部、西壁北半分から北西コーナー部の壁下を巡っている。上幅11~28cm、下幅4~9cm、深さ5cm、断面形は逆台形である。

床 中央部がわずかに高くなっている。全体的に軟質である。

ピット 7か所(P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>は径30~74cmの不整形円形、深さ42~81cmで、支柱穴と思われる。P<sub>7</sub>は南壁中央の壁際から80cmほど内側に位置する。径35cmの円形、深さ47cmで出入り口施設に伴うピットと思われる。



第102図 第165号住居跡出土遺物実測図

覆土 3層からなり、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム大・中・小ブロック微量

遺物 土師器片237点、須恵器片10点が出土している。第102図1の土師器碗、2の土師器杯、3の須恵器坏身は覆土中から出土している。4の須恵器碗は北壁寄りの床面から出土しており、胎土が緻密で、断面が暗赤褐色に焼けていることから搬入品と思われる。5の不明鉄製品は覆土中から出土している。

所見 本跡から出土した須恵器坏身は口径が最小になる時期のものである。出土遺物から古墳時代後期の7世紀前葉と考えられる。

第165号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 1	碗 土師器	A[15.4] B(7.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は丸みをもって立ち上がる。体部と口縁部の境に段をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面手持ちへら削り。	長石・砂粒 黒褐色 普通 外面煤付着	P185 10% 覆土中
2	杯 土師器	A[15.8] B(3.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面手持ちへら削り。内面へら磨き。内・外面黒色処理。	砂粒 黒色 普通	P186 10% 覆土中
3	坏身 須恵器	A[8.2] B(2.3)	受部片。体部は内彎して立ち上がり受部に至る。受部は上方に伸び、口縁部は短く内傾する。	内・外面クロナデ。	緻密 灰黄褐色 普通	P188 5% 覆土中
4	碗 須恵器	A[15.6] B(4.7)	口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。端部に平端面があり、口縁部下方に稜をもつ。薄手。	口縁部内・外面クロナデ。口縁部外面下方叩き痕。	緻密 外面青灰色 内面暗赤褐色 良好	P187 10% 北壁寄り床面

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	不明鉄製品	(3.0)	0.6	0.5	(1.7)	覆土中	M21

### 第167号住居跡（第239図）

位置 調査6区北部、L15h1区。

重複関係 第157・165・166号住居跡、第133号土坑・第6号掘立住建物跡に掘り込まれていることから、本跡が最も古い。

規模と平面形 一辺が[6.60]mの方形と推定される。

主軸方向 「N-38°-W」

壁 削平のため確認できなかった。

床 全体的に軟質である。

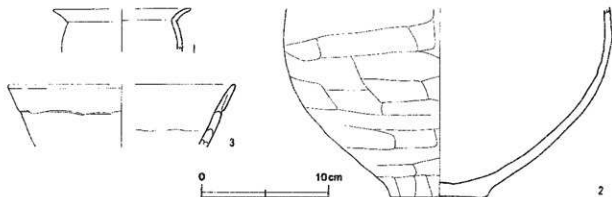
覆土 削平のため1層しか残っていない。

#### 土層解説

I 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片64点、鉄滓3点が出土している。第103図1の土師器埴は南西壁寄り覆土下層、2の土師器釜、3の土師器壺は北西寄り覆土下層から出土している。2、3は内・外面に二次焼成が認められる。2は体部上半が欠損しており、割れ口は磨滅し、二次的に利用された彩跡がある。

所見 本跡の時期は出土遺物から、古墳時代中期の5世紀前半と考えられる。



第103図 第167号住居跡出土遺物実測図

### 第167号住居跡出土遺物観察表

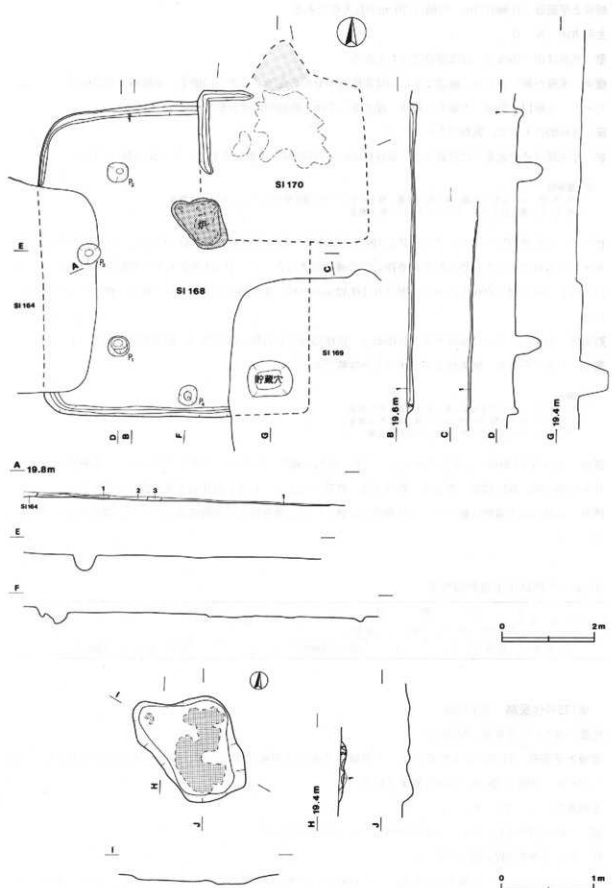
図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 1	埴 土師器	A[10.8] B(9.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内・外面磨ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	P196 10% 南西壁側覆土下層
2	釜 土師器	B(15.0) C 7.6	底部から体部にかけての破片。平底。突出尖味の底部から丸みをもって立ち上がり、球形状を呈する。	体部外面へラ削り後ナデ。内面磨滅。	長石・砂粒 にふい褐色 普通 煤付着	P197 50% 北西壁側覆土下層
3	壺 土師器	A[17.8] B(4.9)	口縁部破片。口縁部は外傾し、折り返し口縁である。	口縁部内・外面磨ナデ。 外面のナデは工具痕が明瞭。	長石・砂粒 灰色 良好 煤付着	P198 10% 北西壁側覆土下層

### 第168号住居跡（第104図）

位置 調査6区北部、L15gs区。

重複関係 第164・169号住居跡に掘り込まれ、上部には第170号住居跡が構築されていることから、本跡が最も古い。





第104图 第168·170号住居跡实测图

規模と平面形 長軸6.77m、短軸[5.70]mの長方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は10~16cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 重複が激しいため、確認できたのは北壁西半分から北西コーナーの壁下、南壁西半分の壁下を巡る部分である。上幅12~28cm、下幅5~13cm、深さ5~7cm、断面形は逆台形である。

床 全体的に平坦で、軟質である。

炉 中央部のやや北寄りに位置する。長径112cm、短径85cmの不整長方形で、5~10cm掘りくぼめている。

炉土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量

ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>の掘り方は径35~45cmの円形、深さ33~67cmで、主柱穴と思われる。

本来は6本柱であったと思われるが重複のため確認できなかった。P<sub>4</sub>は南壁中央の堀込から約15cmほど内側に位置し、如と同一直線上にある。掘り方は径42cmの円形、深さ23cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナーに位置する。長径95cm、短径75cmの長方形、深さ68cm、断面形は逆台形である。

覆土 3層からなる。暗褐色土が主体の人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片159点、石1点が出土している。遺物は細片のみで図示できる土器はない。器種別にみると、杯・杓頭59点、高杯13点、埴2点、器台4点、甕77点である。石は雲母片岩で北壁際から出土している。

所見 本跡の出土遺物は細片のため時期決定は難しいが、重複関係や器種構成などから古墳時代前期であると考えられる。

第168号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
1	不明な製品	11.0	9.4	3.4	203	北壁際	Q17 雲母片岩 実測値なし

第173号住居跡 (第105図)

位置 調査6区北東部、M15gd区。

規模と平面形 耕作による掘乱によって規模や平面形は明確ではないが、現存する床や炉の状況から長軸[3.60]m、短軸[3.38]mの方形と推定される。

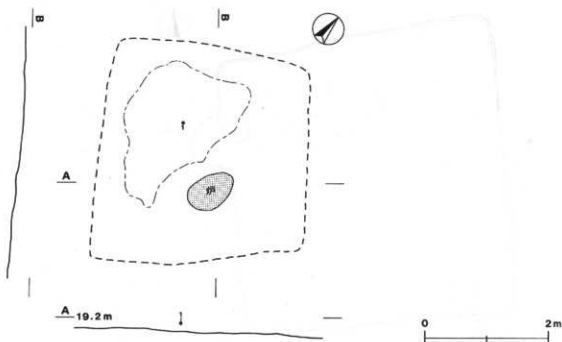
主軸方向 [N-40°-W]

壁 上面は削平されており、炉周辺が残存しているのみである。

床 炉の北西部が踏み固められている。

炉 中央部からわずかに南寄りに位置し、長径80cm、短径58cmの楕円形で、床面を12cmほど掘りくぼめている。

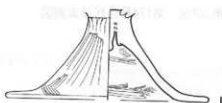
覆土 削平によって、確認できなかった。



第105図 第173号住居跡実測図

**遺物** 土師器片4点が出土しており、第106図1の土師器高杯の脚部は覆土上層から正位の状態でも出土している。

**所見** 遺物は少なく時期を決定するのは困難であるが、炉跡の確認や刷毛目調整されている土器片が出土していることなどから古墳時代前期と考えられる。



第106図 第173号住居跡出土遺物実測図

第173号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第106図 1	高杯 土師器	D[16.0] E[7.2]	脚部片。脚部はラッパ状で、裾長に大きく広がる。	脚部内面刷毛目調整後、ヘラ磨き。外面ヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P211 80% 覆土上層

### 第174号住居跡 (第107図)

**位置** 調査6区北東部、M15f区。

**規模と平面形** 耕作による攪乱によって規模や平面形は明確ではないが、現存する床や竈の状況から長軸[4.70]m、短軸[4.45]mの方形と推定される。

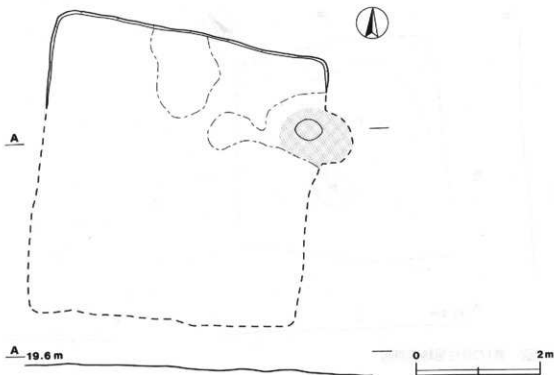
**主軸方向** [N-95°-E]

**壁** 壁高は2~6cmで外傾して立ち上がる。上部が攪乱されているため残存しているのは北壁部のみである。

**床** 北側の一部と竈前部分がわずかに高く、踏み固められている。

**竈** 東壁のやや北側に付設されている。攪乱のため、火床部の範囲が確認できただけである。

**遺物** 上面が削平されているため、土師器片12点が出土したのみである。器種は土師器杯・甕である。第108



第107図 第174号住居跡実測図



第108図 第174号住居跡  
出土遺物実測図

図1の土師器坏は、内・外面黒色処理されており、甕内覆土中から出土している。

所見 本跡は、遺物が少なく、かつ細片のため時期を決定するのは困難であるが、東側に甕が付設されていることや出土遺物などから、古墳時代後期の7世紀前半と考えられる。

第174号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 1	坏 土師器	A(10.0) B(2.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内灣して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・貫母 明赤褐色 貫直	P212 5% 甕内覆土中

### 第175号住居跡 (第109図)

位置 調査6区北部、M15<sub>3</sub>区。

重複関係 第176号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

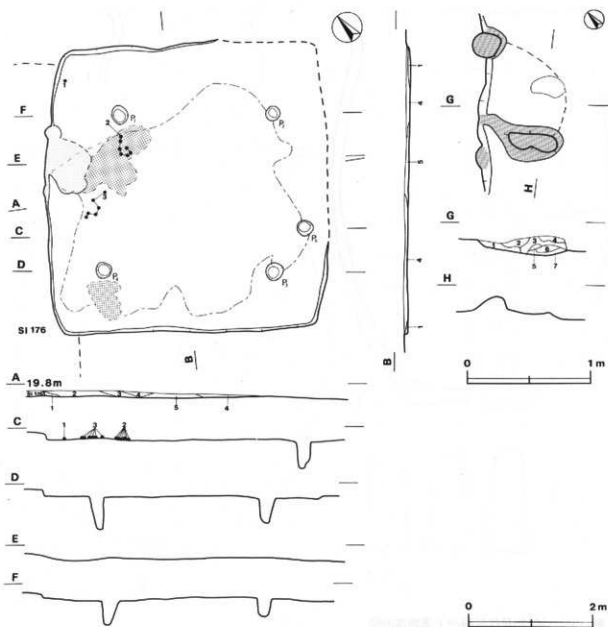
規模と平面形 長軸4.60m、短軸4.46mの方形である。

主軸方向 N-48°-W

壁 壁高は8~10cmで外傾して立ち上がる。北東コーナーは、耕作による擾乱を受けている。

床 中央部から甕にかけて踏み固められている。P<sub>4</sub>の付近から焼土の固まりが検出されている。

甕 北西壁のやや北寄り位置する。規模は長さ65cm、袖幅110cmである。壁外への掘り込みは、耕作によっ



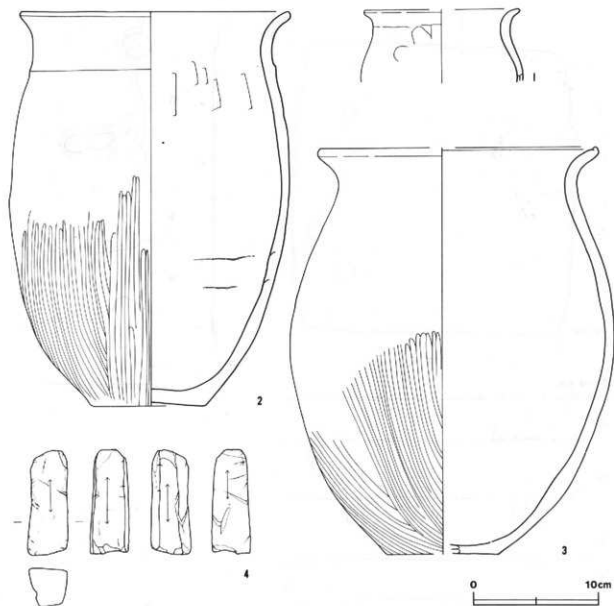
第109図 第175号住居跡実測図

て壊され、確認できなかった。天井部は削平されており、袖部の一部は、灰白色の粘土で構築されている。火床部は、長径30cm、短径15cmの楕円形で、床面と同じレベルの平坦面を使用している。

富士層解説

- 1 極暗褐色 炭化粒子・焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 3 極赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化物少量
- 5 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・粘土ブロック微量
- 6 にぶい褐色 焼土粒子・焼土小ブロック中量
- 7 灰褐色 粘土ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 5か所(P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>は、長径30cm、短径26cmの楕円形、深さ38cm、P<sub>2</sub>～P<sub>4</sub>は、径25～30cmの円形、深さ28～54cmで、いずれも主柱穴と思われる。P<sub>5</sub>は、径25cmの円形、深さ44cmのピットであり、位置



第110図 第175号住居跡出土遺物実測図

と形状から出入り口施設に伴うピットと思われる。

覆土 5層からなる。炭化粒子・焼土粒子・ロームブロックが含まれており、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量

遺物 土師器片15点、石製品1点が出土している。第110図1の土師器小形甕は、耕作による攪乱の北コーナー付近から、2の土師器甕は竈前面部から出土している。3の土師器甕は、竈覆土下層から出土している。4の砥石は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期の7世紀前葉と考えられる。

第175号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地成	備考
第110図 1	小形 土器	A[12.4] B( 5.8)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ刮り。内面ヘラナデ。	砂粒・石英・雲母・赤色粒子 褐色 普通	P213 10% 北コーナー付近
2	寛 土師器	A 21.4 B 31.7 C 8.7	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位ヘラ磨き。内面ナデ。	砂粒・石英・赤色粒子 明赤褐色 普通	P214 80% 甕前面部
3	深 土師器	A[22.1] B 32.6 C[ 9.0]	底部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位・底部ヘラ磨き。	砂粒・石英・赤色粒子・小石 褐色 普通	P215 30% 甕覆土下層

図版番号	種別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
4	砥石	8.4	3.3	3.1	124	覆土中	Q18 燧状岩

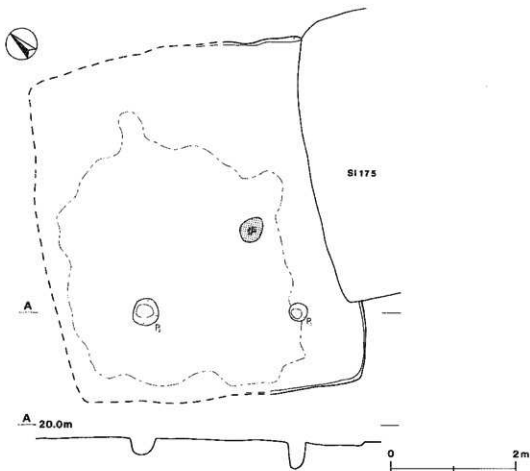
第176号住居跡 (第111図)

位置 調査6区北部, M15d区。

重複関係 第175号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸[5.79]m, 短軸[4.92]mの長方形と推定される。

主軸方向 [N-40°-W]



第111図 第176号住居跡実測図

壁 上部は削平され、東壁コーナーと南壁コーナーの一部が2～6cmの高さで残存している。

床 中央部から南西部がわずかに高くなっている。全体的に散らかい。

炉 長径45cm、短径35cmの楕円形である。

ピット 2か所(P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>は径25～45cmの不整形、深さ26～44cmで、主柱穴と思われる。

遺物 土師器片23点が出土している。細片のみであり、図示できるものはないが、甕の頸部片に刷毛目のある土器片が数点出土している。

所見 本跡は、遺物が少なく時期を判断するのは困難であるが、遺構の形態や出土遺物片から古墳時代前期と考えられる。

### 第179号住居跡(第112図)

位置 調査6区北部、M14bd区。

重複関係 第134・137号土坑に掘り込まれており、本跡は第134・137号土坑より古い。

規模と平面形 長軸7.13m、短軸6.98mの方形である。

主軸方向 N-13°-E

壁 壁高は20～36cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅15～28cm、下幅5～12cm、深さ5～10cm、断面形はU字形で、全周している。

床 全体的に平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 2か所。炉1は北壁から80cm内側に位置し、長径80cm、短径60cmの楕円形で、灰面を7cmほど掘りくぼめている。炉2は、北壁から175cm内側に位置し、長径50cm、短径40cmの楕円形で、床面を3cmほど掘りくぼめている。

#### 炉1土層解説

- 1 凝暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量
- 2 暗褐色 炭化粒中量、焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子多量
- 4 赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子多量
- 5 凝暗褐色 焼土粒中量、炭化粒子・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 焼土粒中量、ローム粒子微量

ピット 7か所(P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>)。P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は径35～45cm、深さ35～81cm、断面形は逆台形で主柱穴と思われる。

P<sub>7</sub>は南壁やや東側の壁際に位置し、長径40cm、短径30cmの楕円形で、18cmほど掘りくぼめている。出入り口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 南東コーナーに位置する。長径83cm、短径75cmの楕円形、深さ61cm、断面形は皿状である。

#### 貯蔵穴土層解説

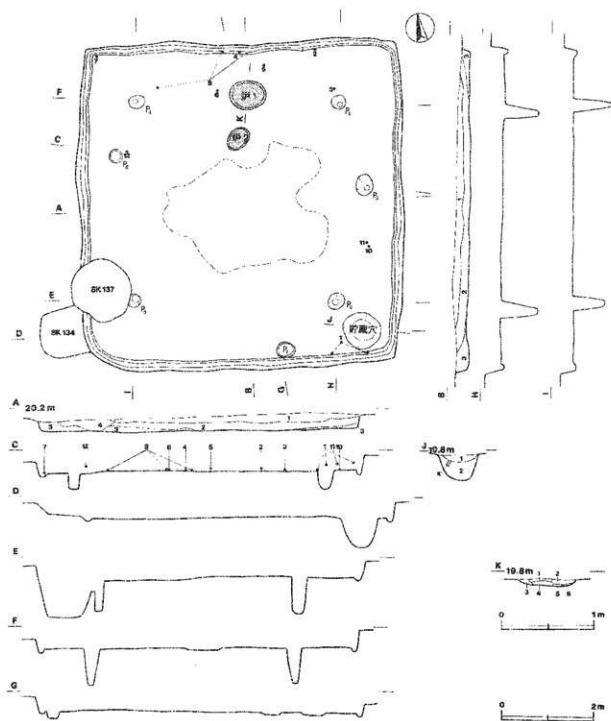
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒少量、ローム中・小ブロック微量

覆土 4層からなり、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 凝暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック中量、焼土粒子少量
- 3 凝褐色 ローム小ブロック・焼土小ブロック少量
- 4 凝暗褐色 ローム大・中ブロック中量

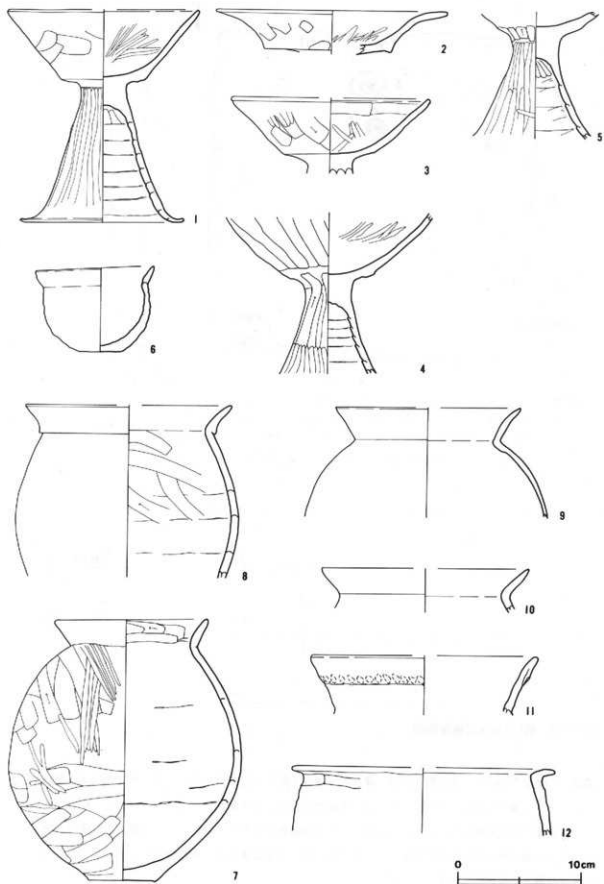




第112図 第179号住居跡実測図

遺物 土師器片1005点、須恵器片25点、礫3点、縄文土器片1点が出土している。第113図1の土師器高坏は、南東コーナー覆土中層から出土し、2～5の土師器高坏は、北壁側覆土から出土している。6の土師器塔、8の土師器壺は北壁側覆土から出土している。7の土師器甕は完形で、北西コーナー覆土から横位で出土している。9の土師器壺は覆土中から出土している。10、11の土師器壺片は、東側付近から出土している。12の土師器壺は西側覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期の5世紀前半と考えられる。



第113图 第179号住居跡出土遺物実測図

第179号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	目録番号	器形の概要	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第113図 1	高土師器 高土師器	A[15.3] B[17.2] D[12.5] E[11.0]	胴部でエンタシス状の膨らみを持ち、胴部はハの字状に強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ、内面へう磨き。胴部内・外面横ナデ、胴部外面へう磨き。輪横み痕有り。	砂粒・長石・赤色粒子にぶい黄褐色 普通	P223 70% 南東コーナー 覆土中層
2	高土師器	A[18.6] B[3.6]	杯部片、杯部は外傾して立ち上がり、大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ、内面へう磨き。外面へう磨り。杯部部下手持ちへう磨り。	砂粒・長石・赤色粒子にぶい黄褐色 普通	P224 30% 北壁覆土下層
3	高土師器	A[15.8] B[6.1]	杯部片、杯部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。外面へう磨り後、へう磨き。内面へう磨き。	砂粒・長石・赤色粒子にぶい黄褐色 普通	P225 30% P:北寄り周辺
4	高土師器	B[13.0] E[7.0]	杯部・胴部片。胴部はラッパ状に下方に開く。杯部は直立に開き、下半に縦をつくる。	杯部外面へう磨り後ナデ、内面へう磨き。大部分磨滅。胴部外面へう磨き。輪横み痕有り。	砂粒・長石・赤色粒子にぶい黄褐色 普通	P226 40% 北壁側床面
5	高土師器	B[10.2] E[7.5]	胴部片。胴部はハの字状に開く。	胴部外面へう磨き。内面胴毛目調整後、ナデ。胴部内面上部へうナデ。輪横み痕有り。	砂粒・長石・赤色粒子にぶい黄褐色 普通	P227 30% 北壁側覆土下層
6	土師器	A[9.4] B[6.9] C[3.3]	平底。体部は扁平気味であり、内側して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部内・外面磨滅。	砂粒・長石 明赤褐色 良好	P228 70% P1左側周辺
7	土師器	A[12.0] B[21.1] C[5.5]	平底。体部は内側して立ち上がり、胴部でくの字状に外反する。	口縁部内面へう磨り。体部外面へう磨り後、へう磨き。輪横み痕有り。外面全体磨滅。	砂粒・長石 褐色 普通	P229 95% 北西コーナー 覆土中
8	土師器	A[18.4] B[13.8]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内側して立ち上がる。胴部はくの字状に折れ、外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へう磨り。輪横み痕有り。	砂粒・石英 褐色 普通	P230 25% 北壁側覆土中
9	土師器	A[14.8] B[8.8]	体部から口縁部にかけての破片。胴部はくの字状に大きく折れて外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・赤色粒子にぶい黄褐色 普通	P231 10% 覆土中
10	土師器	A[16.6] B[3.2]	口縁部片。胴部でくの字状に折れて外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒にぶい黄褐色 普通	P232 5% 東寄り床面
11	土師器	A[18.0] B[4.8]	口縁部片。口縁部は複合口縁である。	口縁部内・外面横ナデ。複合口縁部の下端部は、指築押止を横一列に築いている。	砂粒・石英・長石・赤色粒子にぶい黄褐色 普通	P233 5% 東寄り覆土中層
12	土師器	A[21.0] B[5.4]	体部から口縁部にかけての破片。体部上位は直線的で、口縁部は外方に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へうナデ。	砂粒・石英・長石にぶい黄褐色 普通	P234 5% 西寄り覆土中層

第194号住居跡 (第266図)

位置 調査6区北部、L14j3区。

重複関係 第135・188号住居跡に掘り込まれていることから、第135・188号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸 [4.86] m、短軸 [4.66] mの方形と推定される。

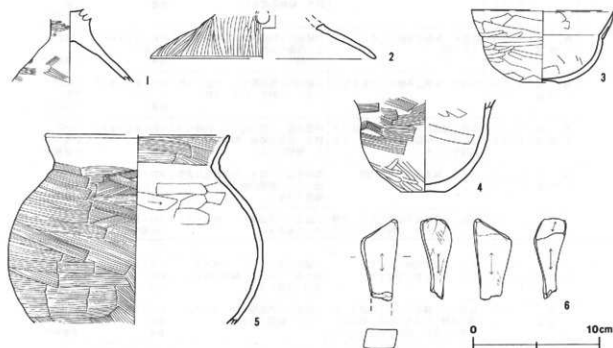
長軸方向 [N 66° - E]

壁 南西コーナーが一部残存し、壁高は5 cmほどである。

床 全体的に平坦で、軟質である。

遺物 土師器片89点、須恵器片4点、縄文土器片1点が出上している。第114図1の土師器高杯は、覆土中から出上している。2の上師器高杯は、南東側覆土下層から出上している。3の土師器埴は、東壁側床面から出上している。4の土師器埴は、南東側覆土下層から出上している。5の土師器小形埴は、東壁側床面から出上している。6の瓦石は覆土中から出上している。

所見 本跡は、時期を判断するには不明な点もあるが、刷毛目のある土器が多く、古墳時代前期の4世紀前半と思われる。



第114図 第194号住居跡出土遺物実測図

第194号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 1	高 土 器	E ( 5.8)	脚部片。脚部はラッパ状に下方に開く。	脚部外面に刷毛目調整後、ヘラ磨き。脚部下位に粉散痕あり。	砂粒・長石・赤色粒子にふい棕色 普通	P306 10% 覆土中
2	高 土 器	D [17.8] E ( 3.5)	脚部片。緩やかに広がりながら、底部にいたる。脚部下位に三方の透かし孔を有する。	窟部外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・赤色粒子 棕色 普通	P307 10% 南東側覆土下層
3	埴 土 器	A [11.3] B 5.8 C 3.0	底部から口縁部にかけての破片。底部は上げ底。体部は内彎し、口縁部にいたる。口縁部は折り返されている。	底部から体部外面ナデ後、ヘラ磨き。体部内面ナデ、ヘラ当て痕有り。	砂粒・長石・赤色粒子 明赤褐色 普通	P308 30% 東壁南側床面
4	埴 土 器	B ( 7.3) C 3.4	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面刷毛目調整。体部下半ヘラ磨き。体部内面刷毛目調整後、ナデ。	砂粒・長石 棕色 普通	P309 40% 南東側覆土下層
5	小形 土 器	A [14.5] B (15.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、ほぼ球形を呈しながら口縁部でくの字状に外反する。	口縁部内面・体部外面刷毛目調整。体部内面ヘラ磨り。	砂粒・赤色粒子 棕色 普通	P310 30% 東壁南側床面

図版番号	種別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
6	砥石	(6.5)	3.0	2.5	(42.0)	覆土中	Q25 凝灰岩

### 第197号住居跡（第115図）

位置 調査6区北部、M14a区。

重複関係 第152・198号住居跡を掘り込み、第193号住居跡・第136号土坑に掘り込まれていることから、第152・198号住居跡より新しく、第193号住居跡・第136号土坑より古い。

規模と平面形 長軸5.88m、短軸5.60mの方形である。

主軸方向 N-1°-W

壁 壁高は43～55cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第193号住居跡に壊されている南東壁を除いた壁下を巡っている。上幅15～31cm、下幅4～14cm、深さ4～8cm、断面形は逆台形である。

床 全体的に平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁のやや西コーナー寄りに位置する。規模は長さ85cm、袖幅120cmである。左袖部から煙道部の一部は根岳を受けて壊されている。火床部は長径35cm、短径30cmの楕円形であり、浅く掘りくぼめられている。

#### 壁土層解説

- 1 黒褐色 砂中量、炭化粒子・焼土粒子・焼土小ブロック少量
- 2 暗褐色 粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子中量
- 3 黒褐色 粘土粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子多量
- 5 黒褐色 砂多量、焼土粒子・粘土ブロック微量
- 6 黒褐色 砂多量、焼土粒子・炭化粒子中量
- 7 黒褐色 炭化粒子多量、焼土粒子少量

ピット 3か所(P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は径23～30cmの円形、深さ57～70cmで、七柱穴と思われる。

貯蔵穴 北西コーナー部に位置する。長径52cm、短径44cmの楕円形、深さ20cm、断面形は逆台形である。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量
- 2 黒褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子中量

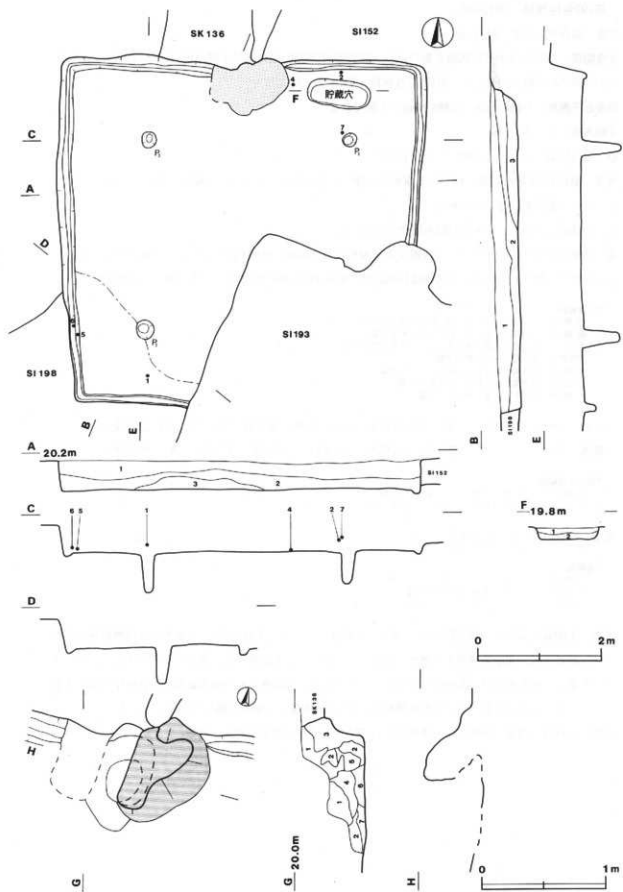
覆土 3層からなり、人為堆積である。

#### 土層解説

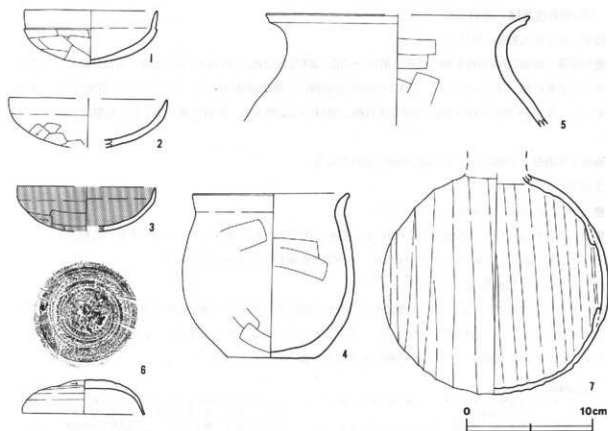
- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小・中ブロック少量

遺物 土師器片357点、須恵器片21点、鏝5点が出上している。第116図1の土師器坏は南西側覆土中層から、2の土師器坏は、北壁東側覆土上層から出土している。3の土師器坏は、覆土中から出土している。4の土師器小形甕は、竈右袖部付近床面から出土している。5の土師器要・6の須恵器蓋は、西壁中央覆土下層から出土している。7の須恵器フラスコ形長頸瓶は、P<sub>1</sub>の北西覆土上層から横位で出土している。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代の7世紀前半と考えられる。



第115图 第197号住居跡实测图



第116図 第197号住居跡出土遺物実測図

第197号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	杯 土師器	A 10.5 B 4.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有する。口縁部は直立する。	底部から口縁部外面横ナゲ。体部外面手持ちヘラ削り。	長石・赤色粒子にふい橙色 普通	P 321 50% 南西側覆土中層
2	杯 土師器	A[12.6] B(4.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内面から口縁部外面横ナゲ。体部外面手持ちヘラ削り。	砂粒・長石にふい赤褐色 普通	P 322 30% 北壁東側覆土上層
3	杯 土師器	A[13.0] B(3.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有する。口縁部は直立する。	体部内面から口縁部外面横ナゲ。体部外面手持ちヘラ削り。内・外面黒色処理。内面ヘラ磨き。	砂粒にふい褐色 普通	P 323 20% 覆土中
4	小形 甕 土師器	A 12.3 B 12.7 C 7.0	体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面刷毛目調整後、横ナゲ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナゲ。	砂粒・石英・長石・赤色粒子 淡黄褐色 普通	P 325 70% 甕石袖部付近床面
5	壺 土師器	A[20.6] B(8.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。内面ヘラナゲ。	長石・石英・雲母・赤色粒子にふい褐色 普通	P 326 10% 西壁中央覆土下層
6	杯 蓋 須恵器	A 9.6 B 2.8	口縁部一部欠損。天井部から内彎して口縁部に至る。	天井部内面から体部外面クロコナゲ。天井部外面回転ヘラ削り。	砂粒・長石 70% 普通	P 327 70% 西壁中央覆土下層
7	フラスコ形 長頸須恵器	B(17.4)	体部は若干横長な球形を呈し、中位に最大径を有する。	体部内・外面クロコナゲ。体部成形の最終段階で、粘土内版を貼り付けて蓋をした後、ヘラナゲ。穴を塞いだ反対側回転ヘラ削り。	砂粒・長石 灰青色 良好	P 329 70% P <sub>1</sub> の北西側覆土上層

## 第198号住居跡 (第117図)

位置 調査6区北部, M14es区。

重複関係 第267号住居跡を掘り込み、第193・197・266号住居跡、第145・153号土坑、第14号溝、第1号大形堅穴状遺構に掘り込まれており、第268・264号住居跡が上部に構築されていることから、第267号住居跡より新しく、第193・197・263・264・266号住居跡、第145・153号土坑、第14号溝、第1号大形堅穴状遺構より古い。

規模と平面形 長軸8.04m、短軸3.00mの方形である。

主軸方向 N-33°-W

壁 壁高は約40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 重複ははげしく、第193・197・266号住居跡、第145号土坑に壊されている部分を除いた壁下を巡っている。上幅14～22cm、下幅3～8cm、深さ6～8cmで、断面形はほぼ逆台形である。

床 竈から中央部が踏み固められている。

竈 北西壁の中央部に位置する。規模は長さ134cm、袖幅121cmである。遺存状態は良好で、袖部は灰白色の粘土で構築されている。竈内掘土層からは、まとまった灰が確認され、火床部からは骨片や貝が数点出土している。火床部は長径85cm、短径70cmの楕円形で、浅く掘りくぼめられている。

### 土層解説

- |        |  |         |                         |
|--------|--|---------|-------------------------|
| 1 黒褐色  | 炭化粒子・焼土ブロック少量、焼土粒子・焼土ブロック微量            | 9 黄褐色   | 焼土粒子・炭化粒子少量、焼土ブロック微量    |
| 2 暗褐色  | 焼土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量                   | 10 灰褐色  | 焼土粒子・粘土少量、炭化粒子微量        |
| 3 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量           | 11 黒褐色  | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量     |
| 4 黒褐色  | 焼土小ブロック・焼土粒子・粘土ブロック少量、ローム小ブロック・ローム粒子微量 | 12 暗褐色  | 焼土小ブロック・焼土粒子・灰少量        |
| 5 黒褐色  | 焼土小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量、粘土ブロック微量   | 13 暗赤褐色 | 炭化粒子・灰中量、焼土粒子少量         |
| 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、焼土粒子中量、焼土小ブロック少量              | 14 黒褐色  | ローム粒子・灰中量、焼土粒子・炭化粒子少量   |
| 7 暗褐色  | 焼土ブロック多量、炭化粒子中量、焼土粒子少量                 | 15 黒褐色  | ローム粒子中量、炭化粒子・灰少量、焼土粒子微量 |
| 8 灰黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量                            | 16 明赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・焼土小ブロック少量     |
|        |  | 17 暗褐色  | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量   |
|        |  | 18 灰黄褐色 | 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量        |
|        |  | 19 灰黄褐色 | 炭化粒子多量、灰中量、焼土粒子少量       |

ピット 2か所(P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>)。径28～32cmの円形で、深さ72～76cmである。位置や深さから、支柱穴と考えられる。

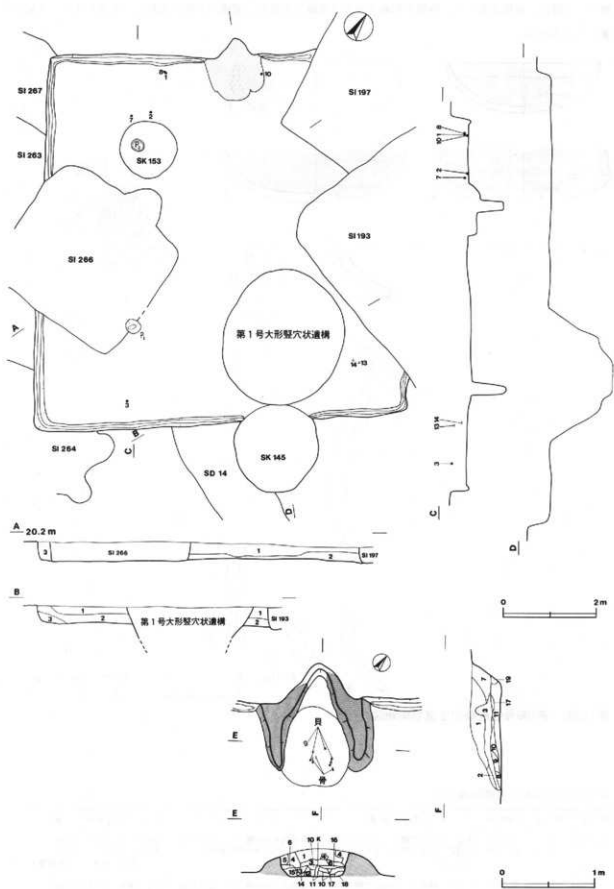
覆土 3層からなる。中層、上層には炭化粒子、焼土粒子、ロームブロックが含まれており人為堆積と考えられる。

### 土層解説

- |       |                              |
|-------|------------------------------|
| 1 褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・粘土少量、焼土粒子・炭化粒子微量    |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量             |

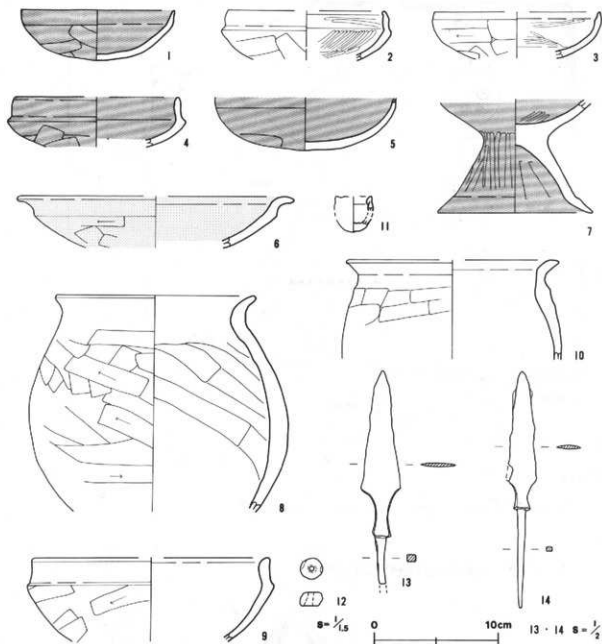
遺物 土師器片1018点、須恵器片43点、縄文土器片1点、土製品1点、鉄製品2点、鉄滓1点、貝、骨などが出土している。第118図1の土師器杯は、北西側覆土中層から、2の土師器杯は、北西側床面から、3の土師器杯は、南西側の覆土上層から、4の土師器杯は、覆土中から、5の土師器杯と6の赤彩された高杯は、竈覆土中から出土している。7、8の土師器高杯と甕は、北西側覆土中層から下層にかけて出土している。9の土師器碗は、竈覆土中から出土している。10の土師器甕は、竈心袖部覆土下層から出土している。11のミニチュア土器は、竈内覆土中から出土している。12の小玉は南東側覆土中から、13、14の鉄鏝は、南東側覆土中層から出土し、混入と思われる。獣骨・キジ・スズメ・魚骨などの骨片、ヤマトシジミ・ハマグリ・カキなどの貝は、竈火床面から出土している。





第117図 第198号住居跡実測図

所見 本跡は、重複が激しく、時期を判断するのは困難であるが、遺構の形態や遺物から古墳時代の6世紀後葉と考えられる。



第118図 第198号住居跡出土遺物実測図

第198号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第118図 1	坏 土師器	A 12.4 B 4.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有する。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・石英・長石・雲母・赤色粒子に富み橙色 普通	P330 80% 北西側覆土中層
2	坏 土師器	A[12.6] B(4.0)	体部・口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有する。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面手持ちへラ削り、内面へラ磨き。	長石・雲母・赤色粒子 灰黄色 普通	P331 20% 北西側床面

図版番号	種 別	寸法値(cm)	器 形 の 特 徴	下 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第118図 3	坏 土 胎 蓋	A:13.4 B(3.7)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有す。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面手持ちへう割り、内面へう磨き。	砂粒・長石・雲母・赤色粒子 に多い赤褐色 普通	P332 13% 南西側覆土上層
4	坏 土 胎 蓋	A:13.0 B(4.0)	体部・口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有す。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう割り。内・外面黒色処理。	砂粒 に多い褐色 普通	P333 10% 覆土中
5	坏 土 胎 蓋	B(1.2)	底部から体部にかけての破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう割り。内面へう磨き後、へうナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・赤色粒子 に多い赤褐色 普通	P334 40% 壺内覆土中
6	高 土 胎 蓋	A:22.4 B(4.1)	坏部片。坏部は外傾して外上方に開き、端部はわずかに反る。口縁部下位に段を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面へう割り後、ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・長石 赤色 普通	P335 60% 壺内覆土中
7	高 土 胎 蓋	B(9.2) D 12.4 E 6.0	脚部及び坏部上位欠損。脚部は円筒状を呈し、坏部は外傾して立ち上がる。	坏部内面・脚部外面へう磨き。脚部内・外面横ナデ。脚部内面へうナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・赤色粒子 褐色 普通	P336 60% 北西側覆土下層
8	壞 土 胎 蓋	A 15.9 B(17.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう割り。体部内面へうナデ。	長石・雲母・赤色粒子 に多い黄褐色 普通	P337 60% 北内側覆土中層
9	純 土 胎 蓋	A:19.0 B(6.7)	体部・口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有す。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう割り。体部内面へうナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 褐色 良好	P338 10% 壺内覆土中
10	壞 土 胎 蓋	A:17.2 B(8.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部はの字状に折れる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へうナデ。外面へう割り。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P339 10% 壺石胎蓋覆土下層
11	ひょうろ 土 胎 蓋	A: 2.8 B(2.2)	底部は尖底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内側に折り返している。	内・外面斜縁が激しく調整痕不明。	砂粒 褐色 普通	P340 40% 壺内覆土中

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
12	小 玉	0.5	0.9	0.2-0.4	0.41	南東側覆土中	D P11

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
13	鉄 鏝	(11.4)	2.1	0.8	(15.0)	南東側覆土中層	M38
14	鉄 鏝	12.6	1.5	0.8	12.0	南東側覆土中層	M39

### 第204号住居跡 (第119図)

位置 調査6区北部、L15<sub>14</sub>区。

重複関係 本跡の上部に第201・203号住居跡が構築され、第6号掘立柱建物跡に掘り込まれていることから、第201・203号住居跡、第6号掘立柱建物跡より古い。

規模と平面形 長軸[6.40]m、短軸6.10mの方形である。東壁側は削平されている。

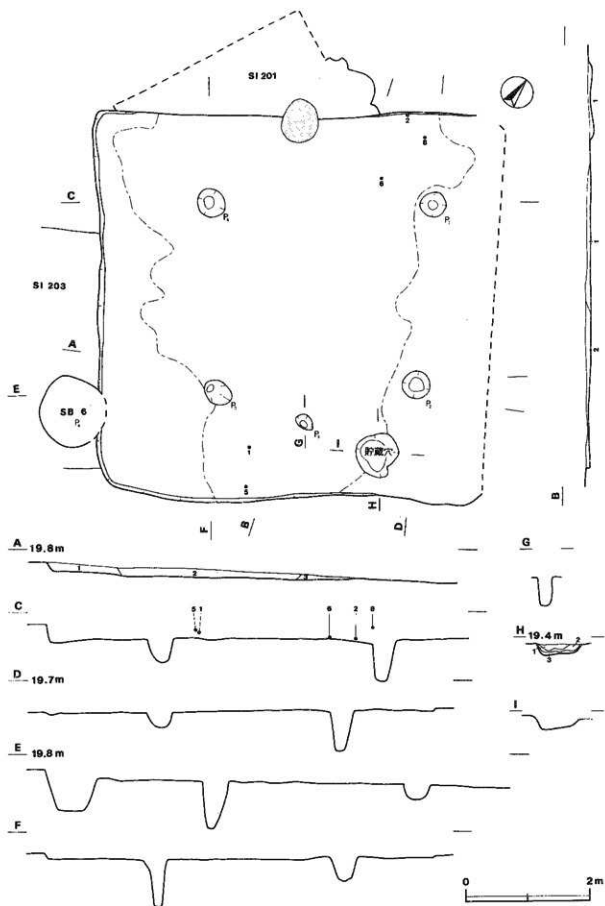
主軸方向 N-35°-W

壁 壁高は27cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、出入りロビットから庭にかけての広い範囲が踏み固められている。

竈 竈の痕跡しか確認できなかった。北壁中央部に付設され、火床部は長径(70)cm、短径(56)cmの楕円形と考えられる。

ピット 5か所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>は径41~46cmの円形、深さ24~65cm、P<sub>3</sub>は長径48cm、短径35cmの楕円形、深さ78cm、断面形は逆台形で支柱穴と思われる。P<sub>5</sub>は南壁中央の壁際から100cmほど内側に位置



第119图 第204号住居跡实测图

し、竈と同一線上に並んでいる。P<sub>3</sub>は長径30cm、短径20cmの楕円形、深さ48cmで出入り口施設に伴うピットと思われる。

**貯蔵穴** 南壁やや東側に位置する。径70cmの不整形円形、深さ18cm、断面形は逆台形である。

**貯蔵穴土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

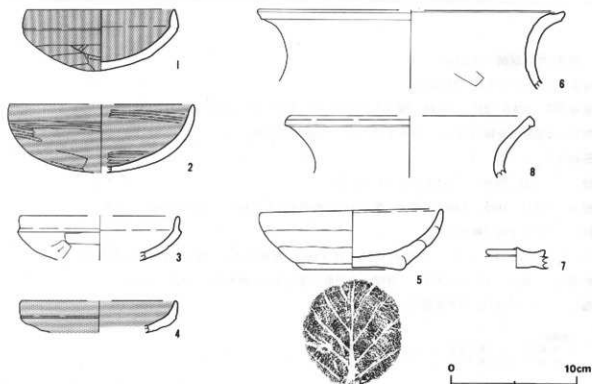
**覆土** 3層からなり、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量、焼土粒子微量

**遺物** 土師器片212点、須恵器片17点、縄文土器片1点、鉄滓1点が出土している。第120図1の土師器坏は南壁側覆土中層から、2の土師器坏は北壁東側覆土下層からそれぞれ出土している。3、4の土師器坏は南側覆土から出土している。5の土師器坏の底部は木葉痕があり、南壁中央付近覆土中層から出土している。6の土師器甕は北東側床面から出土している。7の須恵器の蓋は、覆土中から出土し、混入と思われる。8の須恵器甕は北壁近くの覆土上層から出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期の6世紀後葉と考えられる。



第120図 第204号住居跡出土遺物実測図

第204号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第120図 1	坏 土師器	A 14.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有する。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・雲母にぶい黄色 普通	P351 60% 南関中央層土中層
		B 4.8				
2	坏 土師器	A 14.6	底部から口縁部。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内面へラ削き。体部外面下端手持ちへラ削り。内・外面黒色処理。	長石・赤色粒子にぶい褐色 普通	P352 20% 北関東側層土下層
		B (5.3)				
3	坏 土師器	A 12.4	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、体形と口縁部の外側に段を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部手持ちへラ削り。内面一薄野減。	砂粒・長石にぶい褐色 普通	P353 5% 南関層土中
		B (3.5)				
4	坏 土師器	A 12.1	体部から口縁部。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有する。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。体部外面磨減。	砂粒・長石にぶい褐色 普通	P354 5% 南関層土中
		B (2.5)				
5	坏 土師器	A 14.2	底部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。口縁部は内傾し、一薄内側に茶む。	口縁部内・外面横ナデ。底部に本妻痕。体部下端手持ちへラ削り。輪放み痕有り。	砂粒・長石・赤色粒子にぶい褐色 普通	P355 95% 南関中央層土中層
		B 4.8				
		C 7.8				
6	坏 土師器	A 24.2	体部から口縁部にかけての破片。口縁部はの字状に外傾する。器部はつまみ上げられ、内面に沈線を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面へラ削り。	砂粒・長石・長石・雲母にぶい黄色 普通	P356 5% 北関東方面
		B (6.2)				
7	蓋 須器	B (1.6)	蓋のつまみ部。つまみは中央が突出したボタン状を呈する。	クロコナデ。	砂粒・雲母にぶい黄色 普通	P357 5% 覆土中
		F 4.5				
		G 0.7				
8	底 須器	A 19.0	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面クロコナデ。	砂粒・長石にぶい黄色 普通	P358 5% 北関東土層
		B (4.9)				

## 第206号住居跡 (第284図)

位置 調査区6区中央部, M14区。

重複関係 第205・213号住居跡に掘り込まれており、第205・213号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸(3.50)m、短軸(1.00)mで、平面形は不明である。

長軸方向 N-85°-E

壁 壁高は22~24cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅11~16cm、下幅4~9cm、深さ4cm、断面形はU字形で、南壁下を巡っている。

床 全体的に平坦で軟質である。

ピット 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は径37cmの円形、深さ28cm、断面形は逆三角形で主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南東コーナーに位置する。径60cmの円形、深さ48cm、断面形は逆台形である。

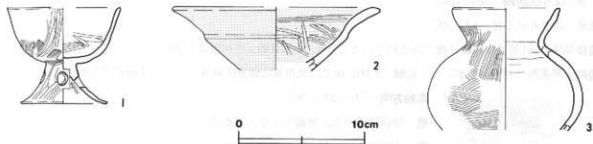
覆土 2層からなり、自然堆積である。

## 土層解説

- 1 黄褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量
- 2 粉褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片39点、土製品12点が出土している。第121図1の上層器高坏は南関中央層土中層から出土している。2の高坏の坏部は内・外面が赤彩され、覆土中から出土している。3の小形甕は覆土中から出土し、刷毛目整形が施されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期の4世紀中葉と考えられる。



第121図 第206号住居跡出土遺物実測図

第206号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 1	高土師器	A[ 8.8] B 7.6 D 6.7 E 3.2	坏部一部欠損。脚部はラッパ状に下方に開き、4か所に透かし孔を有する。坏部はやや内彎気味に外反する。	脚部内面刷毛目調整。外面へラ磨き。坏部内面へラ磨き。外面刷毛目調整後、へラ磨き。	砂粒・長石・赤色粒子に濃い褐色普通	P369 50% 面壁中央覆土中層
2	高土師器	A[16.0] B( 5.0)	坏部片。緩やかに広がりながら、口縁部に至る。	坏部内面へラ磨き。内・外面赤彩。外面一部剥離。	砂粒・赤色粒子褐色普通	P370 10% 覆土中
3	小形土師器	A[ 8.4] B( 9.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部に至る。口縁部は折り返される。	体部外面ナデ後、へラ磨き。体部内面ナデ。輪轆み痕有り。	砂粒・長石・赤色粒子・明赤褐色普通	P371 40% 覆土中

### 第211号住居跡 (第81図)

位置 調査6区北部、L14j<sub>9</sub>区。

重複関係 第132・149号住居跡に掘り込まれていることから、第132・149号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸5.18m、短軸(1.70)mで、第132・149号住居跡に壊されており平面形は不明である。

主軸方向 [N-8°-E]

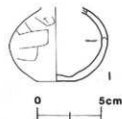
壁 壁高は2~4cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に踏み固められている。

炉 北壁側中央から85cm内側に付設されている。火床部は長径(32)cm、短径(17)cmで、浅く掘りくぼめられている。南半分は第132号住居跡に壊されている。

遺物 土師器片33点、須恵器片5点が出土している。第122図1の土師器小形壺は、北西側床面から出土し、壺の中からベンガラが多量検出された。祭祀に関わりのある遺物の可能性がある。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期と考えられる。



第122図 第211号住居跡出土遺物実測図

第211号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第122図 1	小形土師器	B( 5.7) C 3.0	底部から体部にかけての破片。体部は球形状である。わずかに頸部が残存し、外反する。	体部外面へラナデ。体部内・外面ベンガラ付着。輪轆み痕有り。	砂粒・長石・黄褐色に濃い赤褐色普通	P401 70% 北西側床面

第212号住居跡 (第124図)

位置 調査6区北部, L14j区。

重複関係 第189号住居跡に掘り込まれていることから, 第189号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸 (3.85) m, 短軸 (2.00) mで, 北西側は調査区域外のため, 平面形は不明である。



第123図 第212号住居跡  
出土遺物実測図

長軸方向 [N-23°-W]

壁 壁高は28cmで, 外傾して立ち上がる。

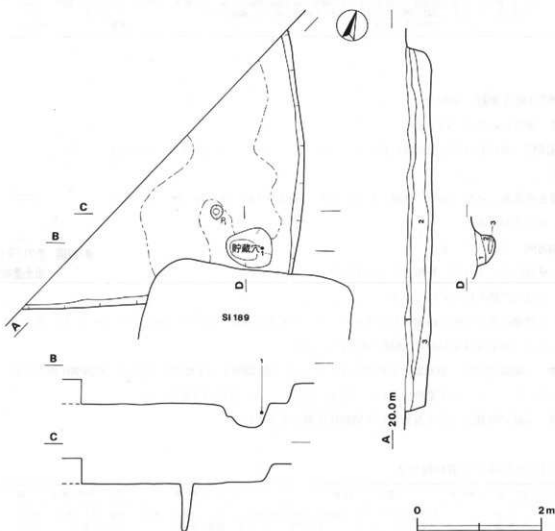
床 中央部から東側が踏み固められている。

覆土 3層からなり, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は, 径20cmの円形, 深さ76cmであり, 支柱穴と考えられる。



第124図 第212号住居跡実測図



貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。長径75cm、短径60cmの不整楕円形で、深さ28cmである。断面形は鍋底状をしている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量

遺物 土師器片32点が出土している。第123図1の土師器増は、貯蔵穴覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代の前期と考えられる。

第212号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	平床の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第123図1	土師器	A 11.6 B 5.1 C 3.3	平底。体底と口縁部との間に段を持ち、口縁部以外反して立ち上がる。	体部内・外面鬚毛目整列状、ヘラ磨き。底器手持ちヘラ磨り。	砂粒・石英・灰石・管母に多い黄褐色	P402 80% 貯蔵穴覆土中層

第213号住居跡 (第125図)

位置 調査6区中央部、M14has区。

重複関係 第206号住居跡を掘り込んでおり、第205・207・208号住居跡、第138・139号土坑に掘り込まれていることから、第206号住居跡より新しく、第205・207・208号住居跡、第138・139号土坑より古い。

規模と平面形 長軸5.01m、短軸5.00mの方形である。

主軸方向 N-28° W

壁 壁高は25~38cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅9~36cm、下幅2~10cm、深さ4~6cm、断面形はU字形で、ほぼ全周している。

床 全体的に平坦で、竈から出入り口施設に伴うピットにかけて踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ89cm、袖幅79cm、壁外への掘り込みは30cmで、平面形は逆J字形である。第208号住居跡の壁溝によって一部削平を受けているが、袖部、焼道部は残存している。火床部は長径32cm、短径20cmの楕円形で、わずかに掘りくぼめられている。焼道部奥から煙道部へは緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 炭土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子・灰少量
- 2 暗褐色 炭土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量

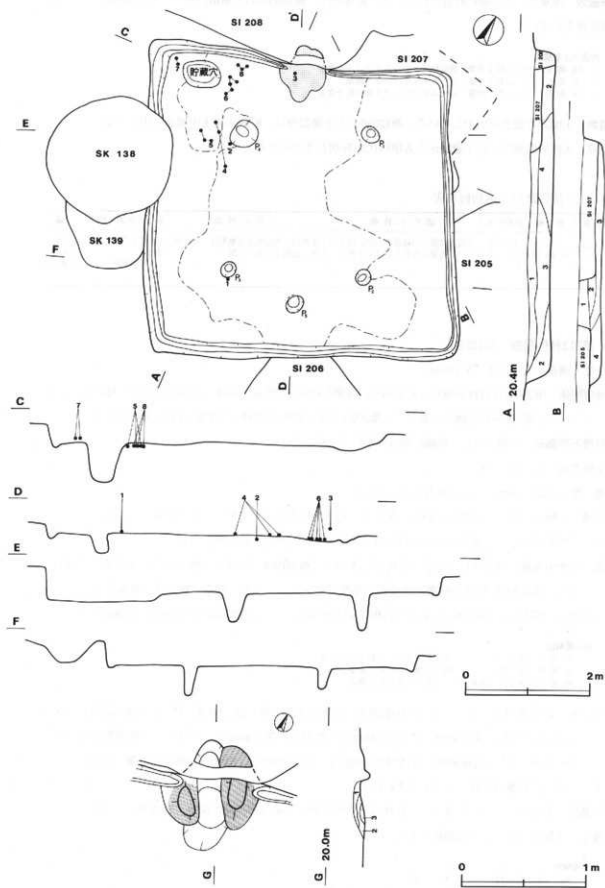
ピット 5か所(P1~P5)。P1は長径30cm、短径24cmの円形、深さ60cm、P2は径24cmの円形、深さ34cm、P3は径26cmの円形、深さ49cm、P4は径44cmの不整形円形、深さ46cmで、それぞれの断面形は逆台形で、主柱穴と思われる。P5は長径30cm、短径24cmの楕円形、深さ30cmで、南壁の中央から内側に55cm入ったところにあり、出入り口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 北西コーナーに位置する。長径64cm、短径42cmの楕円形、深さ60cm、断面形はJ字形である。

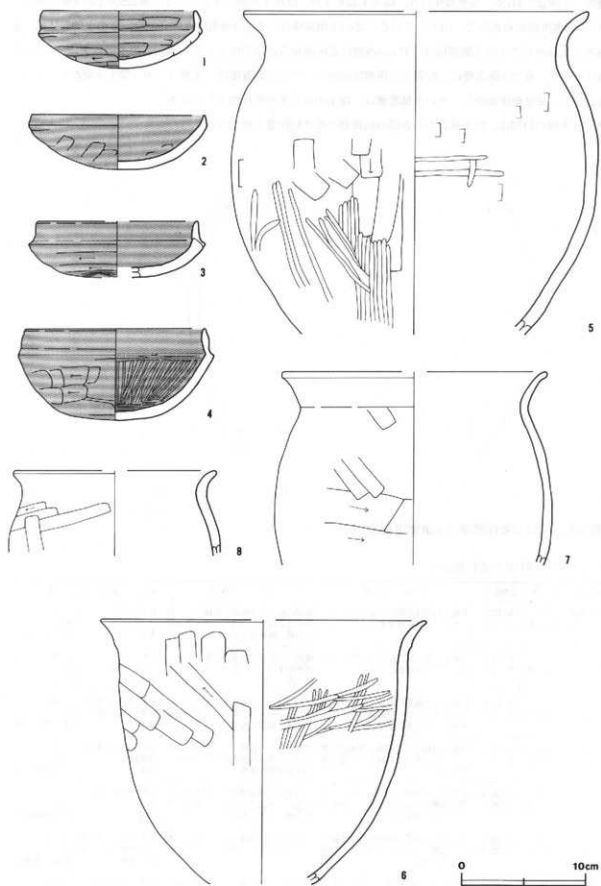
覆土 4層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 炭土粒子・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量



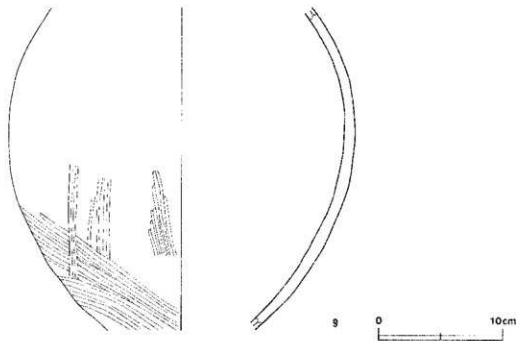
第125图 第213号住居跡実測図



第126图 第213号住居跡出土遺物実測図(1)

遺物 土師器片441点、須恵器片11点、縄文土器片1点、鉄滓1点が出土している。第126図1の上師器坏は、P<sub>3</sub>の南側床面から正位で、出土している。2の上師器坏は、P<sub>4</sub>の西側付近床面から、3の土師器坏は、竈内覆土上層から、4の上師器坏は、P<sub>4</sub>の西側付近床面から逆位で出土している。5の土師器坏は、P<sub>4</sub>の西側床面から、6の上師器坏は、貯蔵穴の東側床面から、7の上師器坏は、北東コーナー覆土下層から、8の土師器坏は、北壁側床面から、9の土師器坏は、覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半と思われる。



第127図 第213号住居跡出土遺物実測図(2)

第213号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	平底の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第126図 1	坏 土師器	A 12.4 B 4.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有する。	底面内面から口縁部外面横ナデ。体部外面手持ちヘリ削り。内・外面黒色処理。輪痕み痕有り。	砂粒・灰母にぶい・褐色 普通	P403 80% P <sub>3</sub> 南側床面
2	坏 土師器	A 14.6 B 4.4	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。	底面内面から口縁部外面横ナデ。体部外面手持ちヘリ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・灰母にぶい・黄褐色 普通	P404 70% P <sub>4</sub> 西側付近床面
3	坏 土師器	A 12.8 B 4.5	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部の境に段を有する。口縁部は直立する。	体部内面から口縁部外面横ナデ。体部外面手持ちヘリ削り。内・外面黒色処理。輪痕み痕有り。	砂粒・長石・灰母・石英にぶい・褐色 普通	P405 30% 竈内覆土上層
4	碗 土師器	A 14.6 B 7.3	体部・口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へり削き。体部外面手持ちヘリ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・灰母 洗黄褐色 普通	P406 70% P <sub>4</sub> 西側付近床面
5	壺 土師器	A 28.0 B (26.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部でくの字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へり削り。体部内・外面へり削き。体部内面へり削り。	砂粒・石英・長石 褐色 普通	P407 35% P <sub>4</sub> 西側床面
6	甕 土師器	A 26.0 B (21.3)	体部から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内面へり削き。体部外面へり削り。	石英・長石・赤色粒 了・灰母にぶい・褐色 普通	P408 15% 貯蔵穴東側床面
7	甕 土師器	A (21.0) B (15.5)	体部から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部でくの字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へり削り。	石英・長石・灰母 灰褐色 普通	P409 10%北東コーナー 覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第126図 8	甕 土器	A[16.0] B(6.8)	体部から口縁部の破片。体部は縦やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部でくの字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒・長石・雲母 淡赤褐色 普通	P410 5% 北壁側床面
第127図 9	甕 土器	B(26.0)	体部破片。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。	体部外面下方へラ磨き。	石英・長石・雲母 に濃い黄褐色 良好	P411 25% 覆土中

### 第215号住居跡（第129図）

位置 調査6区南部，N14dof区。

重複関係 第214号住居跡に掘り込まれており，第214号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸3.38m，短軸3.30mの方形である。

主軸方向 N-10°-E

壁 壁高は20～30cmで，垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅9～22cm，下幅4～10cm，深さ4～6cm，断面形は逆台形で，ほぼ全周している。

床 出入り口部内側から竈にかけての中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。竈の規模は，長さ[65]cm，袖幅[85]cmと推定される。両袖は壊されており袖部の一部が山砂混じりの粘土で構築されているのを確認できる程度である。

#### 甕土層解説

- 1 暗褐色 粘土粒子多量，焼土粒子少量
- 2 極暗褐色 焼土粒子多量，粘土粒子中量
- 3 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子中量，焼土粒子少量

ピット 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は，径28cmの円形，深さ24cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

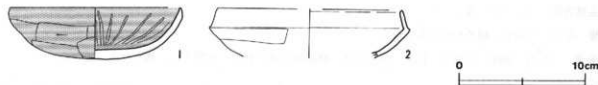
覆土 3層からなり，自然堆積である。

#### 土層解説

- 1 褐色 焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量

遺物 土器器片64点，須恵器片2点，陶器片1点が出土している。第128図1の土器器片は，内，外面が黒色処理されており，中央部やや西側の覆土下層から出土している。2の土器器片は，覆土中から出土している。

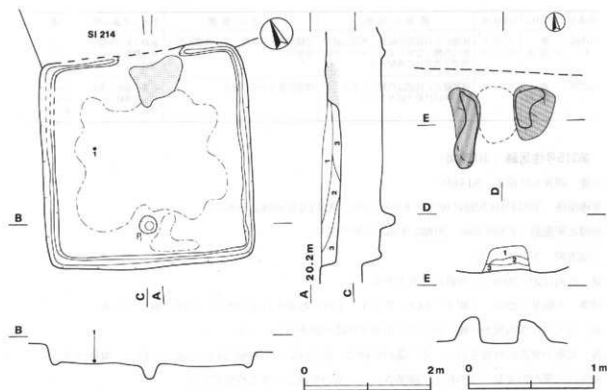
所見 本跡の時期は，出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。



第128図 第215号住居跡出土遺物実測図

### 第215号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 1	坏 土器	A 13.4 B 4.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内・外面黒色処理。体部内面放射状のへラ磨き。	砂粒・長石・赤色粒子 暗赤褐色 普通	P417 95% 西側覆土下層



第129図 第215号住居跡実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 2	坏 土器	A[14.4] B(3.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有する。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。	砂粒・長石・赤色粒子 淡赤褐色 普通	P418 10% 覆土中

### 第218号住居跡（第297図）

位置 調査6区南部，N14ca区。

重複関係 第217・225号住居跡に掘り込まれており，第217・225号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸（3.64）m，短軸（1.42）mで，第217・225号住居跡に掘り込まれており，平面形は不明である。

主軸方向 [N-5°-E]

壁 壁高は12cmで，緩やかに立ち上がる。

壁溝 上幅14～25cm，下幅5～13cm，深さ6cm，断面形は逆台形で，北壁下の一部だけ巡っている。

床 全体的に平坦である。

炉 中央やや西側に付設されている。長径60cm，短径45cmの楕円形で，5cmほど掘りくぼめられた地床がである。

#### 伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量
- 2 極赤褐色 焼土粒子多量
- 3 褐色 焼土粒子少量

覆土 単一層であり、堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒 色 ローム粒少量

遺物 土師器片52点、須恵器片11点が出土している。細片が多く、図示できる遺物はない。

所見 本跡の時期は、遺物も少なく判断するのは困難であるが、遺構の形態と刷毛目整形されてある土器などから、古墳時代前期以降と考えられる。

第228号住居跡（第131図）

位置 調査6区南部、N14区。

規模と平面形 長軸[4.60]m、短軸[4.35]mで、方形と推定される。

主軸方向 [N - 8° - W]

壁 壁高は15cmで、緩やかに立ち上がる。

床 全体的に平坦で、竈周辺が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ85cm、袖幅82cm。壁外への掘り込みはほとんどない。袖部は粘土で構築されている。火床部は径7cmの円形で、浅く掘りくぼめられている。

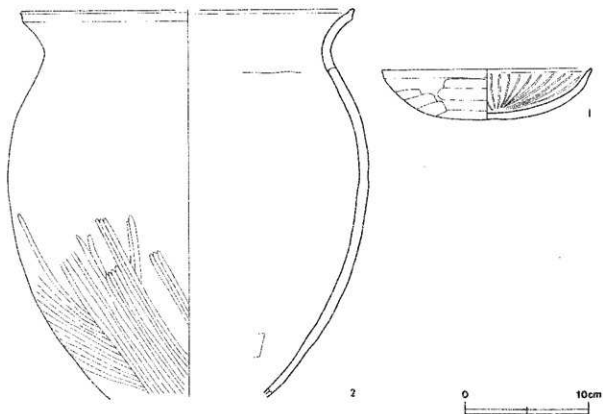
遺土層解説

1 黒 紫色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、炭化粒子少量

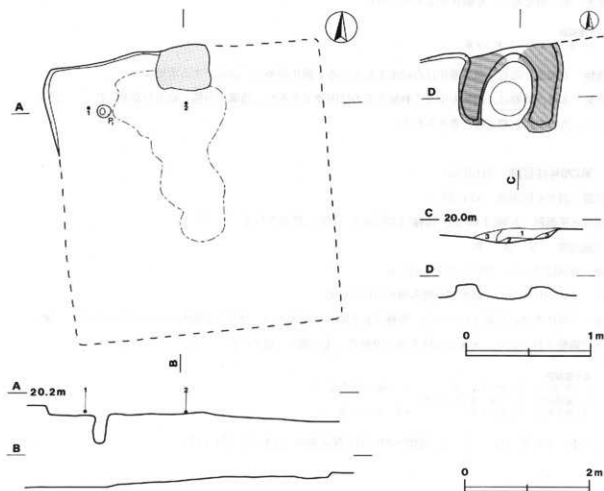
2 黒暗褐色 粘土少量、焼土粒少量

3 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック多量、炭化物少量

ピット 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は、径22cmの円形、深さ48cmで支柱穴と思われる。



第130図 第228号住居跡出土遺物実測図



第131図 第228号住居跡実測図

**遺物** 土師器片13点が出土している。第130図1の土師器坏は、P<sub>1</sub>の西側覆土下層から出土し、2の土師器甕は、竈袖部前面床面からそれぞれ出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期の7世紀後葉と考えられる。

第228号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図 1	坏 土師器	A 17.0 B 4.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に緩やかな段を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部下端手持ちへラ削り。内面へラ磨き。	長石・雲母・赤色粘土・赤色 普通	P504 70% P <sub>1</sub> の西側覆土下層
2	甕 土師器	A [22.6] B (31.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、くの字状に外反し口縁部にいたる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ磨き。輪積み痕有り。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P505 40% 竈袖部の前面床面



### 第231号住居跡（第133図）

位置 調査6区南部，N14<sub>1</sub>区。

規模と平面形 長軸4.15m，短軸3.80mの方形である。

主軸方向 N-9°-E

壁 壁高は12~48cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅10~20cm，下幅5~12cm，深さ5~12cmで，断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ91cm，袖幅130cm，壁外への掘り込みは18cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は，円形に浅く掘りくぼめられており，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 極暗褐色 砂多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック・砂中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 砂中量，ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 4 灰褐色 砂中量，焼土粒子少量
- 5 黒褐色 焼土粒子多量，炭化粒子中量
- 6 黒褐色 炭化物・焼土粒子・炭化粒子多量
- 7 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 8 極暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子中量

ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は径35~55cmほどの円形で，深さ24~53cmである。いずれも主柱穴と考えられる。

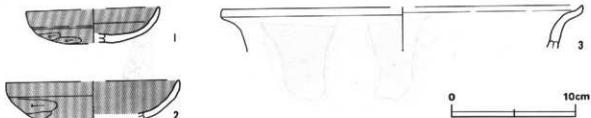
覆土 6層からなり，自然堆積である。

#### 土層解説

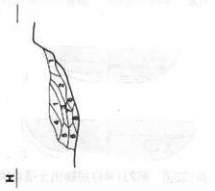
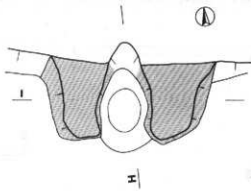
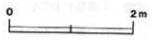
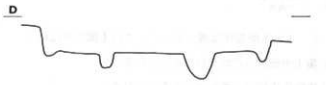
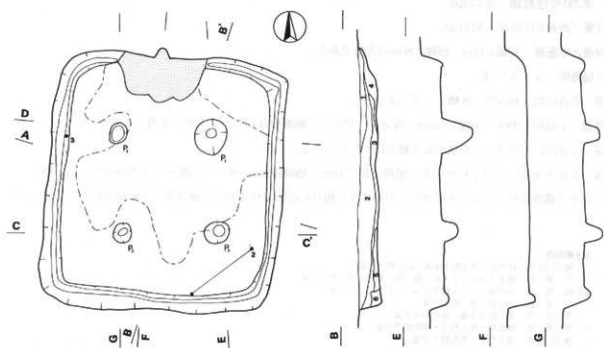
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量
- 3 極暗褐色 ローム中・小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量，焼土中ブロック微量

遺物 土師器片427点，須恵器片8点が出土している。1の土師器杯は覆土中から，2の土師器杯は南東コーナー付近の覆土下層から，3の土師器甕は西壁際の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の7世紀後半と考えられる。



第132図 第231号住居跡出土遺物実測図



第133图 第231号住居跡実測图

第231号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第132図 1	坏 土 器	A[10.8] B 2.7	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部と体部との境に不明瞭な稜を持つ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 了 褐色 普通	P1000 25% 覆土中
2	坏 土 器	A[14.0] B 3.2	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・スコリア に多い 褐色 普通	P1001 25% 南東コーナー 付近覆土下層
3	焼 土 師 器	A[29.0] B( 3.5)	口縁部片。口縁部は外反し、端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 褐色 普通	P1002 5% 西壁階覆土中層

第235号住居跡 (第135図)

位置 調査6区南部, N13ds区。

規模と平面形 長軸3.47m, 短軸3.26mの方形である。

主軸方向 N-8°-E

壁 壁高は25~32cmで、外傾して立ち上がる。

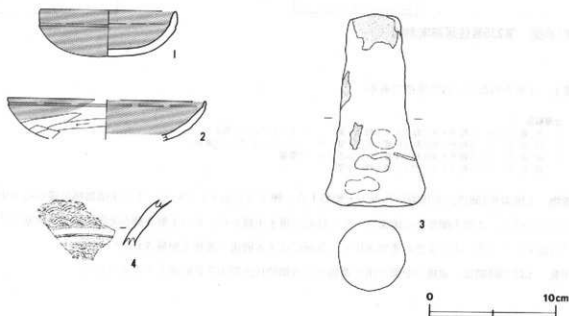
壁溝 上幅15~20cm, 下幅10~15cm, 深さ5~10cmで、断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で、中央部がよく踏み固められている。

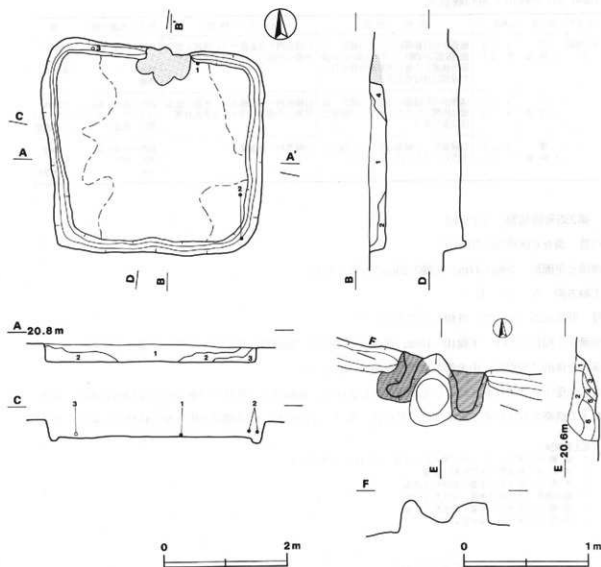
竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ60cm, 袖幅85cm, 壁外への掘り込みは10cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられ、煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量, 炭化物・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子中量
- 5 黒褐色 炭化粒子中量, 焼土粒子少量
- 6 黒褐色 炭化物・焼土粒子少量



第134図 第235号住居跡出土遺物実測図



第135図 第235号住居跡実測図

覆土 4層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量、ローム大・小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量、ローム大・中・小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量

遺物 土師器片158点、須恵器片8点、土製品1点、礫3点が出土している。1の土師器片は竈付近の床面直上から正位で、2の土師器片は南東コーナー付近の覆土中層から、3の土製支脚が北壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。4は須恵器頸部片で、外面には4本櫛歯の波状文が施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の7世紀後半と考えられる。

第235号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第134図 1	坏土師器	A 10.6 B 3.7	口縁部・部欠損。丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、体部と口縁部の境に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・霞緑 内・外面黒褐色 普通	P1029 95% 壺右袖付沈床直
2	坏土師器	A 15.6 B (3.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。端部外面に沈線が走る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。一部内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内面黒色・外面明赤褐色 普通	P1030 30% 南東コーナー付五中層

図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	重量(g)		
3	支脚	45.2	5.5	537	北瀬原遺土下層	DP1000 90%

第243号住居跡(第136図)

位置 調査6区南部, N14jaK。

重複関係 第240～242・244号住居跡が上部に構築されており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.68m, 短軸4.44mの方形である。

主軸方向 N-14°-W

壁 壁高は26～38cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅12cm, 下幅8cm, 深さ8cmで、断面形はじ字形である。全周している。

床 全体的に平坦で、中央部がよく踏み固められている。

窓 北壁中央部に付設されている。袖部の遺存状況は悪く、規模は長さ115cm, 袖幅75cm, 壁外の掘り込みは5cmほどである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に5cmほど掘りくぼめられており、壁基部は火床部から外傾して立ち上がる。

陶土層解説

- 1 黒褐色 炭土粒子中量, 炭化粒子少量
- 2 極暗褐色 炭土粒子・炭化粒子中量
- 3 暗褐色 炭土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 炭土粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化粒子中量, 焼土中ブロック微量
- 6 暗褐色 炭土粒子多量, 焼土小ブロック微量
- 7 暗赤褐色 炭土粒下・炭化粒子多量
- 8 暗赤褐色 炭土粒子多量

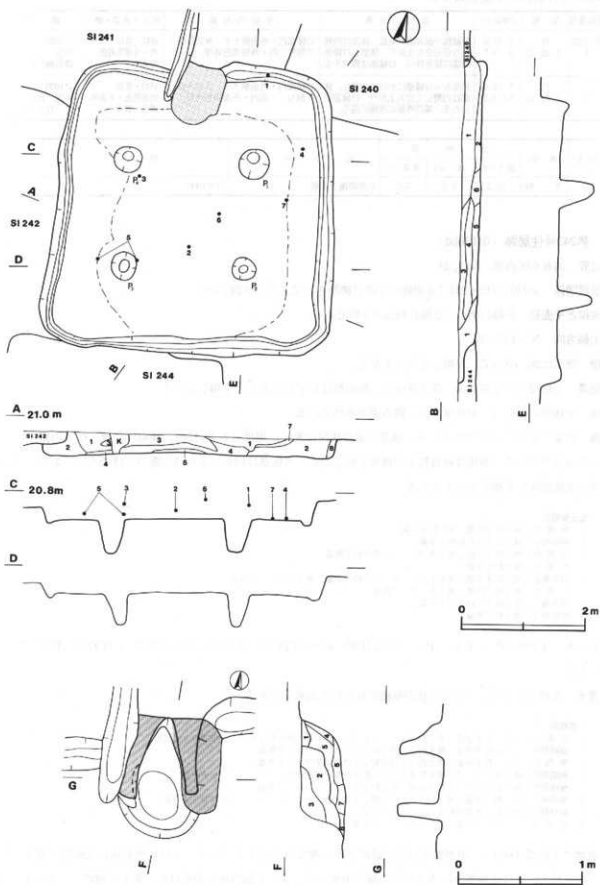
ピット 4か所(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は径40～45cmの円形で、深さ50～55cmである。いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 8層からなり、ブロック状の堆積が見られ人為的堆積である。

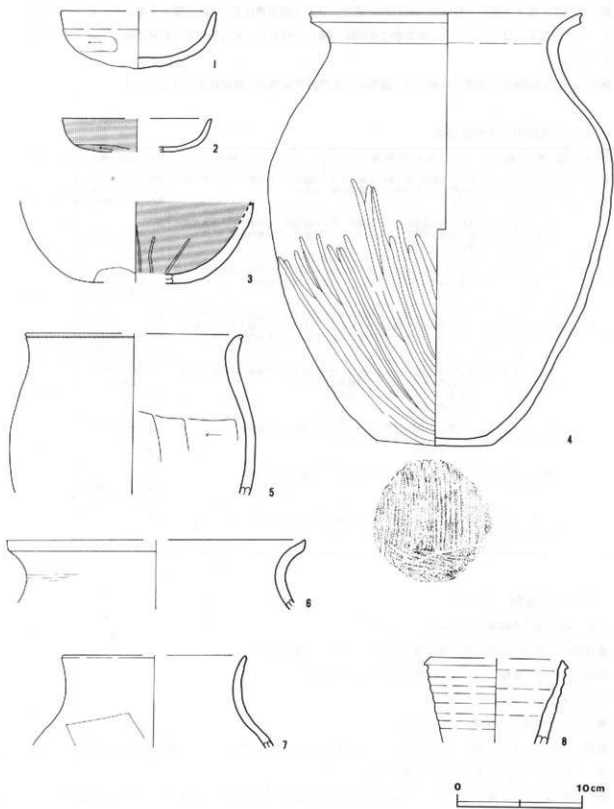
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・ローム小ブロック少量, 炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 4 極暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子・ローム中ブロック少量
- 5 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 6 極暗褐色 炭化粒子中量, 焼土粒子・ローム粒下少量, 焼土小ブロック・ローム小ブロック微量
- 7 暗褐色 炭土粒子・炭化粒子下・ローム粒子少量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量

遺物 土師器片660点, 須恵器片11点, 鉄滓1点, 矽2点が出土している。1の土師器坏は北壁際の覆土上層から逆位で、2の土師器坏は中央付近の覆土中層から、3の土師器坏は中央付近の覆土上層から、4の土師器



第136图 第243号住居跡実測図



第137图 第243号住居跡出土遺物実測図

裏は東壁際の覆土下層から横位のつぶれた状態で、5の土師器裏はP<sub>3</sub>付近の覆土下層から、6の土師器裏は中央付近の覆土上層から、7の土師器裏は東壁際の覆土下層から、8の須恵器こね鉢が覆土中からそれぞれ出上している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の7世紀後半と考えられる。

第243号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(mm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第137図	埴土部器	A(12.4) B(4.6)	体部・口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母・スコリアに多い黄褐色 普通 厚付着	P1055 50% 北壁覆土上層
2	埴土部器	A(12.2) R(2.7)	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。外面黒色処理。	砂粒 外面黒色・内面にぶい褐色 普通	P1056 10% 中央付近覆土中層
3	鉢土師器	B(6.5)	底部から体部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 外面にぶい黄褐色・内面褐色 普通	P1057 30% 中央付近覆土上層
4	壺土師器	A(21.9) B(34.9) C(9.7)	体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。肩部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部中位から下位にかけて縦方向のヘラ磨き。内面ナデ。底部外面ヘラ磨き。	砂粒・石英・長石・雲母 外面にぶい黄褐色 普通 外面厚付着	P1058 80% 東壁際覆土下層
5	壺土師器	A(17.0) B(12.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反して端部に至る。口縁部外面に沈線が施す。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 外面にぶい黄褐色 普通 厚付着	P1059 20% P <sub>3</sub> 付近覆土上層
6	壺土師器	A(14.0) B(5.0)	口縁部片。口縁部は外反する。端部はわずかに上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 外面にぶい黄褐色 普通	P1060 5% 中央付近覆土上層
7	壺土師器	A(14.6) B(7.4)	口縁部片。口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 外面にぶい黄褐色 普通 外面厚付着	P1061 5% 東壁際覆土下層
8	こね鉢須恵器	A(10.6) R(6.8)	口縁部片。口縁部は扇形的に外反する。端部断面は三角形を呈している。	口縁部内・外面クロコナデ。	砂粒 黄褐色 普通	P1062 20% 覆土中

### 第248号住居跡 (第344図)

位置 調査6区の南部、N13j区。

重複関係 第247・249号住居跡に掘り込まれており、木跡が古い。

規模と平面形 長軸[3.44m]、短軸2.94mの長方形である。

主軸方向 N-5°-E

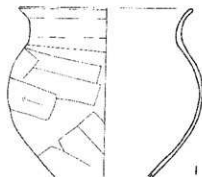
壁 壁高は28cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北東コーナーと南壁下で確認した。上幅14cm、下幅7cm、深さ7cmで、断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。左袖部は第249号住居跡に掘り込まれて遺存状況は悪く、規模は長さ115cm、袖幅(100)cm、壁外への掘り込みは60cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は橢円形に浅く掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変している。煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。





第138図 第248号住居跡出土遺物実測図

遺土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、焼土中・小ブロック・炭化物微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土中・小ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 炭化粒子多量、焼土粒子中量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子多量

覆土 4層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片132点、須恵器片3点が出土している。1の土師器甕は覆土中から出土している。

所見 本跡に伴う遺物は少なく、明確な時期を断定できないが、第247・249号住居跡に掘り込まれていることや、遺構の形態や出土遺物から古墳時代の後期と推定される。

第248号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	小形甕 土師器	A(13.6) B(13.5)	体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。器壁は薄い。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 暗赤褐色 普通	P1078 46% 焼土中

第250号住居跡（第139図）

位置 調査6区南部、N13ha区。

重複関係 第251号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.93m、短軸3.88mの方形である。

主軸方向 N-7°-W

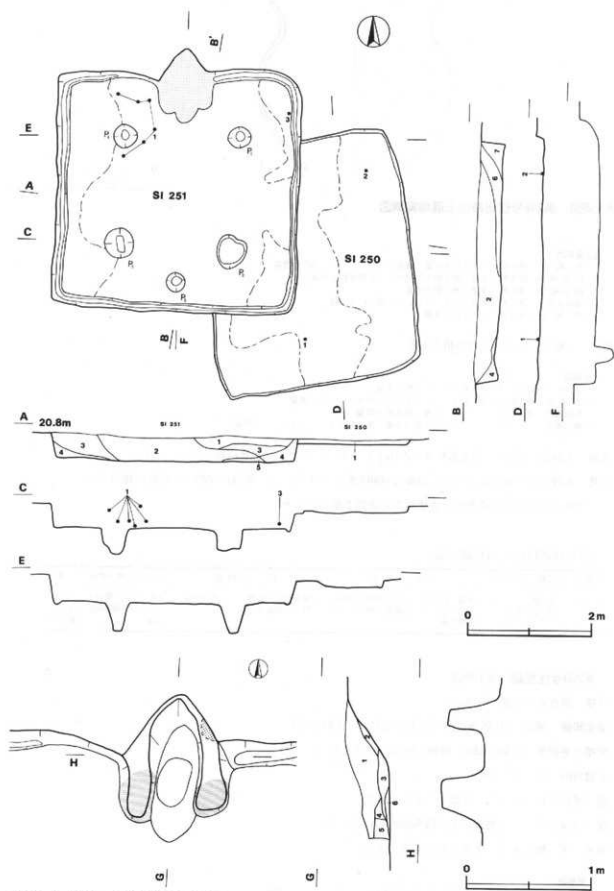
壁 壁高は11~13cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

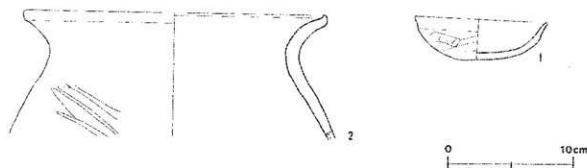
覆土 単一層であり、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量



第139图 第250·251号住居跡实测图



第140図 第250号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片98点、須恵器片2点が出土している。1の土師器杯は中央付近の覆土下層から逆位で、2の土師器甕は北東コーナー付近の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡に伴う遺物が少なく明確な時期は特定できないが、1の土師器杯から古墳時代後期の7世紀後半と推えられる。

#### 第250号住居跡出土遺物観察表

採取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎子・色調・装成	備考
第140図 1	杯 土師器	A 10.5 B 3.2	体部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は中や外反する。	口縁部内・外面横ナズ。体部外向へラ削り。	砂粒・石英・長石 にぶい褐色 普通 外面横ナズ	P1106 60% 中央部覆土下層
2	甕 土師器	A125.6 B19.8	体部から口縁部にかけての破片。砂粒は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。胎部はわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナズ。	砂粒・石英・長石・ 炭屑 明色褐色 普通 外面横ナズ	P1107 20% 北東コーナー 谷底覆土下層

#### 第253号住居跡 (第141図)

位置 調査6区南部、O13a9区。

遺構関係 第254号住居跡、第143号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 南部は調査区域外に延びているが、長軸4.92m、短軸4.68[m]の方形と推定される。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は28~44cmで、外傾して立ち上がる。

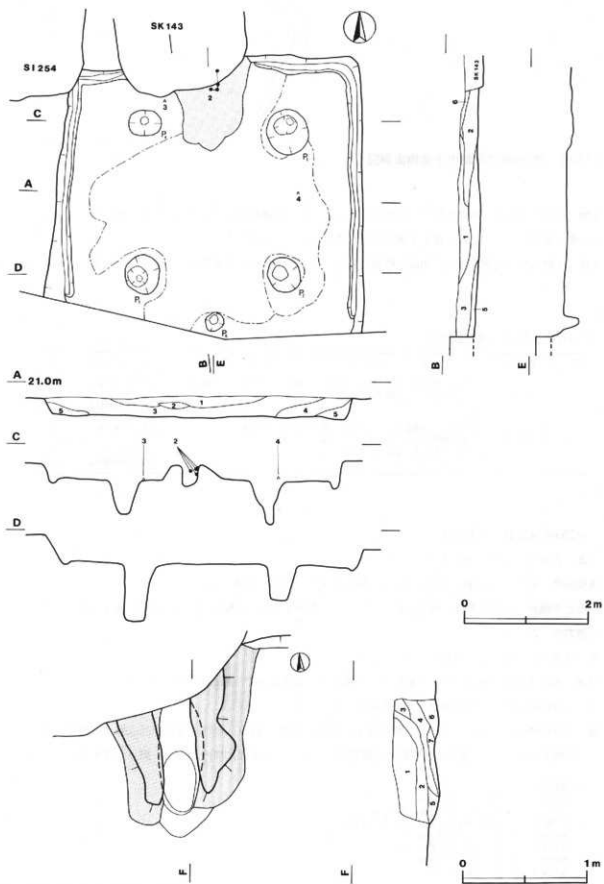
壁溝 南壁下を除き確認した。上幅15cm、深さ12cmで、断面形はJ字形である。

床 全体的に平坦で、中央部がよく踏み固められている。

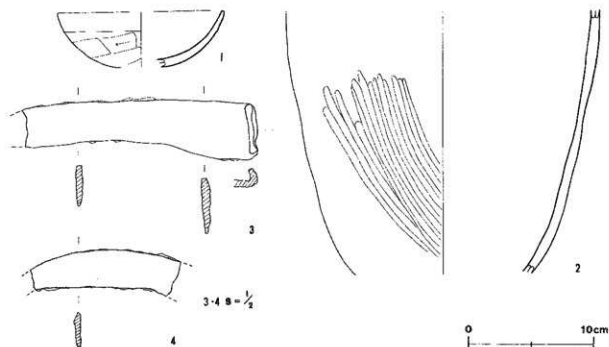
竈 北壁中央部に付設されている。煙道部は、第143号土坑に掘り込まれて遺存状況は悪く、規模は長さ150cm、袖幅105cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられている。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 粘土多量、焼土粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、粘土少量
- 3 黒褐色 粘土多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子多量、流土・小ブロック少量
- 5 暗褐色 焼土粒子多量、炭化粒子中量
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子多量
- 7 暗褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量



第141图 第253号住居跡実測图



第142図 第253号住居跡出土遺物実測図

ピット 5か所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は長径55~65cm、短径45~60cmの楕円形で、深さ57~93cmである。いずれも主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は径25cmの円形で、深さ30cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。  
覆土 6層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・炭土粒子微量
- 2 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム中・小ブロック少量
- 5 黒褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム中・小ブロック微量

遺物 土師器片817点、須恵器片18点が出土している。1の土師器杯は覆土中から、2の土師器甕は竈内から、3、4の鉢は左袖付近、中央付近の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 木跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代の7世紀後半と考えられる。

第253号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第142図 1	杯 土師器	A(13.0) B(4.4)	体部から口縁部にかけての鉢片、丸底。体部は内脛して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒・長石にふい褐色普通 二次焼成	P1127 20% 覆土中
2	甕 土師器	B(21.0)	体部片。体部は内脛しながら立ち上がる。	体部外面へウ磨き。内面ナデ。	砂粒・石英・長石・炭屑 明赤色普通 二次焼成	P1117 20% 竈内

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
3	鉢	(12.4)	3.4	0.4	(39)	左袖付近覆土下層	M1007 50%
4	鉢	(7.8)	2.5	0.4	(11)	中央付近覆土下層	M1008 30%

第255号住居跡（第144図）

位置 調査6区西南部、N13区。

重複関係 第254号住居跡に覆り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 本跡の西部は調査区域外へ延びているが、長軸4.75m、短軸[3.50]mで、平面形は長方形と推定される。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は34cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅12cm、下幅7cm、深さ7cmで、断面形はし字形である。調査区域外が不明であるほかは、全周している。

床 ほぼ平坦で、全体的によく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ155cm、袖幅120cm、壁外への掘り込みは65cmである。竈前は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形状に12cmほど掘りくぼめられ、煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・ローム小ブロック微量
- 2 灰褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 灰暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 7 灰暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子微量

ピット 2か所(P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>は径40cmの円形、深さ57cmで、いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 5層からなり、自然堆積である。

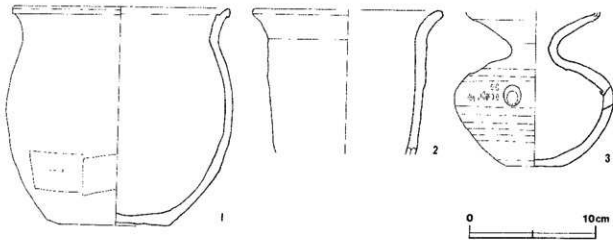
土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・焼土粒子微量
- 3 灰暗赤褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量
- 4 灰褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・粘土微量

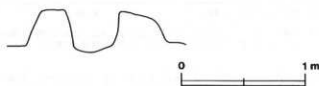
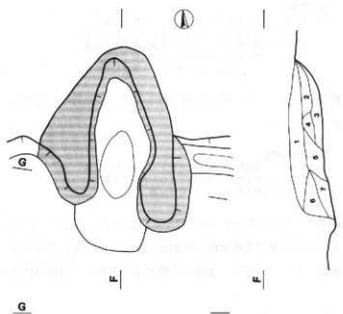
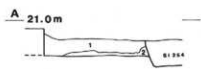
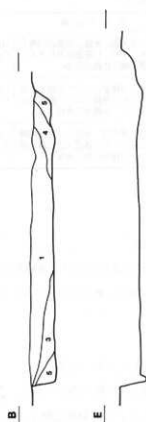
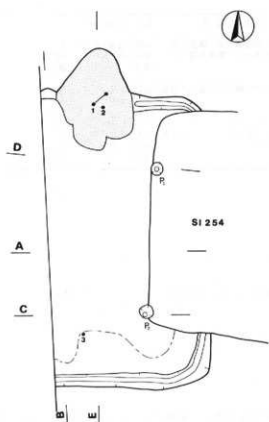
遺物 土師器片229点、須恵器片5点、礫2点が出土している。1の土師器小形埴、2の土師器腹は竈内から、

3の甕が南壁際の覆土下層から横位でそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。



第143図 第255号住居跡出土遺物実測図



第144图 第255号住居跡实测图

### 第255号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(㎝)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第145図 1	小形土師器	A 17.2 B 17.4 C 9.4	底部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内側に沈線が通る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。磨きが著しい。	砂粒・石英・長石・雲母 明木褐色 普通 二次焼成	P1123 96% 壺内
2	土師器	A 16.01 B 11.5	体部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部の磨減が著しい。	砂粒・石英・長石・雲母 褐色 普通	P1124 5% 壺内
3	須恵器	B (12.3) C 4.5	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部との境に段を有する。口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面口コナナデ。体部外面平行厚き後、ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 淡黄色 普通	P1125 80% 奈良聖徳太子廟

### 第259号住居跡 (第145図)

位置 調査6区東部, M15rdk。

重複関係 第159号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 南部が調査区域外に延びているため、東西軸(4.00)m、南北軸(6.00)mで、平面形は不明である。

主軸方向 [N-60° W]

壁 壁高は12~13cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、竈前面がよく踏み固められている。

竈 北西壁中央部に付設されている。袖部は削平により遺存状況が悪く、規模は長さ120cm、袖幅(75)cm、壁外への掘り込みは55cmである。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられている。

#### 遺土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量。ローム粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子中量。炭化粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量。焼土粒子・炭化粒子少量

貯蔵穴 北コーナー部に付設されている。長軸77cm、短軸65cmの長方形で、深さは35cmである。断面形は鍋底状をしている。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子中量。焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量

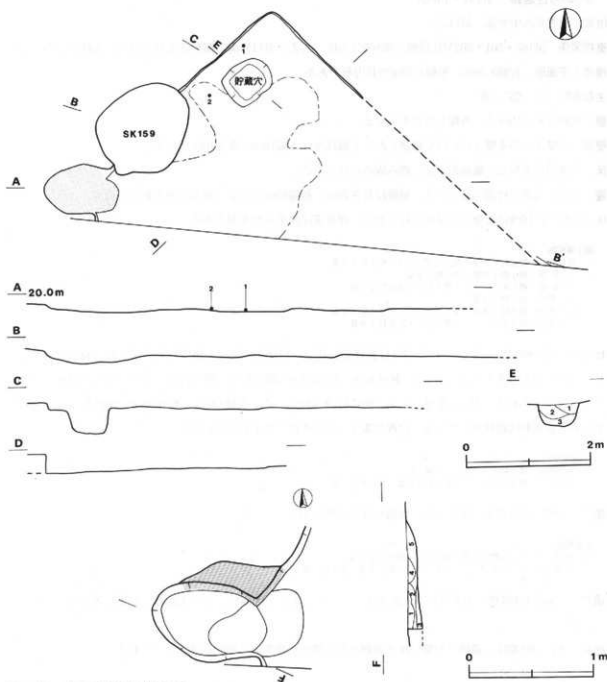
遺物 土師器片215点、須恵器片3点が出土している。1の土師器片は北コーナー付近の床面直上から逆位で、2の土師器片は北西壁際の床面直上から逆位でそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。

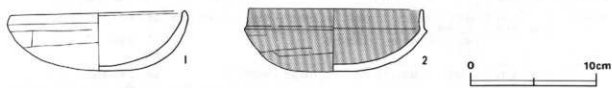
### 第259号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(㎝)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第145図 1	土師器	A 13.7 B 4.6	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。	砂粒・石英にぶら褐色 普通 焼付者	P1138 96% 北コーナー・付設床内
2	土師器	A 13.6 B 5.0	体部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、体部と口縁部との境に段を有する。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内・外面当色処理。	砂粒・雲母内・外面黒色 普通	P1139 90% 北西壁際床内





第145図 第259号住居跡実測図



第146図 第259号住居跡出土遺物実測図

## 第260号住居跡（第147・148図）

位置 調査6区中央部，M14e区。

重複関係 第185・261・262号住居跡，第160号土坑，および第14号溝に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.36m，短軸4.70mの長方形である。

主軸方向 N-25°-W

壁 壁高は6～10cmで，外積して立ち上がる。

壁溝 北壁下から東壁下にかけて確認した。上幅15cm，下幅12cm，深さ10cmである。

床 全体的に平坦で，竈前面がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ70cm，袖幅85cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に10cmほど掘りくぼめられており，煙道部は削平され不明である。

### 竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量
- 3 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子中量
- 6 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量

ピット 6か所(P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>)。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は長径35～75cm，短径30～55cmの楕円形で，深さ52～58cmである。いずれも主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は，長径35cm，短径20cmの楕円形で，深さ21cmである。出入り口施設に伴うピットと考えられる。P<sub>6</sub>は北東コーナー部に付設されている。長径140cm，短径90cmの楕円形で，深さ27cmである。断面形は皿状をしている。位置や覆土から灰を捨てたものと思われる。

### P土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量

覆土 2層からなるが，覆土が浅く堆積状況は不明である。

### 土層解説

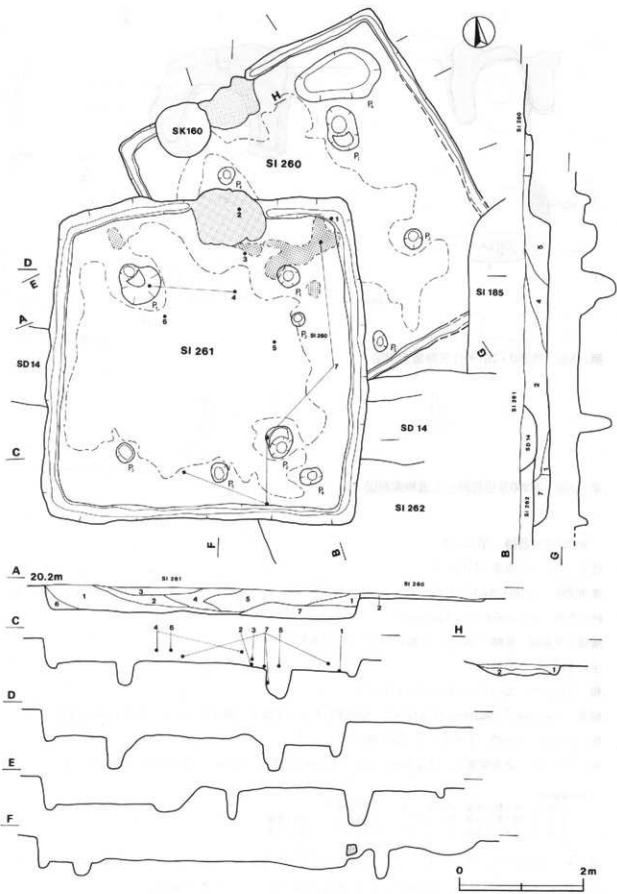
- 1 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量

遺物 土師器片157点，須恵器片5点が出土している。1の土師器坏，2の土師器小形壺は覆土中から出土している。

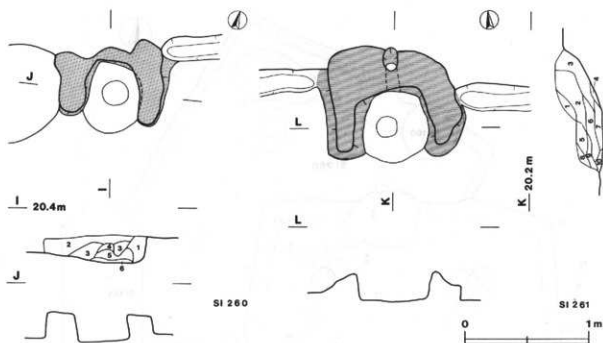
所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の7世紀前半と考えられる。

## 第260号住居跡出土遺物観察表

図位番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第148図 1	坏 土師器	A[11.4] B(3.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，体部と口縁部との境に線を有し，口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・スコリアに濃い黄褐色 普通	P1140 10% 覆土中
2	小形壺 土師器	A[12.2] B(4.7)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母に濃い褐色 普通 窪付着	P1141 10% 覆土中



第147图 第260·261号住居跡実測图



第148図 第260・261号住居跡竈実測図



第149図 第260号住居跡出土遺物実測図

### 第267号住居跡 (第150図)

位置 調査6区南部, M14e,d区。

重複関係 第198・266号住居跡, 第146・161・162号土坑に掘り込まれており, また本跡の上部に第263号住居跡が構築されているので, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸[5.88]m, 短軸5.70mの方形である。

主軸方向 N-35°-W

壁 壁高は10~22cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅15cm, 下幅10cm, 深さ12cmで, 断面形はU字形である。掘りこまれている部分を除き全周している。

床 全体的に平坦で, 中央部がよく踏み固められている。

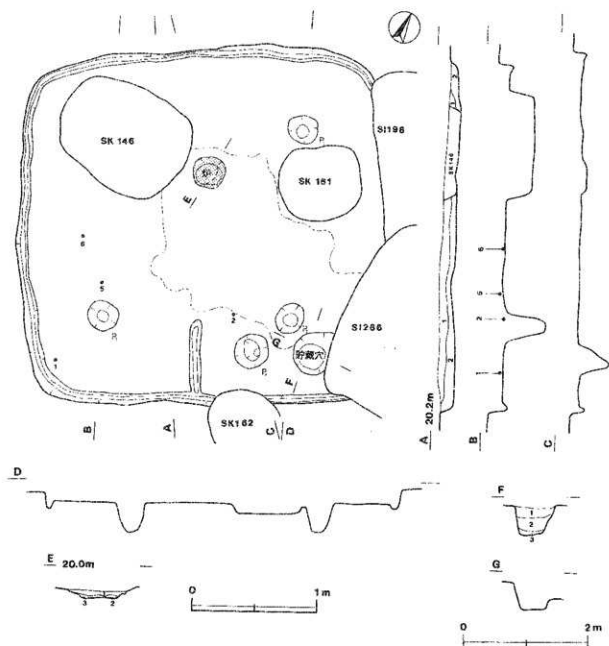
炉 中央部から北西壁寄りに付設されている。径50cmの円形で, 10cmほど掘りくぼめた地床炉である。

#### 伊土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量

ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は径50cmの円形で, 深さ46~65cmである。いずれも主柱穴と考えられる。P<sub>4</sub>は径55cmの円形で, 深さ51cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。径70cmの円形で, 深さ48cmである。断面形は鍋底状をしている。



第150図 第267号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量

覆土 2層からなるが、覆土が浅く堆積状況は不明である。

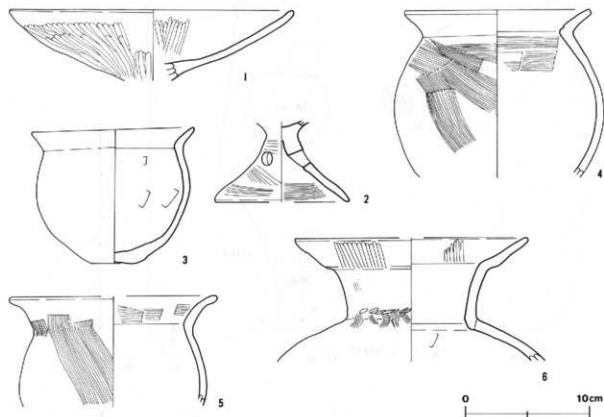
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量

遺物 土師器片534点、須恵器片30点、礫2点が出土している。1の土師器高環の坏部は南西コーナー付近の覆上下層から、2の土師器高環の脚部は中央付近の覆土下層から、3、4の土師器小形甕は覆土中から、5の

土師器甕はP<sub>3</sub>付近の覆土下層から、6の土師器壺は西壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代前期の4世紀中葉と考えられる。



第151図 第267号住居跡出土遺物実測図

第267号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第151図 1	高土師器 杯	A 22.5 B (5.7)	脚部欠損。杯部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	杯部内・外面ヘラ磨き。	砂粒・雲母・スコリアにふい・褐色 良好	P1160 50% 南西コーナ 一付近覆土下層
2	高土師器 杯	B (6.5) D [10.6] E 5.5	脚部片。脚部はラッパ状に開く。脚部上位に3単位の円孔が穿たれている。	脚部外面ヘラ磨き。内面刷毛目調整。	砂粒 褐色 良好	P1161 30% 中央付近覆土下層
3	小形土師器 壺	A 12.8 B 11.0 C 3.6	体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部外面刷毛目調整後、ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P1162 30% 覆土中
4	小形土師器 壺	A 14.8 B (13.5)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面刷毛目調整後、磨ナデ。体部外面刷毛目調整。内面の一部刷毛目調整。	砂粒・スコリアにふい・褐色 普通	P1163 45% 覆土中
5	小形土師器 壺	A [16.4] B (8.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面刷毛目調整。体部外面刷毛目調整。内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P1164 10% P <sub>3</sub> 付近覆土下層
6	壺 土師器	A [18.6] B (9.9)	口縁部片。頸部は外傾して立ち上がり、段を有し口縁部に至る。	口縁部内・外面ヘラ磨き。頸部刷毛目調整後、ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 良好	P1165 10% 西壁際覆土下層

### 第274号住居跡（第152回）

位置 調査6区中央部，M141号区。

重複関係 第272・275・276号住居跡が上部に構築されており，本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.96m，短軸4.70mの方形である。

主軸方向 N-16°-E

壁 壁高は26cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下を除き確認した。上幅15cm，下幅10cm，深さ8cmで，断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。左袖部が第272号住居跡に掘り込まれており遺存状況は悪いが，煙道部を確認した。規模は長さ120cm，袖幅(75)cm，壁外への掘り込みは25cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りこぼめられ，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

#### 壁土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量，焼土小ブロック・ローム粒子少量
- 7 暗褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 8 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量
- 9 にぶい褐色 焼土粒子・炭化粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム粒子少量
- 10 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量

ピット 5か所(P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は径35～45cmの円形で，深さ50～55cmである。いずれも土柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は長径55cm，短径45cmの楕円形で，深さ30cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなり，自然堆積である。

#### 土層解説

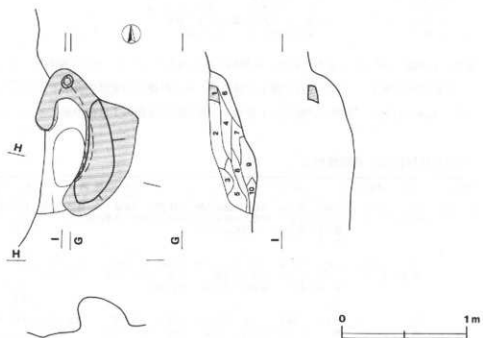
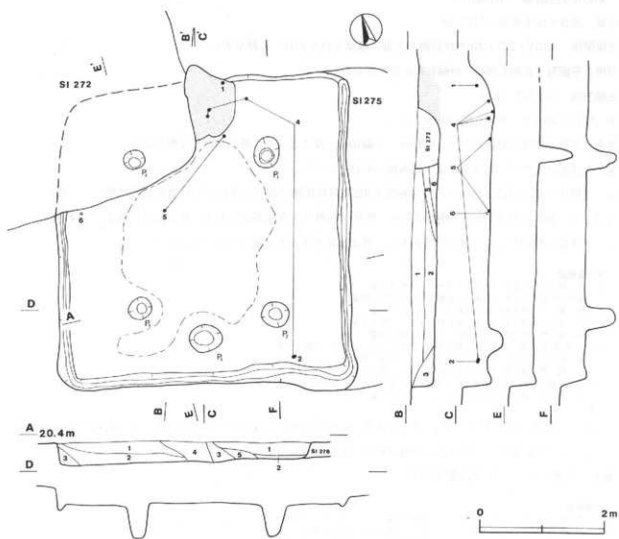
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック少量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック中量，炭化粒子・ローム粒子少量

遺物 土師器片185点，須恵器片11点，鉄製品1点が出土している。1の土師器片，4の土師器片は竈内から，2の土師器片は南東コーナー付近の覆土中層から，6の鉄鏝は西壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の7世紀中葉と考えられる。

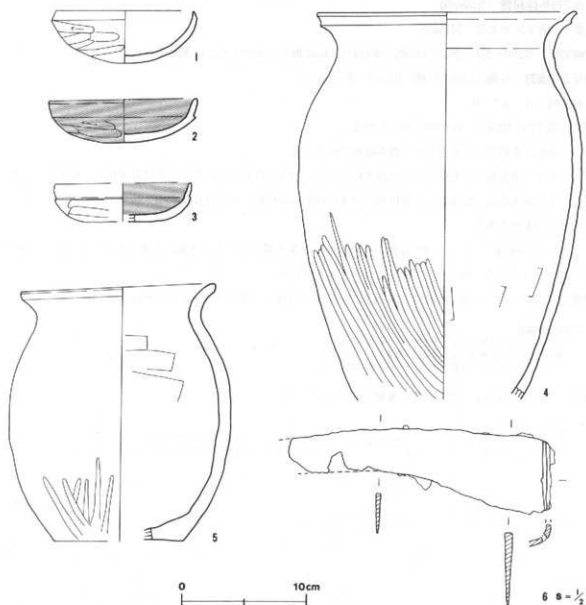
### 第274号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	下法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152回 1	土師器 杯	A 11.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり，体部と口縁部との境に深い線を有つ。口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部・底部外面へう崩り。体部内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 良好	P1208 95% 竈内
		B 4.2				
2	土師器 杯	A 11.9	口縁部 那欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり，体部と口縁部との境に深い線を有つ。口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部・底部外面へう崩り。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 内・外面黒色 普通	P1209 95% 南東コーナー 付近覆土中層
		B 3.5				
3	土師器 杯	A 10.8	底面から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり，体部と口縁部との境に線を有つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へう崩り。内面ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 外面にぶい黄褐色・ 内面黒色 普通	P1198 30% 覆土中
		B 3.1				



第152图 第274号住居跡实测图





第153図 第274号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第153図 4	甕 土師器	A 21.0 B (31.3)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。中位から下位にかけて縦方向のヘラ磨き。内面ヘラナデ。	石英・長石・雲母・スコリア 橙色 普通 外面煤付着	P1210 60% 壺内
5	甕 土師器	A 15.7 B 20.7 C (10.3)	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。器壁は厚い。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ磨き。内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通 外面煤付着	P1211 50% 甕付近

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
6	甕	(14.0)	4.5	0.4	(46)	西壁際覆土下層	M1013 70%

### 第279号住居跡（第381図）

位置 調査6区中央部、M14ha区。

重複関係 第278・281～283号住居跡、第151号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.15m、短軸5.10mの方形である。

主軸方向 N-8°-W

壁 壁高は10～20cmで、緩やかに立ち上がる。

床 全体的に平坦で、中央部がよく踏み固められている。

炉 5か所。中央部から北壁寄りに付設されている。炉1は径45cmの円形、炉2は長径70cm、短径50cmの楕円形、炉3は長径65cm、短径35cmの楕円形、炉4は径50cmの円形、炉5は長径45cm、短径30cmの楕円形である。いずれも地床炉である。

ピット 2か所（P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>）。P<sub>1</sub>は径20cmの円形で、深さ30cmである。性格は不明である。P<sub>2</sub>は径40cmの円形、深さ26cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。径50cmの円形で、深さ39cmである。断面形は鍋底状をしている。

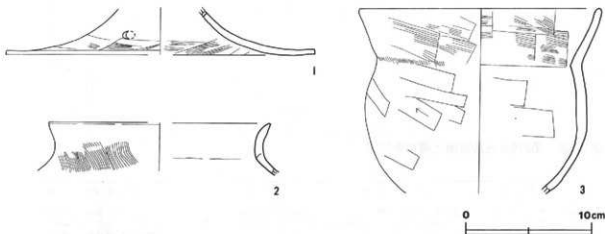
#### 貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量

覆土 4層からなるが、覆土が浅く堆積状況は不明である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子多量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量



第154図 第279号住居跡出土遺物実測図

#### 第279号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第154図 1	高坏 土師器	D[24.4] E(3.7)	脚部片。脚部はラッパ状に大きく開く。脚部中に、2段に円孔が穿たれている。	脚部内・外面刷毛目調整。	砂粒・石英・長石・雲母にふい黄褐色 普通 外面磨付着	P1225 5% 貯蔵穴付近 近覆土下層
2	壺 土師器	A[17.6] B(4.1)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部刷毛目調整。	砂粒・長石・雲母・スコリア 褐色 普通 外面磨付着	P1226 5% P≠付近 近覆土下層
3	壺 土師器	A 19.2 B(14.7)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面刷毛目調整。体部外面刷毛目調整後、ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 褐色 普通 外面磨付着	P1227 70% P≠付近

遺物 土師器片212点、礫2点が出土している。1の土師器高坏は貯蔵穴付近の覆土下層から正位で、2の土師器甕はP<sub>2</sub>付近の覆土下層から、3の土師器甕はP<sub>2</sub>付近からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代前期の4世紀前半と考えられる。

#### 第281号住居跡（第155・156図）

位置 調査6区中央部、M14a4区。

重複関係 第279・283号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。また第277・282・284号住居跡が上部に構築され、第280号住居跡に掘り込まれているので、本跡が古い。

規模と平面形 長軸8.40m、短軸8.38mの方形である。

主軸方向 N-38°-W

壁 壁高は44~55cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅15cm、下幅10cm、深さ6cmで、断面形はじ字形である。全周している。

床 全体的に平坦で軟らかく、出入り口付近がやや踏み固められている。

竈 北西壁中央部に付設されている。第280号住居跡に掘り込まれており、火床部と袖部の一部を確認したのみである。規模は長さ(130)cm、袖幅(140)cm、壁外への掘り込みは(35)cmである。袖部は遺存状況から砂質粘土で構築されていると思われる。火床部は円形に5cmほど掘りくぼめられている。

#### 寄土層解説

- 1 濃い赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子・炭化物少量
- 2 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、炭化粒子微量
- 3 ぶい褐色 焼土粒子少量
- 4 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 5 ぶい褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 6 灰褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック微量
- 7 黒褐色 炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量

ピット 5か所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は径35~45cmの円形で、深さ41~92cmである。いずれも土柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は径35cmの円形で、深さ45cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北コーナー部に付設されている。長径95cm、短径50cmの長方形で、深さ48cmである。断面形は鍋底状をしている。

#### 貯蔵穴土層解説

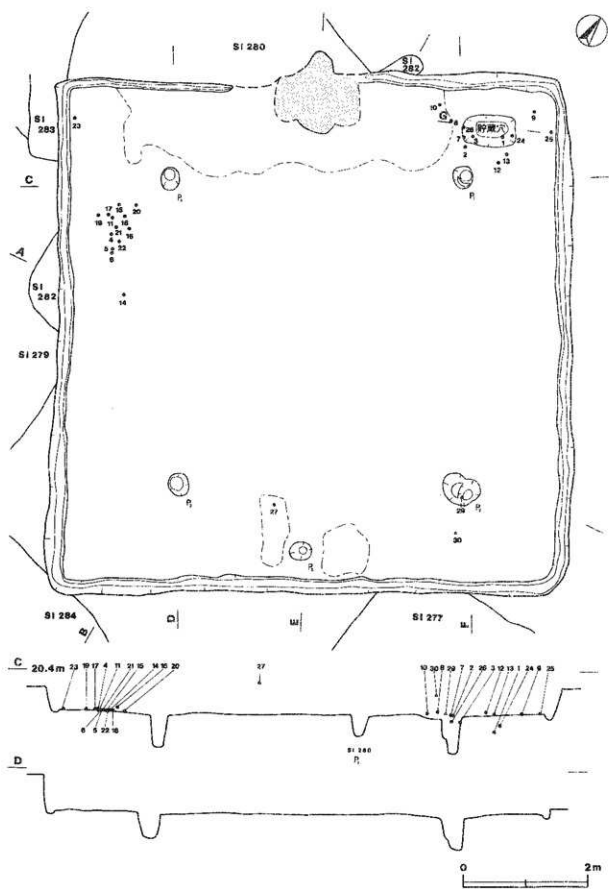
- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大・小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大・小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量

覆土 7層からなり、自然堆積である。

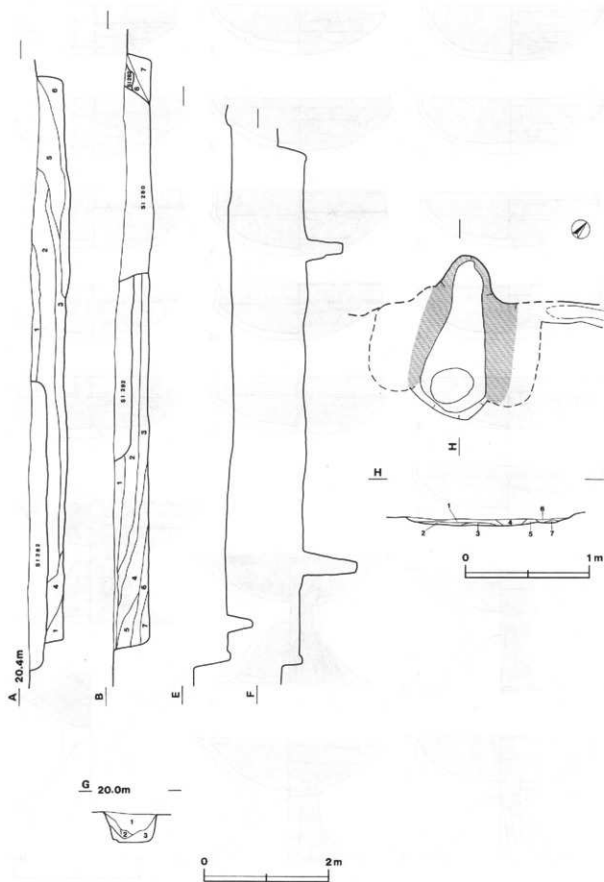
#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子・ローム中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子・ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック微量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量

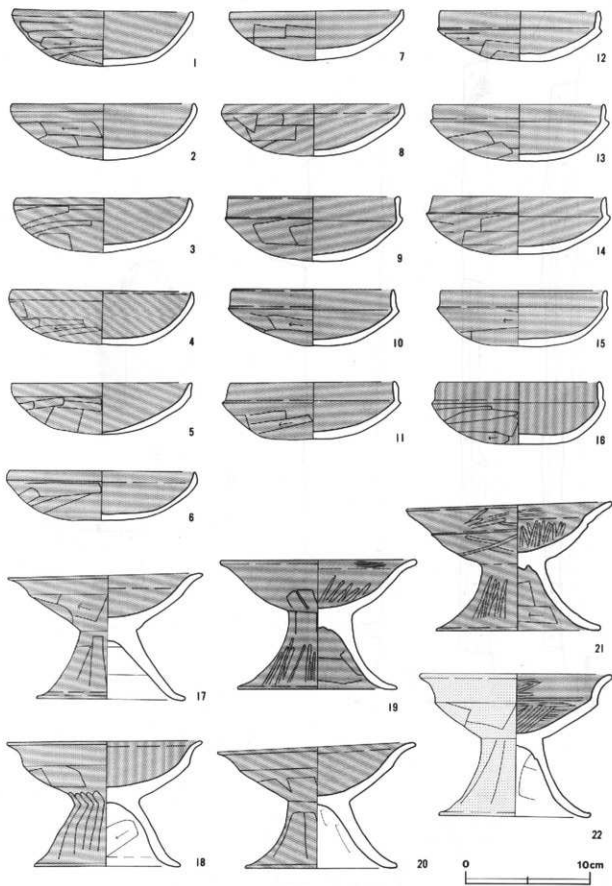
遺物 土師器片1414点、須恵器片16点、鉄製品2点、縄文土器片1点、礫3点が出土している。1、3の土師器坏、24の土師器小形甕、26の土師器甕は貯蔵穴内の覆土土層から、2、7、8、10、12、13の土師器坏は貯蔵穴付近の床面直上から、2、7、8、12、13は正位で、10は横位、9の土師器坏、25の土師器小形甕は北コーナー付近の床面直上から、9は正位で、25は横位でそれぞれ出土している。4~6、11、14~16の土師器坏、



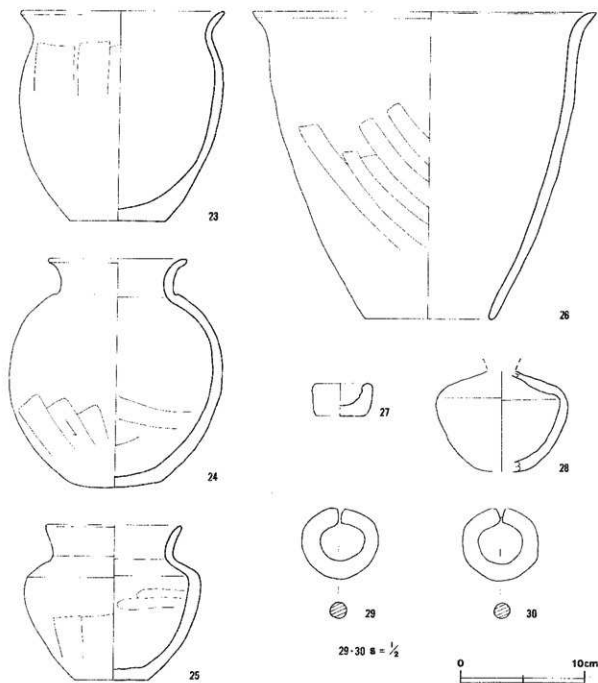
第155图 第281号住居跡实测图(1)



第156图 第281号住居跡实测图(2)



第157图 第281号住居跡出土遺物実測図(1)



第158図 第281号住居跡出土遺物実測図(2)

17～22の土師器高坏は南西壁際の床面直上から、5、6、14は正位で、11、15～17、18、21、22は逆位で、23の土師器小形甕は四コーナー付近の床面直上からつぶれた状態でそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。

第281号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第157図 1	坏 土師器	A 14.3 B 4.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内極する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へう削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 共通	P1231 100% 貯蔵穴内

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	干 法 の 特 徴	粘土・色調・地成	備 考
第157図 2	坏 土 師 器	A 14.7 B 4.5	丸底。腰部は内彎して立ち上がり、 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1232 100% 貯蔵穴付近床直
3	坏 土 師 器	A 14.0 B 4.4	口縁部一部欠損。丸底。腰部は内彎 して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1233 99% 貯蔵穴内
4	坏 土 師 器	A 14.5 B 4.4	口縁部一部欠損。丸底。腰部は内彎 して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1234 99% 南西壁際床直
5	坏 土 師 器	A 14.4 B 4.0	口縁部一部欠損。丸底。腰部は内彎 して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1235 99% 南西壁際床直
6	坏 土 師 器	A 14.4 B 4.0	口縁部一部欠損。丸底。腰部は内彎 して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1236 95% 市内壁際床直
7	坏 土 師 器	A 14.0 B 4.0	口縁部一部欠損。丸底。腰部は内彎 して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1237 95% 貯蔵穴付近床直
8	坏 土 師 器	A 14.4 B 4.2	口縁部一部欠損。丸底。腰部は内彎 して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1238 90% 貯蔵穴付近床直
9	坏 土 師 器	A 13.7 B 3.2	丸底。腰部は内彎して立ち上がり、 腰部と口縁部との境に段を有する。 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1239 100% 北コーナ 普通
10	坏 土 師 器	A 13.0 B 4.6	丸底。腰部は内彎して立ち上がり、 腰部と口縁部との境に段を有する。 口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1240 100% 貯蔵穴付近床直
11	坏 土 師 器	A 13.2 B 4.5	丸底。腰部は内彎して立ち上がり、 腰部と口縁部との境に段を有する。 口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1241 100% 市内壁際床直
12	坏 土 師 器	A 12.8 B 4.0	口縁部一部欠損。丸底。腰部は内彎 して立ち上がり、腰部と口縁部との 境に段を有する。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1242 85% 貯蔵穴付近床直
13	坏 土 師 器	A 13.7 B 4.5	口縁部一部欠損。丸底。腰部は内彎 して立ち上がり、腰部と口縁部との 境に段を有する。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒 内・外面黒色 普通	P1243 98% 貯蔵穴付近床直
14	坏 土 師 器	A 13.9 B 4.6	口縁部一部欠損。丸底。腰部は内彎 して立ち上がり、腰部と口縁部との 境に段を有する。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒 内・外面黒色 普通	P1244 95% 南西壁際床直
15	坏 土 師 器	A 13.3 B 4.5	口縁部一部欠損。丸底。腰部は内彎 して立ち上がり、腰部と口縁部との 境に段を有する。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1245 85% 南西壁際床直
16	坏 土 師 器	A 12.9 B 3.0	口縁部一部欠損。丸底。腰部は内彎 して立ち上がり、腰部と口縁部との 境に段を有する。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部・底部 外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1246 95% 市内壁際床直
17	高 土 師 器	A 15.6 B 10.1 D 11.8 E 5.5	口縁部一部欠損。脚部はラッパ状に 開く。杯部は内彎気味に立ち上がり、 腰部と口縁部との境に段を持つ。口 縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。杯部外面、 脚部外面へラ削り。脚部内面へラナ デ。脚部内面を除き、内・外面黒色 処理。	砂粒・石英 内・外面黒色 良好	P1247 99% 南西壁際床直
18	高 土 師 器	A 15.6 B 10.4 D 11.8 R 5.4	口縁部一部欠損。脚部は影らみを持 ってラッパ状に開く。杯部は内彎し て立ち上がり、腰部と口縁部との境 に段を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。杯部外面、 脚部外面へラ削り。脚部内面へラナ デ。脚部内面を除き、内・外面黒色 処理。	砂粒・石英 内・外面黒色 良好	P1248 95% 南内壁際床直
19	高 土 師 器	A 15.8 B 10.4 D 12.8 E 5.9	脚部・口縁部一部欠損。脚部はラッ パ状に開く。杯部は内彎気味に立ち 上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面へラ削り。杯部外面 へラ削り。内面へラ削り。脚部外面 へラ削り。内面へラナデ。内・外面 黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 良好	P1249 90% 市内壁際床直



図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第157B 20	高 土 師 器	A 15.9	口縁部一部欠損。脚部はラッパ状に開く。坏部は内彎気味に立ち上がり、体部と口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面、脚部外面へラ削り、脚部内面へラナデ。脚部内面を除き、内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1250 90% 西内野原床直
		H 10.1				
		D 12.2				
		E 5.2				
21	高 上 師 器	A 16.4	脚部一部欠損。脚部はラッパ状に開く。坏部は内彎気味に立ち上がり、体部と口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部、坏部内・外面へラ磨き。脚部外面へラ磨き、内面へラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石 内・外面黒色 良好	P1251 90% 西内野原床直
		H 10.3				
		D 13.0				
		E 5.4				
22	高 上 師 器	A 15.2	脚部一部欠損。脚部はラッパ状に開く。坏部は内彎気味に立ち上がり、体部と口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部、坏部内面へラ磨き。坏部外面、脚部外面へラ削り。脚部内面へラナデ。坏部内面黒色処理。外面赤彩。	砂粒・長石 内面黒色・外面に赤 彩褐色 普通	P1252 75% 西内野原床直
		B 11.5				
		D 12.0				
		E 5.9				
第158B 23	小形 土 師 器	A 16.2	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・長石・スコリア にぶい褐色 普通 外面横ナデ	P1253 75% 西コーナ ー付近床直
		B 17.0				
		C 7.6				
24	小形 土 師 器	A 10.8	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、体部と頸部との境に稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。体部外面磨減。	砂粒・長石・スコリア にぶい褐色 普通 外面横ナデ	P1254 90% 野塚穴内
		B 15.3				
		C 7.6				
25	小形 土 師 器	A10(6)	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面赤黒比度。外面磨減が著しい。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通 厚付露	P1255 90% 北コーナ ー付近床直
		B 12.5				
		C 5.8				
26	瓶 土 師 器	A 27.6	体部一部欠損。単孔式。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通 厚付露	P1256 95% 野塚穴内
		B 24.8				
		C 10.2				
27	手置 土 師 器	A 4.3	平底。体部は直立して口縁部に至る。器壁は厚い。	体部外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P1257 100% P・付近重土上層
		B 2.6				
		C 3.8				
28	埴 師 器	B: 8.0	体部片。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面クロクナデ。	砂粒・長石 灰色 普通 部自然焼	P1228 10% 覆土中

図版番号	種別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
29	耳 環	3.7	4.2	0.9	33	南東コーナー付近	M1015 100%
30	耳 環	3.8	4.0	0.8	33	南東コーナー付近	M1016 100%

### 第283号住居跡 (第454図)

位置 調査6区中央部、M14地区。

重複関係 第279号住居跡を掘り込んでおり、木跡が新しい。また第280・281号住居跡、第152号土坑に掘り込まれているので、本跡が古い。

規模と平面形 南北軸(3.20)m、東西軸(2.00)mである。大部分を第280・281号住居跡に掘り込まれており、規模や平面形は不明である。

壁 壁高は20～32cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、軟らかい。

覆土 2層からなるが、大部分が第280・281号住居跡に掘り込まれており、堆積状況は不明である。

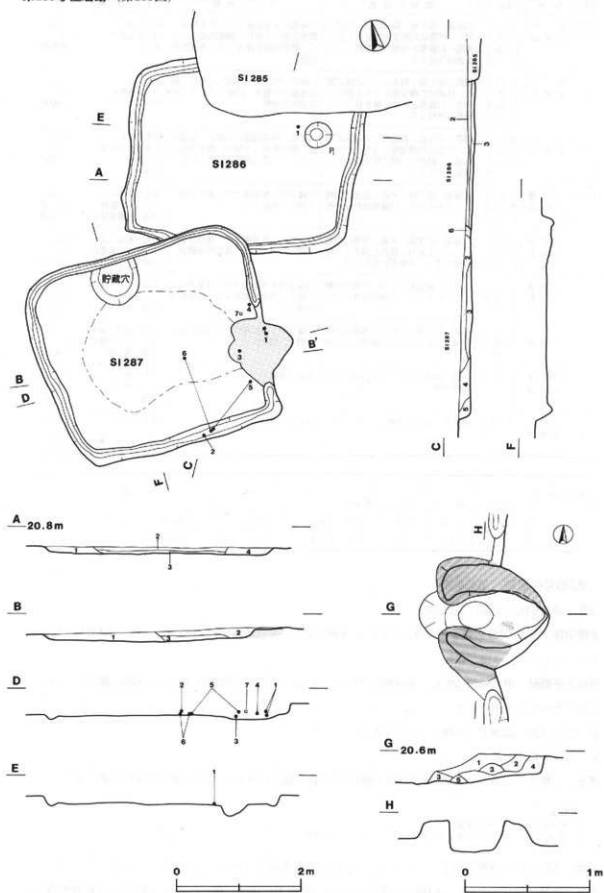
#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック少量

遺物 本跡に伴う遺物は出土しておらず、炭化材1点が床面から出土しているだけである。

所見 本跡に伴う遺物がなく時期は不明であるが、第281号住居跡に掘り込まれ、第279号住居跡を掘り込んでいることから、古墳時代前期から古墳時代後期の時期と考えられる。

第286号住居跡 (第159図)



第159図 第286・287号住居跡実測図

位置 調査6区中央部、N14a区。

重複関係 第285・287号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.80m、短軸2.86mの長方形である。

長軸方向 N-17°-E

壁 壁高は13~23cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第285・287号住居跡に掘り込まれている部分を除き巡っている。上幅10~15cm、下幅5cm、深さ4cmほどで、断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で、軟らかい。

ピット 1か所(P1)。P1は径40cmの円形で、深さ18cmである。性格は不明である。

覆土 4層からなり、自然堆積である。



第160図 第286号住居跡出土遺物実測図

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム大・中・小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

遺物 土師器片135点、須恵器片2点である。1の土師器高坏はP1付近の床面直上から逆位で出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期の4世紀前半と考えられる。

#### 第286号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	器高(mm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第160図 1	高土師器	A(12.2) B(5.7) E(1.6)	坏形片。坏部は内傾して立ち上がり、口縁部はやや重なる。	坏部外面へう磨き。	砂粒・石英・炭粉 褐色 普通	P1251 10% P1付近床直

#### 第288号住居跡 (第161図)

位置 調査6区中央部、M14a区。

重複関係 第326号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸2.64m、短軸2.18mの長方形である。

主軸方向 N-22°-W

壁 壁高は6cmほどで、緩やかに立ち上がる。

床 全体的に平坦で、中央部がよく踏み固められ、凹凸がみられる。

炉 中央部からやや北壁寄りに付設されている。長径70cm、短径50cmの楕円形で、床を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。火床面は焼土がブロック状で、暗赤褐色をしている。

#### 伊土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

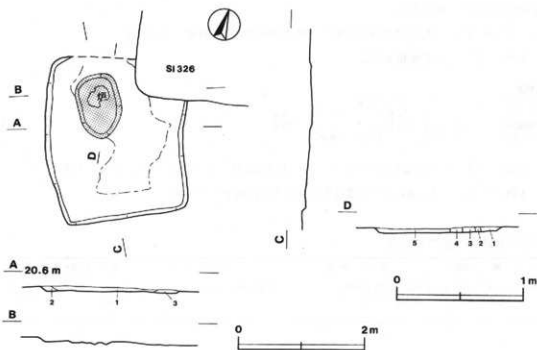
覆土 3層からなるが、覆土が浅く堆積状況は不明である。

土層解説

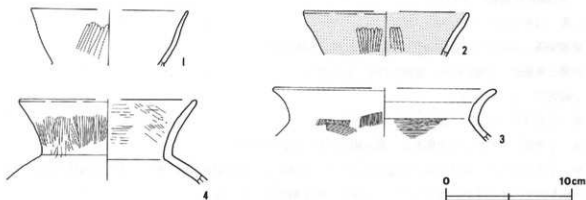
- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片205点、須恵器片3点が出土している。1、2の土師器埴、3の土師器甕、4の土師器壺は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代前期の4世紀前半と考えられる。



第161図 第288号住居跡実測図



第162図 第288号住居跡出土遺物実測図

第288号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第162図 1	埴 土師器	A[12.4] B(4.4)	口縁部片。口縁部は外輪する。	口縁部外面へラ磨き。	砂粒・スコリア 褐色 普通	P1271 5% 覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第162図 2	埴土師器	A[13.0] B(3.5)	口縁部片。口縁部は外脣する。	口縁部内・外面へラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 赤色 良好	P1272 5% 覆土中
3	埴土師器	A[17.4] B(4.2)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部内・外面横毛目調整。	砂粒・炭屑・スコリア にふい橙色 普通	P1273 5% 覆土中
4	埴土師器	A[13.8] B(6.7)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横毛目調整。	砂粒・灰石・炭屑・スコリア 橙色 普通	P1274 5% 覆土中

### 第289号住居跡（第163図）

位置 調査6区南部，N14a3区。

重複関係 第292号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。また第291号住居跡に掘り込まれているので，本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.28m，短軸2.90mの長方形である。

主軸方向 N-1°-E

壁 壁高は20～24cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅12cm，下幅8cm，深さ7cmほどで，断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁北東コーナー寄りに付設されている。煙道部が第291号住居跡に掘り込まれ遺存状況が悪く，規模は長さ[60]cm，軸幅100cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りこぼめられている。

#### 埴土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量

ピット 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は径35cmの円形で，深さ25cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

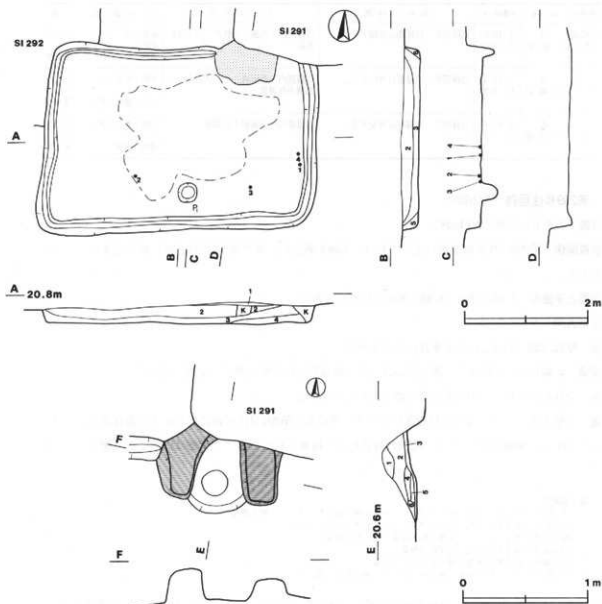
覆土 6層からなり，自然堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・炭化物・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片188点，須恵器片7点が出土している。1の土師器坏は東壁際の床面直上から正位で，2の土師器坏は中央付近の覆土下層から，3の土師器坏は南東コーナー付近の覆土下層から，4の上師器小形壺は東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

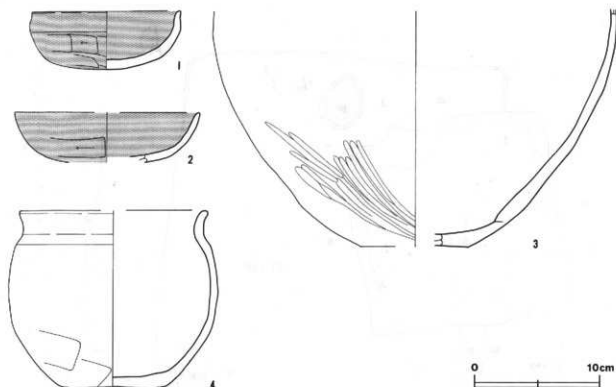
所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の7世紀前半と考えられる。



第163図 第289号住居跡実測図

第289号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第164図 1	坏 土器	A 11.6	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部ヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・スコリアにふい・褐色普通	P1275 95% 東豊原床直
		B 4.6				
2	坏 土器	A〔14.6〕	底部・体部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部ヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 赤褐色 普通	P1276 45% 中央付近覆土下層
		B〔4.0〕				
3	壺 土器	B〔8.8〕	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部下位縦方向のヘラ磨き。内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリアにふい・褐色 普通	P1277 20% 南東コーナ 一付近覆土下層
		C〔8.6〕				
4	小形壺 土器	A〔14.4〕	体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、上位に弱い稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ナデ。内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 灰褐色 普通	P1278 45% 東豊原覆土下層
		B 14.1				
		C 8.8				



第164図 第289号住居跡出土遺物実測図

#### 第290号住居跡 (第165図)

位置 調査6区南部, N14c4区。

重複関係 第291号住居跡に掘り込まれており, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸6.11m, 短軸5.14mの長方形である。

主軸方向 N-8°-W

壁 壁高は10cmほどで, 緩やかに立ち上がる。

床 全体的に平坦で, 軟らかい。

炉 中央部からやや北壁寄りに付設されている。長径90cm, 短径65cmの楕円形で, 床を3cmほど掘りくぼめた地床炉である。

#### 炉土層解説

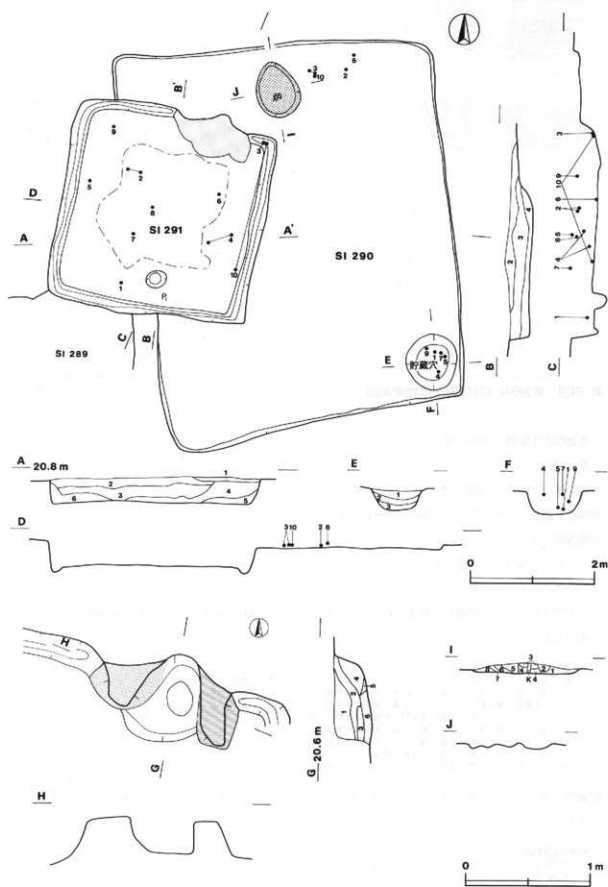
- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子中量, 炭化粒子少量
- 5 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 8 褐色 ローム粒子多量, ローム大・小ブロック微量

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。長径95cm, 短径85cmの楕円形で, 深さ35cmである。断面形は鍋底状をしている。

#### 貯蔵穴土層解説

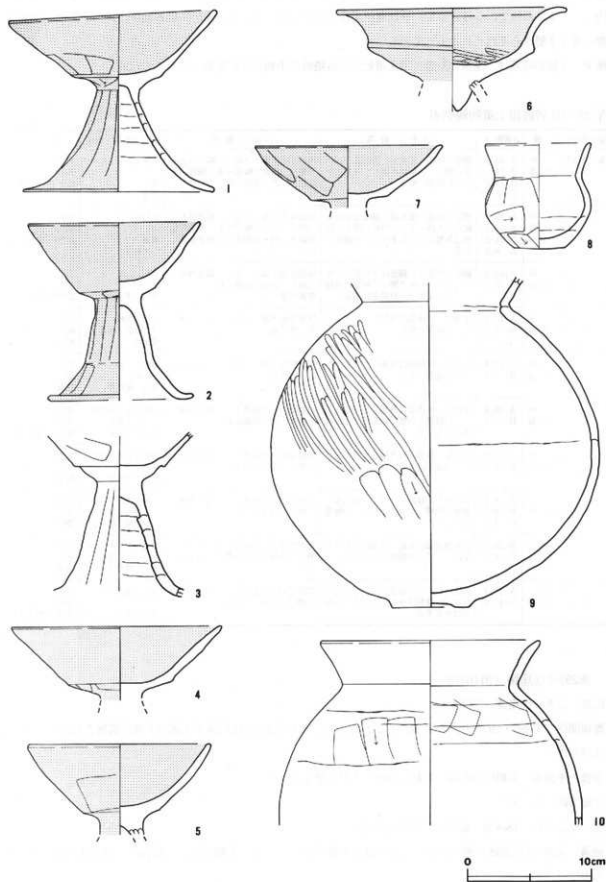
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子中量

覆土 覆土が浅く, 不明である。



第165图 第290・291号住居跡实测图





第166图 第290号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片362点、須置器片41点が出土している。1, 4, 5, 7の土師器高坏、9の土師器甕は貯蔵穴内から、1は斜位で、5は正位で、9は逆位で出土している。2, 3, 6の土師器高坏、10の土師器甕は北壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代中期の5世紀前半と考えられる。

第290号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第196図	高土師器 1	高 16.4 上 14.7 脚 15.2 底 8.3	胴部・坏部一部欠損。胴部はラッパ状に開く。坏部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	坏部外面下端へラ削り。胴部外面へラ削り。内面に輪襷み痕。胴部内面を除き、内・外面赤彩。	砂粒・石英・スコリア 褐色 普通	P1279 90% 貯蔵穴内
2	高土師器 2	高 13.7 上 14.3 D 11.2 E 8.5	胴部・坏部一部欠損。胴部は中位で膨らみを持ってラッパ状に開く。坏部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	坏部外面下端へラ削り。胴部外面へラ削り。内面に輪襷み痕。胴部内面を除き、内・外面赤彩。磨減が著しい。	砂粒・雲母 赤色 普通 二次焼成	P1280 50% 北壁際覆土下層
3	高土師器 3	高 13.2 上 9.0	胴部・坏部片。胴部はやや膨らみを持ってラッパ状に開く。坏部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	坏部外面下端へラ削り。胴部外面へラ削り。内面に輪襷み痕。磨減が著しい。	砂粒・石英・スコリア 褐色 普通	P1281 35% 北壁際覆土下層
4	高土師器 4	高 16.8 上 5.8	坏部片。坏部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	坏部外面下端へラ削り。内・外面赤彩。煤付着。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通 煤付着	P1282 50% 貯蔵穴内
5	高土師器 5	高 14.4 上 7.3	坏部片。坏部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	坏部外面下端へラ削り。内・外面赤彩。煤付着。	砂粒・雲母 赤色 普通 煤付着	P1283 45% 貯蔵穴内
6	高土師器 6	高 18.5 上 6.1	坏部片。坏部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通 煤付着	P1284 40% 北壁際覆土下層
7	高土師器 7	高 15.0 上 5.0	坏部片。坏部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内・外面赤彩。	砂粒・石英・雲母 赤色 普通 煤付着	P1285 40% 貯蔵穴内
8	甕土師器 8	A 8.5 B 8.5 C 4.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通 二次焼成 煤付着	P1286 55% 覆土中
9	甕土師器 9	A 26.5 B 6.4	口縁部欠損。平底。体部は球形状を呈している。口縁部は外反する。	体部外面上位から中位にかけてへラ磨き。体部下位へラ削り。内面へラナデ。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通 煤付着	P1287 80% 貯蔵穴内
10	甕土師器 10	A 17.4 B 14.9	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は球形状を呈している。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P1288 40% 北壁際覆土下層

### 第292号住居跡 (第167図)

位置 調査区6区南部, N14e2区。

重複関係 第289・293号住居跡に掘り込まれており、また第273号住居跡が本跡の上部に構築されているので、本跡が古い。

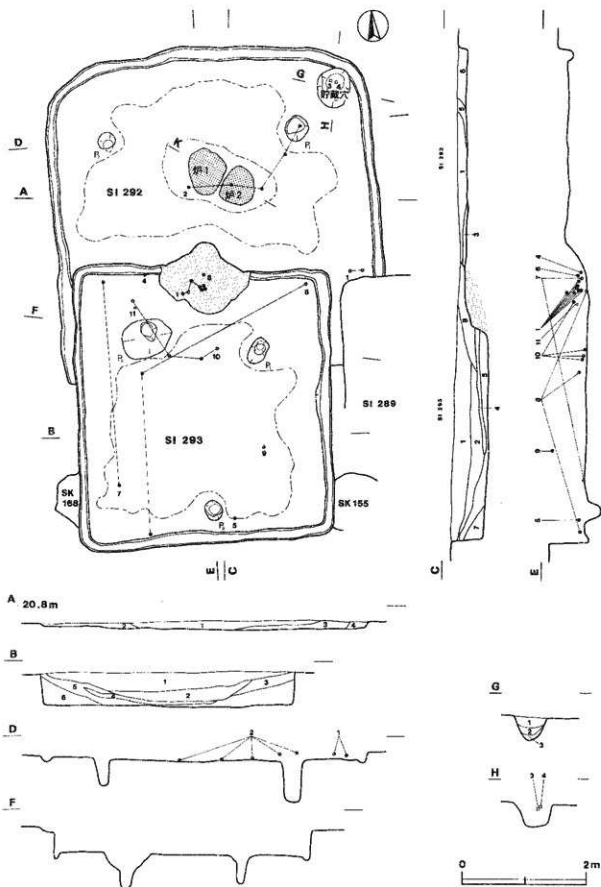
規模と平面形 長軸[5.30]m、短軸5.23mの方形と推定される。

主軸方向 N-0°

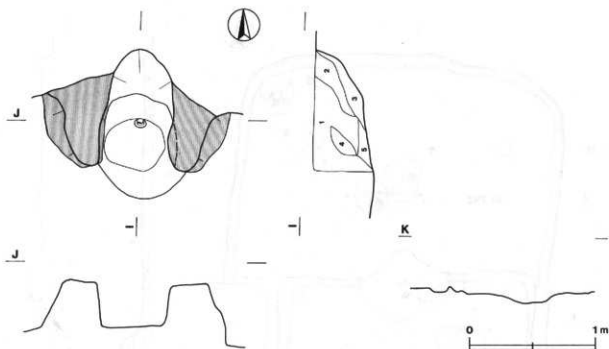
壁 壁高は10~18cmで、緩やかに立ち上がる。

壁溝 第293号住居跡に掘り込まれている部分を除き巡っている。上幅15cm、下幅10cm、深さ10cmほどで、断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で、北壁から中央部にかけてよく踏み固められている。



第167图 第292·293号住居跡実測图



第168図 第293号住居跡実測図

炉 2か所。いずれも中央部からやや北壁寄りに付設されている。炉1は長径70cm、短径60cmの楕円形で、10cmほど掘りくぼめられた地床炉である。炉2は長径60cm、短径50cmの楕円形で、20cmほど掘りくぼめられた地床炉である。2か所ともよく使われており、暗赤褐色に変色し硬く焼き締まっている。

ピット 2か所(P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>は径35~40cmの円形で、深さ60~70cmである。いずれも主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部に付設されている。長径65cm、短径55cmの楕円形で、深さ40cmである。断面形は鍋底状をしている。

**貯蔵穴土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・ローム中ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量

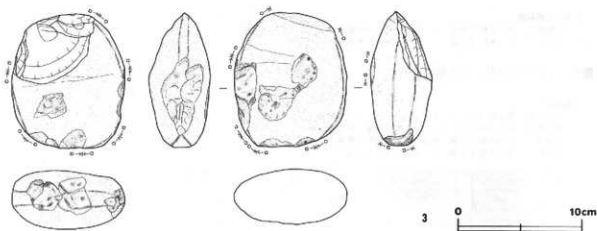
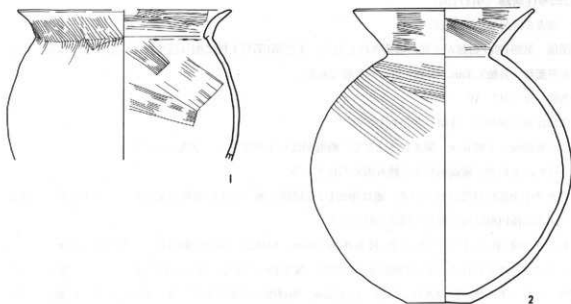
覆土 6層からなり、自然堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量

遺物 土師器片397点、須恵器片9点、石器2点が出土している。1の土師器甕は東壁際の覆土下層から、2の土師器壺は炉付近とP<sub>1</sub>付近の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代前期の4世紀前半と考えられる。



第169図 第292号住居跡出土遺物実測図

第292号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第169図 1	甕 土器	A (17.2) B (12.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面，体部外面刷毛目調整。内面一部刷毛目調整。	砂粒・長石・雲母・スコリア 明赤褐色 普通 二次焼成	F1299 20% 東壁階層土下層
2	甕 土器	A 14.6 B 23.8 C 5.3	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は球形状を呈している。口縁部は外反する。	口縁部内・外面，体部外面ヘラ磨き。内面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母・スコリア 明赤褐色 普通 二次焼成	F1300 40% 伊付近層土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
3	敲石	10.6	8.9	4.5	577	貯蔵穴内	Q1003 ホーンフェルス 100%
4	敲石	13.3	6.3	6.3	614	貯蔵穴内	Q1002 ホーンフェルス 実測図なし

### 第295号住居跡 (第171図)

位置 調査6区南部, N14a区。

重複関係 第294号住居跡が上部に構築されており, また第155号土坑に掘り込まれているので, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.35m, 短軸5.21mの方形である。

主軸方向 N-31°-W

壁 壁高は26~38cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅10cm, 下幅6cm, 深さ5cmほどで, 断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で, 竜前面がよく踏み固められている。

竈 北西壁中央部に付設されている。竈は第294号住居跡に掘り込まれ遺存状況は悪く, 火床部だけを確認した。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられている。

ピット 5か所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は長径30~35cm, 短径25~30cmの楕円形で, 深さ31~55cmである。いずれも主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は径25cmの円形で, 深さ45cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北コーナー部に付設されている。長径75cm, 短径60cmの楕円形で, 深さ20cmである。断面形は皿状をしている。

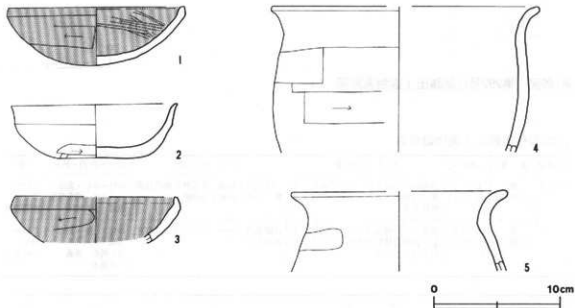
#### 貯蔵穴土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム大ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量

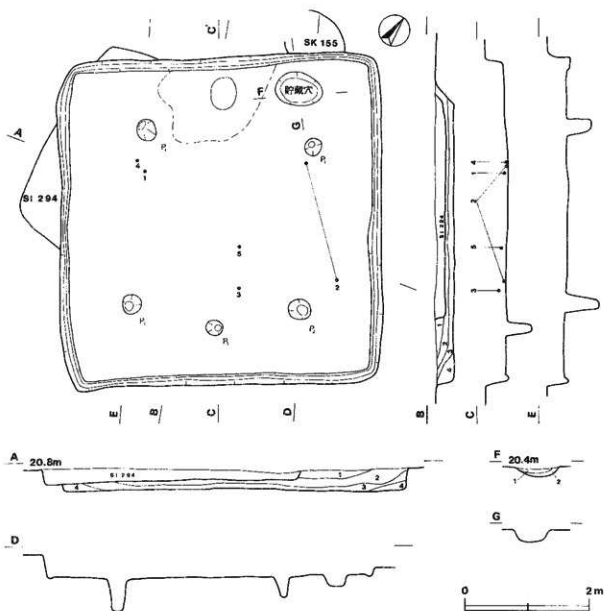
覆土 4層からなり, 自然堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量



第170図 第295号住居跡出土遺物実測図



第171図 第295号住居跡実測図

遺物 土師器片433点、須恵器片9点がそれぞれ出土している。1の上師器坏は中央付近の床面直上から逆位で、2の土師器坏は北東壁際の床面直上から正位で、3の土師器坏、5の上師器甕は中央付近の覆上下層から、4の土師器甕は中央付近の床面直上からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の7世紀前半と考えられる。

第295号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第170図 1	坏 上師器	A 13.9 B 4.6	口縁部一帯欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部・底部外面へつ削り。内面へつ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒 内・外面黒色 普通	P1317 90% 中央付近床直

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第170図 2	坏 土 罎 器	A 13.0 B 4.4 C 6.4	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に壁を持つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。	灰石・岩屑にぶく褐色普通	P1318 60% 中央付近赤味
3	坏 土 罎 器	A 12.8 B 3.6	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内・外面紫色地埋。	砂粒 内・外面黒色 良好	P1319 10% 中央付近黒土下層
4	埴 土 罎 器	A 22.0 B 11.5	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・石灰・長石にぶく褐色良好	P1320 10% 中央付近赤味
5	埴 土 罎 器	A 16.8 B 6.3	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒・石灰・長石にぶく黄褐色 良好	P1321 10% 中央付近黒土下層

### 第305号住居跡 (第172図)

位置 調査6区南部、N13bdX。

重複関係 第303号住居跡に掘り込まれており、また第273・306号住居跡が本跡の上部に構築されているので、本跡が古い。

規模と平面形 東西軸5.17m、南北軸(3.30)mで、ほとんどが第303号住居跡に掘り込まれ平面形は不明である。

軸方向 [N-17°-W]

壁 壁高は23~40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 東壁下の一部を除き確認した。上幅10~15cm、下幅5~8cm、深さ5cmほどで、断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で、中央部付近がよく踏み固められている。

覆土 6層からなり、ブロック状の堆積をされており人為堆積である。

#### 土層解説

- 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 藍暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 藍暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム小ブロック微量
- 藍暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 藍暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 緑褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、炭化粒子・ローム粒子微量

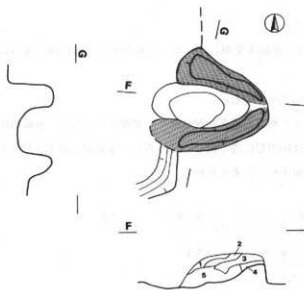
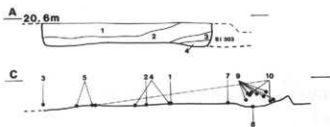
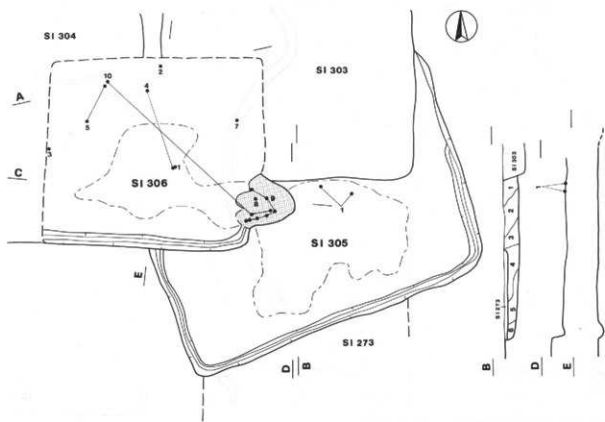
遺物 土師器片123点、須恵器片35点が出土している。1の土師器片は中央付近の覆土下層から、2の須恵器高台付坏、3の須恵器甕は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡に伴う遺物は少なく明確な時期は決められないが、9世紀後半の第303号住居跡に掘り込まれていることから、古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。

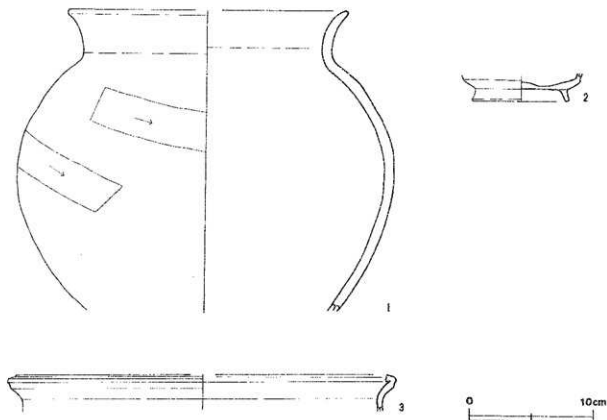
### 第305号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第173図 1	罎 土 罎 器	A 22.4 B (24.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈している。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	石灰・長石 褐色 普通 外面付着	P1368 40% 中央付近覆土下層
2	高台付坏 須 恵 器	B 2.2 D 7.6 E 0.9	底部片。高台はへらの字状に開く。	底面回転へラ切り後、高台貼り付け。	砂粒・石灰・長石 青灰色 普通	P1370 10% 覆土中
3	罎 須 恵 器	A 29.8 B (2.9)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石灰・長石 雲母 黄灰色 普通	P1369 5% 覆土中





第172图 第305·306号住居跡実測图



第173図 第305号住居跡出土遺物実測図

### 第309号住居跡（第174図）

位置 調査6区南部，N13ds区。

重複関係 第296・308・310号住居跡，および第166号上坑に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.32m，短軸3.99mの方形である。

主軸方向 N-92°-W

壁 壁高は20~26cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 第308号住居跡に掘り込まれている部分を除き全周している。上幅20cm，下幅12cm，深さ10cmほどで，断面形は逆台形である。

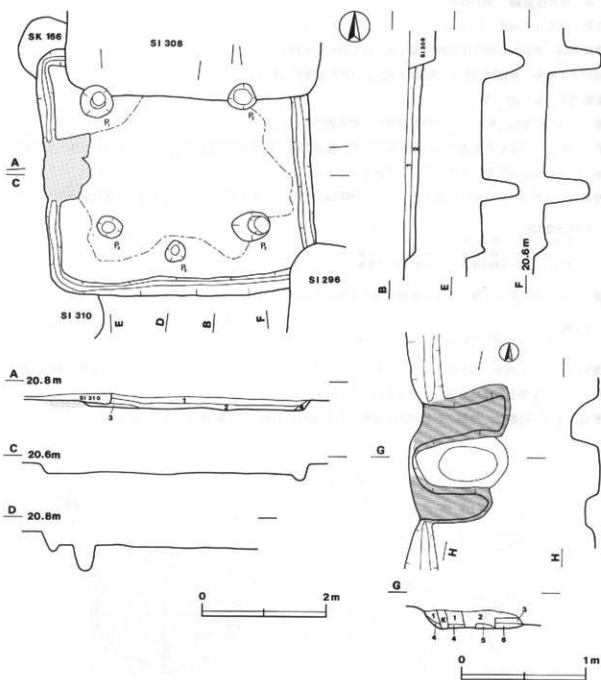
床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈 西壁中央部に付設されている。削平により袖部の遺存状況は悪く，規模は長さ75cm，袖幅[105]cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられ，煙道部は削平され不明である。竈内には雲母片岩があり，袖部の補強材に使用されたと考えられる。

#### 産土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土小ブロック微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック・ローム小ブロック微量
- 3 赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・焼土小ブロック・ローム粒子微量
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子微量

ピット 5か所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は径40~55cmの円形で，深さ62~87cmである。いずれも主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は径35cmの円形で，深さ38cmである。出入口に伴うピットと考えられる。



第174図 第309号住居跡実測図

覆土 4層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物 土師器片158点、須恵器片6点が出土している。ほとんどが細片である。

所見 本跡に伴う遺物が少なく時期は明確にできないが、甕を有することと出土している土師器片から、古墳時代後期の7世紀後半と推定される。

### 第316号住居跡（第176図）

位置 調査6区西部、N13a7区。

重複関係 第313～315号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸[4.94]m、短軸[4.52]mの方形と推定される。

主軸方向 N-10°-W

床 全体的に平坦で軟らかく、炉周辺がやや踏み固められている。

炉 中央部からやや北壁寄りに付設されている。長径75cm、短径40cmの楕円形で、床を3cmほど掘りくぼめた地床炉である。火床部は赤変しブロック状をしている。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。径60cmの円形で、深さ37cmである。断面形は鍋底状をしている。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量

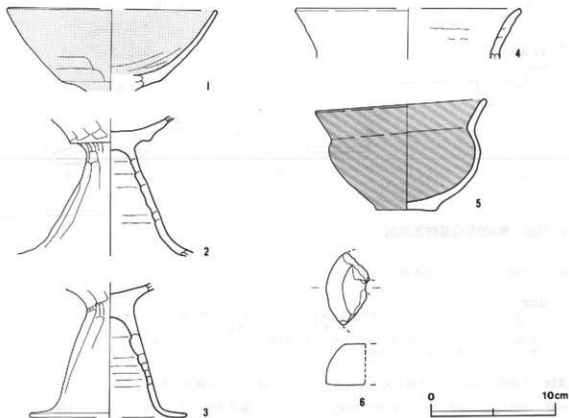
覆土 単一層であり、覆土が浅く堆積状況は不明である。

#### 土層解説

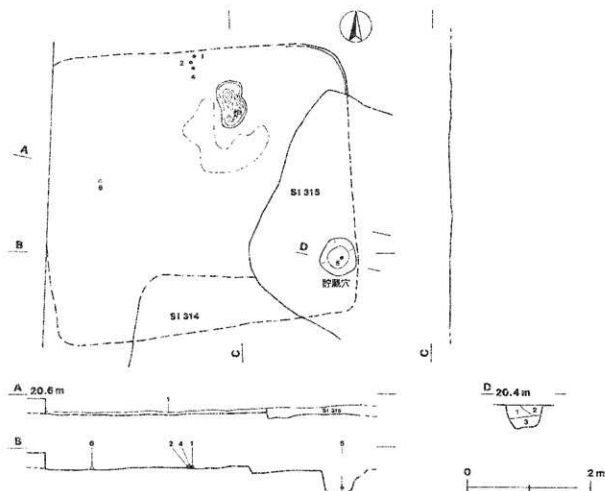
- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 土師器片26点、須恵器片3点、土製品1点が出土している。1、2の土師器高坏は北壁際の覆土下層から、5の土師器小形壺は貯蔵穴内から正位でそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代中期の5世紀前半と考えられる。



第175図 第316号住居跡出土遺物実測図



第176図 第316号住居跡実測図

第316号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地味	備考
第175図 1	高 土 師 器	A: 17.0 B: 6.6	坏部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・石英・スコリア 灰色 普通	P1431 30% 北陸階層土下層
2	高 土 師 器	B(11.3) E( 8.7)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。	脚部外面ヘラ削り。内面に輪轆み痕。	砂粒・雲母・スコリア 灰色 普通	P1432 50% 北陸階層土下層
3	高 土 師 器	B(10.9) D(11.4) E 9.1	脚部片。脚部はラッパ状に開く。	脚部外面ヘラ削り。内面に輪轆み痕。	砂粒・雲母・スコリア 灰色 普通	P1433 40% 黄土中
4	壺 土 師 器	A(18.0) B( 4.1)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通 煤付着	P1434 10% 北陸階層土下層
5	小形 土 師 器	A 13.7 B 9.0 C 4.8	口縁部一強欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は各反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。内・外面磨減が著しい。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 内・外面黒色 普通 煤付着	P1435 90% 貯蔵穴内

図版番号	種別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
6	防 鉢 平	(3.9)	2.3	[0.7]	(33)	西陸階層土下層	D P1006 30%

第318号住居跡（第178図）

位置 調査6区西部，M13<sub>18</sub>区。

重複関係 第317号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 北東軸(5.10)m，南東軸(4.20)mで，西部が調査区域外に延びており平面形は不明である。

主軸方向 N-57°-E

壁 壁高は8～11cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 調査区域外を除き，ほぼ全周している。上幅12cm，下幅7cm，深さ5cmほどで，断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で，全体的によく踏み固められている。

竈 北東壁東コーナー寄りに付設されている。削平され火床部のみを確認した。

土層解説

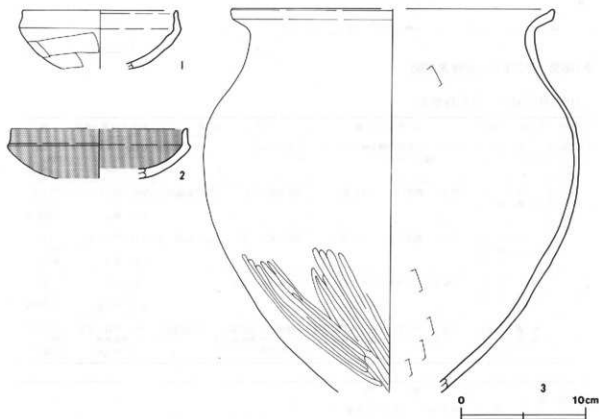
- 1 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量，炭化物・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 4か所(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は径40～45cmの楕円形で，深さ48～63cmである。いずれも支柱穴と考えられる。P<sub>4</sub>は径32cmの円形で，深さ25cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

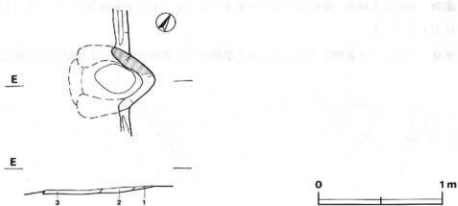
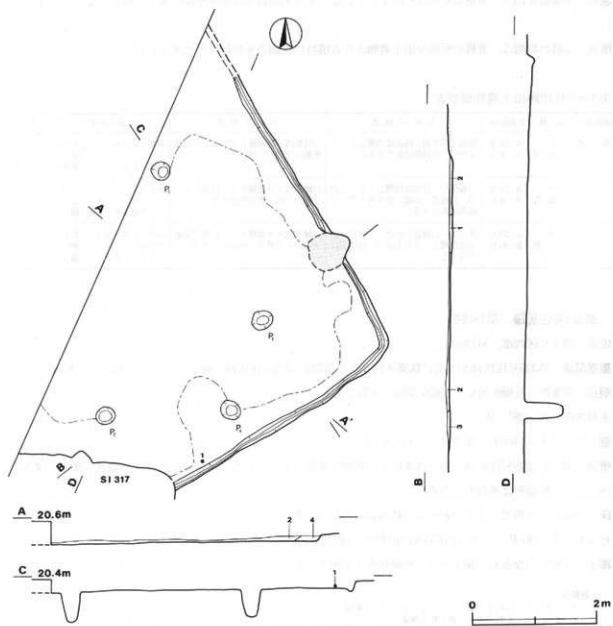
覆土 4層からなるが，覆土が浅く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子少量



第177図 第318号住居跡出土遺物実測図



第178图 第318号住居跡实测图

**遺物** 土師器片78点、須恵器片10点が出土している。1の土師器坏は南東壁際の覆土下層から正位で出土している。

**所見** 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。

第318号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第177図 1	坏 土師器	A 12.4 B (4.7)	底部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へう磨り。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P1441 80% 南東壁際覆土下層
2	坏 土師器	A[14.2] B (4.0)	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有する。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう磨り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 内・外面黒色 普通	P1442 5% 覆土中
3	壺 土師器	A[25.8] B (30.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のへう磨き。内面へうナデ。	砂粒・石英・長石・ 雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P1443 40% 覆土中

### 第323号住居跡（第180図）

**位置** 調査6区西部、M13a区。

**重複関係** 第320号住居跡が上部に構築され、また第324～326号住居跡に掘り込まれているので、本跡が古い。

**規模と平面形** 長軸6.91m、短軸6.30mの方形である。

**主軸方向** N-28°-W

**壁** 壁高は4～14cmで、緩やかに立ち上がる。

**壁溝** 第324、325号住居跡に掘り込まれている部分を除き巡っている。上幅15～20cm、下幅8～10cm、深さ5cmほどで、断面形は逆台形である。

**床** 全体的に平坦で、中央付近がよく踏み固められている。

**ピット** 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は径55cmの円形で、深さ44cmである。支柱穴と考えられる。

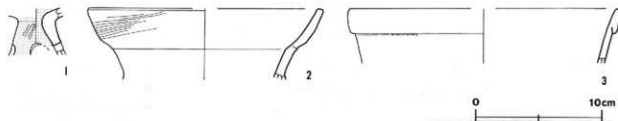
**覆土** 5層からなるが、覆土が浅く堆積状況は不明である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
- 5 極暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量

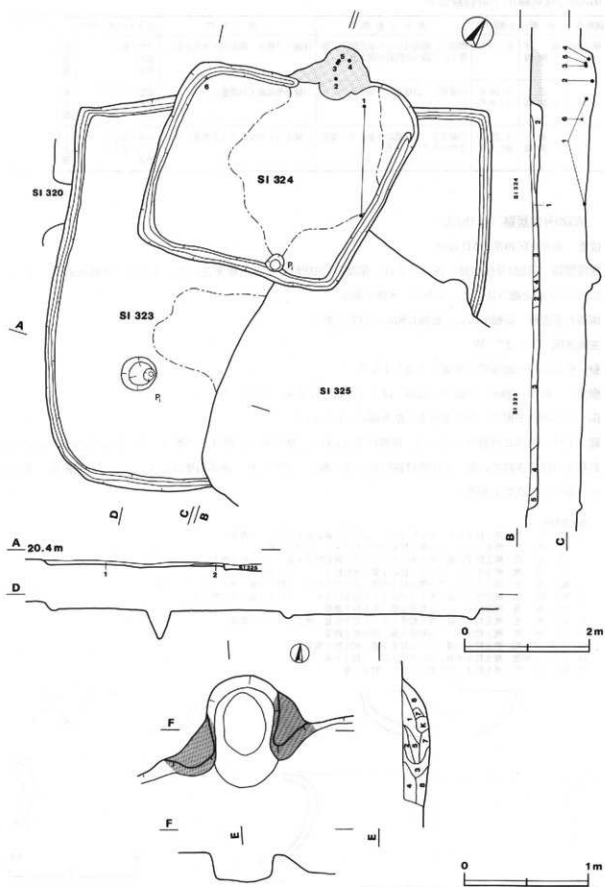
**遺物** 土師器片44点、須恵器片4点が出土している。1の土師器高坏、2、3の土師器壺は覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 本跡に伴う遺物は少ないが、出土遺物から古墳時代前期の4世紀前半と推定される。



第179図 第323号住居跡出土遺物実測図





第180图 第323·324号住居跡実測図

第323号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	丁法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第179図 1	高 土 師 器	K( 3.7)	胴部片。胴部はラップ状に開く。胴部中央に四つの円孔が穿たれている。	外面へラ磨き。胴部内・外面赤彩。	砂粒・岩母 褐色 普通	P1459 5% 覆土中
2	深 土 師 器	A.18.6 B( 5.6)	口縁部片。口縁部は外傾する。	口縁部外面研毛目調整。	砂粒・スコリア 灰褐色 普通	P1460 5% 覆土中
3	壺 土 師 器	A.21.4 B( 4.3)	口縁部片。口縁部は外傾する。胎部は折り返されている。	口縁部内・外面刷毛目調整後、ナデ。	石英・長石 にぶい黄褐色 普通	P1461 5% 覆土中

第325号住居跡 (第182図)

位置 調査6区西部、M14<sub>1</sub>区。

重複関係 第324号住居跡に掘り込まれ、第326号住居跡が上部に構築されているので、本跡が古い。また第323号住居跡を掘り込んでいるので、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸5.07m、短軸4.86mの方形である。

主軸方向 N-2°-W

壁 壁高は16~22cmで、外傾して立ち上がる。

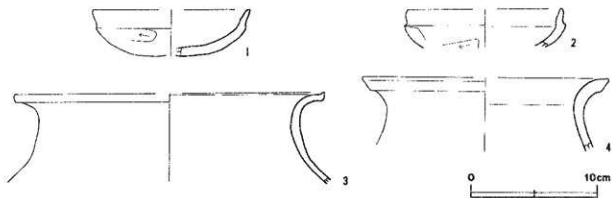
壁溝 上幅15~20cm、下幅10~12cm、深さ7cmほどである。全周している。

床 全体的に平坦で、中央部がよく踏み固められている。

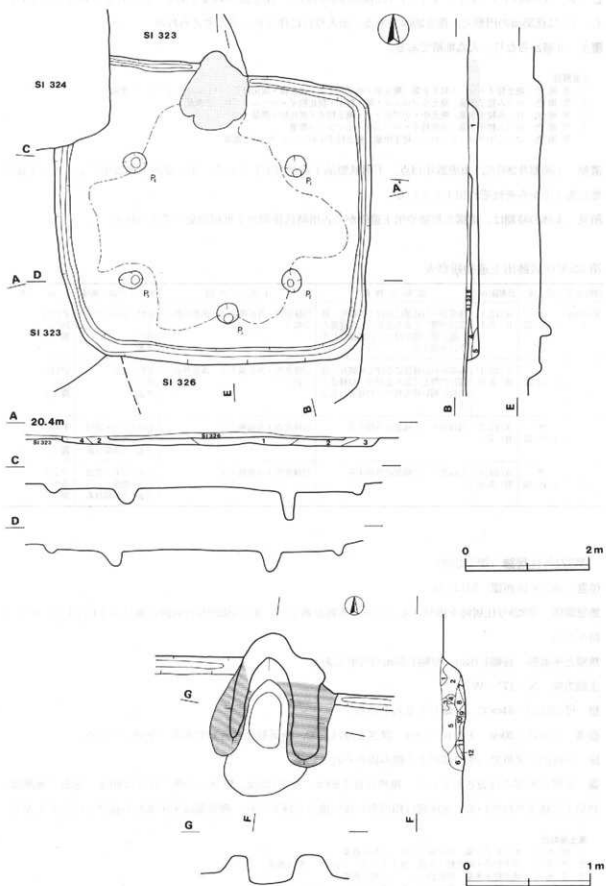
竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ130cm、袖幅90cm、壁外への掘り込みは20cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りこぼめられ、袖部内壁は赤変している。煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

壺土層解説

- 1 餅 褐色 焼土粒子多量、炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック微量
- 2 暗 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 暗 褐色 焼土粒子中量、焼土中・小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 4 赤 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子・ローム粒子少量
- 5 暗 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子少量、焼土中ブロック微量
- 6 暗 褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量、炭化物微量
- 7 暗 褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 8 暗 褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック微量
- 9 暗 褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 10 にぶい褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 11 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子少量
- 12 暗 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量



第181図 第325号住居跡出土遺物実測図



第182图 第325号住居跡実測図

ピット 5か所(P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は径35cmの円形で、深さ23～44cmである。いずれも土柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は径35cmの円形で、深さ20cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土中・小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
- 5 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片266点、須恵器片14点、不明鉄製品1点が出土している。1、2の土師器片、3、4の土師器片は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の7世紀前後と考えられる。

第325号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第181図 1	埴土師器	A[12.4] B 3.7	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P1471 10% 覆土中
2	埴土師器	A[12.4] B(3.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒・雲母 褐色 普通	P1472 10% 覆土中
3	埴土師器	A[12.2] B(7.3)	口縁部片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通 外面横ナデ着	P1469 10% 覆土中
4	埴土師器	A[19.4] B(5.8)	口縁部片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通 外面横ナデ着	P1470 5% 覆土中

第327号住居跡 (第183図)

位置 調査6区西部、M14f区。

重複関係 第328号住居跡に掘り込んでおり、本跡が新しい。また第329号住居跡に掘り込まれているので、本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.04m、短軸3.75mの方形である。

主軸方向 N-17°-W

壁 壁高は20～34cmで、外傾して立ち上がる。

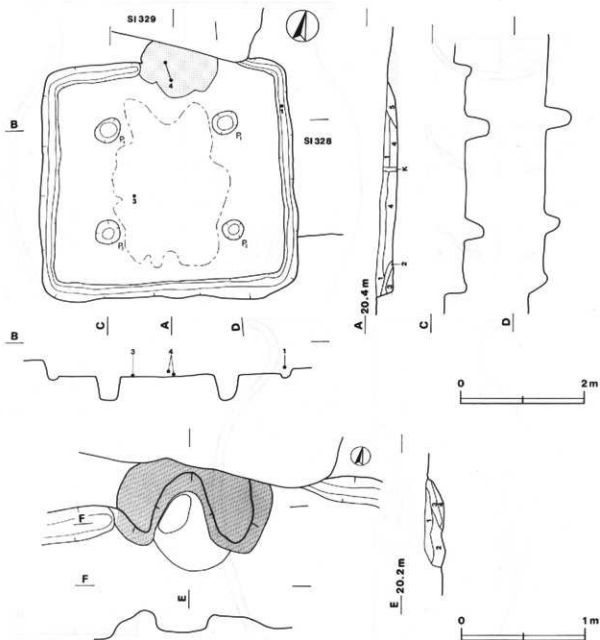
塹溝 上幅15～20cm、下幅10～12cm、深さ5cmほどで、断面形は逆台形である。全周している。

床 全体的に平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ80cm、袖幅125cm、壁外への掘り込みは20cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられ、煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

遺土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック・ローム粒子微量
- 3 赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子・ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量、焼土小ブロック・ローム粒子微量



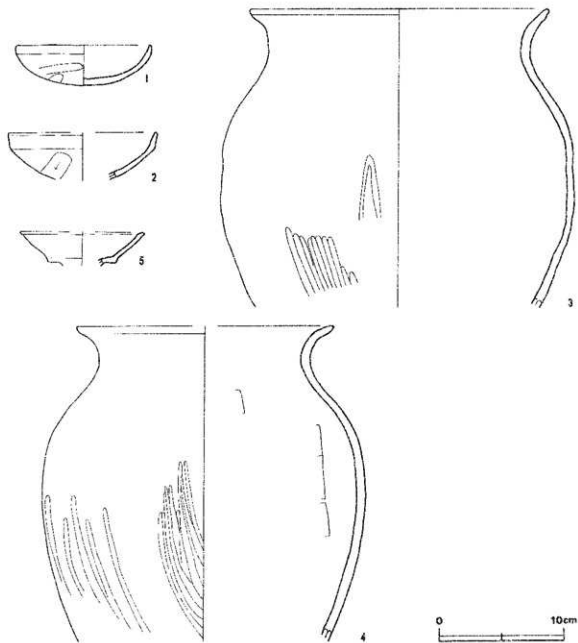
第183図 第327号住居跡実測図

ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は径35~40cmの円形で、深さ24~40cmである。いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 5層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
- 5 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量



第184図 第327号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片183点、須恵器片3点が出土している。1の土師器杯は東壁際の覆土中層から、3の土師器甕は中央付近の覆土下層からつぶれた状態で、4の土師器甕は竈内からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の7世紀後半と考えられる。

第327号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	寸法(cm)	器 形 の 特 徴	丁 法 の 特 徴	胎土・色裏・焼成	備 考
第184図 1	杯 土 師 器	A 10.6 B 3.2	口縁部 范欠肌、体部は内齊して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部・底部 外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア 橙色 良好	P1475 10% 東壁階覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第184図 2	坏 土 罎 器	A[11.8] B( 3.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。	砂粒・スコリア 褐色 青透	P1476 25% 覆土中
3	甕 土 罎 器	A 24.0 B (24.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のへラ磨き。内・外面磨減が著しい。	石英・長石・雲母・ スコリア 褐色 青透 外面煤付着	P1477 40% 中央付近覆土下層
4	甕 土 罎 器	A[20.6] B(25.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のへラ磨き。内面へラナデ。	石英・雲母・スコリア 褐色 青透 外面煤付着	P1478 20% 壺内
5	通 須 壺 器	A[ 9.9] B( 2.7)	口縁部片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 黄灰色 良好 内面自然熱	P1479 5% 覆土中

### 第328号住居跡 (第186図)

位置 調査6区西部, M14f区。

重複関係 第327・329・330・339号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸6.00m, 短軸[5.88]mの方形と推定される。

主軸方向 N-22°-W

壁 壁高は8~16cmで、緩やかに立ち上がる。

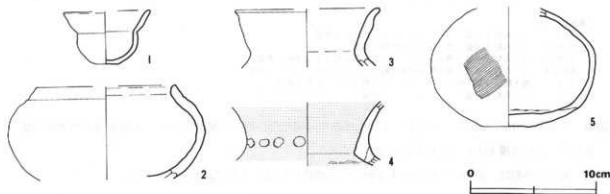
床 全体的に平坦で、中央部がよく踏み固められている。

炉 中央部からやや北壁寄りに付設されている。長径55cm, 短径48cmの楕円形で、10cmほど掘りくぼめた地床炉である。火床部は赤変し、ブロック状になっている。

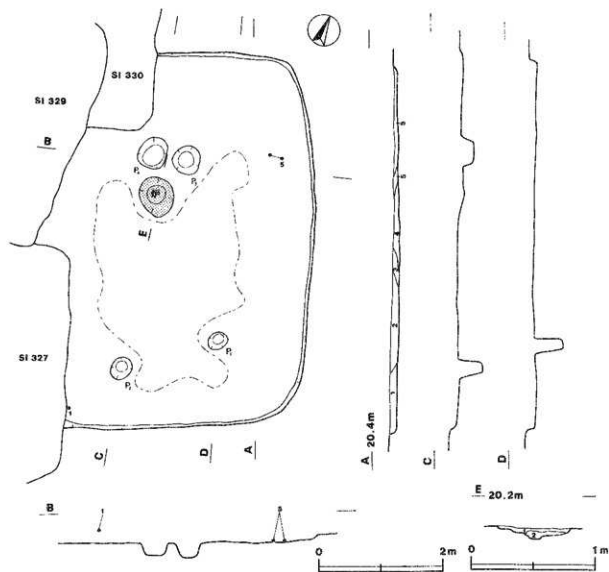
#### 伊土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子中量
- 2 極暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量

ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>は径30cmの円形で、深さ46cmである。主柱穴と考えられる。P<sub>2</sub>は径35cmの円形で、深さ38cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。P<sub>3</sub>, P<sub>4</sub>は45~55cmの円形で、深さ20~26cmである。性格は不明である。



第185図 第328号住居跡出土遺物実測図



第186図 第328号住居跡実測図

覆土 6層からなるが、覆土が浅く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
- 5 黒褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

遺物 土師器片215点が出土している。1の土師器地は南壁際の覆土中層から、5の土師器壺は東壁際の覆土下層から、ほかは覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代前期の4世紀前半と考えられる。



第328号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第184図 1	埴土器	A(6.7) B 4.2 C 1.6	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・長石・スコリア 褐色 良好	P1480 45% 南壁側覆土中層
2	鉢土器	A 11.0. B(7.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。外面磨減が著しい。	砂粒・スコリア 褐色 普通	P1481 30% 覆土中
3	壺土器	A(11.2) B(4.6)	口縁部片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 褐色 普通	P1482 10% 覆土中
4	壺土器	B(5.1)	口縁部片。口縁部は外反する。	頸部下位に円形浮文が貼り付けられている。内・外面赤彩。外面磨減が著しい。	砂粒・スコリア 外面にぶい褐色・ 内面暗赤色 普通	P1483 5% 覆土中
5	壺土器	B(9.4) C 3.7	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内傾して立ち上がる。	体部外面刷毛目調整後、ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石・スコリア 灰青色 普通	P1484 45% 東壁側覆土下層

## 第330号住居跡 (第187・188図)

位置 調査6区西部, M14a区。

重複関係 第329・339号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。また第328号住居跡を掘り込んでいるので、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸6.40m, 短軸6.21mの方形である。

主軸方向 N-18°-W

壁 壁高は5~20cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅10~12cm, 下幅8~10cm, 深さ8cmほどで、断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で、電前面から中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。削平により袖部の遺存状況は悪く、規模は長さ95cm, 袖幅115cm, 壁外への掘り込みは15cmほどである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられ、煙道部は削平され不明である。

## 遺土層解説

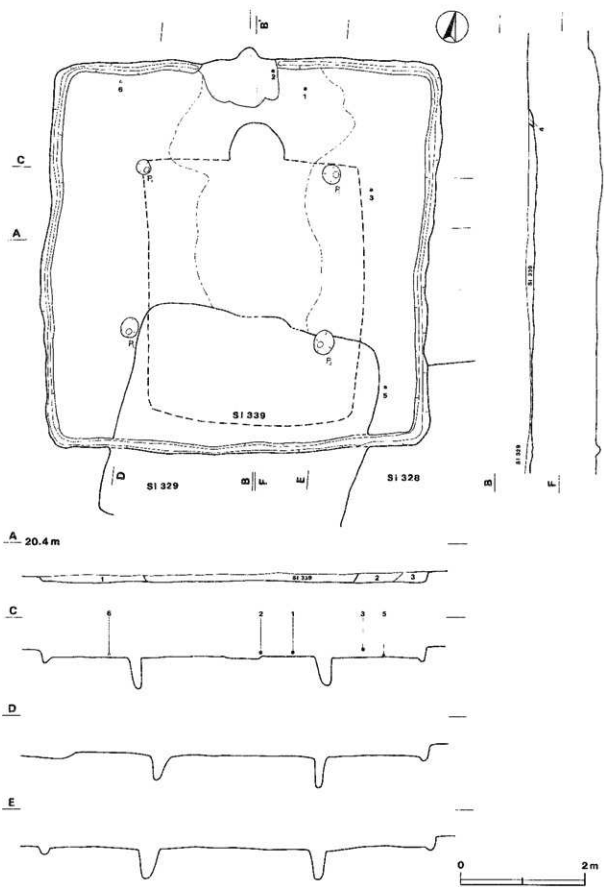
- 1 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土中・小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 7 にぶい黄褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 8 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量, 焼土粒子微量

ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は径25~45cmの円形で、深さ42~51cmである。いずれも主柱穴と考えられる。

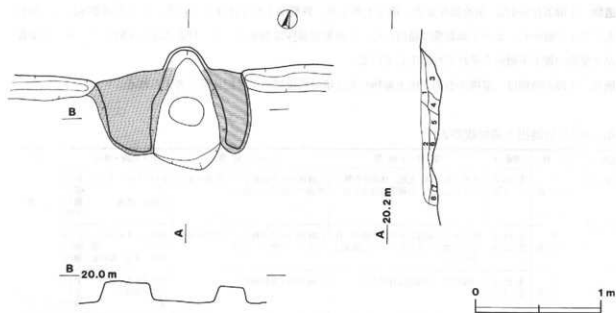
覆土 4層からなるが、覆土が浅く堆積状況は不明である。

## 土層解説

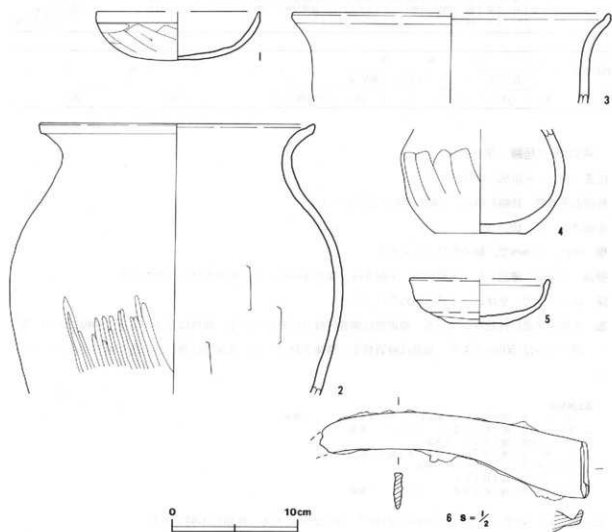
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化物・ローム中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム大ブロック微量



第187图 第330号住居跡実測図



第188图 第330号住居跡実測図



第189图 第330号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片194点, 須恵器片2点, 縄文土器1点, 鉄製品1点が出土している。1の土師器坏は竈右袖付近の覆土下層から, 2の土師器壺は竈内から, 5の須恵器坏は南東コーナー付近の覆土下層から, 6の鉄製鎌が北壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の7世紀後半と考えられる。

第330号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特長	手法の特長	胎土・色調・成成	備考
第190図 1	年 土師器	A113.2 B 4.0	体部一部欠損, 丸底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面ヘラ削り。内面ナデ。	砂粒・灰石・スコリア 灰褐色 普通	P1488 65% 竈右袖付近覆土下層
2	壺 土師器	A 23.9 B(21.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のヘラ磨き。内面ヘラナデ。	砂粒・石灰・雲母・スコリア 灰褐色 普通 灰付着	P1489 50% 竈内
3	甕 土師器	A25.4 B(7.2)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・灰石・雲母にぶい黄褐色 普通	P1490 5% 北壁跡覆土中層
4	小形壺 土師器	B(8.5) C 7.2	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り。内面ナデ。底部ヘラナデ。	砂粒・灰石・雲母・スコリア 赤色 普通 片断集付着	P1527 45% 覆土中
5	坏 須恵器	A111.0 B 3.6 C 4.4	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面クロコナナデ。底部回転ヘラ切り。	緑粒 灰褐色 黄砂	P1492 50% 南東コーナー付近覆土下層

図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
6	鎌	(14.4)	3.9	0.4	(S3) 北壁跡覆土下層	M1031 80%

### 第331号住居跡 (第190図)

位置 調査6区南部, O13rdC。

規模と平面形 長軸4.27m, 短軸2.98mの長方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 壁高は2~8cmで, 緩やかに立ち上がる。

壁溝 北壁下で確認した。上幅10cm, 下幅5cm, 深さ3cmほどで, 断面形はU字形である。

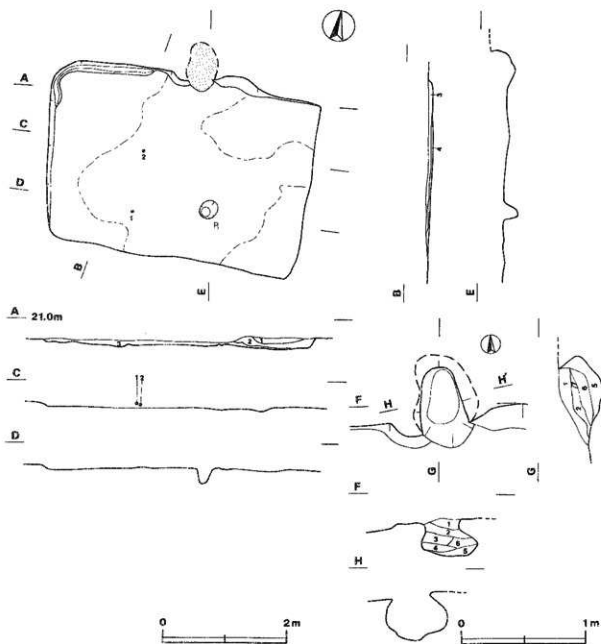
床 ほぼ平坦で, 全体によく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。煙道部は調査区域外に延びている。規模は長さ(80)cm, 幅(70)cm, 壁外への掘り込みは(50)cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられている。

#### 甕土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子少量, 焼土粒子・ローム中・小ブロック微量
- 2 褐色 焼土粒子少量, ローム小ブロック微量
- 3 にぶい赤褐色 焼土大ブロック多量
- 4 赤褐色 焼土中ブロック多量, 焼土粒子少量
- 5 明黄褐色 ローム中ブロック少量
- 6 にぶい赤褐色 焼土粒子多量
- 7 明赤褐色 焼土粒子少量, ローム小ブロック微量

ピット 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は径30cmの円形で, 深さ23cmである。性格は不明である。



第190図 第331号住居跡実測図

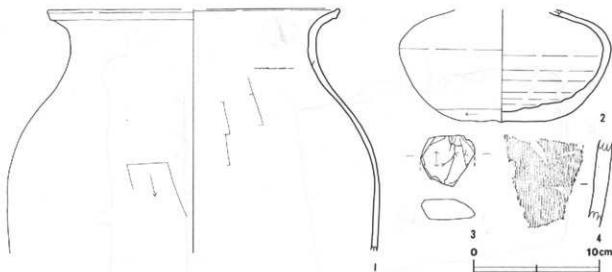
覆土 4層からなるが、覆土が浅く地質状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 黒褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム中ブロック中量

遺物 土師器片56点、須恵器片19点、石製品1点が出土している。1の土師器甕、2の須恵器平瓶は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。4は須恵器壁の口縁部片で、外面には横位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の7世紀前半と考えられる。



第191図 第331号住居跡出土遺物実測図

第331号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図 1	土 師 器	A(23.0) B(14.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒・石英・雲母・スコリア に多い。褐色 普通 窯行窯	P1493 30% 中央付近露土下層
2	平 須 壺	B(8.9) C 7.0	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、体部上位に最大径を持つ。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ切り。	砂粒・石英・雲母 灰黄色 普通	P1494 60% 中央付近露土下層

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
3	紙 石	(4.1)	4.3	1.6	(33)	覆土中	Q1008 凝灰岩

### 第332号住居跡 (第192図)

位置 調査6区南部, O13rd区。

規模と平面形 長軸3.46m, 短軸3.42mの方形である。

主軸方向 N-10°-E

壁 壁高は28cmで、外傾して立ち上がる。

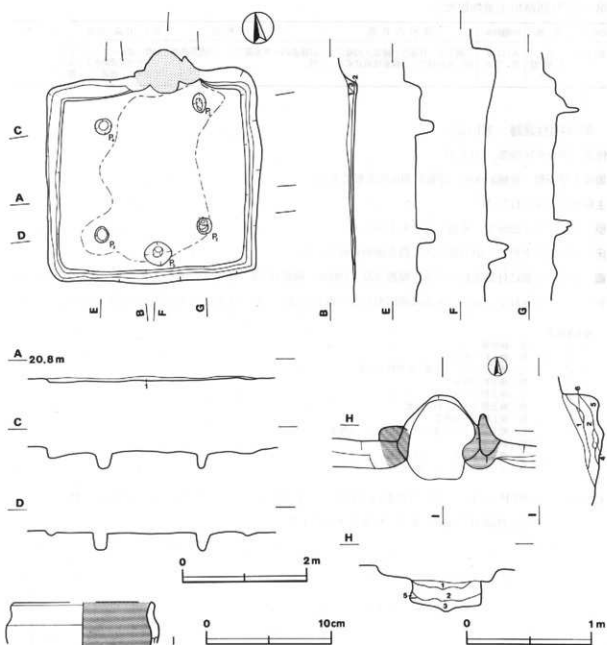
壁溝 上幅15~25cm, 下幅5~15cm, 深さ5cmほどで、断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で、竈前面から出入口口にかけてよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。袖部の遺存状況は悪く、規模は長さ65cm, 袖幅[95]cm, 壁外への掘り込みは35cmである。袖部は遺存状況から砂質粘土で構築されていたと思われる。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられ、煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。

#### 覆土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、ローム小ブロック少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 焼土粒子少量
- 5 褐色 焼土粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子・ローム小ブロック微量



第192図 第332号住居跡・出土遺物実測図

ピット 5か所(P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は径25cmの円形で、深さ24～29cmである。いずれも主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は径35cmの円形で、深さ38cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

覆土 3層からなるが、覆土が浅く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片46点、須恵器片1点が出土している。1の土師器鉢は覆土中から出土している。

所見 本跡に伴う遺物が少なく明確な時期を特定できないが、出土遺物から古墳時代の7世紀前葉と推定される。

第332号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第192図 1	坏 土器	A[11.0] B(3.4)	口縁部片。体部と口縁部との境に、 弱い稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内面黒色施 理。	砂粒・雲母・スコリア 外面灰黄褐色・ 内面黒色 普通	P1485 5% 覆土中

第334号住居跡（第194図）

位置 調査6区南部，O13a区。

規模と平面形 長軸3.66m，短軸3.36mの方形である。

主軸方向 N-11°-W

壁 壁高は5～22cmで，外傾して立ち上がる。

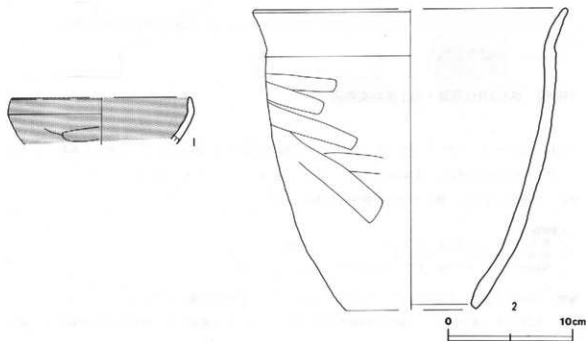
床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ120cm，袖幅110cm，壁外への掘り込みは40cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられ，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

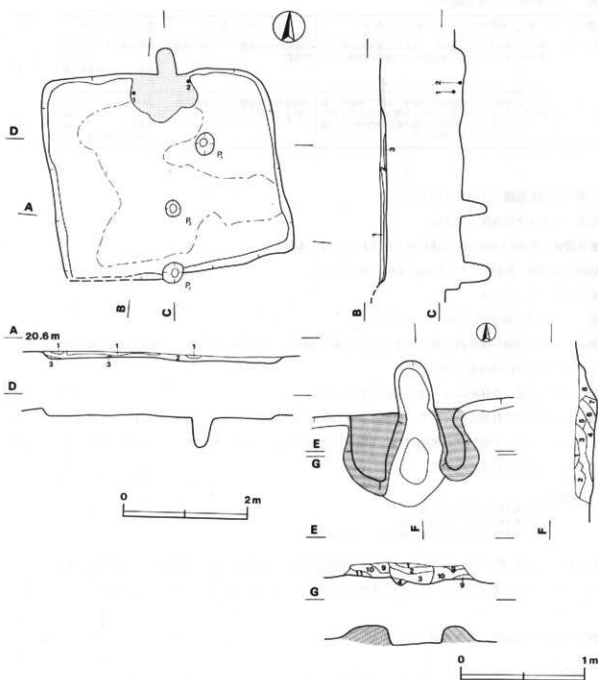
- 1 褐色 色 砂中量
- 2 黄褐色 色 焼土粒子中量
- 3 褐色 色 焼土小ブロック中量，炭化粒子少量
- 4 褐色 色 焼土粒子微量
- 5 褐色 色 焼土粒子少量
- 6 褐色 色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 明赤褐色 色 焼土粒子・砂微量
- 8 褐色 色 焼土粒子・砂少量，ローム小ブロック微量
- 9 にぶい黄褐色 色 砂多量
- 10 赤褐色 色 焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 11 明褐色 色 ローム小ブロック少量

ピット 3か所(P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>は径35cmの円形で，深さ47cmである。主柱穴と考えられる。P<sub>2</sub>，P<sub>3</sub>は25～35cmの円形で，深さ41～45cmである。性格は不明である。



第193図 第334号住居跡出土遺物実測図





第194図 第334号住居跡実測図

覆土 3層からなるが、覆土が浅く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片75点, 須恵器片11点が出土している。1の土師器杯は竈左袖付近から, 2の土師器甕は竈右袖付近からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の7世紀前半と考えられる。

第334号住居跡出土遺物観察表

区画番号	産 種	計量値(m)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・地味	備 考
第193区 1	坏 土 師 器	A 14.4 B ( 3.8)	口縁部片。体部と口縁部との境に 弱い稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。内・外面黒 色地味。	砂粒・雲母・スコリア 普通 内・外面黒褐色	P1502 10% 竈左袖付近覆土 上層
2	瓶 土 師 器	A125.2 B 24.3 C10.4	底部から口縁部にかけての破片。厚 孔式。体部は内湾気味に立ち上がり、 口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁 部は内反する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へ う割り。内面ナゲ。	砂粒・雲母・スコリア A 明褐色 良好 内面黒付着	P1503 80% 竈右袖付近覆土 下層

第336号住居跡 (第196・197区)

位置 調査6区南西部、N13区区。

重複関係 第337・338号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸6.53m、短軸6.40mの方形である。

主軸方向 N-9°-W

壁 壁高は15~30cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第337、338号住居跡に掘り込まれている部分を除き、ほぼ巡っている。上幅12cm、下幅6cm、深さ7cm  
ほどで、断面形は逆台形である。

床 ほぼ平坦で、全体的によく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ110cm、袖幅120cmである。袖部は砂質粘土で構築されており、  
左袖部内側には、土師器甕が補強材として貼り付けてある。火床部は楕円形に深く掘りくぼめられ、煙道部は  
火床部から緩やかに立ち上がる。

電土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、焼土小ブロック少量

ピット 5か所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、長径60~80cm、短径45~65cmの楕円形で、深さ62~83cmである。  
いずれも主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は、径40cmの円形で、深さ18cmである。出入り口に伴うピットと考えられ  
る。

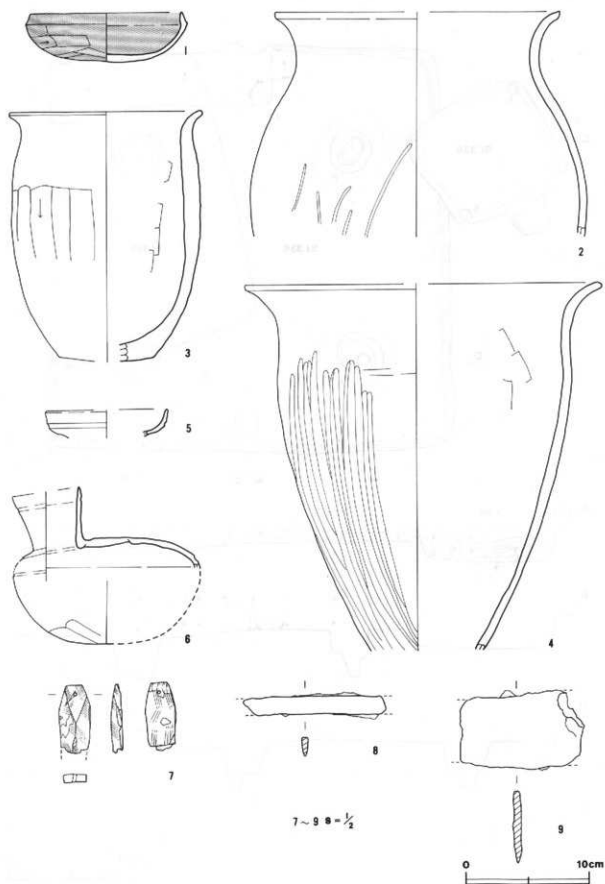
覆土 8層からなり、人為堆積である。

土層解説

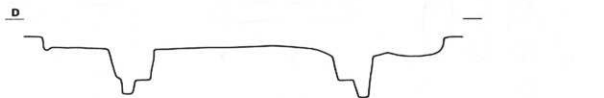
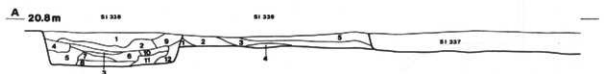
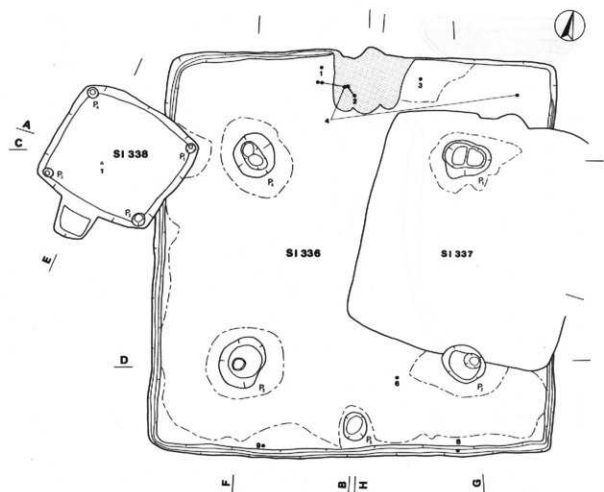
- 1 褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 2 稀褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム中・小ブロック微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 稀褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム中量
- 7 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 8 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック微量

遺物 土師器片384点、須恵器片19点、石製品1点、鉄製品2点、礫3点が出土している。1の土師器杯は竈  
左袖付近の覆土下層から、3の土師器小形甕は竈右袖付近の覆土中層から、4の土師器甕は竈内、電付近の覆  
土下層から、6の須恵器平瓶はP<sub>2</sub>付近の覆土中層から正位で、8の鉄製刀子、9の鉄製鎌は南壁際からそれ  
ぞれ出土している。2の上師器甕は竈左袖部の補強材として使用されていた。

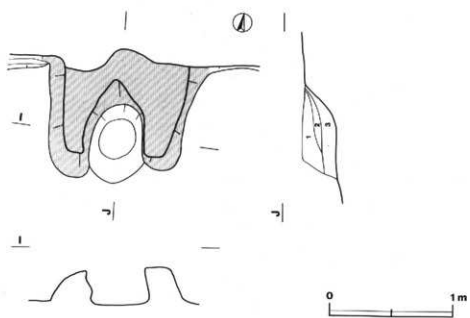
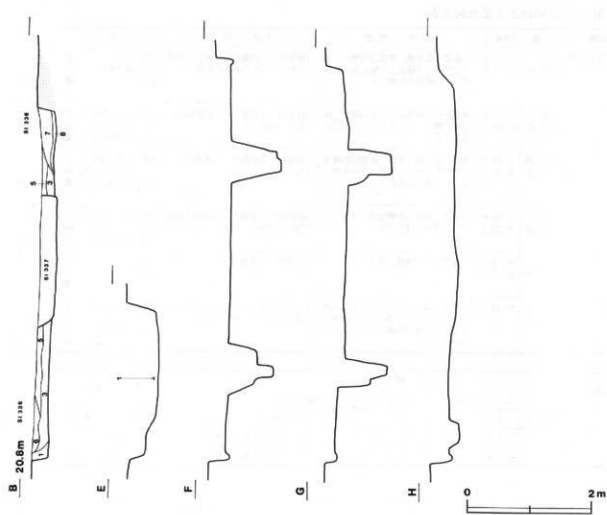
所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半と考えられる。



第195图 第336号住居跡出土遺物実測図



第196图 第336·338号住居跡实测图(1)



第197图 第336·338号住居跡実測图(2)

第336号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第195図 1	坏 上 部 器	A 12.2 B 4.0	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に若干の稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部内・外面風色処理。	砂粒・雲母内・外面風褐色 青透	P1508 90% 甌土袖付近覆土下層
2	甌 土 部 器	A〔23.0〕 B (18.1)	体部から口縁部にかけての稜片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ磨き。内面ナデ。	砂粒・石英・雲母にふいぬ色 青透 内面横ナデ	P1509 20% 甌内
3	小形甌 上 部 器	A 15.4 B 20.1 C' 7.6	体部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。体部はやや長胴である。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒・石英・雲母・スクリップにふいぬ色 青透 横ナデ	P1510 60% 甌土袖付近覆土中層
4	甌 土 部 器	A〔28.8〕 B (29.4)	単孔式。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のへラ磨き。内面へラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母にふいぬ色 青透 外面横ナデ	P1511 60% 甌内・甌付近覆土下層
5	坏 須 部 器	A、9.6〕 B ( 2.2)	口縁部片。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 黄褐色 良好	P1512 5% 甌土中
6	平 須 部 器	B (12.6)	体部・口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、体部上位に最大径を持つ。頸部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。	体部内・外面クロクナデ。口縁部袖付付後、ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰色 良好	P1513 70% P = 付近覆土中層

図版番号	種別	計 測 値					出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
7	副葬品	(3.7)	1.7	0.6	0.2	(5.06)	覆土中	Q1011 滑石
8	刀 子	(7.1)	1.0	0.3	—	( 8)	甌部近覆土下層	M1033
9	鏝	(6.7)	1.0	0.4	—	(38)	甌部近覆土中層	M1034

茨城県教育財団文化財調査報告第133集

(仮称)島名・福田坪地区特定土地地区画  
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

熊の山遺跡  
(上巻)

平成10(1998)年3月16日 印刷

平成10(1998)年3月20日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587  
印刷 (有) ミツギ印刷社  
〒311-4153 水戸市河和田町4433-33  
TEL 029-252-8481

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第133集

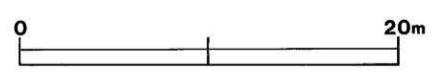
熊の山遺跡 5区遺構全体図

熊の山遺跡 6区遺構全体図

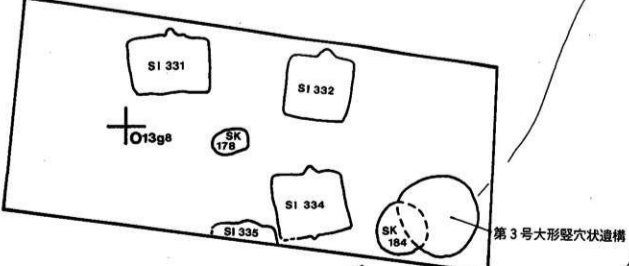
熊の山遺跡 8区遺構全体図



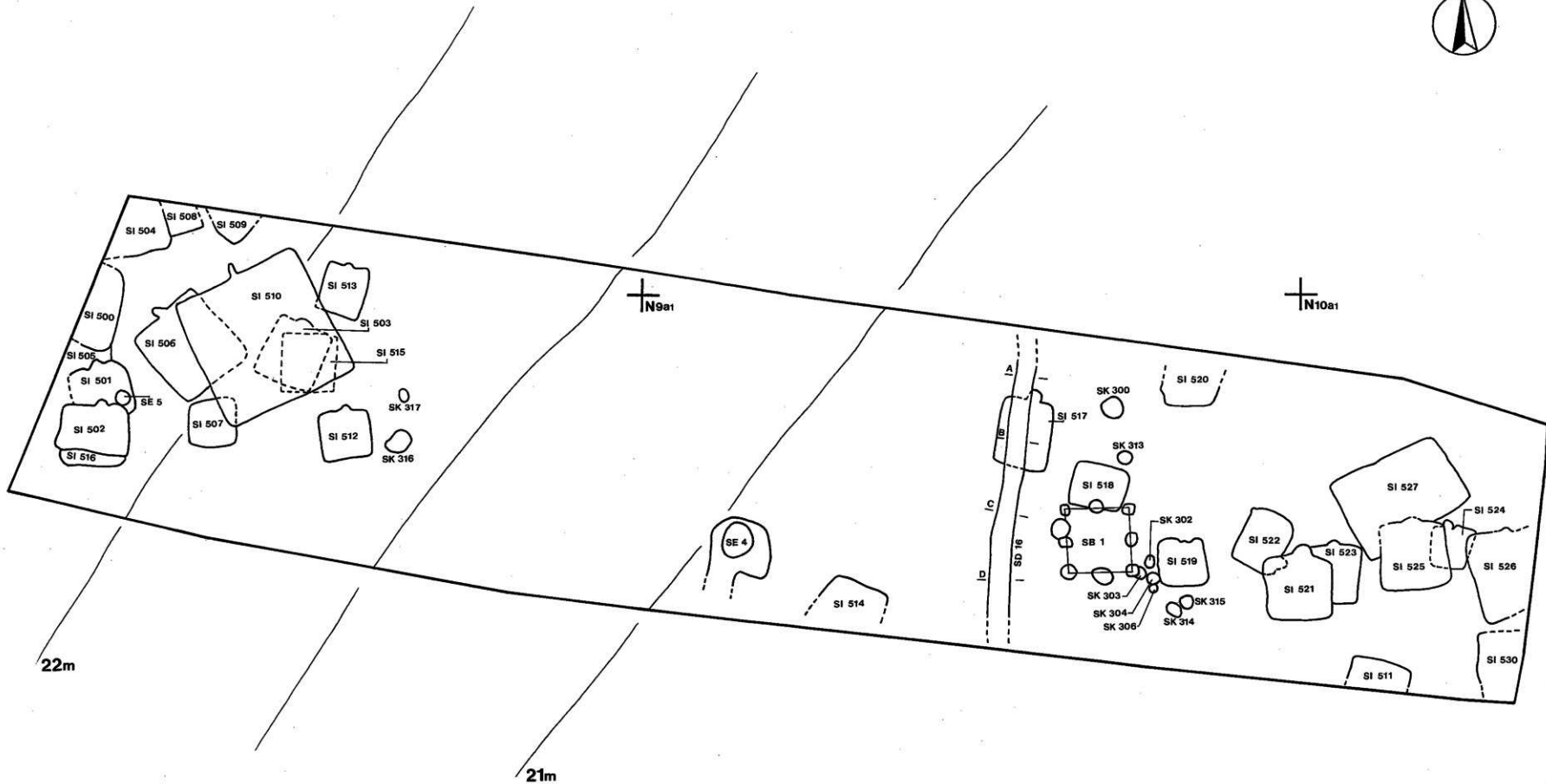
熊の山遺跡 5区遺構全体図



熊の山遺跡 6区遺構全体図



熊の山遺跡 8区遺構全体図



22m

21m

